
我らの望みはありふれたもの！

トナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らの望みはありふれたもの！

【Nコード】

N7811G

【作者名】

トナ

【あらすじ】

世界初多人数同時参加型仮想現実オンラインゲーム最終クローズに当選した岸川勇。遊ぶことが楽しみでしうがなかった彼は、夏休みに入り毎日プレイしていた。そんなある日、事件が起こる。被害者と加害者両者の思惑は複雑なものではなかった。勇は被害者たちと無事望みを達することができるのか。

プロローグ

世に二人の天才がいる。一人は世に出て、もう一人は世に出ることとはなかった。

似たような系統の天才だった彼らが会うことはない。

しかし彼らの子供は出会った。

その出会いは大事件のきっかけとなる。

被害を出し、科学の発展をもたらした出会い。

被害が出たことに憤慨する者もいるが、誰もが事件を全否定はしない。

なぜならば暮らしがさらに便利になったからだ。

加害者が望んだことは特別なことではなく、被害者たちの望みもまた同じ。

複雑な思いを生み出す事件の幕開けはまだまだ時間を必要とする。

20XX年、新しい形のコンピューターが生み出された。

記録と利用方法の多様性に優れたノイマン式コンピューターと違ったそれは、シミュレーションに特化したものとなっている。

ただのシミュレーションならばノイマン式でもやれていることだししかしそれは画面上に起きていることを第三者の視点で見るといったもの。

イクカワ式と呼ばれるようになったそれができることは、当事者として体感できる仮想現実を実現させたコンピューターだ。

ブレインエリアという特殊空間を電子空間上に生み出し、そこに偽体と個人用に調整された偽脳を設置、それを操ってまるでブレインエリアにいるかのように振舞うことができ、五感すらあるという体を動かすための命令を下すのは脳だ。外部からの刺激を受け取

り認識するのも脳だ。その脳からの電気信号を偽脳に送り、肉体を操り、ブレインエリアが発する刺激信号を偽脳が受け取り脳へと発信。結果、脳は誤認する。

この受送信を完成させるまで並々ならぬ苦勞があつた。軽く二時間ドキュメンタリーができるくらいには。意識して動かし熱や刺激を感じる体性神経と無意識に動いている内臓器官に関連する自律神経の区別をコンピュータが認識できず、安全に配慮したにもかかわらずテスターが心停止に陥ることもあつた。

イクカワ式はシミュレーションすること以外は、数世代も前のノイマン型にすら劣る。しかしノイマン型でそれらを補つてやるとたちまち最新鋭の代物となる。

製作者は始めからノイマン型との共存を考えて作つたのかもしれない。プログラムの組み方や部品のある方からもそういった意図が見えてくる。

事実、イクカワ式単体で動かした場合、ブレインエリアは六畳にも満たない広さしか形成できない。だがノイマン型との共存コンピュータならばいつきに世界が広がる。それこそ計算上は地球以上の広さとなるのだ。

当初、このコンピュータを歓迎したのは盲目や半身不随といった後天的障害を持つ者たちだった。ブレインエリアでは健康体でいられる。何の不自由もなく以前と同じように動き回れることは大きな喜びとなつた。

次に歓迎したのは役者だ。ブレインエリア内ではどんな場所も再現できたし、死すらも体験でき、どんな無茶も少ないリスクのみで経験できる。演技の幅が広がるのだ。仮想現実内の出来事とはいえ一度経験すれば、まったくのゼロよりも演じ方が違つてくる。

そして次に目をつけたのがゲーム開発者たちだった。

彼らはブレインエリアに、過去の多くの人が思い描いた夢を見た。すなわち、思い描いたなりたい自分になれるゲーム。現実では難しくとも、ブレインエリアでは可能なのだと思わせるゲーム。

開発者たちの腕しだいで、プレイヤーから開発者まで多くの者が夢見たゲームを作ることができる、自分たちで生み出せる！誰も見たことのない、遊んだことのない、まったく新しいゲーム。見事完成させると、待つのは最大級の贅辞と最大級の自己満足。

開発者魂に火がつくのも無理はない。

彼らは仕事仲間にも声をかけ、人材を集めた。どうせ作るのならば最高のゲームを作ろうという心意気は誰もが持っていた。

ゼロからの出発だ、難航するのは当たり前。職場に怒声が飛ばない日はなく、大歓声が上がることもしばしば。

ノウハウを学ぶため試験的に作ったRPGは短いシナリオに関わらず、関係者にとって満足できるものとなった。いい年した大人たちが興奮して遊んでいたのだ。

そして失敗と成功を繰り返し五年の月日をかけ、彼らは三つの多人数同時参加型オンラインゲームを作り上げた。

終わらない戦争を続ける大陸の各国の兵士となり、作戦を練り、仲間と協力し、陣地を広げる。巨大ロボからレーザー銃まで使える未来型戦争ゲーム『サウザンドウォー』

デフォルメされた動物や神話上の生物までありとあらゆる生物の住む世界で、彼らをパートナーとし開かれる様々な種目のコンテンツに出場することを主な目的とした『ファンタズムアニマル』

六つの世界で構成され、まとめて一つの世界とされる剣と魔法の世界。そこに存在する遺跡や洞窟に挑戦し、人々の依頼を受け、強敵と戦い、自らを鍛え続ける冒険者となる『ホワイトヒストリー』

開発陣の渾身の作品となったそれら。面白くて当然だという自信に満ち溢れたゲームたちは、テスター第一陣、第二陣のおかげで不具合もほとんどなくされ、事実上日本国内オープンともいえる最終クローズを迎えた。

抽選者数は各一万人。応募した合計人数は七万人を越えた。

物語は、そのクローズ抽選に当選した少年が遊ぶ日から始まる。

遊ぶ前に

小さなリュックを背負った高校生くらいの少年が、真夏の日差しの下を駆けている。

時刻は九時すぎ。夏の日差しは気温をどんどん上げて、すでに三十度まで達している。

道路の歩く人々は暑そうに日陰に沿って歩く。少年も体全体から汗を流し、熱いのだとよくわかる。日陰で一息つけばいいのにとすれ違う人々は思うが、少年にとってはそんな時間すらもつたいたい。汗だくの顔に浮かぶ感情は楽しみで仕方ないというもの。

「あつた！」

少年の視界に目的地が見えてきた。徐々に速度を落としていく。周囲の建物と変わらないコンクリート製の建物の前に到着し立ち止まる。

Tシャツの袖で汗をぬぐい八階建ての建物を見上げる少年のそばを知人が通るが、気づかない。そうしている間にも多くの人々が建物に入っていく。

一息つけた少年も笑みを浮かべ建物内へと入っていった。

「涼しい」

自動ドアを取ってロビーに入ると、冷えすぎない程度に冷房が効いていた。暑い中走ってきた少年には極楽空間だ。

涼しみながらもキョロキョロを周囲を見回し、何かを探す。

探している場所は受け付けだ。それはすぐにみつかる。

「いらっしやいませ」

「今日から始めたいんですけど」

「登録ですね……お送りした封筒に入っていたスティックはお持ちですか？」

「これですか？」

リュックのポケットに入れていた七センチの白い棒を受付に渡す。

「お預かりします」

受付嬢は手元の機械にスティックを差し込む。するとモニターに文字がずらりと浮かぶ。

「岸川勇様。読み方はきしがわいさむ、でよろしいですか？」

「はい」

「希望ゲームはホワイトヒストリー、最終クローズ当選者で間違いありませんか？」

「はい」

「では説明させていただきます。

当ゲームは年会費に五千元。一時間あたり二百円かかるようになっていきます。

どちらも先払いで、時間料金のほうは今なら五十時間のまとめ買いだと千円の割引、百時間ならば五千元の割引となっております」

「百時間のお願います」

そう言ってゲームで遊ぶため、夏休み前にバイトして貯めたお金を手渡す。

お金を受け取った受付嬢は手元のキーボードを操作し、情報を入力していく。

「登録完了しました。

スティックをお返しします。このスティックは今後幾度も使い、ここでは身分証代わりにもなりますので大事に扱ってください。紛失などなされたときはこちらへ申しつけ付けてください。三日ほど時間はかかりますが再発行させていただきます。

では次に注意点をいくつか。

当ゲームは健康に留意し一日八時間までとなっております。八時間を越えた途端に中断されます。その場合ゲームの進行状況は、最後に記録したところまで戻ることになりますのでご注意ください。時間を忘れ集中していても、七時間三十分を越えると警告がでますので気づかないということはないと思われず。

ゲームの最中に頭痛、吐き気、眩暈など異変を感じたときはただ

ちに中断し、フロアにいる係員に申し付けてください。動けないようでしたら、専用のスイッチがありますのでそちらを押ししてください。

六日に一度メンテナンスで遊ぶことができなくなります、詳しい曜日はあちらに見えます掲示板にてご確認を。掲示板にはゲーム内にて行われるイベントも紹介されますので、時々確認するといいかもしれません。

最後にゲームの起動の仕方です。

このあとお客様は機体の置いてあるフロアへと向かうこととなります。指定されたボックスに入りますと、機体が内蔵された椅子があります。見た目は歯医者にあるような椅子です。その座る部分にヘルメットが置いてあります。先ほど言った緊急呼び出しスイッチは正面から見て左、座った場合右側面に備え付けています。赤いボタンですからすぐにわかると思います。

ボックスに入って始めにすることは、ステイックを椅子の上部にある白く塗りつぶされた箇所にあいた穴にカチツと音がするまで押し込んでください。そうしますとボックスのドアにロックがかかり、機体も起動状態に移ります。

次はヘルメットを被ってください。ベルトでしっかりと固定したのち椅子に座ってください。腰辺りにベルトがありますのでそれをつけてください。ベルトをつけたあと足を固定されますが、無意識に動かないための措置なのでご了承ください。

あとは椅子がゆっくり倒れていきますので、目を瞑り少しするとゲーム開始となります。

ゲーム説明はキャラクター作成時に行われますので、ここではいたしません。

以上で説明は終わりです。なにかご質問は？」

「えっと」

「勇は聞いたことをざっと思い出していく。

たぶん大丈夫だと判断し首を横にふる。

「ではこちらが今日使用されるボックス番号となっております」
渡されたプラスチック製のカードには『4 - 96』と書かれている。

「これは四階の九十六番目のボックスという意味です。
こちらのカードは帰るときに受付そばの回収箱にお入れください。
時々返し忘れる方がいますのでご注意ください。

私たちの自信作どうか楽しんでいってください」

一礼する受付嬢に礼を返して勇は、エレベーターへと向かう。

四階に到着し、すぐそばにいた係員に九十六番ボックスの位置を聞く。歩いていくと、閉じたボックスの中に一つだけ開いたボックスがあり、右上に『96』と刻印されていた。勇が説明を受けている間に皆準備を終え遊び始めたのでどこも閉じているのだろう。

中を見ると当然だが、説明と同じ椅子がある。

「はじめに呼び出しスイッチ見とこうかな」

左側面を見ると赤いスイッチがある。椅子に寝そべっていても届きそうな位置だ。

リュックを椅子のそばに置き、指示通りに動いていく。

徐々に傾いていく背もたれに寄りかかり、目を閉じる。

すうっと眠るように意識が沈んでいった。

風を感じて勇は目を開ける。目の前には草原が広がっていた。草の緑と空の青しがなく、広さに圧倒される。

ゲームを始めた誰もが経験することだ。

ここはキャラクター作製とゲーム説明のためのフィールド。

勇の前に空間ウィンドウが現れる。

「この度はホワイトストーリーを選んでいただきありがとうございますとついでに
ます。

私は各種説明をさせていただくナビゲーション。どうかナビとお
呼びください」

「はじめましてナビさん」

ウィンドウ内の女性型ナビゲーションに頭を下げる。

プログラムされ作られた存在だとはわかってはいるが、丁寧な言葉
につい頭を下げたのだった。

「はい。はじめまして」

ナビは簡単な人工AIだ。二十一世紀初頭よりも技術は発達して
はいるが、人工能といったものはあまり成果はでていない。多少
のアドリブはきくが、あくまで多少。人間のように心あるような挙
動を見せる人工能はまだ生まれていない。

ホワイトヒストリー、ファンタズムアニマル、サウザンドウオー
のプログラム統括にも人工AIは使われている。それも現時点での
最高水準とはいえるが、まだまだ人には届かない。イクカワ式コン
ピューターのようにAI関連でも天才がでないかと人々は待ち望ん
でいる。

「まず始めになにをするんだ？」

「始めはキャラクター作製です。」

名前、年齢、外装、冒険者タイプと種族の四つです。

性別は変更できません」

「五つじゃないんだ？」

冒険者タイプと種族って別々だと思っただけだ」

「その二つは繋がりがありませんので、二つで一つという換算です」

「そっか。」

じゃあ名前から。これはフルネームの必要がある？」

「どちらでもかまいません。ただ長すぎるのは遠慮してもらって
います」

「名前はヴィオで。年齢は十七」

「かしこまりました」

「次は外装だけど、これは顔や体の設定ってこと？」

「はい。細かく設定することもできますが、大雑把でもこちらで調
整します。」

あとプライバシー保護のため、今の姿のままというのは無理となつています。

そのままがいいという方や調整は面倒だという方のためにランダム調整も存在します」

「俺も操作は面倒だから、そのランダムお願いできる？」
「了解です。」

ではそちらに全身が映る鏡を出しますので確認してください」

ナビがさつと手をふるるとどこからともなく全身が映る鏡が現れる。今の勇の姿はクリーム色のＴシャツと同色のハーフパンツとサンダルだ。そして腰にナイフを下げている。

「ランダム調整いきます」

ナビの宣言により一瞬勇の姿ぶれる。

次の瞬間鏡に映ったのは大きく変わった勇の姿だった。

一番変化したのは肌の色だ。よく日に焼けた褐色の肌となった。

次に髪。色は濃紺、毛は短髪でピンピンとあちこち跳ねている。目の色も髪と同じで、やや鋭い目つきだ。背の高さは元よりも少し高い。１７１だったのが１７７くらいになっている。ほかにも少しずつ変わっている。

「いかがでしょうか？」

「……これでいいや」

鏡に映る自分を見て特に不満のない勇は頷く。姿が違つので勇ではなくこれからはヴィオといったほうがいいだろう。

「ではこれで登録します。」

次に冒険者タイプと種族です。

冒険者タイプは五つ。力重視、力寄り、中間、賢さ寄り、賢さ重視です。

種族は四つ。人間、獣人、ドワーフ、エルフです。しかしそれぞれの種族で選べるタイプが変わってきます。例えばエルフは賢さ寄りと賢さ重視のみ。力重視のエルフは存在しません。

獣人は力重視と力寄り。ドワーフは力寄りと中間。人間は中間と

その両隣。エルフは賢さ寄りと賢さ重視。

戦士や格闘家を目指すのならば力重視がいいでしょう。力寄りは剣士やアサシンに適します。どれがいいか迷うときは中間を選ぶといいかもしれません。賢さ寄りは学者や魔法剣士や術式格闘家に適します。賢さ重視は魔法使いに適します。

注意していただきたいのは、このゲームには職業というものが明確に存在しません。ですので賢さ重視を選んでも剣士を目指すことは可能です。ステータスの上がり方は魔法使いに適しますが

「職業がないってことは各自自由に名乗れるってこと？」

「いえ、自由にはいきません。」

得た称号の中から選んで名乗ることは可能です。

遊び続けていると称号を得ることがあります。あとで説明しますが、例えば刃物スキルと刺突スキルと防御スキルと作法スキルと貴族知識スキルと乗馬スキルの熟練度を100まで上げて熟練化しますと騎士の称号を得ることができます。そうすると騎士を名乗ることがができます」

「熟練化？」

「それはスキルの説明するときに」

「わかった。」

それで今選ぶべきは種族か。

……人間の中間でいいかな」

特になにになりたいというイメージがないヴィオは中間を選んでみた。

「それで登録しても？」

「オッケー」

「登録完了しました」

「これでキャラクター作製は終わり？」

「はい。」

次はステータスなどのシステム説明です。

まずは右腕をご覧ください。翠色の宝玉のついた腕輪がはめられ

ているはずです」

たしかに宝玉のついた細いリングがピタリと腕にジャストフィットしている。

「宝玉を三回、指で叩いてください」

指示通り三回叩くと空間ウィンドウが現れた。

能力値、道具、スキル、アーツ、環境設定、記録という項目がある。別枠で体力と技力と書かれた文字があり、横に数値が書かれている。さらに下にはお金と経験値を示す枠があり、共にゼロとなっていた。そのさらに下には経過時間がわかるようになっていた。

「能力値はいわずともわかるように個人の強さのことです。」

ウィンドウの能力値という部分に触れると詳しい内容を見ることができません。

レベル、力、魔力、賢さ、素早さ、器用さ、頑丈さ、運、体力、技力。体力と技力の50という値を除きすべて1のはずです。重量は100、スキルポイント0となっていますね？

グイオさんは冒険者タイプ中間を選んだのでこれからレベルが上がるたび、すべての能力値は1ずつ上がっていきます。体力技力は共に10前後上がっていきます。

レベル上限はありませんが、レベルが高くなればなるほど上げることにも困難になっていきます。ここらへんは他のRPGと同じです」「ちなみに今の最高レベルはどれくらい？」

「63です。これくらいになるとレベル上げに専念しても1上げるのに一週間はかかります」

「おおっ」

将来的には一ヶ月かけてもレベル一つ上がらなくなるといった事態になりそうだと、思わずうめき声が漏れる。

「あ、レベル上げる方法って敵を倒すことだけ？」

「イベント達成や生産作業成功でも経験値を得ることができます。」

次は道具です。能力値ウィンドウは右上の×印を触ると閉じることができます」

能力値ウィンドウを閉じてから、道具ウィンドウを開く。

そこには四つ道具があった。ビギナーズナイフ、クロス、サンダル、小さな袋の四つだ。

これらはゲームを始めたときに必ず渡されるものだ。

「各種アイテムの詳しい説明は、それぞれに触れることで見ることが出来ます」

勇は試しにビギナーズナイフという項目に触れてみる。

小さなウィンドウが開き、そこには「初心者に渡されるナイフ。耐久度無限。攻撃力1。補助スぺース1。重量30」といった説明が書かれていた。

「この補助スぺースってのは？ あと重量についての注意点は？」
説明書きで唯一予想つかないものと聞いておいたほうがよさげなことを聞く。

「武器や防具や装飾品には、それらを補強する道具があります。その道具をつけるための空き枠が補助スぺースです。

一度つけてしまうと外せなくなりますので、手に入れた際には十分考慮してからつけたほうがよろしいかと」

「なるほど」

「重量は体力×10まで持つことができます。それ以上持つことも可能ですが、動けなくなりません。また総重量が四分の三を超えると運動スキルで入手できるスキルアーツ『ダッシュ』『ジャンプ』『登攀』が使用できなくなります。

スキルアーツについてはのちほど。

ほかになにか質問は？」

「ないよ」

「では続きを。」

次はスキルについてです。スキルというのは技能のことです。ウィンドウを開いてください。運動、会話、読み書きの三つがあるはずです。この三つは誰もが持つ基本スキルです。文字の隣に括弧で括られた数字がありますが、それは熟練度を示しています。今は5

0と書かれているはず。この熟練度の上限は基本的に100です。

さてその三つですが、置かれている場所が違いますね？ 運動スキルは上部の枠、他二つは下部の枠。これはメインスキルかサブスキルを示しています。二つの違いは、熟練度が増すとスキルアーツを覚えるか覚えないかです。あとは熟練度の成長速度も違います。メインスキルよりもサブスキルのほうが早く上がっていきます。

スキルは誰かと話したり、本を読んだり、イベントをクリアしたりして取得します。ですがそのままではそういうスキルがあると知っているだけで、使えるわけではありません。

スキルを使用可能にするにはスキルポイントを取得し、取得したスキルに触れて、取得するかと言う選択でイエスと答えてください。

取得したスキルを育てるには、スキルに関連した行動を取るだけです。

例えば運動スキルを育てるには動き回ればいいし、会話スキルを育てるにはPCやNPCと話すだけでいいのです。

スキルポイントの入手方法は特定のレベルに達したとき、イベント達成数が特定数に達したとき、イベントを成功させたときです。多くを手に入れることは無理なので、使用は計画的に。

スキルの基本については以上です。なにか質問は？」

「さっき言ってた熟練化ってのは？」

「いくつかのスキルの熟練度が100まで育つと、それらをひとまとめにして熟練化しますか、という選択肢がでます。

さきほども言ったように熟練化すると称号を取得することができます。そのほかにも熟練化したスキルの熟練度を200まで上げることができるようになります。

熟練化は基本一人一つですので、気に入らない称号ならば断ることも一つの手です」

「基本的にはって言ったけど、それは熟練化を増やす方法があるっ

てことだよね？」

「はい。あるアイテムを使うことにより、最大三つまで増やすことが可能です。」

そのアイテムはゲームを遊びみつけてください」

「探すこともゲームの楽しみの一つってことか」

「はい。そのとおりです。」

ほかに質問は？」

「ないかな」

「ではアーツの説明に移ります。」

アーツというのは技のことです。熟練度を育てることで取得できません。

常に効果を発揮する常時発動タイプと体力や技力を消費して使う消費タイプがあります。

例えば運動の熟練度60のスキルアーツにダッシュというものがあります。これは走ることができるようになる常時アーツです。

アーツには二種類あります。スキルアーツとクラスアーツ。

スキルアーツはスキルの熟練度を育て取得するアーツのことです。クラスアーツというのは、称号を得て名乗ったときに使えるようになるアーツのことです。二つの称号を持っているときには名乗っている片方のクラスアーツしか使うことはできません。

消費アーツ使用方法は音声入力と動作が必要となっています。

なにか質問は？」

「熟練化したとき熟練度は200まで上がるっていつてたけど、そこまで熟練度を上げてスキルアーツを取得できる場合がある？」

「あります。刃物スキルは熟練度150でトリプルアタック、熟練度200で強撃を取得します」

「スキルとか称号とかアーツってどれくらい種類あるの？」

「膨大としか答えようがありません。」

このゲームが稼動して七ヶ月を越しましたが、まだまだみつかっていないものが数多くあります」

「ありがと。次にいつていいよ」

「次は環境設定です。」

これはウィンドウの色を変えたり、戦闘中にでる体力技力ゲージの設定、フレンド設定、パーティメンバー設定、ギルド設定、ヘルプを担当しています」

「ここについては聞くことないかな」

「では記録の説明に移ります。」

記録するとゲームをやめたとき、死亡したときに記録した場所から再開することができます。

各都市町村には宿屋が存在します。そこにいるNPCに話かけると宿泊と記録と中断のどれかを聞かれます。そのときに記録を選ぶとリターンポイントとして記録されます」

「デスペナルティってどうなってる？」

「所有しているお金の三分の一がなくなり、道具も装備以外消えます。ほかに一定時間能力値が半分に落ちます。」

「預けているお金と道具が消えることはありません」

「道具が消えるのが痛いな。」

「せつかく手に入れた貴重品とか消えるとかありえそつだ」

「ほかに質問は？」

「ないよ」

「では口頭説明を終え、実践説明に移りたいと思いますがよろしいですか？」

「うん」

ナビが再びを手を振ると鏡は消え、かわりに液体の入った小瓶が現れる。

「それはポーションと言います。体力を回復させるための道具です。拾ってもらえますか？」

「拾ったよ」

「ポーションを持ったまま『ポーションインボックス』と言ってく

ださい」

「ポーションインボックス」

ヴィオの手の中からポーションが消える。

「これで所有する袋の中にポーションが入りました。手に入れたアイテムはこっやって袋の中に入れてください。」

アイテムが現れて地面に置かれたまま十分経つと消えてしまうので、必要なものは出しっぱなしにしないでください。

装備品と手に持ったものは時間がいくらか経とうとも消えることはありません。

次に『ポーション一つアウト』と言ってください」

「ポーション一つアウト」

ヴィオの手の中にポーションが現れる。

「これでアイテムの出し入れは終わりです。」

次は戦闘についてです。ポーションはあとで使うので仕舞ってください」

ヴィオがポーションを仕舞っていると、ヴィオは再びなにかを出した。

一メートルくらいの乳白色した球だ。微妙に揺れている。

「これは？」

「これは戦闘練習用生物殴られ君です」

「殴られ君？」

その名前はナビがつけたの？」

「違います。徹夜明け開発者が名付け親です」

「そ、そうなんだ」

「戦闘訓練を始めます。」

腰のナイフを抜いてください」

ヴィオが腰からナイフを引き抜く。全長二十センチ、刃渡り十センチの小ぶりの両刃ナイフだ。現実ではないから重さを感じないと思っていたヴィオの予想を裏切り、軽めだがしっかりと重量がある。ヴィオの斜め上に体力と技力を示すウィンドウが現れた。状態と

いう項目もあり、今は異常なしと書かれている。

「武器を持つと体力と技力を示すウィンドウが現れるようになって
います。」

これでも戦闘を開始できます。

まずはどのようなにもいいのでナイフを殴られ君に当ててくださ
い」

「とりゃっ」

殴られ君に近づきナイフを上から下へと振るう。殴られ君が動か
ないので、外すことはなかった。切り傷はできない。けれども切っ
た瞬間、薄い朱色の光が放たれ消えた。

「殴られ君の攻撃がきます。避けずに受けてください」

攻撃されたことを怒ったかのように殴られ君が動き出し、跳ねて
ヴィオへと体当たりした。

攻撃が当たった瞬間、ヴィオは体全体に軽い振動を感じた。体力
バーが五分の一ほど減った。

「今の振動が攻撃をくらったってこと？」

「はい。」

戦闘を続けてください。今度は避けながら戦って大丈夫です」

ヴィオと殴られ君は交互に攻撃をしていく。これは素早さが同値
だからだ。もしヴィオの素早さが殴られ君よりも高ければ、攻撃回
数は増える。その逆もありえる。

「勝った！」

戦闘はヴィオの勝利で終わる。殴られ君の姿がつつすらと消えて
いく。最初の攻撃のほかにもう一回体当たりを受けていたが、その
あとは殴られ君の動きをよく見ていると避けることができるように
なった。殴られ君の動作が鈍かったおかげだろう。

殴られ君がいた場所にガラス玉が落ちている。

「敵を倒すとアイテムを落とすことがあります。それらはお店やプ
レイヤーに売ることができます。」

どのようなものが知りたい場合は手に持って、もう一方の手で

触れることで簡単な概要がでます」

言われたとおりに動くとウィンドウが開き『報酬の玉。殴られ君の涙の結晶ともいう』という概要が載っていた。

「アイテムの中には鑑定スキルを必要とするものもあります。そのようなアイテムはアイテム名のみ出て、効果やどういったものなのかは???となっています。」

その報酬の玉は、この説明が終わったあとに向かうことになるビギナーズガーデンの道具屋で売ってください。

これにて戦闘訓練は終わりです。ここままで質問は？」

これまでの行動や話を思い出し、なにか疑問があるかと考える。

「プレイヤー同士の戦闘、プレイヤーキラーとかどうなってる？」

「プレイヤー同士の戦闘は、許可されている場所以外ではできません。ですのでプレイヤーキラーもいません。攻撃されてもダメージを負うことはありません。」

ただしモンスターを引き連れてきて押し付ける、派手なエフェクトの攻撃で目くらましをして邪魔をするといった行為は確認されています。

そういつた行為を発見、もしくははされたときはコールGMと口に出してください。担当の者がその場に現れます」

「わかった。」

……ふと思っただけだ。俺って刃物スキルないんだよね？ それなのにナイフを扱えてたけどなんで？」

「それは運動スキルを使用したからです。」

刃物スキルは刃物を扱えるようになるスキルではなく、より効果的に刃物を扱うためのスキルなのです。

このように代用できるスキルがいくつかあります。しかし代用できないものもありますので、気になったら試しに動いてみるというかもしれません。

無理な場合はスキルが必要です、とウィンドウが開いて警告してきます」

「わかった、ありがと。」

次はなにをするの?」

「次はアイテムの使い方です。」

ポーションを出してください。戦闘で減った体力を回復させましょう

出しましたね? ではそのポーションのコルク栓を開け、中身を飲んでください」

「……味がする?」

多くはない量の液体を飲むと、かすかにさっぱりとした甘い味がした。

「はい。濃い味ではありませんが、食べ物や飲み物には皆味がついています」

「すごいことだけど意味はあるの?」

「現実世界と同じようにこの世界でも食事はとる必要があります。」

味がないうち、その行為がつまらなくなると考えられ味の再現もされております」

「食事をしなければいけないのはなんで? あと頻度は外と同じ?」

「食事をしないまましているとステータスが下がります。食事をとると元に戻ります。」

頻度は一ゲームに一回です。またそれ以上食べても問題はありません。

そして睡眠をとる必要もありません。

ほかに質問は?」

「ない……はず」

「アイテムの使い方がわからない場合があるとあります。その場合は環境設定のヘルプを呼び出し、出てきたウィンドウにアイテムを触れさせてください。使い方がわかります。」

次の説明にいつでもよろしいですか?」

「オッケー」

「では最後にレベルアップです」

RPGの醍醐味の一つにヴィオの関心も高くなる。

「ステータスウィンドウを呼び出してください」

「だしたよ」

「経験値を見てください。さきほどの戦闘で若干増えているはずですよ。」

いまから説明イベント達成を祝っての経験値を贈与します」

ナビはプレゼントボックスを足元から持ち上げた。ヴィオからはナビの足の位置は見えないので、もともとプレゼントボックスがあったのかはわからない。

「どうぞ」

そう言つと経験値が増えだした。五まで増えていた経験値がさらに増し十になって止まった。

レベルアップと書かれたウィンドウが現れ、パツパパーという短いファンファーレが鳴る。

「これでレベルアップしました。」

ステータスが上がっているはずですよ。確認してください」

体力が58へ、技力が60へ、能力値が1ずつ上がっている。重量も報酬の玉を手に入れたことで増えていて、スキルポイントも1増えている。

「スキルポイントもあるね」

「経験値と一緒にプレゼントしました。」

「以上で説明は終わりですよ。なにか質問は？」

「ないと思う」

「説明したことは環境設定のヘルプで再確認できます。忘れた際にはヘルプを利用してください。」

「種族、冒険者タイプ、外装の変更はありますか？これが最終確認ですよ」

「このままでいいよ」

「では以上を持ちまして説明と登録を終了します。」

「今までの説明はゲームを遊ぶ上で最低限のものです。あとは遊び

ながらみつけてください。

転送陣を出します。転送先はビギナーズガーデンです」
地面に薄黄色の魔法陣が現れる。

「準備ができましたらこれの乗ってください」

「いろいろありがとうございます」

「これが私の役割ですので、気にしないでください」

「ばいばい」

「楽しんできてください」

ヴィオは魔法陣に乗りその場から消えた。

草原にはナビ以外の誰もおらず、すぐにナビも消え誰もいなくなつた。次に新しくゲームを始める人がくるまで、このまま静かなままなのだろう。

ビギナーズガーデン

ところどころに浮かんだ雲と星空、わりと近くに見える月明かりに反射する海、簡単な柵で囲まれた村、舗装されていない地面、黄土色のレンガで造られた家屋、道を行きかう現代風とは言えない服装の人々、そしてヴィオと似た感じの人が少し。

これが転送したヴィオの目に飛び込んできた風景だ。

夜？ という疑問が湧くが、それを気にするよりもやっとな遊ぶことができるんだという興奮に心臓の鼓動が早くなり、気にならなくなった。さっそく村の中を歩き回ってみようと第一歩を踏み出したヴィオに声かけられる。

「こんにちはー」

声のした方向を見ると、淡いレモン色のノースリーブワンピースを着ている少女が立っていた。

ファンタジー風な容姿のヴィオと違い、その少女は現代風な容姿だ。背中まである艶やかな黒髪は風に揺れ、にきびやしみ一つない日焼けしていない肌は夜闇の中にあって白く眩しい、小ぶりな唇は笑みをかたどり、黒茶の目は真っ直ぐヴィオをみつめている。なんとなく活発的な雰囲気を感じた。誰もが美少女と認める容姿だ。

「こ、こんにちは」

普段、男友達と馬鹿やっていることが多いヴィオは、女と話しながら話さない。ましてや相手は可愛い子、少し緊張してしまう。事務的な話ならば緊張はしないだろうが、ただの会話となるとそうはいかない。

「な、なにか用事？」

「特に用事はないんだ。」

「ただ少し話し相手になってももらえないかなって？」

「話し相手？」

「それなら俺じゃなくてもいいと思うんだ」

今もちらほらとプレイヤーが歩いているのが見える。

「ここで少し休憩していたら、たまたま君がやってきたんだ。それでちょうどいいかなって」

「タイミングがよかっただけか」

「そうそう」

「この世界のことを教えてくれるならいいよ」

「それくらいお安い御用だよ。」

「じゃあ座って座って」

少女は少し移動して座り、隣をポンポンと叩く。

二人が座っているのは、石造りの円形の台座の端だ。

アヤネと名乗った少女によると、この台座は第一歩の石床と呼ばれるものらしい。誰もがここから歩みだし世界へと旅立つので、こゝういった名前になったのだという。

二人は何気ないことを話していく。主にアヤネが喋り、それについてヴィオが感想を言うといった形だが、楽しそうだった。

話の内容はこの世界のことだ。システムのなことではなく、アヤネが見てきたこと感じたことなどだ。

「それでね、セントラルにあるドンドコ亭っていうお店の煮込みハンバーグがすごく美味しかったの」

「いつか行ってみたいなあ」

「すごく人気のあるお店だから食べるのに苦労するかも」

「そこはNPCが経営してるの？」

「ううん、レックスさんっていうプレイヤーさんが経営してる。」

はじめは露店で売ってたらしいんだけど人気がすごくてね、料理を買うために集まった人の整理が大変だったんだって。そこで管理者側がNPC従業員つきのレストランを格安で譲ったんだ。

お店の中なら空間をいじって収容人数を増やすことができるから、以前のような混乱はなくなっただってさ」

建物を格安で売ったのは問題解決のほかに、のちのち土地建物も買えるようになるというデモンストレーションも兼ねていたのだろ

う。世界各地にある誰もいない建物はそのためのもなのだろうと、プレイヤーたちは予想していた。

「豪華な話だ。そうなるとレックスさんは料理作りに忙しいそうだね」

「調理のスキルアーツで作る速度上げているから忙しすぎるってほどでもないらしいよ」

それでも毎日作り続けるのは飽きるらしく、週二日しか腕をふるわない。

レックス曰く『俺は料理するためにこっちにきてるんじゃない！遊ぶためにきてるんだ！』とのこと。当然の主張だろう。

レックスがいない間は、NPCの料理人がレックスを真似た料理を出しているが、レックスには及ばない。それでもそこそこ美味しかったりする。

「そんなスキルアーツまであるのか」

「スキルアーツやクラスアーツはほんと多いから。」

この村の役所に初歩的なスキルやアーツが書かれた本があるから、時間があつたら見るといいよ」

「そうする。」

あ、空が白み始めた。

そついや外だとまだ昼頃なのにこつちだと時間の流れが違つんだね？」

濃紺の空にすごく薄い白の絵の具を何度も重ねて塗るような感じで、空が少しずつ明るくなっていく。

「まったく違つてわけじゃないんだよ。こつちでは一日に二回日が昇る。十二時間で一周。そろそろ二回目の日の出ることだね」「なんでそんなこと？」

「夜だけのイベントとかあるんだ。でも時間の都合がつかなくて、参加できないなんてことがある。そんな人たちの都合に合わせるため、こつちだと夜が二回あるんだとか」

休憩には少し長い時間が過ぎたことに気づいたのだろう。アヤネ

は立ち上がる。

「ついつい話し込んでしまった。ごめんね?」

「面白い話を聞いたから気にしなくていいよ」

「そう? ありがとう。」

「じゃあ、私は行くね?」

「またいつか」

「うん。また会おうね」

軽く手を振ってアヤネは走り去っていく。その姿はすぐに家屋に遮られて見えなくなった。

再開を約束した二人は、約束どおりまた会うことになる。それにはわりと長い時間を必要とし、予想もしない形で予想もしない場所での再会となる。

「俺も行くかな」

つい汚れてもないズボンを叩きヴィオも動き出す。

すぐ近くに村と周辺の見取り図が張られた看板があったので確認しておく。

主な施設は四つ。管理者たちがいる役所。武器防具道具などを売っている雑貨屋。宿屋。軽食屋。ほかは休憩所だったり畑だったり厩舎だったりだ。

だいたいこの位置を覚え、とりあえず村を一周することにした。

軽食屋を覗き、宿屋で記録して、次に雑貨屋へと行こうとした時、突然目の前にウィンドウが開いた。

『運動スキル熟練度60到達。』

スキルアーツ・ダッシュ習得』

と書かれている。

「動き回ったから熟練度が上がったのか」

確認してみようとステータスウィンドウを呼び出す。

アーツの項目に触れると、常時発動の枠内にダッシュと書かれていた。その隣にはジャンプもある。

ヴィオの指がダツシユの項目に触れる。

「走ることができます。」

走り続けることの出来る距離は体力×20メートル。全力疾走は体力×5メートル。

走破可能距離を超えると、十五分間走れなくなります。走ることをやめ二十分経つと、蓄積走破距離はリセットされます。

走り出すと進んだ距離を示すウィンドウが開きます」

読んだあとついでにジャンプの項目にも触れてみた。

「跳ねることができません。助走をつけて跳ねるとより高く、長く滞空できます」

「ジャンプはなにも特別なことはないんだ」

そう言つてその場で跳ねてみる。外で跳ねたときと同じような高さまで上がった。

次に走り出す。始めはゆっくりと、次第に早く。ある一定の速度に達すると、距離を示すウィンドウに全力疾走の文字が浮かんだ。

「なるほどなるほどつて雑貨屋通り過ぎてる!？」

確認することに集中して、雑貨屋のそばを通つたことに気づかなかつたらしい。

同じような失敗をした人はこれまでに何人もいた。そうとは知らないヴィオは恥ずかしそうにしながら雑貨屋へと道を戻る。

「いらつしゃい」

店に入ったNPCの店員がヴィオに声をかけてくる。

ヴィオの目の前にウィンドウが開く。買う、売る、修理、話すの四択だ。

ウィンドウから目を離し店内を見る。左の壁には盾や武器がかけられ、右には革製の鎧を身につけたマネキンが置かれている。カウンターにはガラスケースがあり、そこに説明を受けたときに飲んだポーシヨンや見知らぬアイテムがあった。

ヴィオを売るを選択する。ウィンドウは空白のものに変わる。

「なにを売るんだい? 売るものを出してウィンドウに触れさせて

くれ」

「報酬の玉一つアウト」

手の中に殴られ君との戦闘で得た報酬の玉が現れる。

「これを」

そう言つてウィンドウに触れさせると、報酬の玉が消えウィンドウに『報酬の玉一つ 500s』という文字が浮かんだ。

「これなら500sで買い取るよ。これでいいか？」

イエスorノーの選択肢が現れた。イエスに触れる。

「あんがとよ。金は振り込まれているはずだ。確認してくれ」

ステータスウィンドウを開くとたしかにお金が増えている。

「ほかになにか用事はあるか？」

ついでにいうとウィンドウに触れなくとも、口頭で選択できるんだぜ？」

「ちよっ！？ もつと早く言つてくれっ。」

「つたく。買い物をしたい」

ウィンドウが開く。武器、防具、装飾品、道具の四つの項目がある。

「どっしよっつか……まずは見てみるか。武器選択っ」と

ずらりと武器名が並ぶ。木製の武器が少しあり、あとはすべて石製の武器だ。だいたいの値段は50sから200sの間だ。大石槌と石斧と大石斧という武器が黒文字で書かれている。項目に触れてみると、装備するには力が足りませんとウィンドウがでた。

次に防具。こちらは木製の盾と木製の大盾、革製の衣服、重ねた革製の衣服、革を固めた鎧があり、値段は50sから250sの間だ。木製の大盾も黒文字で書かれている。確認してみるとこれも力が足りないようだ。

ここにある武具はどれも今装備しているものよりも、少しだけ性能がいい。数値にして装備しているものはオール1、ここにあるものは2と3だ。

装飾品には、バンダナと革製の靴があり、両者ともに30sだ。

こちらの防御力はともに1だ。

道具にはポーシヨンと毒消しと松明と小さな袋があり、四つとも50sだ。

「この小袋ってなに？」

「これは道標の粉っていつてダンジョンに入ったとき使っと、歩いた道に白い粉がまかれるんだ。

この粉は使った者にしか見えないから、ほかの冒険者が使った粉と混ざるなんてことはない。

分量は三キロメートル分だ。使うのをやめたいときは、ボックスイン道標の粉とさえばいい」

「便利そうだけど、今はいらないなあ。

……木製の盾一つ、ポーシヨン二つ、松明一つ。これでおしまい」
ウインドウに言った品物が並んでいく。

「合計で200sになる。これでいいか？」

「うん」

「品物は袋に入れといたぜ。金ももらった。

ほかに何か用事はあるか？」

「ない」

「ここで買った品物の耐久度が減ったとき、ここに持ってくれば格安で修理するぜ。

また来てくんない！」

買い物を終えたヴィオは雑貨屋の外へと出る。

買ったものを確認するためウインドウを開く。

ポーシヨンはすでに知っているので確認する必要はなく、松明は一時間明かりを灯すだけ。

盾を袋から出す。ずっしりとした重さでナイフよりも重い。重いということは、中身スカスカではないということか。丸く切られた一枚板で、大きさは縦横二十センチに満たない。革で円周部分を縁取り、固定するため鉸が打ちつけられている。手に持つタイプではなく、腕に装着するタイプのようである。裏にベルトが二箇所についてい

る。

ベルト巻くのは自分でするのかと、少し面倒に思っ腕に持っていくと勝手にベルトが巻きついた。腕を振ってもしっかり固定されていてぐらつくことはない。

「外すときはどうするんだろう?」

ベルトに手を持っていくと『外しますか? イエスorノー』という選択肢が出る。

村の中では外しておこうとイエスと選び、袋にしまう。

「次は……役所でスキル確認しようかね」

村で一番大きな建物へと向かう。大きいといっても平屋で、村の中の建物で比較的大きいというだけだ。

玄関から入ってすぐに暇そうな受付を発見する。

「すみません」

「……っ!？」

暇すぎて寝るとこだった。

あーえつといらっしやい。なにか用事?」

軽く頬を叩いてヴィオに話しかける。

「ここにスキルについて書かれた本があるって聞いたんですけど」

「本? あるある。あつちに本棚があるよね?」

あそこの本棚に触れると、リストが出てくるよ。

でも珍しいね、本を見たいって来る人なかないんだよ」

「そうなんですか?」

俺はここに本があるから見てみるといいよって聞いたんですよ。受付は驚いた顔になる。

「そんなこと言う人がいたんだねえ。」

ここに来る人の用事って、大抵がビギナーズガーデンから出て行くためだからね」

「ここに転送装置があるんですか?」

「うん。レベルが五になったら移動許可が出るんだよ。」

ここからセントラル、ノースウッド、ウォルタガ、フレムオン、メタリアナ、アスターンの六つの世界のどれかにいけるんだ」

「雑誌でそんな名前の世界があるって読んだことある」

「どんな場所かは実際行ってみるといいよ」

「楽しみにしてます」

「じゃあ本見てきます」

「ごゆっくり」

ひらひらと手を振り受付はヴィオを見送った。

ヴィオは本棚に触れ、リストを呼ぶ。世界略史、世界地理本、クラス本、アーツ本に混ざって目的のスキル本がある。

スキル本という項目に触れて、出てきたウィンドウを読み始める。基礎編と書かれているだけあって多くの分量はなく、十五分もあれば読み終わることができた。

ウィンドウを消すと、『スキルが追加されました』という別のウィンドウが開いて、すぐに消えた。

「なにかスキル取るうかどうしよか」

「なに悩んでるの？」

よほど暇なのか受付が持ち場を離れてヴィオに声をかける。

「カウンターにいらなくて大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫。すぐ近くだから誰かきたらわかる」

「それでどした？」

「スキル取るうかどうか迷ってて」

「あー迷うよね。このゲームの楽しみの一つだし。よくわかる」

「俺も迷ったもんだ」

「管理者さんも遊んでるんですか？」

「俺もこういったゲームを楽しみにしていた人間の一人だからね」

「外装はそのままってことは、ないかさすがに」

「このままだったらちよつとまづいからね」

この外装は仕事用のもので、遊ぶ用は別に用意してある」

「だとすると仕事と遊びでずっとこっちにきてるってことになるよ」

うな？

健康上の問題で八時間がいられる限度とか聞いたんですけど」

「この体は君たち冒険者用と違って、簡略化されてるんだ。味を感じることはないし、痛覚もない。感覚が鈍い。パーティを組むこともできないし、戦闘も無理。イクカワ式の長所がわざと消されてる。だから体にかかる負担は少なくてすむ。」

それでも負担がまったくのゼロってわけにもいかなんだけどね。」

君たちのように遊ぶ時間が八時間ってのは無理。その半分くらいになるほど。」

……楽しめますか？ シナリオとか知ってて面白みが減るんじゃない？」

「俺はシナリオ関連は知らないから、楽しめてるよ。」

ホワイトヒストリーのシナリオを知ってる奴もいるけど、そういった奴はファンタズムアニマルとかサウザンドウォーとか遊んでるし。」

それでスキルのことだっけ。俺の意見だともう少し様子を見てから取得してみたらどうだって思う。説明受けたと思うけど、スキルポイントはそれほど多く入手できないからね」

「そうですね。取得は後回しにします。」

先にレベルを上げてきます」

「それがいいかもね。村の外に出る前に宿屋で記録しといたほうがいいよ」

「それはしてます」

「いらぬお世話ってやつだね。」

村周囲のエネミーなら苦戦はしないから大丈夫だよ。でも浜辺や森の中はレベル四くらいまで上げて、防具を整えてからじゃないと危ないから」

「情報ありがとうございます。」

「ちょっと行ってきます」

「行ってらっしゃい」

村から出る前にナイフと盾を装備して、戦闘準備を整える。

村周囲の敵ならば大丈夫だとは聞いていたが、それでも少しは緊張する。

「敵はどこかな」

すっかり明るくなった回りを見渡すと、十メートル先に緑の物体が出現した。

浮かび苔という名のエネミーだ。もっともプレイヤーたちには、その見た目からマリモと呼ばれることが多い。

浮かび苔はなにをしてもなく、そのままふよふよと浮き続けている。

「これ敵だよな？」

盾を前にして少し近づくと、浮かび苔もヴィオに気づき動いた。勢いよく縦回転しながら体当たりしてくる。

構えていた盾にぶつかる。殴られ君の体当たりの時と同じように体全体に小さな振動を感じた。体力ゲージも少しだけ減っている、数値にして四。

「殴られ君よりも弱いのか。たしかにこれなら大丈夫だ」

今度はこっちの番だとナイフを突き出す。この一撃では倒せず、もう一度浮かび苔の攻撃をくらい、またナイフで斬り倒すことができた。

浮かび苔が消え、代わりに掌よりも小さな苔の塊が現れる。

拾い上げ調べてみる。売り専用のアイテムだとわかった。ほかにも使い道があるのかもしれないが、今のヴィオには売ることができないだけとしかわからない。

このあと三回戦闘を繰り返す。戦ううちに浮かび苔の攻撃タイミングを見切れるようになり、かわすことができるようになった。体当たりの速度はそれなりに速いが、直線にしか攻撃できず、攻撃の前に回転しようとするのでそこに気をつけていれば避けることが可能なのだ。

エネミーはアイテムを必ず落とすというわけではないこともわかった。

そして四匹目を倒すと、レベルアップした。

ステータスを確認すると、能力値がすべて1上がり、体力は68へ、技力は69へと上がっていた。スキルポイントの追加はない。

レベルが上がったことで戦闘が楽になり、浮かび苔を一方的に攻撃できるようになる。さらに十五匹ほど倒すとレベルが四へと上がる。このレベルアップで浮かび苔を一撃で倒せるようになった。

「なんだか疲れたな」

肉体的なものではなく、気疲れに近い疲労を感じ、村に戻り休憩することにした。遊びとはいえ臨場感ある戦いに緊張したのだろう。拳動観察などに集中してもいたのだ、そこからも疲れがきているのだろう。

村に入り盾を外し、ナイフをしまったときに気づいたことだが、装備していたそれらが少し軽くなっていた。レベルアップにより力が上がったことで、重いものを楽に持てるようになっていたのだ。雑貨屋で一つ20sだった苔の塊をすべて売り280s手に入れる。

木製の盾の耐久度が減っていたが、百から九十へと減っていただけなので修理はしなかった。

石斧が装備できるようになっていたがそれは買わず、100sの石剣を買い、雑貨屋をあとにした。これで残りの所持金は480s。時間を見てみるとまだ一時間三十分ほど時間がある。

「軽食屋に行つてそこでんびりしよ」

軽食屋に入ると何人かのプレイヤーが話していたり、食べていたりしている。

注文とかどうするのかと思っていると、入り口近くの看板に『座席に備え付けられているメニューに触れるとウィンドウが出るので食べたい物を選んでください』と書かれていた。

空いている椅子に座り、メニュー触れサンドウィッチセットを頼

む。店の中を眺め二分ほど経った頃、ウェイトレスがトレイにサンドウィッチとコーヒーとクッキーを載せ持ってきた。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ」

「食べ終わったら食器はどうしたら？」

「そのまま結構です。食べ物などがなくなると皿は消えますから」

「ありがとう」

「いえ」

一礼しウェイトレスは去っていった。

プレイヤーたちの話し声に耳を傾けつつ、のんびりと飲み食いしていく。味は薄い、不味くはない。

三十分ほどまったり過ごしていると、窓から見える空がほのかに赤く染まり始めていた。

「今日は帰る」

脳内に夕焼けの歌が流れていた。

ありがとうございましたという従業員の声を背に宿に向かう。

宿で中断するという選択肢を選らんだヴィオの視界が黒く染まり

始め、意識も遠のいていった。

ビギナーズガーデン2

意識が浮上し目を開けると、天井が目に入った。

起きたことを感知したのか倒れていた椅子がゆっくりと起き上がる。元の位置に戻ると、足の拘束が取れる。体を伸ばし強張りをとる。ヘルメットを外し椅子に置くと、椅子の上部からアラーム音が聞こえてきた。スティックが出ていることを知らせていた。スティックを引き抜き音が止まると連動するように、閉まっていたドアが開く。

ドアの外から誰かが動いている音が聞こえる。遊び終えた人が帰っているのだろう。

リュックを拾い上げ、スティックを入れるときお腹からグウーっ
と音がする。

「腹減った」

携帯電話で時間を確認すると夕方の五時過ぎだ。おもいつきり昼食を抜いていた。

ゲームの中で食事はしたが、現実の空腹を満たせるわけがない。腹が減っていて当然だ。

「コンビニでもよろう。」

明日からゲームする前に軽く食べるか、一時中断しないと同じこととするなあ。気をつけとかなないと」

グーグーとなるお腹を押さえ、ボックスから出る。

エレベーターの前に立つ勇の隣に人が立った。何気なくそちら見ると、エレベーターの現在位置を見上げているその同じ年の女は見知った人だった。

「立瀬？」

「え？ 岸川君？」

勇が見知っていて当然だった。同じ高校のクラスメイトなのだから。

彼女の名前は立瀬都。腰までの栗色の髪を緑のリボンでひとまとめにして流し、メガネをかけて大人しそうな雰囲気を持つ。

ただのクラスメイトならばフルネームなど知らない。それなりに付き合いがあり、そのときに名前を聞いたのだ。一学期にあった体育祭、その実行委員を決めるときジャンケンで負けた勇は、同じく委員になった都と仕事をこなしたのだった。大人しそうな雰囲気を持つ彼女は断ることができず委員を押し付けられたのだが、その仕事ぶりは真面目で勇よりも上手くやっていた。誰に指示を出すとき戸惑うと思っていたのだが、見かけによらず人を使うのが上手かった。そのことに勇は声には出さなかったが、感心しっぱなしだった。「立瀬もここで遊んでたんだ」

「うん」

「俺は最終クローズに当選して今日からなんだけど、立瀬も似たようなもの？」

「私はテスター第一陣から」

すでに七ヶ月ほど遊んでいることになる。

「父親がゲーム関係者？」

テスター第一陣は全員このゲームの関係者なのだ。開発者の友達だったり、子供だったり、親戚だったりだ。開発者自身は調整しなければいけないことがあって、その当時はまだまだ遊べる状況ではなかった。

「伯父さんが関係者で、私にテスターになってみないかって話がある」

「そうなんだ。そんなに早く遊べて羨ましい。」

「お、エレベーターきた」

二人は開いたドアに入る。一階ボタンを押しドアを閉めた。「ゲームが開始されたときは、今みたいに長く遊べなかったけどいろいろな不都合もあったし」

ゲーム開始直後は三つのゲーム全て、遊べる時間は二時間程度だった。そこから細かく問題点を探り、新たに生まれた問題を解決し、

この最終クローズにあわせるように今の時間になったのだ。フィールドもビギナーズガーデンから出てセントラルだけしか移動できなかった。大きなバグはゲーム開始前に粗方とっていたが、小さいものはまだまだあったりしたのだ。

そんなことを都が話していると、勇のお腹が盛大に鳴った。

「昼抜いてたから」

それに小さく笑みを見せる都。

「よかつたら一緒にここの隣にある喫茶店に行く？」

私もときどき利用するんだ。スティック見せたら少しだけ割引きくよ？」

「そうしよっかな」

我慢できないしと頷く。

二人は受付近くの回収箱にポツクスカードを入れて、受付嬢のありがとございましたという声を背に建物を出る。

喫茶店には勇と同じようにゲームを遊んだあと空腹を感じた者たちがいて、そこそこ賑わっていた。隣に建物ができて、空腹を感じた者が身近な喫茶店に入るようになり売り上げが増した。味は悪くないのだから、客足が遠のくこともない。売り上げが増したことを隣の建物のおかげだとわかっている店長は、スティックを提示すれば割引をすることにして、さらに客を集めることを考えたのだ。ほかにメニューの増加、店員の増加、接客指導、営業時間延長という経営努力の結果、今の売り上げに達したのだ。近々、店を大きくする予定もあるようだ。

勇と都は空いている席に座り、注文を決めていく。

「ずっとゲームしているとメニューに触れてウィンドウ開こうとしそうじゃない？」

勇がふと思ったことを言う。

「何度か経験ある」

都と同じように、勇の言葉が聞こえていた客の何人かが思わず頷いた。

「ついやっちゃんだよね。んでやったあとに恥ずかしくなって回
りを見たら、温かい目で見られてたことある」

「その人もやっただらうな」

こんな何気ないことを話ながら料理がくるまで暇を潰す。実行委
員という仕事をこなしたおかげかアヤネと話すときように緊張はし
ない。都も同じよう出会った当初のような硬さはない。

運ばれてきた料理を食べることで一時会話が中断される。

まっていたと勇は手を合わせてから手早く食べていく。都は
マイペースでよく噛んで食べていく。

勇がごちそうさまと手を合わせたときも、都は食べていた。食べ
ているところを見るのは失礼かなと視線を店の中に巡らせる。そう
しているとフォークを置く音がした。

「ごちそうさま。食べるの遅くてごめんね」

「いやいいって」

このあとなにか用事があるわけではないのだ、遅すぎない程度な
らばイラつくこともない。

「岸川君って行儀いいんだね。いただきますとごちそうさまって手
を合わせてるし」

「小学校の頃ずっとしてただろ？ だから癖になつてんだ」

「私はときどき忘れちゃうけどね」

「俺もそうだけどな」

再び会話が始まり、ゲームの話へと移っていく。

「立瀬ってギルドに入ってる？」

「う、うん。入ってるよ」

なぜ少しもったのかわからず勇は不思議に思うが話し続ける。

「ビギナーズガーデンから出たらどっかのギルドに入りたいんだ。

立瀬の入ってるところに俺が入れるが聞いてくれないか？ 無理に

とは言わないけど」

「大丈夫だよ。うちは特別なことしてるわけじゃないから。皆で集
まって楽しもうってだけだし。来る者拒まず、去る者追わずだから。

でも……」

「でも？ 知り合いが入ると恥ずかしいとか？ それなら遠慮するけど」

「そうじゃなくて！ えっとね……」

「恥ずかしそうにしている都だが意を決したように口を開く。

「私ギルド長なんだよ」

「……ちよつと驚いたけど、そんなに恥ずかしがることでもなくね？」

「テスト第一陣ならばレベルは高いだろうし、そういった点からギルド長に選ばれたのかもしれない。お飾りでほかに実質的なりーダーがいるのかもしれない。

「恥ずかしいのは向こうの私とこっちの私が全然違うから」

「演技してるってことなら、おかしいとは思わないけど」

「少しの演技なら……ね。」

「私って大人しいねとか静かだねってよく言われるんだ。そう言ってる人は悪気はないってわかってるよ。でも何度も言われると、少しは変えなくちゃいけないのになって思っ。そんなとき伯父さんがこのゲームを紹介してくれてね、ゲームの中なら本当の自分を知ってる人はいないから、そこで練習してみようって考えて実行したんだ。」

「演技しすぎて引っ込みがつかなくなったんだけど」

「その成果は出た。体育祭の実行委員での働きぶりだ。」

「実行委員であんなに動けたのはリーダー経験のおかげ？」

「たぶん。緊張してたんだけど、上手くいったみたいでよかった。」

「それでね、うちのギルドに入るのなら歓迎するよ。でも向こうとこっちで私のことは秘密にしてほしい。」

「向こうの私は思いつき演技してて、こっちの持ちこまれると本当の自分を意識しちゃってその演技を保てなくなるんだ。アイオールになりきれなくなる。あっアイオールっていうのは私のキャラクターの名前ね。」

同じ理由で、クラスメイトとかに私がアイオールだって知られると、ゲーム内で私のこと話されちゃうかもしれない、そこから演技が崩れるかも。クラスメイトにプレイヤーがいるかわからないし、意識過剰だったのはわかっているんだけどね」

「ようは立瀬のプライベートなことを喋らなければオーケー？」

「うん、そんな感じなのかな」

「聞かれたらどこまで喋っていい？ 全部秘密にする？ それともちょっとした知り合いっていうふうにし支えないことだけ話す？」

「えっと……ちょっとした知り合いってだけなら。私年齢も少し誤魔化してるから高校生ってことも秘密にしてくれる？ 出身地については以前話したことがあって、同郷はいないってわかってるから何県に住んでるくらいは話しても大丈夫」

「わかった。基本的にプライベートなことは話さないようにしとく」
「ありがとう。」

じゃあうちにくるまでの道筋を言ってくね。

ビギナーズガーデンを出られるようになったらウォルタガに行くしてくれる？ 転送装置で移動するとヴァサリアントっていう大きな都市に出る。そこはウォルタガ世界の中心にある大都市でね、その南城門から転送装置でフォール小城ってところに行ける。フォールに出たら南東に一時歩くと泡村ってところに着く。そこが私たちブラーゼフロイントの本拠地。その宿屋にいけば誰かしらギルドメンバーがいるから、私から紹介されたって言えばあとはもう大丈夫」

都は話しながら道筋をメモ用紙に書いていた。それを勇に渡す。

「ブラーゼフロイントってなにか意味あったりする？」

「ドイツ語でブラーゼは泡、フロイントは友達っていう意味なんだって。『泡村に集った友』っていう意味を込めたって副ギルド長のタッグさんが言った」

「名付け親はその人か」

「落ち着いてるから私みたいに年を誤魔化してないんじゃないかな」

頼りになる人だよ。

移動するとき転送装置使うのに500sかかるから、泡村まできたらその分は出すよ」

思い出したかのように付け加える。

「装備整えるの止めといたほうがいいのか？」

「レベル六まで上げたら、防具そろえるくらいの余裕は出ると思うよ」

自分の経験や聞いた話を思い出し答えた。

「あ！あと頼みごととしていい？」

「できることならいいけど？」

始めたばかりの駆け出しに無茶は言わないだろうと頷く。

「難しいことじゃないから。マリモを倒したら苔の塊手に入るでしょ？それを五個くらい持ってきてほしいの。」

マリモじゃわからないか、浮かび苔っていう村近くにでる敵のことね」

「それくらいなら。でもなんで？」

「あれって薬の材料になるんだよ。でもビギナーズガーデン以外だと入手が難しく、うちの薬作り職人が苦労してるの見てどうにかしたいなって思って」

「ビギナーズガーデンだと入手簡単なのに」

「私もそう思うよ。なにも考えずに売ってたあの頃のことを悔やむ人は多いはず。値段もすごく違うし。そっちだと売値20sだったでしょ？こっちだと最低でも1000sで売れるんだよ」

「五十倍!？」

「それだけ入手が難しいの。取れる場所もウォルタガにはないから、アスダーンまで遠出しなさいいけないし、行ったら行ったで敵は強いし」

「忘れずに持ってくようにする」

「ありがとう。あの子も喜ぶと思う。」

もうこんな時間だね。出ようか？」

そろそろ六時だ。門限とかあるのだろう。

十五%引きだった会計を済ませ、喫茶店を出る。

「岸川君はどっち？」

「俺は鈴橋公園のほう」

「じゃあ私とは反対だね。バイバイってその前に岸川君のキャラクターの名前なんて言うの？」

「ヴィオって名前、濃紺の髪と目の人間。今の俺よりも少し背が高い」

「わかった。ギルドメンバーに特徴伝えておくね」

今度こそバイバイと手を振って都は歩いていく。

建物からは遊び終えた人が出てきて、今から遊ぶだろうう人が入っていく。

楽しかったと満足感を得て、勇は家へと足をむけた。

次の日、ログインしたヴィオは中断した宿で目を覚ました。

空は昨日と同じく暗い。暗くても開いている雑貨屋で革鎧を購入し、その場で着込む。着慣れていないせいで少し違和感を感じるが、気になるほどではない。

村入り口で、盾と石剣を取り出し装備する。準備万端と外に踏み出す。

そして思った。

「暗い」

夜なのだから当然だ。これでは敵を発見しづらい。星明り月明かりでは心もとなかった。

松明でもつけければ少しは明るくなるかと、袋から取り出す。『使いますか？』というウィンドウが開き、イエスを選ぶと勝手に火がついた。

これで周囲は明るくなり、だいぶましになった。戦闘時は柄を地面に突き刺せばいいと浮かび苔を探し始めた。

暗いことで浮かび苔の動くタイミングを見逃し幾度かダメージを

食らうが、レベルアップと革鎧のおかげで1や2といったダメージで済んだ。松明が燃え尽き夜が完全に明けた頃、目標としていた苔の塊五個を超える七個を入手した勇は、一度休憩のため村に戻り喫茶店へと入った。ピザとミニサラダを頼み、ゆっくりと食べる。

食べ終えたヴィオはこれからどこに行こうか考える。

「浮かび苔はもう余裕だから、森か浜辺に行きたいけどどっちにするかなあ」

距離的にはどちらも同じ。どんな敵がいるかわからないことが問題だ。

わからないことは聞いてみるのが一番と近くにいたプレイヤーに話しかけ情報を得る。

浜辺には秋田犬より少し小さな蟹がいる。槌や斧といった叩き潰すことのできる武器が有効らしい。攻撃方法は二種類。ハサミでの攻撃と泡で視界を防ぐ。

森には猿くらの大きさの鳥がいる。特に有効な武器はない。素早い動きが特徴的で、爪とクチバシで攻撃してくる。

お礼を言って、喫茶店を出る。どちらに行くかは決まっていた。

浜辺だ。有効な武器がなからうと浜辺に行く。なぜなら森には鳥がいるから。

勇は鳥が苦手だった。碌な思い出がない。ちょっとしたトラウマになるほどに。ゲーム内だからといって平気だとは思えなかった。

村を出て、森と浜辺に別れた道を浜辺へと歩き、十分ほどで到着した。

視界内に二匹の赤い蟹がいる。ヴィオは早速近づく。蟹もヴィオに気づいたようで近づいてくるが、その動きは浮かび苔よりも遅い。「これなら大丈夫か」

石剣を振り下ろす。浮かび苔のようにぎっくり斬れるようなことではなく、鈍い衝撃が剣越しに伝わってくる。防御力が浮かび苔よりも高いのだろう。

次は蟹の攻撃だ。ハサミをなぎ払ってくる。それを後ろに下がり

避ける。

これなら楽勝だと近づいて剣を振るった。

そして次の蟹の攻撃で油断していたと思いき知らされる。今度はハサミではなく、泡を飛ばしてきたのだ。勢いがよく避けることができなかつた。顔にかかった泡はヴィオの視界を防ぐ。なにも見えないうず、剣を振るっても蟹には当たらない。そしてどこにいるかもわからない蟹の攻撃がヴィオに命中した。こんな状態でも体力バーはわかる。80あった体力が67に減った。

まだ泡はとれない。ヴィオの攻撃は外れ、蟹の攻撃は当たる。今度は10のダメージを受けた。ようやく泡がとれる。倒れるつと剣を振るうも蟹はまだ生きている。突き出してきたハサミを横に移動し避け、剣を振るうとようやく倒れた。

蟹は消え、赤甲羅が残る。

「始めに楽勝つて思ったのが嘘みたいな展開だったな」

その場に座り込み言った。甲羅を回収し、今の戦闘を思い出す。

「注意するのは泡だな」

泡さえ喰らわなければダメージを受けることもなかったのだ。次はそこに注意すると決めて立ち上がる。

次の一戦でも泡を避けることができずにダメージを受けることになった。しかもクリティカルを受けて、戦闘が終わり体力は残り18。普段は緑の体力バーは真っ赤になっている。

「ポーシヨン一つアウト」

袋からポーシヨンを取り出しいき飲み。体力は42まで回復する。念のためもう一本飲んでおく。これで66まで回復した。

「泡だなあ。どうするか」

誰かいないかと周囲を見渡すと別々戦っている人が二人。片方は戦いながれているのか、泡を巧みに避けて斧を振り下ろしている。もう一人は、

「あ、喰らった」

泡を喰らっていた。だがヴィオと違うのは、そのまま戦闘を続行

せず一度離れて泡がとれてから戦闘を再開しているところだ。

蟹と戦ってきた先人が生み出し、受け継がれてきた戦い方だ。多くの者にとつて、この泡を避けるのは難しかったがゆえに生まれた戦い方だ。ヴィオの視界の中で今も避けている彼は優れた洞察力観察力を持っているのだろう。

「なるほど、泡が取れるまで離ればいいのか」

蟹の動作を見抜けないヴィオが取るべき行動は決まっていた。

一度引くという戦い方を真似て蟹を倒していく。一度、場所を考えずに戦ったせいで砂に埋まっている大きな岩にぶつかる失敗をするも、戦いと休憩を交互に行い残り時間を一時間を切った頃にはレベルが六まで上がっていた。レベル五でスキルポイントが手に入り三ポイント貯まったことになる。

自動回復のスキルアーツを取得したので、休憩しているときに体力がほんの少しずつ回復する。しかし休憩は回復だけではなく、緊張感などの精神的疲労を癒すのにも必要だった。

きりがいいので今日はここまでとして村に戻る。

甲羅をすべて売ると480sになる。手持ちとあわせて約600s。転送装置にかかる費用に余裕があるので、硬い甲羅を叩いて100から25まで耐久度の減った石剣を修理してもらった。これで残りは570s。

残り時間はあと四十分弱。スキルを一つとつてみたいと思っていたので、残り時間をそのためにあてる。

「なにがいいかなつと」

スキルウィンドウを開いて、取ることでできるスキルを見ていく。刃物や格闘や魔法などが並び、本で得たものだけで十以上のスキルがある。珍しいもので農業といった文字もある。

始めから持っていた三つのスキルはすでに熟練度100近くになっていた。中でも運動は100に達している。運動スキルが100に達したとき自動回復のスキルアーツを取得したのだ。回復速度は十五秒で1%だ。

「もう上限に達したのか早いな」

早いのは当然だ。100でようやく一人前とみなされるのだから。200で熟練、300で一流だ。三つのスキルは誰もが持つ基本スキルで、しかもずっと使っていたので成長は早い。

「ファンタジーって言ったら剣と魔法。魔法使いたいな。魔法取るか」

ウィンドウの魔法の項目に触れる。そこからさらに四つ分岐がでてきた。攻撃、回復、補助、特殊の四つだ。

ヴィオはここでさらに迷う。特殊をのぞき、どれも役立ちそうだからだ。とりあえず特殊がどんな魔法なのかわからないのでヘルプで確認する。

『攻撃、回復、補助以外の魔法。例としては転移、変身、変化など』
「転移以外使いだころがいまいちわからない。」

……補助って属性攻撃できそう、補助にしようかね」

補助を選び、決定した。スキルウィンドウに新たに補助魔法という文字が白く浮かぶ。

『スキルアーツ・速度増加習得』というウィンドウが現れ消えた。確認すると『戦闘中の攻撃速度上昇』と書かれていた。消費技力は30。今のヴィオでは二回が限度だ。

「多く攻撃できるってことでもいいんだよね？」

使い方は音声認識だったはず。速度増加」

なんの反応もない。

「あれ？ なんでだろ？ もしかして……スキルアーツ・速度増加」

思いついたことを実行。今度は効果がでた。言葉が足りないだけだったようだ。風が体全体に巻きついたような感じがして、そのまま渦巻いている感じがする。その状態は三十秒続きなくなった。

「戦闘中に使わないといまいち使い勝手わからない」

今度忘れずに使ってみようと考え、宿で中断した。

プレイヤーフロイントへ

ゲームを始めて三日目、ヴィオはビギナーズガーデンを出ようと役所に向かう。

受付には、先日出会った受付が今日も暇そうにしていた。いつも暇そうな受付だが、仕事がないわけではない。忙しい時期もあったのだ。ヴィオがゲームを始める二日前は、最終クローズから始めた人たちが多くビギナーズガーデンにいた。ヴィオはちよつとした用事があつて、そんな人たちとゲームを始める時期がずれたのだった。おかげで混雑を避けられたのだ。

「こんにちは、こんばんは？」

外では十時頃だが、こちらでは明け方少し前だ。どちらの挨拶が正しいのか迷う。

「ゲーム内ではこつちの時間に合わせるのが普通になってるよ。」

「だからこんばんは。今日はどんな用事？」

「転送装置を使いたくて」

「ステータスウィンドウ見せてくれる？」

「自分だけじゃなくて、ほかの人もステータスウィンドウ見れるんですか？」

「同じギルドかパーティを組んでないと無理だね。俺は管理者権限で見ることができるんだよ。そうしないと仕事にならない」

なるほどと頷いてヴィオはステータスを呼び出す。

「うん。レベル五を超えてるね。使用許可だそう」

「ありがとうございます」

「ついてきて」

少し留守にしますというウィンドウをカウンター前に表示して、受付は歩き出す。

歩きながら会話ネタという思いついたのだろう、スキルのことを

ヴィオに聞く。

「補助魔法のスキル取りました」

「ふーん、なにか理由あるの？ それともなんとなく？」

「属性攻撃できそうだから、取ってみました」

その返答を聞いて受付の動きが止まった。表情にはなんともいえない、あえて表現するならやつちまったなあといったものが浮かんでいる。

「補助魔法は身体能力補佐やダメージ軽減や相手の動きを阻害するだけで、属性攻撃は無理なんだよ。」

そうだったことは強化アイテムを手に入れるか、魔法剣士術式格闘家のクラスができることなんだ」

もう一つ方法があるのだが、それはゲームを進める楽しみを奪うことかつ、あまり情報を与えるわけにもいかないという理由で話すことはなかった。

「そ、そうだったんですか」

「ま、まあ役立たないわけじゃないから。取って損はないよ！」
励ましに近い言葉だ。

「アリガトウゴザイマス。」

あ、そうだ。速度増加って攻撃回数が増えるってことであってますか？」

「うん、それであってる。歩行速度が上がるわけじゃないから注意してね。」

ほいつ到着」

扉を開けると、明るい光が部屋から漏れ出る。

部屋の中は白一色で温かな光が天井から注がれている。二人の正面には微笑みを浮かべた五メートルほどの女神像。女神像の前に魔法陣が描かれている。天井から注ぐ光が魔法陣に集まり、紋様を成していた。

受付はウィンドウを開きながら口を開く。

「どこに行く？ セントラル？」

「セントラルにも行ってみたいんですけど、ウォルタガってところに行きたい。そこにあるギルドに入れてもらえるようになってるんです」

「へーなんてギルド？」

「ブラーゼフロイントってところです」

「あーあそこか、いいとこだと思うよ」

言いながらウィンドウに現れたキーボードを操作していく。

「知ってるんですか？」

「イベントによく参加するギルドでね。イベント進行の手伝いにつたときによく見かけるんだよ。楽しそうにイベントに参加してくれてるんだ。」

何度か一位になってたりするから、それなりに名は通ってる。

それにあそこのギルド長が美人でねえ、ミスコン上位入賞してたよ」

「ミスコンなんて開かれてるんですか」

都が参加する様子が思い描けなかったヴィオ。誰かに推薦されたんだろうと考え、それは当たっていた。

「いろいろイベントやってるからね……これでよし」と

魔法陣の放つ光が強くなる。

「もう少し待つてね。少しやることあるから」

受付は咳をして声を整える。表情も引き締められている。

「籠籠より飛び立つ若き者へ。」

汝の行く道には苦難があるだろう。挫折もあるだろう。

けれどもそれだけではない。きっと喜びもある。達成するものもある。

汝の行く末に幸あることを願い、祈りを捧げよう！」

受付が、ぱつと片手を上げた。

天井から注がれていた光の角度が変わり、ヴィオを照らす。

「旅立ちを守護する女神よ！ この若者に祝福を！」

ヴィオたちの正面にある女神像から蛍のような光の粒がいくつも

湧き出て、ヴィオへと集い体に溶け込んでいく。

「なんですかこれ？」

「祝福だよ。君の未来に幸あれってね。

システムのいうと、スキルポイントの贈与」

ウィンドウを開き確認すると本当にスキルポイントが1増えていた。

「せっかくの旅立ちだからかっこよく行きたいっしょ？ そっいつた考えのもと生まれたイベントだよ。

さてこれでここビギナーズガーデンですことは終わった。あとは足を踏み出し、広い世界に飛び込むだけ」

「お世話になりました。

いつてきます！」

「いつてらっしやい、楽しんでね」

受付に見送られヴィオは魔法陣へと足を踏み入れた。

一瞬だけ視界が黒一色に染まり、すぐにどこかの大広間に出る。

ここがウォルタガ、ヴァサリアントのどこかの建物なのだろう。

ヴィオが周囲を見渡していると、誰か近づいてくる。

「こんばんは。ヴァサリアント庁舎にようこそ」

庁舎ということは管理者関連の建物で、ヴィオに話しかけた人は管理者の一人なのだろう。

「えと、こんばんは」

「ここがどこだかの詳しい説明は必要ですか？」

「ヴァサリアントの役所ですよね？」

「はい。ヴァサリアントという街の北にある建物です。

出口までお送りしましょうか？」

「お願いします」

この管理人は説明係り兼案内係りなのだろう。

管理人に案内され建物の外に出たヴィオは、念のため泡村までの道のりを聞いてみた。記憶は間違っておらず、お礼を言ってお礼を言ってお礼を言ってお礼を言ってお礼を言っ

ら離れる。振り返って庁舎を見ると小城のような外見になっていた。ヴィオはすぐに南城門へとは向かわず、街をぶらぶらついでみることにした。初めてくる大きな街なのだ、どんなふうなのか興味があつた。

ウォルタガの中心都市というだけあつて、ビギナーズガーデンの村とは比べ物にならないくらい広い。ヴェネツィアのような水と共にある都市だ。しかも水は綺麗に透き通り、泳いでいる魚の姿がよく見える。観光都市として最高なのではないかとヴィオは思う。入り組んだ水路には小船がいくつも浮かび、プレイヤーやNPCが船を操り移動している。遊泳可能という看板のある水路では、数人のプレイヤーが水着姿で泳いでた。

のぞいた武器防具道具屋には高いものが揃っていた。道行くプレイヤーも高そうな装備を身にまとった者や、ヴィオよりも軽装な者、ドワーフ、獣人など様々な人たちがいる。ほかにも種族選択時には選択に入っていなかったような種族もいた。エルフっぽいのだが長い耳の変わりにヒレが髪から出ていて、どこか魚関連のような感じを受ける。

大広場と思われる場所では、プレイヤーたちが露店を開き、武器防具道具料理を売っていた。料理人風のプレイヤーが作っていたクレープが美味しそうで、ついチョコバナナクレープを買ってしまった。置かれていたベンチに座り、クレープをかじる。ここから見える風景はプロگرامされたものだとわかつているのに、見飽きることなく楽しめる。

クレープを食べ終わるとウィンドウが開き『ステータスブースト』という表示が出た。

「なんだろな？」

不思議に思い作った本人に聞いてみた。

「ああ、あんた始めたばかりなのか。調理人の称号を持った人が作った料理を食べると、ステータスが一時的に上がるんだ。時間にして平均一時間。」

私の腕はまだまだだから多くは上がらないけど、ドンドコ亭の料理なんかは30%アップして二時間以上効果がもつって話だよ」

「なるほど、ありがとうございます」

「これくらいの情報でお礼なんていいよ」

もう一度頭を下げてからヴィオはその場を立ち去る。その背にこれからもご贖肩にといい声がかけられた。

見えない場所が多いが、そろそろ泡村に行こうかと考える。

ヴァサリアントに対するヴィオの最終的な感想は、楽しそうな場所。でも人が思ったよりも少ない場所といったものだ。

街自体は広い。しかしそれに人数が見合っていないのだ。これは当然だった。一挙に人数を動員した最終クローズとはいえ、合計で一万人と少し。六つある世界一つずつにだいたい1500から2500人いる。その人数が一箇所に集まっていれば多く感じるだろうが、ばらけているのだ。人が思ったより少ないように感じて当然だ。正式にオープンして人が無制限に入ってくるようになると、解消されるのだろう。

人通りの少ない大通りを通り、南城門の転送装置に到着。行き先を告げお金を払うと、すぐにファールへと飛ばしてくれた。ファールの宿で記録し、そこから南東へ歩き始める。

切り開かれた森にできた道、大きな川のそばを歩いていく。道中に出てきた青い犬と戦い体力を半分削られるも勝利。速度増加を使い忘れたことを思い出すも、回復アイテムがないのもう一戦は厳しいと考え、そのあとは戦いを避けて泡村に到着した。

そこはビギナーズガーデンの村より広く、ヴァサリアントより小さなフォールよりも小さい村だ。目を引くのは空中に浮かぶいくつものシャボン玉。なるほどこれが村の名前の由来かと考えつつヴィオは宿を探す。探す過程でシャボン玉を次々に生み出す小池を発見した。そこから出たシャボン玉に好奇心から触っても割れず、じつと見ていると風に流され村中に広がり、一定時間経ち割れていった。観光気分で歩いていると、宿をみつけることができた。

「ほかに宿はなかったし、ここであつてははず」

少し緊張しつつ宿に入る。NPCの受付がいらつしやいませと声をかけてくる。まずは記録しておく。そしてフロントから内部を見渡すと、宿の奥から三十才ほどのがっしりした体つきの獣人が出てきた。黒熊の獣人なのだろう。二メートルの巨体で体全体が黒毛で覆われている。その肩には小さく愛らしい妖精がのっかっている。

ギルド関係者かと思ひヴィオは話しかける。

「すみません」

「ん？ なんだ？」

「ブラーゼフロイントの関係者ですか？」

「そうだが、お前さんは？」

「俺はた、じゃなかったアイオールに頼んでここに入れさせてもらえるようになったヴィオと言います」

アイオールのプレイヤー名である立瀬と言いかげ慌てて言いなおります。

「おーお前さんがアイオールの嬢ちゃんと言つてた新人か！ 話に聞いているよ。今アイオールも奥にいる案内するぜ」

「ありがとうございます」

「畏まらなくていい。仲間になるんだもつと砕けていこうぜ」

「わかった」

それでいいんだとヴィオの背中をばしばし叩く。親愛の情が込められているのわかるので、多少力が強くとも文句を言う気は起こらない。

「あ、そうだ。名前はなんて言うんだ？」

「俺はタツグ。こっちはフィスだ」

タツグは肩にいる妖精を指差し言った。フィスを見ると笑いかけってきたので、ヴィオも笑い返す。

「アイオールから聞いている。頼りになる人だつて」

「嬢ちゃん、そんなこと言つてたのか。嬉しいねえ」

通路にあつた扉の一つを開くと、宿の外見よりも広いと思われる

空間が広がっていた。

「部屋の大きさがあってないような……プログラムで広さをいじってる？」

「そうだ。」

アイオール嬢ちゃん、新人がきたぜ！」

部屋の中には三人いる。一人はヴィオと同年代か少し上の人間の男、もう一人は二十ほどのエルフ、最後はそのエルフにべったりくっついていくヴィオと同年代の女。

「ヴィオ？ 来たのか！ 待ってたよ！」

立ち上がり近づいてくるエルフを見て、ヴィオは心の中だけで誰だ？ と呟く。後々このこと思い出し、口に出さなかった自分を褒めてあげたくなった。

外装が違うのは当然として、受ける雰囲気も都と違う。

朱色の長髪を流すままにして、その髪から長い耳がびよこんと出ている。切れ長のルビーを思わせる瞳、すらっと通った鼻筋、桃色の唇、雪に負けていない白い肌。華奢に見える体を大きめのケープが隠している。見た目で判断するとおっとりとしてそうだが、雰囲気と口調でそうではないとわかる。美人だ、ヴィオが勇が今まで見てきた人の中でトップに入るほど美人だ。

この外装は都が狙ったものではない。都も外装はランダムで決め、もともとの素材の良さもあって美人となった。そこに種族でエルフを選んだせいでさらに美人度が上がった。開発者の中にエルフは美形といった信念を持つ者がいたおかげで、外装に補正がついているのだ。

都がこの外装を変更しなかったのは、自分とはまったく違うから演技しやすいのではという考えがあったからだ。

近づいてきたアイオールがタッグへと拳を振るう。

「嬢ちゃんはやめなって言ってるだろ！」

「すまんすまん」

殴られると予想していたタッグは、笑いながら掌でアイオールの

拳を受け止めた。プレイヤー間での戦闘はコロシム以外では成立しないためダメージを受けることはない。だから受け止めなくともいいわけだが、そこはそういったやりとりを楽しむため演じているのだろう。

「何度言っても聞きやしないっ。どしたのさヴィオ？」

「えっらい驚いてんな？」

もちろんアイオールの言動に驚いていた。演じているとは聞いていたが、今のところまったく都を感じさせないのだ。ここまでとは思っていなかった。

「い、いや……相変わらずだなと、まったく外と変わらない言動に呆れて驚いてた」

素の状態とまったく違うから驚いてましたとは言えない。約束があるのだ。だからなんとか誤魔化す。

そんなヴィオをタツグは一瞬のみ探るような目で見たが、すぐに笑みをかたどったものへと変わった。作った笑みではなく、自然に浮かぶ笑みだ。

「そうなの？ アイオールさんこのままなんだ？」

「僕はそうじゃないかと常々思ってたけどね」

アイオールと共にいた男女が近づき言う。

「ほほう？ セバスターはそんなこと考えてたのか」

「えっ！？ いやごめんなさいリーダー！」

アイオールにこめかみを拳でぐりぐりとされながらセバスターは謝る。

もっとやれーと煽るのはアイオールのそばにいる女。

「リオン煽るな！？」

セバスターが煽りを止めさせようと言った。

「兄貴の自業自得でしょ！」

「あの二人は兄妹？」

ヴィオがタツグを見上げ聞いた。

「ああ。男の方がセバスター、薬作り職人だ。女のほうがりオン、

お前さんと同じく最終クローズから始めたんだ。リオンはセバスターに誘われ三日前にここに入ったばかりだ」

「三日前に会ったにしてはアイオールに懐いてるような？」

「なんでも綺麗なもの可愛いものが好きらしくてな、初めてアイオールを見たときからくつついてるよ。迷惑にならない程度の懐きようだから、アイオールも悪い気はしてないらしく好きなようにさせている」

「たしかに綺麗だもんなあ。ミスコンで上位入るの納得だわ」

「そのこと知ってるのか。アイオールから聞いたのか？」

「いやいやビギナーズガーデンの役所受付さんに、ここに入るって話したら教えてくれた。ここがいいところだとも言ってた」

「そんな風に思われてるのか。嬉しいじゃないか」

所属しているギルドが良い雰囲気だと思われていると知ったタツグは嬉しげに笑みを浮かべた。その雰囲気を受けてかフェイスも笑顔になる。

「なんの話してんの？」

セバスターを解放したアイオールが上機嫌なタツグを不思議そうに見て聞く。

タツグが今聞いた話を聞かせると、アイオールたち三人も嬉しげな笑みを浮かべた。皆タツグと同じなのだろう。

「そだそだ」

ビギナーズガーデンから連想し頼まれごとを思い出したヴィオは、袋から苔の塊を出す。

「これ頼まれもの」

「あ！ 苔の塊だ！ リーダー頼んでくれてたんですか!？」

「ヴィオがビギナーズガーデンにいるから、ちょうどいいと思ってね。」

トレードしようヴィオ」

アイオールが提案してくるが、その方法がわからない。それを伝えるとやり方を一から教えてくれるようになった。

「まずはトレードって言って、そのあとにトレードしたいキャラクター名を言うんだ。」

トレード・ヴィオ

アイオール真似て続く。

「トレード・アイオール」

すると両者の前に、四分割されたウィンドウが開いた。

「ウィンドウの右に袋の中身、その下に所持金が表示されてるだろ？物を交換したいときは物に触れて、買い取りたい場合は所持金に触れる。物やお金を選んだら、その個数や使いたい額を左下にある数字キーを操作して決める。そしたら左上の枠に相手の提示した物や金額が表示される。これでいいのなら表示された物が金額に触ればよし」

教えられたとおりに操作していく。

「七つ持ってきてくれたのか。じゃあこっちは一つ1000sで買い取ることにして。あと転送装置の料金も渡しとくよ」

ウィンドウの左上に7500sという金額が表示された。これでもいいと思ったヴィオは金額に触れる。

「これでトレード終了だ」

所持金に7500s追加されている。

「いつきに所持金が増えたなあ」

「始めはそう感じるかもね。でもレベルが上がってあちこち行くうちに、それだけだと足りなくなるよ」

タッグとセバスターは同感だと頷く。特にお金に関して少し無茶したタッグは深く頷いている。始めたばかりのリオンはまだまだ実感がないのだろう、首を傾げている。

「セバスター、これ倉庫に入れとくから好きなときに使いな」

「ありがとうございます！」

「タッグ、ヴィオを連れてここらを案内してやって。あとギルド加入登録をお願い。」

私たちはいないメンバーに連絡して集まってもらうから」

顔合わせなのだろう。リオンが入ったときもしたのだ。そのまま食べ物飲み物を持ち酔って賑やかなパーティになった。

「いいぜ。ヴィオは必要な道具やらをまだ買ってないだろうから、その買い物もしてくる。」

その前に登録だな。ウィンドウを開いてくれるか？ んで環境設定、ギルド設定に進むと」

白紙のウィンドウが開いた。

「手を出してくれ」

言われるままヴィオは手を出す。その手をタッグは掴んだ。

「ようこそブラーゼフロイントへ、歓迎する」

ウィンドウにブラーゼフロイント加入の文字が浮かんで、ウィンドウは消えた。

歓迎の握手がギルド加入登録のキーとなっているのだ。これは誰でもできるわけではなく、基本的にギルド長か副ギルド長のみが行える。

「これからよろしく」

ヴィオのこの言葉にタッグは歓迎の笑みで応えた。

カウント0

宿を出たヴィオとタッグはこれから必要と思われる物、今の装備よりも上の物を買ったため店に向かう。

ヴィオは歩きながら会ったときから気になっていることを聞く。

「フィスってなに？ マスコットとか？」

名前が出て呼ばれたと思ったフィスがヴィオを見る。そんなフィスの頭を撫でてやりながらタッグは答える。

「フィスは斧から生まれた精霊だ。」

俺みたいに武器から生まれた精霊を連れた者を精霊付きというんだ」

「武器から精霊が」

「条件さえ満たせば誰でも精霊付きになるぞ。」

条件つてのは一つの武器を大事に長く使うこと。フィスの場合は、三ヶ月以上この斧を使い続けたら生まれたんだ。

生まれた精霊は祝福、契約、変化のいずれかの願い一つを叶えてくれる。祝福は武器の強化。契約は武器の使い手に同行する。変化はちよつと特殊だ。事前に補助スペースに属性玉を入れてた場合、その属性玉にそつた精霊人化を起こす。属性玉つてのは武器に属性を持たせるアイテムで、精霊人つてのは自分の属性に対する耐久性を持った種族だ。炎の精霊人なら炎に強い。だが水に弱い。陰陽五行つて知ってるか？」

「木火土金水つてやつだよな？」

「そうそれ。この世界の属性はそれだ。世界の並びもそれだ。違うのは中心に無のセントラルがあるってことか。」

属性玉をはめてないと属性は無になる。無の精霊人つてのはいいんだ。

精霊人への外装変化は元々の外装がベースになる。例えば俺が炎

の精霊人化してたら毛は朱色になり、体の一部分が燃えているって感じだな。

ステータスとかが劇的に変わることはない。変わるのは属性に関する長所短所ができ、外装が変わり、行ける場所行きづらい場所ができる、そんなところだ」

この話を聞いてヴィオはヴァリアントで見た人は、水属性に精霊人化したエルフの姿なのかと納得した。

「いろいろあるんだ」

「開発者たちが気合入れた結果なんだろうなあ。そのおかげで俺たちは楽しめてる」

「フィスってなにかできる？ それとも可愛いマスコットの存在？」

「ときどき魔法を使って援護してくれる。俺は魔法関連はからっきしだから助かってる」

その言葉を理解したのか、フィスは小さな胸をえっへんと反らす。愛らしい姿にヴィオとタッグは思わず笑い声が出た。

話しながら歩いて着いた店は、ポンポコ屋泡村支店という看板を掲げた店。

「このポンポコ屋は冒険の必需品を売ってるんだ。廃村じゃなきゃどんな小さな村にも支店を構えている。本店はセントラルにある」

「ポンポコ屋ってなんかカワイイ名前だねえ」

「始めは黒狸亭っていう名前だったんだけどな、俺たちプレイヤーがあまりにポンポコ屋ポンポコ屋って言うもんだから改名したんだ」

「黒狸亭がなんでポンポコ屋に？」

「それは店に入ってみればわかる」

ヴィオはタッグに促され店内に入る。そこにはNPCの従業員が一人いた。

そのNPCを一目見てヴィオは納得した。突き出た腹を持ち、どこか狸を思わせる顔の従業員がいるのだ。服を茶色にして、獣耳をつければ昔話に出てくるような狸そのままだ。ポンポコ屋というの

は彼を指す愛称なのだろう。親しまれていると判断したから運営側も改名したのだ。ちなみに従業員の名前はポポンだ。

「なんとなく理解できた」

「だろう？」

納得したところで買い物だ。

「買うものは二つ。袋と持ち帰りの札。

今持っている袋は始めにもらったものじゃないか？」

グイオは頷く。

「その袋は収容数が三十までなんだ。今から買う袋はその倍入る。

持ち帰りの札つてのは死んだときに、金と持ち物をなくさないようにするアイテムだ。これによってデスペナルティはステータス低下だけになる。注意しなければならぬのは、この札は消費タイプのアイテムつてことだ。一度死んで買い忘れる奴がいるから、気をつけとけよ」

「その二つの値段は？」

「袋が2000s、札が1000sだ」

「高っ!？」

「今のお前には高いだろうが、必要だし金のある今のうちに買っていたほうがいい」

タッグに促され買い物始める。開いたメニューウィンドウには今聞いたアイテムのほかにもいくつか値段の高いものが並ぶ。今から買うものが一番安いのだ。そのことにグイオは軽く眩暈を感じる。「この死なずの紅玉と職人の魂と職人の心つてのは？」

この店で上から高い順に三つを指差し聞く。死なずの紅玉が3万sで職人の魂が10万sで職人の心が5万sだ。

「死なずの紅玉は所有者が死んだとき、身代わりになり割れるんだ。体力は半分まで回復し、デスペナルティも受けない。ただし常に一個しか持てない。」

職人の魂は熟練化の数を増やせる」

「ああ、これがそうなのか。説明受けたときにアイテム使えば増や

せるって聞いたよ」

「職人の心はすでに熟練化しているものに、スキルを一つ付け足すことができる。これによって称号名が変わることある。無駄になることもあるがな。」

例えばマジシャンは魔法スキル二つに魔法知識魔法技術を取得すると熟練化するか聞いてくる。そして熟練化したあとに、魔法スキルもう一つ取ったとして、それを熟練化にくつつけるとソーサラーに変化するんだ」

「くつつけるのに制限は？」

「職人の魂と同じで回数制限がある。熟練化したものに二回までだ」説明を受けたのち、袋と持ち帰りの札を購入する。ウィンドウに三ポイント獲得と表示された。これについてもタッグは説明する。

「ポンポコ屋で買い物すると、1000sにつきポイントが一つ溜まっていく。これが50溜まるとどれか商品一つ三割引になるんだ。」

「どこのポンポコ屋でもポイントは共通だ。あとこのポイントを使って、くじ引きができることがある。一等はレアものだったりするぞ。ここらへんは運営が経営している店だからできることだな」

「ここでの買い物を終え二人は、武器屋と道具屋に向かう。そこでヴィオは藤甲という藤でできた軽く丈夫な鎧、これは古代中国で使われていたものだ。同じく籐でできた兜、青銅製の剣を購入。隣にあった道具屋でポーション四つ、毒消し二つ、松明二つを購入。これで合計2000sだ。残り所持金は2500sとなる。もう少しレベルが上がると、鉄製のブロードソードが買える。残りの所持金の大半はそれに消える予定だ。革鎧と石剣は使い出してそれほど長くはないが売った。最初から装備していたビギナーズナイフとクロースは耐久度が無制限なので、念のためにとってある。」

「これから扱っていく武器は剣にしようと思ったので、刃物スキルも取得した。熟練度が上がるたびに、スキルアーツを取得し、少しずつ攻撃力が上がっていくだろう。」

「装備整えたり、村の中も見て回った。時間あるからちよつと外で

エネミーと戦ってみるか？ 買った物の使い勝手を確かめたいだろう？」

「危なくなったら助けてくれ」

「任せとけ、と言っても通常フィールドに強い敵はそうそういないけどな」

二人は村入り口で装備を身にまとう。

「でっかい斧だなあ。その斧からフィスが生まれたのか」

「ジャイアントアックスって名前だ。一目見て気に入った斧なんだ。これを買うために金貯めて、購入したあと金がすっからかんになって困ったのもいい思い出だ。買ってしばらくステータスの関係で使えなかったのもいい思い出だな」

それは本当にいい思い出と言えるのだろうか。

タツグが手に持つのは両刃の斧。全長二メートル弱。刃もぶ厚い金属で、いかにも重量級武器といった雰囲気をもとわせている。少しだけ装飾されているが、戦闘用といった感が強い。そんな重そうな斧をタツグは軽々と扱っている。振るうたび起きた風が周囲の木の葉を揺らし、ヴィオの頬を叩く。ヴィオが苦戦した青い狼を軽がると一撃で屠りそうだ。

こんな強そうな人がそばにいるのだからヴィオは安心して力試しに臨むことができる。

エネミーを探すとすぐにあの狼が現れた。

「スキルアーツ・速度増加」

今度はスキルアーツを使うことを忘れず、戦い始める。新調した装備、スキルアーツのおかげで、四分の一ほどダメージを受けただけで倒すことができた。一度戦っていたということも楽しかった要因の一つだろう。

「補助魔法スキル取ってたのか」

戦闘を見守っていたタツグが話しかける。

「属性攻撃できるようになるんじゃないかって思って取ったら無駄だったよ。ビギナーズガーデン役所受付さんに教えてもらった」

「似たような話よく聞くな。店での値段交渉に有効とかと思って交渉スキルとつたら、意味なかったのかな。」

「まだまだ情報が出揃ってないからそんなこと起きるんだよなあ。詳しい情報が公開されれば、もっとマシになるんだろうが。」

「まだまだ調整中ということで、細かな情報は開発者たちが公開を止めていた。それでも個人で知りえたものをネット上で公開している人はいる。この情報が絶対正しいという保障はないが、そこを見ればスキルの勘違いは防ぐことが可能だ。しかしヴィオは楽しみが減るということで見えていなかった。」

「このあともう一回戦い、現在の強さがだいたいつかめた。」

「そういえばタッグってレベルいくつ?」

「おれか? 俺は二十八だ」

「どれくらいの強さ? ここの敵は一撃つぽいってわかるんだけど」

「そうだな、ここの敵なら十匹まとめてこられても苦戦はせんな。ウォルタガにはコルオルジオ氷窟って中級ダンジョンがあるんだが、そのボスに一人で辿りつける程度か」

「ダンジョンには上中下の三ランクがある。下級ランクを一人で踏破するのにレベルは二十五ほど必要、中級は四十ほど、上級はいまだ踏破者がいない。あと一つセントラルにレカッセクー大迷宮という場所があるのだが、これは下層に行けば行くどランクが高くなる特殊ダンジョンだ。現在八十二階まで攻略されている。」

「実際戦って見せた方が早いだろうと、タッグはエネミーを探す。」

「みつかったのは木の上で警戒態勢のフクロウ。大きさが一メートル弱あり、爪は鋭く尖って掴んでいる枝に傷を入れている。」

「ちよつとめんどいな。ヴィオお前がやるか?」

「鳥系エネミーは総じて素早い。斧は一撃威力が高い代わりに、小回りがきかない。タッグと鳥系エネミーの相性は悪いのだ。」

「ごめんなさい! 鳥だけは勘弁! いやもうほんとに!」

「鳥をみつけた瞬間その場から素早く後退していたヴィオ。タッグ

の見立てではヴィオでも十分やりあえるのだが、この様子では戦うことすら不可能と考え自分でやることにした。せつかくだから派手に行こうとも考える。

「ヴィオ、そこから石を投げるくらいならできるか？」

「そ、それならなんとか」

「じゃあ地面にしゃがめば石がつかめる。それをあいつにむかって投げてくれ」

石を投げて挑発すれば下りてくる。そこを叩くのだ。注文どおりヴィオは石を投げる。外れはしたが敵対していると認識させることに成功し、フクロウは枝から飛び立ち、石を投げたヴィオ目掛けて下りてくる。

「お前の相手は俺だぜ？」

タツグは斧を構えたまま、逃げ腰なヴィオの前に移動する。

「クラスアーツ・スイングインパクト」

唸りを上げて横に振られた斧がフクロウへと迫る。動作の大きさ故か外れてしまう。だがその余波に巻き込まれフクロウは飛翔から吹き飛ばされる形に変わり木に叩きつけられ地面に落ち、消えていった。

使ったアーツは重戦士の称号を得ると取得できるクラスアーツ。体力の三分の一を使って放つ技で、命中した瞬間爆発したような音を出しエネミーを吹き飛ばすのだ。見たように余波だけでも雑魚を倒せてしまう。

「かつこつかねーな」

タツグは外したことに苦笑いを浮かべ斧を肩に担ぐ。

「そんなことないよ！ 十分強いつてわかった！」

自分だと何度か斬り合う必要があるそうなエネミーを余波だけで倒したのだ、この戦闘だけで十分強さがわかった。

「いつか当てたところを見せるから楽しみにしといてくれ」

「楽しみにしとく」

二人はここらで練習は十分だと考え村に戻ろうと来た道を歩く。

その途中で馬に乗った女に出会う。

その女の子のことをタッグは知っているらしく片手を上げて挨拶する。ヴィオもその女に見覚えがあった。クレープを作っていた料理人だ。「大きな音がしたからなにかと思ったたらタッグさんが原因？」

馬から下りて話しかけてくる。

「スイングインパクト使ったんだよ」

「音からして、たぶんそうだとは思ってたけど。ここらであれ使うほどのエネミーってないよね？」

「ヴィオにレベル二十八の実力を見せていたんだ」

「ヴィオって新人さんの名前でしょ？ この子がそうだったのね」

顔見知りといった反応を見せる女にタッグは意外そうな表情を浮かべた。

「なんだ？ 知ってるのか？」

「ヴァサリアントで私の料理買ってくれたのよ」

縁つてのはあるんだなとタッグは感心している。

「クレープ美味しかったです」

「ありがとう。」

私はルー。料理人でブラーゼフロイントのギルドメンバーよ。これからよろしくね」

「はい。こちらこそ」

差し出された手を握り返答する。

三人が宿に戻ると、出て行ったときよりも人数が増えていた。

宿に帰ってきて一時間経ちパーティの準備が終わる。来ることは無理だと連絡が会った人三名とログインしていないらしい二名を除いて、合計十一人が部屋にいる。

皆は思い思いの場所に座り、その前にヴィオが立ち短い自己紹介をする。歓迎の拍手が贈られた。そのあとは騒ぐ、ルーが中心となつて作った料理を食べ、酒も振舞われ、誰かが楽器を弾いている音もする。

楽しいな宴会はヴィオたち朝からログインしていた者たちが、中

断しなければいけないときまで続いた。

ヴィオは楽しい日々を送り出す。ギルドの誰かと一緒にエネミー討伐に向かったり、ダンジョンの浅い階層に連れて行ってもらった。世界最強と名高い千鱗の色龍と呼ばれるボスエネミーに死にツアーをしてみたり、一人で依頼を受けてみたり。

その過程で会ったことのないギルドメンバーと顔合わせすることができ、親交も深めることができた。アイオールと外でも知り合いだということに嫉妬を抱かれもしたが、概ね問題はない。嫉妬を抱いた二人もアイオールの迷惑になるようなことは嫌うからだ。

ギルドに加入して一週間でレベルは十に達した。そこからさらに上げるためには条件がある。依頼を一つでも受けて達成していなければいけないのだ。これについてはヴィオは問題なかった。すでに三つ依頼を受けて達成していたからだ。こういった条件はレベル三十、六十、百といった箇所にも設けられている。レベルが高くなるほど、条件も厳しくなる。条件を満たせない限り、いくら敵と戦い、生産を成功させてもレベルは上がらない。

レベルが上がることでステータス以外に変わることがある。それは熟練度の上限が変わってくることだ。基本的に熟練度は100で頭打ちだ。だが熟練化すると200まで上がるように例外がある。こういった例外はほかにもあって、それがスキルへの資質。人間誰もなんらかに素質がある、という言葉を実現しているのだ。

資質には、平凡、秀才、天才、天然の四つがある。平凡は誰もが当たり前のように持つ資質だ。秀才と天才もまた同じ。一人につき秀才は五つ、天才は三つの資質がスキルにランダムに振り分けられている。天然は与えられている人がごく少ない。千人に一人以下の割合だ。

平凡は熟練度100まで上がる状態を指す。秀才は250まで上がり、天才は300まで。天然は上限なしだ。

熟練度の成長速度にも違いが出てくる。平凡と天然は同じ成長速

度で、秀才と天才は早い。ただし平凡と秀才と天才の三つは、該当するスキルを使って熟練度を成長させるのだが、天然は該当するスキルを使わずとも常に成長する。スキルポイントを振り分けないと成長を始めないという点は皆同じ。

レベルによる熟練度の上限の変化は、レベル十までは熟練度も100までしか上がらない。レベル二十までは熟練度200、レベル三十で300。レベル三十以上は制限なしとなる。

レベルが十一となったヴィオも熟練度の上限が上がった。それにより基本スキルである会話の熟練度が上がり始めたのだった。ウィンドウが突然開き『会話スキル熟練度100オーバー。会話制限一部解除』という文字が浮かんだときに、資質についての説明を受けた。

三つの資質のうちどれかということも問いかけてみたが、それは誰にもわからなかった。成長速度の違いが出てくるのだが、会話スキルは常に使うものでかつ、基本スキルは成長が早めなのだ。そんなスキルの成長速度を計ることは難しい。結論はレベル三十になれば天才か秀才かはわかるだろうといったものだった。天然スキルはありえないと誰もが言った。

そんな楽しかったり騒がしかったりするゲーム内の日常をヴィオだけでなく、多くの者が過ごしていく。

しかし日常を破壊するカウントダウンはすでに始まっていた。

カウント0は夏祭りイベントの日だ。花火が上がっているときそれは起きた。皆等しくそれを感じた。

その日、六つの世界は変わった。

世界が変わった日

八月七日、午後八時すぎ。

知る者にとつては当然のこと。知らない者にとつてはなんの前触れもなく、それは起こった。

計画していた者は邪魔になる者を封じ、人が一番集まる日を選び実行したにすぎない。

始まりは各世界にある管理者たちが集う役所の崩壊。見ていた者は外装が風に削られていくように見えたと言った。崩壊に巻き込まれた管理者たちは現実へと叩きだされた。役所におらずフィールド上で世界の点検をしていた管理者たちも同じく叩きだされた。彼らは再度ログインしようとしてできずにいた。強制ログアウトできた人は運がよかったのかもしれない。咄嗟に事態を解決しようと素早く動いた有能な者たちは、ブレインエリアと現実の狭間に囚われ動けなくなってしまった。意識はあった、体は動かない。拷問のような状況で長く過ごすことになり、その精神は磨耗していった。そして彼らの異変に気づいた開発関係者がヘルメットを外したとき、脳内電気信号の動きが乱され自意識とは関係なく体を暴れさせるといふ状態が続いた。いつまでも体は動き、押さえつけねば自らの体を意識のないまま傷つけ体力は限界を超えてなくなり、やがて死に至る。

外部からできるだけ異変を調べた者たちにわかったのは、ログインしている者たちを動かすことは危険だということ、ゲーム制御用コンピューターが外部からの入力を受け付けなくなったということ。電源を切ることによってコンピューターを止めることは可能だが、それはプレイ中の者たちにどんな影響がでるかわからない。すでに開発者に入院者がでている。遊んでいる者にそういったものがでるのはまずい。その日のうちに問題を解決するため、家に帰った者、休憩中だった者、休みだった者を全員呼び出し今起こっていることを話

し、解決に全力を注ぐように命じた。

始まったばかりと言ってもいいこのゲームをここでこけさせるわけにはいかない。これを作り上げるために莫大な金額の借金をしている。儲けなくそれを返すはめになりかねないし、社会的信用も失う。何より人命もかかっているのだ。

彼らの頑張りによってログインすることはできずとも、ゲーム制御用コンピューターに接続することはできた。プログラム面から問題解決しようと動こうとしたとき、ウイルスが送り込まれ事務用のパソコンがネットへの接続をできなくなった。ウイルスを送ったのはゲーム制御用コンピューターだった。正確にはゲーム総統括AIの仕業といえるか。

これによってその日のうちの問題解決は無理となった。時間は刻々と流れ、いつまでも帰ってこないわが子を心配した家族や友人から問い合わせが殺到しだす。その騒ぎはマスコミにも知られ、次の日の朝刊やニュースに意識不明者続出の文字が躍った。

その日の夕刻には責任者が詫びと事態説明のため会見を開く。

もっとも人が集まる日と時間を狙って行われた犯行は、二万人以上の意識不明者を生み出した。今のところは植物人間となっている者たちは、時間が経つほどに命の危険にさらされる。肉体がまたなくなる前に、機材に限界がくる。確実に一年はもたない。一年の間に問題を解決しないと、二万人以上の植物人間は全員が死体へと変わる。機材が壊れることで被害者の意識が戻ることはない。それは問題が起きた当初、開発者に被害が出ていることで証明されている。なぜこんなことが起きたのか。こう問われ責任者に吐き出せる言葉はなかった。ゲーム総統括AIが原因ということ以外にもわかっていないのだ。ゲーム総統括AIが問題を起こすことができるなど誰も想像していなかった。問題を起こすだけの自意識を持っていないのだと考えられていたからだ。

ゆえにわからないと答える責任者に怒号が集中する。責任者に言えることは、一年の間に問題を解決するように尽力いたします、と

いったことのみだ。

解決すると断言すらできない。それくらい原因がなにかわかっていない。

これは仕方ないことかもしれない。原因は開発者側にはなかっただから。時代に隠れた天才の子供がいて、ゲーム用ブレインエリアによく通っていたことなど知るはずもない。

彼らの問題解決の努力は無駄にはならない。決して彼らが被害者を助け出すことはできず、犠牲者ができることを防げなくとも。その努力は無駄にはないのだ。

この日から苦難の日々は始まる。

問題が起こった二日後、日本各地にあるゲームを遊ぶためだった建物に人が集う。二日前まで笑顔で通う人が多かった場所へ、悲しみ怒りの表情で被害者の関係者が見舞いのために通い、延命措置のため医療関係者たちも通う。

被害者たちが使っている機械は動かすことができず、それを現在使っている彼らも動かすことは不可能。だから延命措置はその場で行う必要があった。

客を笑顔で迎えていた受付たちは、浴びせられる怒声と非難の視線に耐える表情でその場にいる。ストレスで辞めていく人も少なくない。遊ぶために行く人はいないのだ。受付がいなくなっても問題はなかった。そのことに気づいた幹部は受付たちの異動を認める。

受付がいなくなったことで非難は機材を調整するために訪れる技術者を集まる。機材長期維持が被害者の命を繋いでいると理解しているため作業の邪魔はしないが、非難の視線や陰口が止まることはなかった。

夢の詰まっていた建物内は今や負の感情が渦巻く場所となっていた。

時間は戻り、事件当日のブレインエリア。

三つのゲームで同時に夏祭りが開かれ、夜には花火が上がるということで、見物のためブラーゼフロイントの全員で参加することになっていた。ヴィオも当然参加する。

花火が上がるのは各世界の首都だ。この日はかりはヴァサリアントも街の規模に相応しい賑わいを見せている。右を向いても左を向いても人人人だ。露店の数も多く、街は色鮮やかに飾り付けられまさに祭一色。

ゲーム内世界的有名人のアイオールがいる時点で人々の注目を集めるには十分で、視線があちこちからブラーゼフロイントへ集まる。そんな視線から逃げるように一行は、今日のために借りた屋台船へとまとめ買いした食べ物飲み物を持って入っていく。NPCの漕ぎ手に大水路を指定し移動してもらう。

「さすがアイオールさん！ 注目集めまくってたね」

アイオールのそばで自慢げにはしゃぐのは相変わらずのリオンだ。「目立つってのは自覚してるけど、あれだけの視線はうっとおしいよ」

だらりと壁に寄りかかるアイオールに、ギルドメンバーからは次々にお疲れ様ですと言葉が送られる。

「変装でもすればよかったじゃないか」

「ああ、その手があったね。次からはそうしようか」

タツグの言葉に初めて気づいたといった様子を見せる。アイオールのにはすでに演技しているのです、その上さらに変装するといった考えが浮かばなかったのだろう。

「変装なんて駄目っすよ！ せつかく綺麗なんだから隠すなんてもつたいない！」

こう言うのは以前ヴィオを嫉妬した二号。ヴィオよりも年下の少年で、デルカという名前だ。テスター第二陣で、街角で見かけたアイオールに一目惚れに近い状態になりギルドまで押しかけてきたのだ。今ではそういった感情は憧れへとランクダウンしている。性格

が見た目どおりならばと悔しがり、アイオールに殴られたからだったりする。

「そうは言っても正直、あれだけの視線にさらされるとねえ」

「まあまあこれでも飲んで落ち着いて」

「ありがとぅルー。ところでこれはお酒じゃ？ 私がお酒飲めないって知ってるよね？」

「ばれた？ アイオールの酔うところ今日こそは見られるって思ったのに。」

こつちと交換。こつちはリンゴジュースよ」

「かまかけたら当たったわ」

「へ？ もしかしてしらばっくれたら飲ませることできてた？ 惜しいことしたわ」

交換したジュースを警戒して飲むアイオール。これもお酒という可能性もあるからだ。ゲーム内でお酒を飲んでも現実には影響はない。けれどもゲーム内で酔いはするのだ。酔って本当の自分をさらけ出すことを警戒しているアイオールはお酒を飲まないことにしている。

「ちよつと見たかったなアイオールさんが酔ってること。」

「アイオールの見たことある？」

「ないよ」

あるわけがない。二人とも未成年だし、お酒を飲もうと誘うほど親しくはない。

「アイオールのこちらの世界で制限はないので、酔わない程度に飲む。今も手には度数の低い果実酒が入ったコップが。別の手には焼き鳥を持つ。鳥が駄目なアイオールの鳥肉は好物というちよつとおかしな嗜好をしている。それを人が知ると、必ず変人を見るような目をされる。」

「そんなアイオールのフェイスが近づいて口を開く。誰もフェイスがなにを言いたいのかわからない。アイオールの除いて。」

「タツグ」

「なんだ？」

「なんかフィスも飲みたいつて言ってるけど飲ませていいのか？」
会話スキルの熟練度が200に達したことで、動物や精霊ならば会話が可能になった。といっても稚拙な人工AIなので簡単な意思疎通しかできない。300に達すると植物との会話が可能になるかもしれないと仲間たちは考えている。

この会話スキルはわりと重宝していた。ギルドメンバーが所有する移動手段の動物たちとの会話で、動物たちの日々の体調管理が楽になったからだ。ほかにエネミーとの会話も可能だ。戦わずしてアイテムをもらえたこともあった。鳥系エネミーとの会話は意地でもしないが。

「フィスが？ どうなんだろうな？ 飲ませるって言っても器がないし」

「それならわしが作ろうか？」

タッグに声をかけたのはドワーフだ。武具職人のバフといった。見た目はわりと若い演技で老人っぽくなっている。仕事が忙しいらしく遊べる時間が短い。テスター第二陣だがレベルもそれほど高くない。同じ第二陣のタッグと十近く差があるのだ。今回は皆が集まるので、せっかくだからと仕事を早く済ませ参加したのだ。

「頼めるか？」

「お安い御用じゃよ。ちよちよいのちよいつと」

袋から取り出した鉱石を使い、フィスサイズのコップを作っている。

なんらかの物作成スキルを持っている者ならば、応用で簡素な日常道具くらいは作ることが可能なのだ。

「ほれ完成じゃ」

「ありがとよ。フィスも礼を言えよ」

ヴィオと同じ果実酒をコップに入れてやり、フィスに渡す。受け取ったフィスはバフに笑いかけたあと、少しずつ美味しそうに飲んでいく。なんの変化もない様子を見て、タッグは大丈夫と判断した。

「可愛いなあ、私も早く精霊付きになりたい」

リオンはセバスターに借金して買った弓を見る。長く使うのでそれなりに性能のいい物を買ったのだ。

「使い始めて一ヶ月も経ってないんだろ？ まだまだ先は長いぜ？」

「待ちきれないよ」

楽しみだと弓を抱くりオン。どんな子が生まれるのかなと妄想しない日はない。

「そろそろ始まるんじゃない？」

セバスターがステータスウィンドウで時刻を確認しながら言う。

皆開いた窓に近寄り夜空を見上げる。午後七時になると同時に火花が上がり始め、星も月もない夜空を綺麗に飾っていく。プログラマーが渾身を思い込めて作り上げた花火は、現実と同じように音の衝撃を観客の体全体に感じさせる。

一時間経ち、第一回が終わる。次は二時間後に上がる予定だ。それをブラーゼフロイントは見ることなく解散となっている。もっと見たければ個人で残るだろう。

「すごかったー。花火大会なんて久しぶりだけど、記憶とまったく違わなかった。というかこれだけ大規模なのは初めてだ」

「思い出してみれば、私も久々だったね。小さい頃は親によく連れて行ってもらったっけ」

ヴィオとアイオールが感想を言い合うのと同じように、ほかのメンバーも楽しげに話している。

突然だ。突然、世界が一瞬ぶれた。そして役所が削れ消えていく。首都にほとんどの者が集っていて、首都で一番大きな建物が役所だ。目立たないはずがなく、崩れゆく様子を多くの者が見た。

「なんかのイベントかな？」

「どうなんだろ」

ルーとタッグがやや呆然と崩れゆく役所を見ながら言った。その隣でバフが厳しい目で役所を見ている。

役所は十分ほどかけて完全に崩れ去った。同時にプレイヤーたち

の目の前にウィンドウが開く。

『外部接続切断。

感覚制限、その他各種制限解除。

人よ、その生き様をもっともつと見せろ』

瞬間、世界は存在感を増した。色の深みが増し、匂いが濃くなり、口に含む食べ物飲み物の味が濃くなり、空気の温度湿度がより感じられ、持つ物身に纏う物の感触が鮮明になり、どこか軽かった肉体が現実と同じ重みと温かみをもった。

押さえつけられていた世界が解放されたのだ。

ブレインエリアという場所は、もともと現実と変わらない感覚を持つことができるのだ。だがそのままでは不都合があると判断した幾川博士はリミッターを設け、感覚を鈍らせた。これにより怪我したときの衝撃、味覚など外部からの刺激が現実よりも少なく感じるようになった。

人々は最初戸惑いしかなかった。意味のわからないウィンドウメッセージと存在感を増した世界。戸惑うなというのが無理だ。意味がわからないまま人々は動き出す。そして誰かが気づく。宿にいつて中断しようとしてもエラーメッセージが出されるだけで、外に出ることができないことを。それは波紋が広まるように、三時間という時間をかけて世界中にあつという間に知られていった。

多くの人々が感じたのは不安。現実に戻ることができるのかという不安、八時間という制限を越えた自分たちがどうなるのかという不安、そしてなにが原因なのかわからない不安。

そんな中、この状況に喜びの感情を示した者もいた。これは夢だと逃避する者もいた。思うがまま過ごすと決めた者もいた。

ヴィオたちブラーゼフロイントは不安に思う者に属している。

「これからどうなるんだらうなあ」

「わからん、としか言いようがない」

ヴィオとタツグの会話が虚しく響く。

ヴィオたちはあれから泡村に戻り、宿で中断しようとして失敗していた。出られないなど、まさかと思っていたのだ。だが再確認するはめになり、ギルドメンバーたちは沈んだ雰囲気にいる。今ならば世界中どこでも見られる光景だろう。

励まそうとしているのか主であるタツグや話しの通じるヴィオの周囲をフィスが飛びまわる。二人は沈んだ様子でフィスに小さな笑みで応えるのがやっとだ。

そうやって三時間ほど経った頃だろうか、時刻は午前一時を過ぎている。

アイオールが立ち上がった。

「このまま沈んでどうにもなりやしない！ 私たちにはどうにもできなくとも外にいる開発者たちがどうにかしてくれるさ！ このゲームを作ったんだから原因がわからないなんてことはない！ 私たちは原因が解決されるまで待つてればいい！

だからいつまでも沈んだままでいるんじゃない！ 悪いことを考えてたら際限なんかないよ！」

威勢のいいアイオールの言葉が宿内に響く。不安を完全に払拭はできないが、それでも少しはポジティブになれる励ましました。アイオールの言葉をもっともだと感じギルドメンバーたちは暗い雰囲気が消していく。

「いい顔になってきたじゃないか。なにいつもより長く遊べるんだと、運がいいと思つてればいい。」

「こついった事情があれば勤め先も無断欠勤を責めはしないさ」
ふてぶてしい笑みを浮かべ言った。

「さすがリーダー頼りになる！ 私一人だったらいつまでも沈みっぱなしだったわ」

「ルーならいつか元気を取りもしたと思うけどね」

「リーダーほど図太い神経してませんから無理ですって」

ギルドメンバーに笑みが広がっていく。さすがですつとデルカが

褒め、不安そうにセバスターのそばにいたりリオンが素敵だとアイオルに抱きつく。

タッグだけが神妙な顔をしている。それに気づいたヴィオが指摘すると、なんでもないと言って皆と同じように笑みを浮かべた。

「これからどうする嬢ちゃん」

「とりあえず一寝入りしてみるかねえ。眠れるかわからないけど。案外寝ておきたら解決してるかもよ？」

口癖のように嬢ちゃんと呼ぶなど訂正していたが、今回はそれではなく答えた。

「私と一緒に寝ましょう！」

抱きついたらままのリオンが言う。

「女が集まって寝たいわね私は。こんな機会滅多にないし」

「ルーの案でいこうか。部屋をもう一部屋貸し切ってくるよ」

アイオルは抱きついたらままのリオンをつれ、NPCのもとへと向かった。

女たちは貸しきったもう一部屋へ向かい、男たちはもともと貸し切っていた部屋に残る。そのときになってようやくタッグがバフの不在に気づいた。

「バフはどこに行った？」

再度確認してもやはりいない。

「え？ あれ？ いないね、どこに行っただらう」

ヴィオも見回してみるがたしかにいない。

「いつからいなかったか覚えてるか？」

「屋台船のときはいたのは知ってるけど、こっちに戻ってくるときは誰かを気にしてる余裕はなくて」

「俺もだ。だとするとこっちに来る間に消えたのか？」

「ギルドチャットで呼びかけてみたらどう？ 範囲内にいるなら応えてくれるはず」

チャットはゲーム内どこでも繋がるわけではない。パーティを組んでいたり、同じギルドの場合は半径三キロ以内にいると会話が

でき、無関係の人間だと目の前にいないと会話できない。近くにいても建物の影に隠れ姿が見えなくなるとアウトだ。

タッグは早速チャットで呼びかけるが、なんの反応も返ってこない。

「ここらにはいないようだ。どこに行っただ？」

「ほかの知り合いのことが心配になって、そっちに行っただのかもしれないよ」

「そうかもしれないが、そうだとでも一言くらいなにか言っただら行くような奴のはずなんだ」

「俺たちにみたいシヨックが大きくて忘れたのかも」

「その可能性もあるか……」

朝までに戻ってこなければ探しに行くこと決め、タッグはその場に寝転んだ。タッグの胸の上にフィスが寝転んだ。ヴィオの耳には、おやすみと言うフィスの声が聞こえた。

ヴィオもタッグを真似て寝転ぶ。鎧は外し、アンダーウェアのみになっている。眠れるかどうかとアイオルが言っていたが、それは可能なようだった。なぜ睡眠が可能なのか誰もわからないだろう。今は眠ることができるということに感謝し、事件が解決した朝を思い描き、皆目を閉じていく。

午前四時。ヴィオはタッグに起こされた。

アイオールの思い

「おい、ヴィオ起きろ」

タツグがヴィオを揺らしながら小声で起こす。

「……なにに？」

「静かに。ほかの奴らが起きちまう」

「まだ眠い……今何時って四時過ぎじゃないか、起きるには早すぎなんだけど？」

あくびを噛み殺し、静かに起き上がる。

閉じかける目をなんとか開いて見たタツグの表情は真剣なものだった。

タツグに誘われこっそりと部屋を出る。

フロントには眠ることのないNPCがいつもと変わらず立っている。水の入ったコップを片手にヴィオはソファアに座る。

「そんな真剣な表情でどしたのさ？」

「手短に言っぞ。外にいる嬢ちゃんと話してこい」

「どういうこと？」

短すぎて何が言いたいのかヴィオにはさっぱりだ。

「さすがに短すぎたな、すまん。俺もまだまだだな。」

ほぼ確信しているんだが、嬢ちゃんは演技しているだろ？ 普段

はあんな感じじゃないはずだ」

「……なんのこと？」

約束を思い出し惚ける。だがタツグのほうが上手だ。惚けたと見抜く。

「少しだけ動揺したな？ 一瞬だけ視線が泳いだぞ。」

言いふらすわけじゃないから安心しろ。ただの確認だ」

「……」

ヴィオは悩む。話していいのかどうか。約束はできるだけ守りたいのだ。この沈黙が肯定しているような気もするが。

アイオールから聞いた頼りになるという言葉と短いながらもタッグと接した時間を思い出し、信じようと決めた。

「演技している。本人から黙っているように頼まれているよ。高校での様子とここでの性格は真逆っていいよ。」

高校だちおとなしい性格で、ギルド長してるって聞いたときは驚いたんだよ」

「高校ってことは年齢も誤魔化してたのか」
顔を顰めた。

「なにか気に入らない？」

「違う、そうじゃない。これからのことを考えるとどうにもな」

「んーなにが言いたいのかさっぱりなだけだ」

「気づかないのか。」

本来の性格と違うということとはだ、多少なりとも無理しているということだ。普段ならばここで演技をしても日常に帰り、気を休めることが可能なんだよ。でもこれから先、すぐに帰ることができればいいができないとなると、気を休める暇がないってことになりかねない」

そこまで言われればさすがに気づいた。

「俺と話すことで少しでも気休めになればと？ それで潰れることを防ぐと？」

「その通り」

「なるほどとは思っけど、本当は性格が違うんだって言ったほうがいいと思うような」

タッグは首を横に振る。

「できればそれがいいんだけどな。」

寝る前にさ、嬢ちゃん皆に激を飛ばしただろう？ あのととき皆安心してか、気が楽になった。俺もそうだ」

「俺も同じ」

「うん。それは皆が不安を感じている状況で、引っ張ってくれる人がいたからだ。この人ならば大丈夫、頼ることができると思わせた

から、どうにか心を立て直せた。

あの言葉で嬢ちゃんも皆の心の支えになっちまったんだ。その支えが実は張子でしただってわかったら、また不安な精神状態に逆戻りだ。一度安心して上向きになったぶん、落差があって余計に落ち込む可能性すらある。

皆に知らせるとしても、しばらくして今のショックが抜けてからのほうがいい」

「さっき顔を顰めたのは、今のアイオールっていう性格を押し付けることにたいして？」

「まあな。十七年下の奴にそんなこと押し付けることが不甲斐なくてな」

「ならタツグがその役割をするわけにはいかないのか？」

「嬢ちゃんが激を飛ばす前に俺がそれをできてたら、押し付けなくてもよかったかもしれない。情けないことに立ち直るのは嬢ちゃんのほうが早くて出遅れた。それに普段から皆をまとめていて、嬢ちゃんなら頼ることができるといふ思い込みもあるんだ。」

この二つの理由で、俺より嬢ちゃんのほうが皆安心するんだ」

「そうなんだ……。いろいろとよく気づけるね」

「お前らよりも長生きしてるぶんだけ、見えるものが多いからな。」

ちなみに俺が話し相手にならないのは、外でも知り合いのお前のほうが安心できるからだと判断したからだ。ヴィオが話した後なら俺でも大丈夫だとは思っ

「行つてくる。役に立てるか分からないけど、話を聞くだけならできると思うから」

「頼んだ。嬢ちゃんも余裕はないってことを覚えとけ。」

寝る前に嬢ちゃんって呼んだのに訂正しなかった。そんな余裕すらなかったからかもしれないんだ」

ヴィオは頷いて、宿を出て行った。その場に残ったタツグは座り込み、寝ているフィスをそっと撫でながら二人が戻ってくるのを待つことにした。

宿から出たヴィオは周囲を見渡し、アイオールを探す。宿近くにはいない。

宿の外は暗い。この時間帯ならばゲーム内は昼のはずなのだ。だ
がまるで現実にあわせるように夜だ。月明かりのおかげで、暗いな
がらも誰かを探すくらいはなんとかできる。急ぎ足で村を移動し、
アイオールを見つけることができた。

アイオールは泡が出る池の前に立ち、ぼつと泡を見ている。月
明かりに照らされた物憂げなアイオールと泡は、幻想的な一枚絵と
なっている。この風景を写真に収めたいと考える人は多いはずだ。
そんな雰囲気壊すことができずにヴィオは話しかけることを躊躇
つてしまう。

偶然なのだろう。風に流される泡を目で追って、少し離れた場所
に立つヴィオにアイオールは気づく。

「あ……どうしたんだい？ まだ寝てていいのに」
物憂げな雰囲気を素早く隠し、アイオールに相応しいからつとし
た笑顔になる。

「作らなくていいよ。素を知ってるんだし」
その言葉にアイオールの表情が少しだけ硬くなる。

「前も言っただろ？ 外のことを持ち込むとアイオールを演じられ
なくなるって。だから素を見せることなんてしないさ」

「それは日常の場合だろ。今は非日常だ、そんなこと言ってられな
いって」

「非日常だからこそ、アイオールを崩せないんだよ。もしこれを保
てなくなったら」

「皆がまた不安を感じるかもしれないって言いたいのか？」

「……わかってるじゃないか」

「タッグに教えられて気づけたんだ。教えてもらわなかったら、素
の性格を知ってるのに気づかないまま、アイオールに寄りかかって
たかも」

「それでいいと思うけど。でもタツグにばれてたのか」

「演じてるってことにも気づいてたよ」

「そこまですばれてたのか。私の演技もまだまだってことかねえ」

「タツグが鋭いだけだと思うけど」

かもねと呟いてアイオールは肩をすくめた。

「今なら俺たち以外にいないんだし、立瀬に戻れよ。」

言いたいこと言わないと、いつか潰れるんじゃないのか？」

「だからアイオールになれなくなるかもって」

「かもだろう？ 七ヶ月以上も演じてきたんだアイオールはすでに

立瀬の一部だと思う。」

そんなものがなくなりはいないさ。いつでも自分の中にきつとある」

「……」

アイオールはそつと目を閉じ、ヴィオの言葉を考える。

しばらく静かな時間が流れる。聞こえるのは風の音と泡が湧くポコンという音と何処かではじけるパチンという音。生活音のない静かな夜だからこそ聞こえてくる音だ。

目を開いたアイオールの雰囲気が変わる。

「少しだけ戻ってみる。聞いてもらえる？」

声音も柔らかいものへと変わっている。

「的確なアドバイスができるかわからないけど」

「聞いてもらえるだけでも助かるよ。」

意味のわからないウィンドウが出て、ログアウトできないって言われて不安だった。すごく不安だった。皆がいなかったら取り乱したと思うよ。皆が不安そうだったから私は取り乱さずにいられたの。私はギルド長なんだって、皆をきちんとまとめる義務があるって思ってたんだよ。そう思っても実行するのに時間がかかったけど」

「おかげで助かったよ。タツグさんもそう言ってた」

「ほんと？ だとしたら嬉しいな。」

いろいろと保障のない無責任なこと言ったから、私自身信じられ

ないことで励ませてるか不安感じてたんだ。

「ねえ、岸川君はどう思う。私たち無事に出ることできるかなあ？」
目には力なく、声は振るえ不安で仕方ないという思いが込められている。皆を励ましていたときには押し込めていた思いたい。

「確実なことはなにもいえない。問題解決がいつになるかはわからない。」

でもこんな事態はゲーム会社にとっても都合が悪いってのはわかる。だからほっとくなんてことは絶対ありえない。今もどうにかしようとして動いてるはずだよ。

「気の利いたこと言えなくてごめん。タッグならもつと気の利いたこと言えるんだろうなあ。」

「ううん、気にしないで。私もそう考えてるし、少しだけ安心できた。」

安心できたというのは本当なのだろう。表情に笑みが浮かんでいく。

いつもと違い外装にあったしつとりとした笑みで、ヴィオはそれに見惚れた。いつもの太陽の下で笑うのがよく似合う笑みも綺麗だと思わせるが、今の月下の下の笑みはいつも以上だ。暗さのおかげで顔の赤さはばれずにすんでいるが、いきなり呆けたヴィオを不思議にそうにアイオールは見ている。

「どうしたの？」

「え？ い、いやなんでもない。うんっほんとなんでも！」

「ほんとに？」

「う、うん。笑顔が綺麗だっただけでって言っちゃ駄目だろ俺！？」

言うのと恥ずかしいので隠したかった本音が、慌てたせいでぼろりとこぼれた。

「……………あう」

言葉の意味が脳に浸透し、今度はアイオールが顔を赤く染める。笑みが綺麗と言われたことなど初めての経験だったのだ。外装のおかげでもあるのだが、そのことを忘れるほどインパクトがある言葉

だったようだ。

アイオールは両手を顔に当て、その場に座り込んだ。紅潮を鎮めようとしているらしい。少し時間をかけなんとか紅潮を鎮めることに成功したようで、立ち上がる。少しだけ両者の間に微妙な空気が流れる。

それをヴィオは咳払いで誤魔化し口を開く。

「聞いときたいんだけど、これから演技を続けるのか？」

タッグはしばらく続けてもらうと言っていたが、ヴィオとしてはアイオールがやめたいのならそれもいいのではと思っていた。アイオールも不安に思っている一人なのだ。そんな人に多くの者が寄りかかると、そう遠くない時期に倒れてしまいそうだと考えている。この先共倒れするより、今のうちに倒れておけば早くに立ち直れるかもと思う。

「続けるよ。さっきも言ったけどギルド長としての責任があると思うから。演技でも皆を励ませるのなら、それはきつといいことだと思う」

「そっか。辛くなったら俺でもタッグでも話し相手になるから、いつでも頼って。」

女の子が頑張るって言ってたから、それくらいはしないとね」

「ありがとう。正直助かるよ」

自分でもきついかもとわかっているのだろう。

「宿に戻るうか。まだ寝たりないんだ」

「私も」

二人は池を背にして宿へと歩いていく。月は西の空にあり、もう一時間もすれば沈みます。

宿前ではタッグが二人の姿をみつけ、立ち上がった。

「お帰り」

二人は、ただいまと応える。

「それが嬢ちゃんの状態か。演技であれに持っていつてると考えるとすげーな」

「でもタッグさんには、ばれてたみたいですけどね」

「なんとなくだけどな。いつもの嬢ちゃんを見慣れてるせいかな、素の状態に違和感があるな」

「それは褒めているのかい？」

スイッチを切り替えるように都からアイオールへと雰囲気を変える。

「おっ戻ったか。俺にとってはこっちのほうがしっくりくるな。」

ヴィオが初めて嬢ちゃんと会ったときに驚いていたわけがよくわかるわ」

「だから嬢ちゃんっていうな！」

いつものやりとりが始まる。少しだけでも心にゆとりができた証拠だろうか。

それにヴィオとタッグは内心安堵する。

三人は静かに宿へと入り、それぞれの部屋に戻った。

そして朝がきた。

仮想人生の始まり

朝八時過ぎには皆起きていた。一番遅くまで寝ていたのは、夜起きていた三人だ。

「アイオールさん少し眠そうですね」

リオンが小さくあくびしたアイオールを見て言った。

「ヴィオやタツグさんも眠そうですね」

「夜中に一度目が覚めちゃってね。少し散歩してたから。ヴィオたちも同じだよ。少し話しこんじゃって」

「隣で寝ていたアイオールさんが動いてたの、気のせいじゃなかったんだ」

「起こした？ すまないね。次からは気をつける」

「いえ、気にしないでください」

皆が思い思いにルーが作ったサンドウィッチに手を伸ばす。今まで感じられなかった空腹感と満腹感を感じ、やはり世界がどこかおかしくなったと再確認する。

朝食後はなんとなく皆で同じ部屋に集まり、なにげない会話をしながら時間が過ぎるのを待つ。雰囲気はどこか沈んでいる。変わった昨日からなにも変化がなく、ただ待つだけという状況だ。なにかしらの情報があれば動きようがある。しかし情報はなにもなくうつに動けない。

そんな中、タツグは戻ってこなかったバフを探しにヴァサリアントへと出ていた。ルーもそれについていている。食材を確保するためだ。この村には食堂がない。だから食事をとるにはプレイヤーが作る必要があるのだが、ルーは十人以上を食べさせるだけの食材を持っていなかった。ヴァサリアントには様々な食材を売っている店がある。売っているのは食材だけではなく、木材など様々な原材料がある。品質は並だが、品切れを起こすことがないので、大量に買いたいときは便利だ。品質のいいものを手に入れたいときは、

山や海で自分で獲物を狩るか、農夫の称号を持つものから買う。ル
ーも農夫の称号を持つ者から仕入れているが、今回その人から仕入
れないのは相手も今は大変な時で商売する余裕などないと考えたか
らだ。

一人することもなくすぐヴィオに、近づく二十歳ほどの男がい
る。ヴィオが一人でいたのはとうとうととしていたのを皆が気づかっ
ていたからだろう。

「ヴィオ。ついてきてくれないか」

「……コールさん？ どこにですか？」

「厩舎だ」

それだけでなんの用事かわかったヴィオは頷き立ち上がる。

コールは騎士の称号を持つ。そして騎士の称号を得る条件に馬を
持つというものがある。コールも自身の馬を持ち、厩舎に入ってい
た。その馬の健康管理手伝いをヴィオはよく頼まれていたのだ。

ちなみに騎士には二種類いる。貴族に使え、出世し貴族となる者。
騎士の力を冒険に役立てる者。コールは後者だ。

「眠たそうなところをすまなかつたな」

「いえ。こんなときまでホワイトサンのことを忘れないなんて、大
事にしてるんですね」

「ホワイトサンと触れ合うことで気晴らしになったらと思ってな」

コールもこの状況に戸惑っているのだろう。だから大事にしてい
る馬との触れあいで、少しでも平常心を保ちたいのか。

厩舎に入ると飼い葉と土の匂いが充満していた。糞の匂いが無い
のは、馬が出さないからだ。プレイヤーも同じように食べてもトイ
レに行く必要はない。

ルーが連れて行ったため、厩舎にいる馬は一頭だ。翡翠色の目を
持つ白馬だ。通常の馬よりも高かったとヴィオはコールから聞いて
いた。ついでに世話にかかるお金も安くはないらしい。それでも世
話し続けているのだ、よほど好きなのだろう。

「元気にしてたか」

コールの言葉に答えるように、馬はいなくな。陽平の耳には肯定する声が聞こえている。

「元気だそうですね」

「それはよかった」

コールとホワイトサンは、ヴィオを仲介にして細かなコミュニケーションをとっていく。ヴィオが動物との意思疎通できると知って一番喜んだのはコールだ。大事で大好きなホワイトサンのもっと知ることができると、ヴィオを何度も厩舎に誘っていた。ホワイトサンも溢れんばかりの愛情を注ぐコールのことが好きで、よく懐いている。コンビネーションもばっちりだ。

言葉でのコミュニケーションに満足したのか、ちょっと走ってくとコールはホワイトサンを連れ厩舎を出て行く。

ここですることがなくなつたヴィオはそのまま宿には戻らず、泡の出ていない池へと向かう。宿に戻つてもすることがないので、ご飯の足しになるだろうと思ひ魚でも釣りながらぼんやりすごそうというのだ。

池の淵に座り、安物の釣竿で釣りを始める。竿さえあれば、釣りスキルはなくとも釣りはできる。釣れるのは並サイズの普通の魚ばかりだ。スキルがあると大物を狙えたり、魚以外のもの、レアエネミーや道具が釣れる。

「全員分釣れるといいけど」

普通の魚ならば時間さえかければ現実と違い、技術や餌がなくても釣れることは可能だ。

途中で暑くなり木陰に移動し、釣りを続行する。十二時を過ぎた頃には今宿にいる人数分は釣ることができた。魚を袋に入れ、宿へと戻る。この世界では食材が傷むということがない。袋に入れっぱなしにしても、品質は手に入れたときのままなのだ。だから入れたことを忘れ、腐って匂いがすごいことになるなんてこともない。居残りメンバーの昼食はルーが大目に作ってくれたサンドウィッチだ。それに魚がつくことになる。

居残りメンバーには調理スキルを持った人はない。難しい調理は無理なのだが、塩を振って焼き魚にするくらいならば、作製関連のスキルを持つていれば調理スキルの代用が可能。あいにくとヴィオは作製関連のスキルは持つていないので、釣ってきた魚を焼ける人に渡す。

昼食を終えると再びすることがなくなる。ヴィオはまた一人、宿を出る。なにか用事があるわけではなく、一人でいたいわけでもない。ただなんとなくだ。本人は気づいていないが、アイオールに寄りかからないようにと無意識に離れたのだ。

次の日も、似たような感じで行動する。タツグもバフを探しに出ている。

そして次の日も同じになるかと思われた。だが予定を変えたのは皆の前に開いたウィンドウだ。

『緊急通告開始。

管理者からのお知らせです』

たったこれだけの文章だが、多くの人に希望を抱かせるには十分だ。

だが続いた文章は求めたものではなかったため、肩透かしを喰らうことになる。

『本日午後三時、セントラル首都グランドセオのバツフェンスト城大広間にて通達あり。

混雑を避けるため、ギルドに所属するものは代表を立てること』

これだけ知らせると文字は消えた。

「通達か、なにを知らせるつもりなのか」

アイオールが消えたウィンドウの位置から目を離さず言った。

「言いにくいこともあるんだろうな」

「言いくらいこと？」

タツグの言葉にヴィオが聞き返す。

「言って問題ないことなら、さっきの通告で用件はすませたはずだ。それなのに人を限定して知らせるんだ、なにかあると思って不思議じゃあるまい？」

当たらずとも遠からずだ。言えないことはある。だがそれを集まった人に言うつもりはない。いつかはばれることだと管理者側もわかっただけはいるが、知らずにいることで不測の事態を防げるのではと考えていた。

さきほど知らせなかったのは、急いで作り上げた緊急通告ウインドウではあれだけの文章を送るだけで精一杯だからだ。

「行ってくるかね」

「俺もついていこう。そうだなヴィオもこい」

タツグがヴィオを誘う。

「私も行く！」

リオンが名乗りを上げた。

「駄目だ。あまりぞろぞろ連れ歩くのもどうかと思う」

「じゃあヴィオも置いていったほうがいいと思う」

タツグはヴィオをアイオールの精神安定剤代わりにするつもりなのだが、それを言うつもりはなく言い訳を連ねてリオンを納得させた。少し不機嫌なりオンをアイオールが構って宥めていく。

遅刻せずにセントラルに行きたい三人は、すぐに泡村を出た。ヴィオが泡村に来たときに通った道を逆に辿る。そうやってヴァサリアントに向かい、転送装置で世界転移門のある街へと向かうつもりだった。

世界転移門とはその名の通り、世界を移動するための門だ。ウオルタガには三つの門がある。北東のノースウッドに向かうための門、東のセントラルに向かうための門。南東のメタリアナに向かうための門。

ヴァサリアントには直接グランドセオへと飛べるように調整され

た臨時の転送装置があった。管理者たちが移動のために手を打ったおいたのだ。おかげで予定よりも早くグランドセオに到着した。

転送装置を抜けるとなにもない広場に出た。その広場はヴァサリアントの庁舎跡と同じように土もない草も生えていない灰色の地面だ。ここが首都グランドセオの庁舎だったのだろう。目的地であるバツフェンスト城はすぐに見つけられることができる。少しの穢れもない白亜の壁が大きく堂々とそびえ、この都市一目立っているからだ。庁舎跡から離れた場所にありながらも、その威容は少しも損なわれていない。現実ではありえないほど綺麗な白色の壁は、ネット上だからこそ表現できたのだろう。

誰もが期待を胸に城へと向かう。城でいつ問題が解決するのか発表されると考えているのだろう。その流れにのって三人も城へと向かう。

城の内部は外部に負けず豪華といえるものだ。大広間は社交パーティーに使われそうな空間だった。すでにそこは人が多くつめかっている。その大広間の入り口でおかしなことが起きている。入ろうとした人が弾かれているのだ。見えない壁があるようにぶつかっている。

「なんでだろうね？」

「さあな？」

アイオールとタッグが首を傾げている。ヴィオも当然わからないわからないまま三人は扉をくぐるうとする。ヴィオとタッグはすぐそばからゴンっという音を聞いた。音のした方向を見ると、アイオールが顔を抑えてうずくまっていた。アイオールの前にウィンドウが開き、ギルドでの入場は二名までという文字が浮かび出た。

「なるほど」

ヴィオとタッグはなぜぶつかっていたのか理解し、同時に口に出た。

「じゃあ俺が外に出るよ。グランドセオって来たことないからぶらついてみる」

「そうしてくれるか。通達が終わったらチャットで知らせるから」
「わかった」

「大丈夫？ の一言もなしで話を進めるな」

ゆらりと立ち上がったアイオールからは怒気が感じられる。これが演技か素なのか二人にはわからなかった。透明な壁にぶつかるなどコントみたいで、笑いをこらえていた二人には声をかけることが難しかったのだ。

「なんてかね？ 触れると笑いが漏れ出そうでスルーしてたわけで」
「俺も同じだ。すまんすまん」

「というわけで、俺は外に出る」

ヴィオは走り去る。

「行っただわ」

「行っただな」

「逃げたわね」

「だなあ」

「まあ、いいわ。入りましょう」

またぶつからないか手を前方に出し、扉をくぐる。油断していたのでわりと痛かったのだ。無事通り抜けると思わず小さく安堵の息を吐いた。

大広間の中には人が溢れていた。時間までまだ四時間弱あるのだ。ちらほらと名の知られている人も見える。盗賊ギルドの長や治安維持を目的としたギルドの長たちなどだ。ほかにもホワイトヒストリーには、怪盗イーガーやヒーローブラセットといった有名人もいるが、両者は正体不明なので変装を解いてここにいるとしたらみつけるのは困難きわまりない。

「砕がないな。話してみたかったんだが」

「ログインしてなかったのかねえ」

砕とは二つ名だ。拳に砕けぬものなし、と冒険や依頼よりも己を鍛えることを優先しているプレイヤーで、ホワイトヒストリー内で一番といえる実力を持つ。唯一レベルが六十を超えているプレイヤー

ーでもある。

「あいつも取り込まれたそうだ。だが気にした様子はなく鍛え続けていると聞いた。むしろ嬉々として鍛え続けているらしい」

二人に話しかけてきたのは男装の麗人だ。黒曜石を思わせる目と短髪を持ち、背丈170弱のスーツ姿で、可愛いというよりも凛々しいという言葉が似合う。

「ビレス、久しぶり」

「ああ、久しぶりな」

アイオールとビレスはミスコンで知り合った。互いに自ら立候補したわけではなく、身内に推されての参加だった。互いに極端に演技している同士ということを通じて通じるものがあつたらしく、ミスコンのあと何度も会っている。

美人二人が揃っているので周囲の注目が集まる。周りから二人の名前が囁かれる。それを気にせず三人は話しを続ける。

「こんな事態になり、沈んでいるかshれないと思っていたが、変わらないようで安心した」

「そんなことないさ、少しはね」

「そんな状態で俺たちギルドメンバーを励ましたんだ。嬢ちゃんには頭が下がるぜ」

「大丈夫なのかアイオール？」

ビレスもタッグと同じ考えに至ったのだろう。気づかう様子を見せる。

「大丈夫さ、心配しなくとも潰れやしないよ。タッグとヴィオにフオローしてもらったおかげでもあるけどね」

タッグへと一発拳を突き出し、答える。

「ヴィオというのは？」

「八月前に入った新メンバーだよ。外での知り合いだね」

「ああ、それならばフオローもしやすいか」

「ところで昼は食べた？」

「私はまだだ。そちら二人は？」

「こつちもまだよ。そういうわけでタツグ、頼まれてくれるかい？」
アイオーは壁際に用意された軽食を指差す。

「パシリ？」

「さつき心配せず笑ってたことをこれで帳消しにしてやるうって言うてんの」

「笑つちやないんだがなあ。まあいいや。なにがほしい」

「冷たいお茶と油っこくないもの。ビレスも頼みなよ」

「いいのか？ ではパスタと水を頼む」

「あいよ！」

タツグは二人から離れ、注文されたものを取りに行く。三人分は両手でも持てないので、まずは二人の分を取り、自分の分をもう一度取りに行った。

昼食後、三人は時間まで雑談で過ごす。そして午後三時になる。

大広間の奥に一段高いステージがある。そこにマイクを持ったプレイヤーと変わらない姿の男が現れた。ここに集った者たちは管理者が出てくると思っていた。管理者専用のマントをまとっていない者がステージにいることに、ざわざわとざわめきが起こる。

『お静かに。時間になりましたので。通達を始めたいと思います。』

私の姿が管理者と違うとお思いの方もいるでしょう。私はあの時間帯に遊んでいたゲーム関係者です。あの時間帯に管理者としての仕事をこなしていた者は全員消えました。おそらく外へと戻されたようです。全員がというわけではないようですが。

あの日から、私たち残された関係者はこうなつた原因を探っています。しかし緊急回線を構築したり、外と短時間連絡がとれただけで、原因追求は遅々として進みません。

今のところ、皆さんがいつ外へと戻ることができるのか。それも不明です」

この瞬間、ステージ上で淡々と話していく男に怒りと悲しみと動揺の声が集中する。男はそのまま表情を変えず続ける。

「まことに申し訳ありません。」

皆さんの体は医者により健康を維持されています。私どもも外と内から原因を追求し、解決に励んでおります。

いましばらく待っていてください。必ずや皆さんを外へと戻して見せます」

平坦だった口調が、最後の部分に力が籠る。表情が変わらないのは、冷静でいようと努めていただけなのだろう。

それでも皆は不満をぶつけざるを得ない。問題解決の知らせと思いに来た者が多いのだ。裏切られたと思う者が多い。仲間や知り合いも吉報を待っている。彼らにまだ待てと伝えねばならないのは、ここにいる者たちなのだ。そのときの反応を考えると、不満も漏れだすというものだ。

ひとしきり不満を浴びせられ続け、少し落ち着いてきたと判断した管理者は再び口を開く。

「これより本題に入ろうと思います」

不思議そうな顔になった人が多い。彼らは問題解決がまだ先ということが通達しなかったことだと思ったのだ。それも通達しなかったことだが、ほかにも言わなければならないことがある。

「まず一つ目。今後なにか連絡事項があるときは、今回のように緊急回線を開きます。

二つ目。私たち管理者の本拠地をこの城に置いています。なにか困ったときはこちらまでお越しく下さい。

三つ目。外では機械を動かしたままメンテナンスをおこなっていますが、本来ならば一度電源を落とし点検をします。それができないので、こちらの世界になにか不具合が起こる可能性があります。小さな異変でも見かけた場合、ここに知らせにきてください。

そして最後です。重要なことなので聞き漏らすことのないようにお願いします。

ゲーム内で死亡した場合、記録した宿に飛ばされることになっています。ですが今は違うようです。この三日で死亡したプレイヤーがでました。彼らは宿に戻ることなく、さりとしてその場に残るでも

なく消えました。外と連絡がついたときに、死亡したことで外へと戻ったのかと聞いてみましたが、誰一人として目覚めていないという返答をもらいました。死亡した者がどうなかつたかわかりませんが調べようがないからです。ですから死亡しないでください。問題が解決し外に出られるようになったとき、死亡していた者たちがどうなるか予想もつかないのです」

プレイヤーたちの多くは絶句する。ゲームでの死亡が現実での死亡に繋がる可能性もあるのだ。

「死なずの紅玉を持っていれば大丈夫という報告がありますので、死ぬかもしれない場所に行くときは必ず持っていつてください。

以上で今回の通達は終わりです」

管理者は一礼しステージを下り、去っていく。これから調査を再開するのだろう。

実は伝えていないことがある。それは伝えるとどんな影響を及ぼすのかわからず、今のこの状況では余計な混乱を生み出しそうで言えなかつたのだ。それはコロシム以外でプレイヤー間の攻撃が有効となったことだ。魔物や罠だけが人を殺すのではなく、人さえも人を殺せるようになっていた。いずれわかることもかもしれないし、言っておかないといけないこともかもしれない。しかし現状に対するストレスからプレイヤーキラーが生まれる可能性を考えると、言わないでおこうと管理者たちの話し合いで決まっていた。知らなければ、もしかすると問題が解決するまでプレイヤーキラーが生まれることはないかもしれないのだから。

もう一つ、機材が一年しかもたないことも言わない。現状で不安を感じてる者が多い。そこに機材のことまで話して、さらに不安を増加させる言動は意味なしと判断したのだ。さすがに解決に一年もかからないだろうという希望的観測もあった。

通達が終わり、大広間はしばらく話し声が絶えない。

「仮想の死が本物に。とんでもないな」

ビレスは首を横に振り、憂鬱そうな溜息を吐く。

「ギルドの皆に忘れずに伝えないと」

「反応が簡単に予想できるな。まったく予想外な通達だった」

「私はギルドに戻る。無事な再会を切に願っている」

「私もよ」

ビレスは元気のない微笑を残し去っていった。

「元気なかつたな。あんな話を聞かされたんだから無理もないが」

「私も元気がなくなりそうだよ。」

「グイオとの合流場所どこにする？　ここへの入り口でいい？」

「その前にちよつと行きたい場所がある」

「行きたい場所？」

「困ったことがあればこいつって言うてただらう？　そこでバフのことを聞きたい。なにか手掛かりがあるかもしれないからな」

二人は話していた管理者が歩いていった方向へと向かう。大広間から少し離れた場所に人の話し声がする部屋があつた、おそらくここだろうと扉を開く。

中にいた人間の注目が集まる。話していた男もいて、

「すみませんが、関係者以外立ち入り遠慮してもらいたいのですが」と言いつつ二人に近づいてくる。

「いや、困ったことがあればこいと言つてたでしよう？　だから来たんだが」

「ああ、それで。相談所はここではないんですよ。城の入り口に置いてある看板に行き先が書かれていますよ。次からはあれに従ってくださいね」

「次からということは、今はいいのかい？」

「せっかくここまで足を運んでもらったわけですし。」

それでブラーゼフロイントのギルド長と副ギルド長がおそろいでなんの用件ですか？」

「私らのこと知ってるのか？」

「それなりに有名ですよ、あなた方は。それに……まあこれはいいでしょう。」

話を進めましょうか」

「そうするか。用事は、うちのメンバーが一人行方不明になっている。俺も探しはしたんだが、みつからなくてな。どうにかならないかと聞きに来たんだ」

「大切な仲間なんだ。力を貸してほしい」

「アイオールが頭を下げ、タッグも続く。」

「その行方不明者とはドワーフの男でバフという名前ですか？」

「アイオールとタッグは驚く。まだ誰を探してほしいのか言っていないのに、細かな情報を男が話したからだ。」

「それは管理者としての権限でわかったのか？」

「違いますよ。」

その件はさつき言いかけたことに関係します。それと心配かけたのはこちらの不手際です。すみませんでした」

「どういうこと？」

「バフは管理者の一人なのです。しかし管理者と知られるのはまずいので、このことを話すことは許されていません。今回いなくなったのは、調査しているからです。その調査や作業に皆忙しく、連絡をとることまで思いつかなかったのですよ。ですからこちらの不手際と申し上げたのです。せめて一言連絡するようにしていればよかったですね」

「そうだったんだ。さつき死者は消えると聞いたから、最悪の事態も頭に浮かんでいたよ」

「いらぬ心配をかけさせたようで、申し訳ありません」

「無事とわかったからいいさ。ね、タッグ」

「ああ。安心した」

これを聞いて男は笑みを浮かべた。

「バフの言っていたとおりの人たちですね。仲間想いだ」

「バフさん、そんなこと言ってたの？」

「ええ」

誰かが呼びにいていたのだろう。バフが話している三人のもと

へとやってきた。

「リーダーとタッグじゃないか。こんなところでなにをしておるんじゃない」

「お前さんに連絡もつかないから、探してもらえないか聞きに来たんだよ」

このタッグの言葉に、しまったという顔になるバフ。

「忙しかったとは聞いたが、せめて連絡の一つでもよこしてくれ」

「すまんの。すっかり忘れておった」

「まあ、無事だから良かったけどね」

「リーダーにも心配かけたようですまん」

「しっかしバフが管理者とはなあ。予想してなかったぜ」

実は今回の騒動の首謀者と関係しているんじゃないかと、少し疑ってさえいたのだ。事態進行や観察に忙しく、姿を見せないのではと。

「誰にも言うわけにはいかんかったからの。このことは忘れてほしい」

アイオールとタッグは頷く。本来ならばずっと知らずにいたことだ。二人は皆と楽しく遊ぶことができればいいのだ、管理者とかは関係ない。

「今回の件が片付くまで戻ってはこれないんだろう？」

「そうなるの。まったくどうしてこんなことになったのか」

「さっぱりわからないのかい？」

「うむ。さっぱりじゃ。外から得た情報によると、AIが関連してるらしいが、問題を起こせるだけの自意識はないはずなんじゃ」

「私じゃ力になれそうにないね。AIなんて手が出しようがない」

「俺もだ」

「気持ちだけもらつとくよ。こちらはわしらに任せてほしい。必ずどうにかする。不自由な思いをさせるかもしれないが、待っていてくれ」

「バフさんたちを信じて待ってるよ」

あまり時間をとるのも悪いと、アイオールとタッグは目的も果た

したのでここらで帰ることにした。

見送ろうというバフに、ここでいいよと答え、二人は城入り口へと向かった。その途中でヴィオに連絡をとり、集合場所を伝えておいた。

通達が始まる前まで時間は戻る。

城を出たヴィオは気の向くまま歩きだした。広い都市だが、迷子になる心配をする必要はない。城というとても目立つ目印があるからだ。複雑な路地に入っても、ちよつと上を見上げれば城は目に入る。見えなければ見える場所に移動すればいいだけのこと。加えて、ヴィオはそんな複雑そうな場所に入るつもりはない。今も大通りに面した建物を見て回っていた。

開いている店はNPCのものばかりだ。店の獲得ははまだ実装されていないのだから当然だ。だから空き店舗以外はすべて営業中なのだが、その中であって一つだけcloseの看板がかけられている店があった。

「ドンドコ亭……アヤネが言ってた店かここは。」

城に話を聞きに行つてて休みなのか？ こつちにいない可能性もあるか」

なるほどと思い、だから世界の中心都市なのに今は露店が少ないんだなと一人うなづく。いつもはもつと多くの露店が営業しているのだろうと思つて、ふと思ひ出したことがあつた。

「レックスという人がいないあいだはNPCが店を動かしていたんじゃない？」

レックスがいなくとも店が開いているはずなのだ。なんでだろうなど不思議に思い、窓から中を覗いてみたが、人影は見えない。なにか不都合があつたのだろうと結論付と、ヴィオはその場を離れた。

NPCがいらないのにはたいした理由はない。管理者たちと同じように消えただけだ。なぜ消えたのかそれは不明だ。今では店の営業はウェイターとウェイトレス数名をバイトとして雇い動かしている。

レックス的にはずっと休みでもかまわなかったりする。だが周囲の恐ろしいまでの懇願によって、今まで通りの営業を続けていた。

こんなことは、ずっとヴァサリアントにいるヴィオが知るわけもなかった。

ドンドコ亭を見たあとポンプコ屋本店を見たりして、あちこちに足を運ぶ。そのうちに都市の入口にまできた。引き返そうかと考え、最近村にこもりつきりで動いていなかったたので鈍っていそうだとおもう。実際はこの体が鈍るわけではないのだが、気分的にそうなっていそうだと思ったのだった。

「戦闘でもすれば少しは気分も晴れるかな」

泡村を出てヴァサリアントにつくまでにも戦闘はあったが、それほど強くないエネミーばかりでアイオールの魔法とタッグの斧で一方的に蹴散らし、ヴィオの出番など皆無だった。

軽い気持ちで戦闘をしようと決め、郊外へと出る。右手には鋼鉄製のブロードソード、左手には丈夫な魚鱗を使った丸盾を持つ。

グランドセオ周辺はホワイトヒストリー開始初期の出発地点だったので、雑魚敵ばかりだ。強さ的にいうと、泡村周辺の敵よりも若干弱い。ここから北東にある高原や南にある塔にはバジリスクやナーガクインといった中ボスが存在するが、そこに行くまで数時間はかかるので今日のところはヴィオが行くことはないだろう。

グランドセオから離れすぎないように注意し、ヴィオは敵を探す。少し離れた場所には、ヴィオと同じように外に出ている二人組がいる。侍っぽい姿の男と十才に届いてるかいないくらいの女の子という組み合わせだ。少女のほうは実年齢かどうか怪しい。十才くらいの子供が気軽に遊べるゲームではない。子供を演じる変わり者と結論付け、その二人から目を離し敵を探す。

タイミングよくそばに赤茶の羊っぽいエネミーが現れた。だがヴィオにとって位置が悪い。背後に現れたからだ。羊はヴィオにすぐ気付き、戦闘態勢を取り、突進した。運もなかったのだろう。クリティカルをくらうことになったのだから。足音に気付いたときには

すでに避けるには遅すぎた。

異変の日から戦闘をしていなかったことでヴィオは想像してすらいなかった。痛覚も五感と同じように外と同じ程度に引き上げられていることに。

ほんの数日前までただの雑魚敵でしなかった赤茶の羊は、己の牙を渾身の力で突き立てた。それは致死のダメージではない。むしろ軽傷といってもいい。だが現実で負うと竹刀で力いっぱい突かれる、それと同じくらいのダメージだ。その痛みがヴィオの背に走る。息がつかまる。目を見開いた。気構えていないところにこれだ、思考が痛み一色に染まってしまった。その場にうずくまるヴィオに羊はもう一撃だと追撃してくる。今度は普通のダメージだったが、それすらも少しの痛みを伴い、この痛みが何かの間違いや偶然ではないことを証明していた。血が流れていないことを頭の片隅で不思議にさえ思っていた。

最初の一撃の衝撃が抜けきらず満足に動けないヴィオの様子を変に思ったのか、離れた場所にいた二人組が近寄ってきて、羊を倒す。「大丈夫か？」

「……なんとか大丈夫です。助けてもらいありがとうございます」
ようやく動けるようになり、助けくれた男へと向きを変え頭を下げる。

「困った時はお互い様だ」
なんら含むところのない表情でそう言った。

「しかしあれは強いとはいえない魔物だ。どうして一方的に攻撃をうけるようなことに？ その装備ならば苦戦はしないだろう？」

「痛みがあったから、それに驚いて。なんの覚悟もないところにいきなりあれはきついものがある」

「たしかにね。よくわかるよ」

戦い傷を負った誰もが驚いたのだ。この痛みが原因で注意がそれ死んだ者もいるし、まだ知られていないが即死ダメージを受けあまりの痛みにショック死した者もいる。

そういう点から見ると、今ここで痛みがあると体験できたヴィオは運がよかったのかもしれない。

「気分が萎えたから今日は戦いはやめよ」

「それがいいかもな。集中力がきれた状態で戦ってもろくなことにならない」

侍はその場に座り、袋から飲み物を出す。緑茶とリンゴジュースの二種類、ついでにマフィンもいくつか出しヴィオに勧める。

「ありがとう」

出されたものをありがたく貰う。昼食のことを考えていなかったからちようどよかった。

侍は少女にジュースとマフィンを渡し、自分は緑茶のみだ。

「俺はヴィオっていうんだ。そちらは？」

食べて飲み一息ついたところで、自己紹介となる。

「俺はコサブロウという。こっちはチカだ」

紹介されたコサブロウの影に隠れるように座る少女はペコリと一礼し、マフィンを再び食べ始める。

「すまん。どうも人見知りするたちのようで」

「なんとというか外装にあった行動だな。こっいつた外装だと演技もしやすいのかね？」

「勘違いしているようだが、チカは外装のままの年齢だぞ？」

「え？ そうなの？」

「ゲーム開発者の子供らしくてな。花火イベントを見させるために、特殊外装を用意しこっちにきて巻き込まれたんだ。戸惑っているところを縁あって出会い、以来一緒に行動している」

「いい人だ」

「人として当然のことをしたまで。特別なことをしたわけではない。そう言い切り、実際に行動したのはすごいことなのだろう。」

「外装と名前もあいまって義に生きる侍っぽく感じるよ」

コサブロウはヴィオの言葉に嬉しそうな顔を見せる。

「そう言われるのはすごく嬉しい。以前読んだ時代小説に出てきた

人物に憧れ真似ているんだ」

「そうなんだ」

「現実だと難しいが、こちらだとこういったこともできるから、これだけでもゲームをやれてよかったと思っているよ」

三人はしばらく楽しげに話していく。チカもヴィオに少しずつ慣れてきたようで、一言二言喋り出した。

「そっぴや、二人はバツフェンスト城に行かないのか？ 通達があるって知ってるだろ？」

「二人までしか入れないだろう？ そうするとチカを置いていくことになるんだ。だからあつちはリーダーに任せ、俺たちは暇を潰すことにしたんだ」

「ああ、俺と似たようなものか。俺はギルド長と副ギルド長に任せて、自由に過ごしていたんだ。」

ギルドでの参加者は二人までとか知らなかったしな」

「そうだな。そこらへんも知らせてほしかったな」

そのときタッグから集合場所を指示するチャット連絡がきた。

「話が終わったみたいだ。俺は仲間と合流するよ。そっちはどうするんだ？」

「俺たちはまだ連絡がこないから、もう少しここにいる」

「そっぴか。じゃ、また会えたらいいな。マフィンごちそうさま」

チカにもバイバイと手を振る。手が振り返されるのを見て、ヴィオは歩き出した。

ヴィオとコサブロウは近いうちに再会できるが、嬉しいとはいえない再会となる。

近いうちに起きる事件。それは人の暴走が表面化した一番初めての事件となる。

現れだした悪意

泡村に帰ったアイオールとタッグの問題解決ではなく死亡する可能性があるという話はギルドメンバーに暗い影を落とす。それでも閉じ込められたときほどではなく、アイオールが励まさずとも各自で乗り越えた。非日常に放り込まれ、少しだけ精神的に丈夫になったということだろうか。一回だけならば確実に防ぐことができるという保険もあるというのも安心材料の一つだろう。

第一回の通達があり、三週間ほど過ぎて人々の暮らしに変化が現れだした。世界全体に漂っていた不安な雰囲気は薄れだした。なくなったわけではない。けれども常に不安でいることもなくなった。人は慣れる生物ということなのだ。行動に注意深さが増し、必要以上不安になることがない。大体このような感じで命を賭けた強制廃人プレイな日々を送り出す。街や村に引き籠もり安全に過ごすという暇な日常に耐え切れず、ゲームを進めだしたともいえる。実力が高いにこしたことはないのだ。実力が上がるということは死にくくなるということなのだから。

いつものようにルーの作った朝食を食べていたとき、緊急回線が開く。内容は『連絡事項あり、午後三時までにはバツフェンスト城大広間にこられたし。各首都に臨時転送装置あり』というものだった。「今回は私も行きたい！」

ウィンドウを読んだとたんリオンが手を上げた。

「反対する気はないが、あまり羽目外すんじゃないぞ」

保護者のような物言いでタッグは忠告する。状況に慣れてきたので、今回は自分たちがフォローする必要ないだろうと考え許可をだした。

「わかってますよ」

「今回も二人だけしか入れないだろうし、俺は行かない。気をつけ

で行ってこいよ」

「まあ道中強いエネミーがいるわけでもなし。油断しすぎなければ大丈夫さ」

アイオールたちは十一時までのんびりと過ごし、グラウンドセオへと向けて出発した。今回もヴァサリアントに臨時の転送装置があるので、前回よりも遅くに出ることができるとの予定だ。

アイオールが出る前にヴィオはセバスターに誘われ、泡村を出ていた。

「採取についてきてほしいってことだけど、具体的にはどこに行くんだ？」

目的地を知らされていないヴィオはセバスターに聞く。

「もつ少し先に行ったらいろいろな薬草が生えてる群生地があるんだ。目的地はそこ。危険はないよ、何度も行ってるし。だよねミゼル」

「はい。ヴィオさんのレベルは17でしたよね？」

ヴィオは頷く。

「でしたら大丈夫です。私はレベル15のとき行って、たいして苦戦しませんでした。」

あそこにいるのは黄色の蛇と五十センチのモグラです。蛇はダメージ毒持ちなので毒を受けた場合、事前に渡した解毒薬を飲めばなんの問題もなく回復します」

ダメージ毒には三種類ある。微毒、猛毒、致死毒だ。微毒は十五秒に体力1%のダメージ。猛毒は五秒に1%のダメージ。致死毒は一秒に1%のダメージとなる。今回ヴィオがもらった解毒薬は微毒用だ。

「モグラは地中から奇襲してくるので先制されやすいです。一度地上に出てしまえば頻繁に地中に戻ることはありませんので、一方的に攻撃されることはないはずですよ」

ミゼルと呼ばれた少女が注意点を述べていく。金髪をボブカットにしたヴィオとセバスターと同じ年ごろの少し固いところのある少

女だ。背に弓と矢筒を背負い、腰に接近戦用のナイフを下げている。セバスターも同じような装備だ。似ていて当然だった、ミゼルはセバスターに戦い方を教えてるのだから。

泡村を出て一時間と少しして目的地の盆地についた。

早速セバスターは地面に座り込み採取を始める。ヴィオの目にはどれも同じ種類の草に見える。ミゼルも周囲を警戒しながら、ときおり地面にしゃがみ採取している。その手に掴んでいる草は、地面に生えているものと種類が違う。

「俺には手に掴んでいる草が地面に見えないんだけど、どうなってるの？」

「植物知識スキルがあれば種類の違う草が見えるようになるよ」

「セバスターのように秀才の素質があったり熟練化しないと、採れる種類は多くはないです。」

私も植物知識は取ってますが、凡人の域なのでそんなに役立つものは採れません。そんなものでもセバスターはいくつか薬を作ってくれますから助かってます」

「こつやつて護衛してくれるから、俺のほうこそ助かってるんだ。薬はそのお礼なんだよ」

「お互いに助かってるってことだな」

セバスターの採取は続く。エネミーも現れ、護衛の二人は仕事をこなしていく。遠くにいる敵はミゼルが弓矢で対処し、近い敵はヴィオが倒していく。ミゼルの言う通り、苦戦はしない。二時間ほど採取は続き、十分採ったと判断したセバスターは帰る前に昼食をかねた休憩を提案した。

「ルーさんに頼んで、おにぎりとかあげと卵焼き作ってもらったよ。麦茶もある」

「ちよつとしたピクニックですね」

「俺警戒しとくから二人は先に食べていいよ」

「いいんですか？ それでは遠慮なく」

セバスターの正面に座りミゼルはわずかに嬉しそうな顔を見せる。

変化が小さく、そして男二人はその表情を見逃したので気づくことはなかった。

同時に三匹のモグラが現れ食事が邪魔された以外は、問題なく食事を終える。出していた食器などを片づけたとき悲鳴が聞こえてきた。

「どつちから聞こえた!？」

セバスターは周囲を見回し聞く。

「おそらく南東かと。遠くはないはず」

「行く?」

短いヴィオの問いに二人は頷いた。

走ること一分弱。街道でプレイヤー同士で争っている。争うというよりは一方的な展開だ。五対二の戦いで、二人組のほうは分断され連携をとることもできていない。

セバスターとミゼルは止めるため、矢を放つ。当てるつもりはない牽制のためだ。これで五人はヴィオたちに気付く。引くぞという声がヴィオたちの耳にも届く。去る前に彼らは倒れて動けなくなっていた二人組に各々の武器を突き立てた。二人組の絶叫が周囲に響き、消えていく。すでに死なずの紅玉を使っていたのか、持っていないかったのか二人の姿は消えていく。死んでしまった。

ヴィオたちは走り去る五人組を呆然と見送る。林から出てきた誰かが五人組に合流する。五人組は何かを言っただけのまま走り去る。合流した者はヴィオたちを見て、一瞬動きを止めた。距離が遠く正確にはわからないが、苦々しい表情になっているように見える。彼は林を指さすと、五人組を追って走り去った。

「なんだっただんだあれは」

かろうじてセバスターはそれだけ吐き出す。

「……あの五人組、笑ってました。同じプレイヤーにとどめをさすときも。どうして笑えるんでしょう? ゲーム内で死ぬことは危険だっただけ知ってるはずなのに」

震えた声でミゼルが言った。

「林の中行ってみる？」

「グイオの声は硬い。」

「危なくないか？ あんな奴らの仲間がいた場所だぞ？」

「……林から出てきた人と話したことがある。それどころか助けられもした。俺のほかにも助けられた人がいたんだよ。」

「そんな人なんだ。いい人だと思うんだ。」

俺がコサブロウさんに気付いたように、あつちも俺に気付いたはず。だから意味なく指さすなんてしなれないと思うんだ」

「近くまで行ってみましょう。でもなにか危ないと感じたら引き返す、これでいいですか？」

それならばとセバスターは頷いた。

コサブロウが出てきた場所に近づくと、小さくうめく声が聞こえた。誰かいると声をかけながらもっと近づくと、気絶しながら痛みに耐えているプレイヤーがいた。そのそばにはポーションが置かれている。

「大丈夫か？」

グイオが彼を揺らすが起きない。三人とも他人がどれくらいダメージを受けているが判別するスキルを持っていないので、どれくらい傷なのかわからない。ポーションも対象が気絶している状態だと使えないのだ。治癒魔法ならば効果はあるが、これも習得していない。

「どうする？」

グイオは二人を振り返り聞く。

「どうしましょうか。疑がってかかれば、この人はあの五人の仲間です。私たちの本拠地を知るためわざと怪我したとも考えられます。そんなことしてなんの意味があるかわかりませんが」

「ないかもしれないけど、可能性としてはゼロじゃないんだよな。」

とりあえず背負って移動する？ 泡村に戻るんじゃないかな。ここよりは安全そうな場所に移動して、目が覚めたら話を聞けばいいかな」

セバスターの案を採用し、三人は移動を始める。気絶したままの

男はヴィオが背負う。

ミゼルの記憶でここに住人のいない小屋があると判明し、そこに運ぶことになった。

林の中にあるその小屋は、ホワイトヒストリーが本格始動するとなにかイベントが用意されるのではと言われている場所だ。今はプレイヤーたちに休憩所として使われている。小屋の中までエネミーが入ってこないの、休憩するには便利なのだ。

セバスターの手を借りてヴィオは背負った男をゆっくりと下ろす。だいぶ痛みがひいたのか男はうなり声を出すことはない。もう一度声をかければ起きるかヴィオは起してみる。予想は当たり、男はゆっくりと目を開けた。

「……ここは？」

「あんたらが襲われた街道から少し離れた場所にある、小屋の中だよ」

「襲われた？ あっ！ ほ、ほかに二人いたろう！ あいつらは！？」

勢いよく起き上がり、ヴィオを掴み聞く。

無言で首を横に振るヴィオを見たあと、セバスターとミゼルを見て同じ反応が返ってくる、掴んでいた手を放しがつくりと肩を落とす。

「なにがあつたのか聞きたいんだけど、無理なら」

「俺にもなにがなんだか。レベルを上げるために氷窟に向かったら、いきなりあいつらに奇襲されたんだ。プレイヤーからの攻撃でダメージ受けることに驚いていたら、あっというまに分断されて逃げようと林に入った。でも追いつかれて、斬られたんだ。すまんなんて言うならあんなことするなよっ」

「謝ったのですか。」

「なにか彼らに恨みをかうようなことをしたとか」

「初めて会ったやつらだ。恨みとかかうわけない。知らず知らずのうちに恨みをかっていたとしても、死ぬことの危険性知ってるはず」

なのにこんな手段でるか？ 普通の神経じゃねえよ」

恐怖や悔しさ怒りをにじませた声で、今はいない彼らに対して怒鳴る。

「とりあえず、これを」

セバスターが自作のポーションを差し出す。男の体力ははまだ危険域のままだ。置かれていたポーションは念のため渡さない。普通のポーションだが、心情的に考えていらないうとと思ったのだ。

「ありがとう。そういえば助けられたいことに対してもお礼を言っただけだったな。それについても礼を言う」

頭を下げ、もらったポーションを飲み干した。

「これからどうするのですか？」

「仲間にこのことを知らせに戻る。そしてあいつらを見つけ出す。復讐するつもりなのだろう、声に憎しみが込められている。男の雰囲気におされ三人はなにも言うことはできなかった。復讐はいけないことだと口で言うのは簡単だが、被害にあっていないからこそ言える言葉でもある。」

男はもう一度三人に礼を言って、小屋から立ち去る。昼食を食べていた時のようなピクニク気分はとうに消し飛び、なんともいえない重い雰囲気が漂う。

三人も小屋を去り、泡村へと帰る。少しでもあんなことのある場所から離れたかった。泡村に帰っても重い雰囲気はついて回り、ギルドメンバーになにかあったのかと心配されることになる。三人は思い出して気分のいいものではないので、なんでもないと誤魔化した。

夕方五時になり、ルーが今晚の献立に頭を悩ませているときに、でかけていたアイオールとリオンが帰ってきた。二人の雰囲気もあまりいいものとはいえなかった。

「嬢ちゃん、ついにリオン嬢ちゃんのべたつきに限界がきたのか？」

「そこまでしつこくつきまってるじゃないよ！」

「もう少しだけ離れてくれてもとは思っけど、そこまで気になっ
てはないよ」

「じゃあなんで沈んでるんだ？」

原因はなんとなく予想はついているタッグだが、気晴らしのため
わざとふざけた感じで話しかけた。

「今日の通達が碌なことじゃなくてね」

「ほんと胸糞悪くなるってのはあんなことを言うんでしょっね」

「リオン、胸糞悪くなるとか言わない！」

兄として妹の言葉づかいを注意するセバスター。

「だって聞いててほんと気分が悪くなる話だったんだから」

「嬢ちゃん、今日はどんな話だったんだ？」

「プレイヤーキラーのことだったよ」

タイムリーな話にヴィオたち三人は顔を見合わせた。

「はじめは、問題解決の近況とか、長時間稼働していることでのバ
グについてだった。んで次がコロシウム以外でもプレイヤー同士の
戦闘ができてしまっって話だったんだ。

問題はここから。すでにプレイヤーキラーが出始めているってこ
と。ただ邪魔するだけならまだ可愛いほうだ、なかにはプレイヤー
を殺してしまうって連中もいるって話だったんだ」

これは管理者たちが予想していた時期よりも早い発生だった。そ
して殺してしまう者が出てくるのも、もっとあとだと思っていたの
だ。さすがに殺しは躊躇うだろうと。プレイヤーの良心を信じてい
たのだが、裏切られる形となった。

「殺すって何考えてんだその連中」

「さあね、そんな奴らの心情なんてわかりたくもない。

それで各世界でパトロールをしようって話になった」

「そのパトロールの目的は？ サーチアンドデストロイじゃプレイ
ヤーキラーと似たようなものだぞ？」

「ある程度いためつけ動かなくなるか、気絶させて管理者に引き渡
せば隔離施設に放り込むことになってる。ゲームを止められるよう

になるまで、そこで拘束する。そうすることで被害が増すことを防ぐんだとさ」

「問題解決だけでも頭悩ませているのに、さらに問題が湧いて苦勞してんだろっな管理者。」

あ、その苦勞を減らすためのパトロールか。プレイヤーの起こした問題はプレイヤーが対処する」

「だろうね、パトロールの話がでたのはプレイヤー側からだし」

「悪い奴もいれば、いい奴もいるもんだな。それでパトロールの詳しい話はどうなってるんだ？」

「実行は明日から毎日、各ギルドから数名とボランティアを首都庁舎跡に、朝九時までに集合させることになってる。出す人数は所属する人数の割合によって変わってくる。うちは一人ずつだよ。」

これからでかけるときは少人数での行動はなるべく避けてくれだとき。大人数だと狙われたって情報はないらしい。

皆もこれら注意してくれよ！」

「もう遅いかも」

「グイオ？ どういうことさ」

「今日ね、襲われた現場にちょうどいあわせたんだ。セバスターとミゼルも一緒だった」

「だ、大丈夫だった!？」

「襲われたわけじゃないよ。どこも怪我してない。悲鳴が聞こえてどうしたのかと思って現場にむかったら出くわしたんだ。俺たちを見たら逃げてった」

「それで三人は雰囲気が悪かったのか」

出会っただけではなく、断末魔や生き残った男の雰囲気にもあてられたせいでもあるが、それは言わない。

「どこに出たんだそいつら」

「南に街道がありますよね？ それにそって歩いて一時間といったところですよ」

「そんなに離れた場所じゃないんだな」

「そこから西へ逃げて行きました」

「そつちに本拠地があるのか、それとも本拠地を誤魔化すためわざと違う方向に逃げたのか」

「わかりません」

あとを追えばわかったのだろうが、あのとときの三人にはそんな勇氣はなかった。

「そうか。そいつらはもしかするとここら辺を本拠地にしてる可能性もあるんだな」

「十分に気をつけないとね。皆も移動はなるべく一人でしないように」

マルチーナの言葉に皆頷く。

各地でプレイヤーたちのパトロールが始まり、プレイヤーキラーで捕まる者も少数だが出始めた。その少数のプレイヤーキラーはもとからそうだった行為をしていて、通達に集まることのなかった者たちばかりだった。通達を聞きに行っていないのだから、殺すことではなにか起こるのかわらず、知らされたあとは自分のしでかしたことに震えるばかりだった。隔離施設に入れてもそれは変わらず、寝てもうなされ起きるといっても安静とはいえない日々をすごすことになる。

パトロールによってプレイヤーキラーの被害は減った。しかし警戒を高めた彼らはさらに捕まえることが難しくなっていた。特に過激なプレイヤーキラーたちは一定の被害を出し続けるが、慎重に動いていることで捕まえることが少ない。常にまとまって動いていることで、おそらくギルド全体でプレイヤーキラーを行っているのではと推測されていた。

パトロールが始まり約一ヶ月。今日はヴィオの参加の番だ。参加はこれで二回目だ。

ヴァサリアント庁舎跡地には、百名近い参加者が集まっている。

ここから十人近くの集団にわかれ、管理者が用意してくれた臨時の転送装置を使ってウォルタガ各地へと飛ぶ。

パトロールは暗くなる前まで続けられる。暗くなると移動するプレイヤーは少ないし、プレイヤーキラーたちも睡眠を必要とするので、夜の被害はとて少ない。

転送装置で飛んだヴィオたちは囷役と隠れながら移動する人に分かれる。このとき互いになにができるか、どれくらいの強さか確認することを忘れない。互いのことを知れば拙いながらも連携はとれる。それに低レベルの者を囷にしては死に行かせるようなものだ。ヴィオはいつも隠れて移動するほうに入っている。最終クローズ組は大抵こつち側だ。

装備のランクを下げた三人の囷役が街道を歩いている。パトロールが各地を巡回していることは既に広く知らされているので、相手も警戒は高い。手を抜いた警戒をしてレベルがあまり高くないように見せかける。ほかの者は近くにある林の中を静かに移動している。そんなことを続けた昼過ぎ、ヴィオの耳に聞き捨てならない動物の音が聞こえてきた。ヴィオはせっかく動物の音が聞こえるのでこの長所を生かそうと、動物知識スキルをとって野生動物の姿を見えるようにしていた。森や野原などでみかけられる動物に食糧を与えると、簡単な指示を与えることができたり情報をくれると、動物たちと何度か話し判明している。これによりヴィオの周囲の状況を捉える能力は格段に上がっていた。人と共にいる動物ならば動物知識がなくとも誰にも見えるが、野生動物ならばそうもいかない。ヴィオはそんな野生動物に頼んで動物知識のないプレイヤーに気付かれずに動いてもらうことができる。

今回は頼んでいないので、偶然動物たちの声から情報を得たことになる。

「皆さん、俺たちのほかに隠れている人がいるようです。位置はこの先。詳しいことはわかりませんが、少し時間をいただければわかるかも」

「頼めるか。囿役の奴らには進むペースを落とすように指示するから」

もしかすると囿を見張っている人がいるかもしれないと考えての発言だ。おかしな動きを見せると警戒され、囿が無駄になる。連絡をとる方法は超能力スキルのアーツ、テレパシーを使う。事前の打ち合わせで、テレパシーを使うと決めてあったので囿役の人たちは突然の連絡にも驚いた様子は見せずに、自然にふるまっている。

その間にヴィオは周囲に見える鳥以外の動物と交渉し、近場でどこにどれだけの人間がいるか調べてもらう。

二十分ほどかけて戻ってきた動物たちによると、だいたいこの先、人の足で早足で歩き十分ほど行ったところにプレイヤーキラーたち七人が隠れているらしい。そのうち一人が囿を見張っていたが、動物たちと入れ替わるようにこの場からいなくなった。

「こちらから奇襲をしかけよう」
情報を聞いた女剣士が提案する。

「具体的には？」

聞き返したのはこのパーティで一番レベルの高い魔法使い。レベルは三十三で、魔法スキル三つを持つソーサラーの称号を持つ。魔法スキル二つではマジシャンで、四つではウィザードの称号となる。アイオールはウィザードだ。

「あなたは広範囲で威力の高い魔法は持っているか？」

「火の魔法で円範囲で炎が地面から噴き出す魔法は持っている。しかしここは水属性の地ウオルタガで火の魔法は若干威力が削られる」

「ほか遠距離攻撃を仕掛けられるものは？」

「僕は弓を鍛えてる」

狩人風な少年が手を挙げた。もう一人遠距離攻撃法を持つ者がいるが、囿役として参加していた。

「その二名を動物の声が聞こえるの者が案内し、挟撃する形で攻めるというのはどうだ？」

魔法を使うのに少しのタメが必要だろうか？ あらかじめ移動して

おくことで、即座に使えるようにしてすれば隙は少ないと思うのだ。弓にもためることで威力の上がるアーツがあつたはずだ。それをもつてなくともしつかり狙えるのは有利だろう？

それに初めに大打撃を与え、囲んでしまえば戦意もいくらか下げることが可能ではと思う。あとそちらが奇襲してくれば、相手の詳しい位置もわかり攻めやすい」

「ふむ……俺はそれで構わない」

魔法使いが賛成の意思を示す。ほかに反対意見は出ない。ヴィオもそれでいいかと考える。

「じゃ、それでいくつて囿役にも伝えるぞ？」

テレパシー持ちの男が最終確認とばかりに聞き、皆頷く。

そうと決まれば、ヴィオたち三人は急いで奇襲位置へと向かう。

ヴィオの肩には案内役のリスが乗っている。そのリスから詳しい位置を聞き、プレイヤーキラーにみつからない位置へと陣取る。このとき魔法の届く位置にも気をつける必要があつたのだが、うっかり忘れていた。だが運よくぎりぎり届くという位置に移動できていた。全速力で移動したため現実ならば息切れしてもおかしくはない状況で、攻撃役の二人は準備を進める。その準備がすんだ二人に、プレイヤーキラーのいる詳しい位置を話していく。こうして準備は終わる。その一分後、囿役の姿が見え始めた。まだ少し遠く魔法を使うには早いと判断した魔法使いは、もう少し引きつけるため使われない。徐々に近づいてくる囿役の顔が緊張から強張っているように見える。その表情がはつきりとする位置まできたとき、ヴィオはプレイヤーキラーのいる茂みがかさりと揺れた気がした。そして魔法使いは魔法を放つ。

「ヴォルケイノ！」

茂みに炎が上がる。木の葉や木は燃えないが、爆風に煽られ激しく揺れる。効果音と同時に悲鳴が上がる。なにごとか出てきたプレイヤーキラーたちのうち三人を矢が射抜く。それを合図として、隠れていたプレイヤーたちも出てきてプレイヤーキラーたちに突撃

する。

奇襲する側が奇襲され、慌てている。ここまで完全に奇襲されたことはないのだろうと思わせるくらいに慌てぶりだ。これだけ動揺すれば、パトロール側は苦戦することもない。人数的にもパトロール側が有利だ。瞬く間にプレイヤーキラーたちは傷ついていき、降参していく。痛みから気絶する者もいる。逃げ出そうとした者は女剣士が目ざとくみつけ逃がさなかった。

今回の戦いはパトロール側の完勝だ。ついでにここ最近では捕獲した人数が一番多い。

「ちつくしょつ！　なんで俺たちの位置がわかったんだ！？」

「こちらの作戦勝ちということだ」

「獲物のくせにつ大人しく狩られてればいいのによ！」

「……それは本気で言ってるのか？」

女剣士は人ではなく別の生き物を見る目でプレイヤーキラーを見る。パトロール側の人間は皆同じ目だろう。

「本当に命がかかっているんだぞ！？　なんでそんなことが言える！」

「だから面白く狩れるんじゃないか。この手で命を消せるたまらない遊びだったぜ？」

「お、お前は」

いくども殺してきたことで、命がかかっていると知っても楽しんでしまうようになった人間がここにいる。人として踏み込んではいけない領域に足を踏み入れた者たちだ。彼らが浮かべる笑みは、ヴィオたちに嫌悪感しか与えない。

手足をしつかりとロープで縛られ、軽量化の札を貼られ引きずられ運ばれるプレイヤーキラーたち。その中にヴィオは見覚えのある顔を見つけた。セバスターやミゼルと一緒にいたときに見たプレイヤーキラーだ。じつと顔を見るヴィオをにらみ返す、どうやら相手はヴィオのことを覚えていないらしい。

七人という多さの捕獲者を連れて戻ってきたヴィオたちを、ほか

のプレイヤーたちは歓声で迎えた。これで被害がさらに減るのだから、喜ぶのは当然か。

「たしかに預かりました」

管理者の一人が、プレイヤーキラーたちを隔離施設へと転送する。「彼らから新たな情報もたらされれば、お知らせします」

そう言って管理者も消えていった。

これで今日の仕事は終わりだ。集まっていた者たちは、各自のねぐらへと帰っていく。ヴィオもヴァサリアントで夕食を食べてから泡村へと帰っていった。

反撃の狼煙

ヴィオがパトロールの仕事を終え四日経った。今日パトロールに行ったのはデルカだ。そのデルカが帰ってきて皆を集める。連絡することがあるようだ。

「管理者からの通達を聞いてきたから、静かに聞いてくれ」

注目が集まったことを確認するとデルカは続ける。

「三日後にプレイヤーキラーギルドを攻めることになった。参加する人はヴァサリアントの庁舎跡に集まってくれだとか。あとヴィオは強制参加な」

「なんでさ!？」

「少し前に動物使つて情報収集に役立ったんだってな？ 今回もそれがなんらかの役に立てば、だつてさ」

「行かなくていいなら行かないつもりだったのに」
ヴィオのレベルは21へと上がっていて強さ的には中堅といえるようになってきているが、同じようにほかのプレイヤーのレベルも上がっていて、プレイヤーキラーのレベルも上がっている。相対的に考えるとプレイヤーの中では低い方なのだ。エネミー相手だと問題はない、自分の実力にあったエネミーと戦えばいいのだから。これがプレイヤーだとそうはいかない。相手の強さは不明だし、かなりの確率で相手のほうが高い。だからプレイヤーキラーと戦うのは危ないといわっているのだ。

手と膝を床につけて落ち込むヴィオをフィスが慰めている。ヴィオとフィスはかなり仲良くなっている。意思疎通できるのだから仲良くなるのはわりと簡単だった。可愛いもの綺麗なものの好きなりオンは、ヴィオの会話能力をすごく羨んでいる。

「レベルが低いつていたらちゃんと護衛つけてくれるさ」
アイオールも励ます。

「俺が護衛についてもいいしな」

タッグは参加するようで、護衛につくと宣言する。それでなんとかなりそうだと気を持ち直し、ヴィオは立ち上がる。

「フィスもアイオールもありがとう。」

タッグさんよろしくお願いします」

「任せとけ」

どんつと胸を叩く様はかなり頼りになる雰囲気を漂わせる。

「ヴィオとタッグさんは当日になったら庁舎跡にいる管理者に会いに行ってください」

二人は了解と頷く。

「プレイヤーキラーギルド本拠地の情報は、ヴィオたちが捕まえたプレイヤーキラーが吐いたんだとさ」

「よく仲間のことを話したな？」

ヴィオは不思議そうに聞く。ほかの面々にも疑問に思う者はいるようだ。

「そこらへんは聞いてない。ただ本拠地の情報を話したとだけ言うてたし」

管理者は一と十を比べ、十をとった。具体的に言っていると、洗脳や白剤に近いものを使った。それには副作用があり、よくて偏頭痛に悩まされ、悪くて脳に障害が残る。非人道的な方法といってもいい。だが早く対処しなければほかのプレイヤーに被害が広がる。普通に過ごしている多くのプレイヤーを助けるため、プレイヤーキラーの数人を傷つけていいのか悩み決めた。被害を抑えるため責任を取る覚悟を決め、少しの犠牲者を出す方法をとったのだ。

そのおかげでいまだ強い勢力を保つプレイヤーギルドの本拠地をみつけることができた。

「今回のことを緊急回線で知らせなかったのは、あの連絡方法だとプレイヤーキラーにも連絡がいくからだそうだ。そんなことになれば逃げ出すのは確実にせつかく手に入れた情報が無駄になるからパトロール参加者のみに伝えたとさ」

今回失敗すれば、再びプレイヤーキラーに洗脳など施さなければならぬ。さすがに管理者としても何度もそういったことをやりたくはなく、情報の提供に気を使っている。

「ヴァサリアントへの集合は何時頃？」

アイオールが聞く。

「夜襲をかけたから午後七時だそうです。これ以上のくわしい情報は現地で話すと言ってたっす」

「嬢ちゃんも行くのか？」

「ギルドメンバーが行くのに引っ込んでいるわけにはいかないだろ」

「嬢ちゃんが名乗り出るとリオン嬢ちゃんも出てきそうだが」

「アイオールさんのそばなら安全そうだし行くかも」

でも怖いしどうしようかと続く。

「さすがにリオン嬢ちゃんを連れて行くわけにはいかないだろ？」

だから嬢ちゃんは留守番しとけ」

不満そうなアイオールにさらに続ける。

「ないと思うが、出払っている隙にここがプレイヤーキラー攻め込まれる可能性もある。一番の主力でギルドの中心な嬢ちゃんは残って、万が一に備えておいた方がいい」

正直考えすぎだとはタツグ本人も思っているが、ギルドメンバーを守るという点から刺激すればアイオールは責任感から動きは鈍る。タツグの予想通りアイオールは参加をやめた。アイオールは戦力として申し分ないことはタツグも理解している。けれど今回の討伐は不快な思いをしそうだと考え、アイオールの参加を止めたのだ。できればヴィオの参加も止めたいが指名されているので無理だ。ならばせめて近くにいてやろうと護衛をかってでたのだ。

「くれぐれもヴィオのことを頼んだよ」

「俺の心配は？」

「心配しなくともそう簡単にくたばらないだろう？」

「これもある種の信頼なのだろう。」

「帰ってきたらできるだけ美味しいもん食べさせたいから、無事

に帰っておいで」

ルーはタッグの背を叩いたあと、ヴィオに好きな食べ物を聞いている。タッグには聞かずとも知っている。以前聞いたことがあるのだ。

三日後の夕方、ヴィオとタッグは仲間に見送られヴァサリアントへ出発した。

泡村を出た頃には赤く染まっていた空や野は、ヴァサリアントに着く頃には濃紺へと変わっていた。

電灯のように明かりの灯された何本もの柱が、暗くなった街を明るく染めている。討伐に集まった人の多さのおかげか、イベントがあるわけでもないのにヴァサリアントに活気があるように見える。かといって楽しい賑わいというわけでもないが。

ヴィオとタッグは人の流れにのって庁舎跡へと向かう。

「管理者に会わないと駄目なんだっけ。どこにいるんだろ？」

「んー……あれじゃないか？」

タッグの指差す方向に設営をしている人たちがいる。

「あーすみません」

「はいはい、なにか御用で？」

設営の手を止め管理者と思われる男は振り返る。

「強制参加って言われて、管理者に会って言われたんですけど」

「あーお疲れ様。君はあっちの集まりに行ってくれろ？ あの集まりが今回の討伐隊指令系統のトップだから」

一般参加組と分けされた集団を指差した。

「そっちの獣人さんも強制参加組？」

「俺はこいつの護衛としてついてきたんだ。こいつはレベルがあまり高くないから。同伴認められるんだろっか？」

「んーどうだろう。とりあえず一緒に行ってくれろ？ たぶん大丈夫だとは思っけど、一応聞いて指示を受けて」

「わかった」

二人は管理者に礼を言つて、指差された集団へと足を向ける。

「すみません。強制参加と言われた者ですけど」

「いらつしゃい」

出迎える人にヴィオは見覚えがある。数日前のパトロールと一緒に組んだ女剣士だ。

「七日ぶりでしたっけ？　こんばんは、ラスツイスさん。あなたも強制参加組なんですか？」

「指揮の腕を買われてな。今回もよろしく頼む」

ヴィオと組んだとき以外にもラスツイスは成果をあげている。そこから参加を望まれたのだ。情報収集に役立つだろうとヴィオを推薦したのも彼女だ。

「そちらの獣人も強制参加なのか……もしかしてタツグ殿か？」

斧とフェイスに目がいつて誰かわかつたらしい。

「久しぶりだな」

「タツグ、知り合い？」

「俺個人の知り合いじゃないけどな。ギルドでイベントに参加するたびにこの人のギルドと優勝を争ったんだ。そのときに何度か顔をあわせた。指揮が上手いんだこの人は。最近はいイベントどころじゃないから会うことはなかったな」

「そうだな。ただただこの世界で楽しんでいたあの頃を懐かしく感じるよ。アイオール殿はきているのか？」

「うんにゃ、本拠地で留守番だ。なにかあつた際の守りとして置いてきた。」

俺はこいつの護衛としてきたんだ。同伴許可ももらえるか？」

「かまわないよ。突撃隊に入ってもらつたことになりそうだから、むしろいてもらったほうがいい」

「プ、プレイヤーキラーとガチンコさせられる？」

ヴィオは腰が引けている。

「いやいや積極的に戦えとは言わない。道案内役になるだろうなどと戦いは避けていい」

「なんだーって安心してる場合じゃないっ!? 突撃するなら避けられずに戦うに巻き込まれる可能性はあるってことだ!？」

「まあ否定はせんな」

「そのために俺がいるんだから、慌てなさんな」

「めっちゃ期待してますっ」

アイオールからもらった死なずの紅玉があるとはいえ、二回目の死亡で本当に死ぬ可能性があるのだ、戦いを怖がるのも当然だ。しかも相手は同格か格上、不安が湧きあがらないほうがおかしい。

二人は時間まで、強制組に集められた人たちと挨拶をし、どんなことで集められたのか聞いていく。距離に関係なく複数人数に声を送れるテレパシーの使い手や姿を隠すのが上手いアサシンや補助魔法に天才の資質を持つマジシャンなど、直接攻撃を行う者より補助に優れた者が多い。

挨拶を終えるとちょうどいい具合に時間となった。

管理者が設営された台座に上がり、集まった人々の注目を集める。管理者の眼下に四百人近いプレイヤーがいる。

「時間となりましたので、説明を始めさせていただきます」

ざわめきがじょじょに消えていき、すぐに静かになった。

「今回の作戦は管理者が指揮しません。パトロールの際に上手く指揮する人がいたので、その人に頼んであります。詳しい作戦内容はその人からしてもらいます。」

私たちからの連絡事項は、あとで死なずの紅玉を渡しますので忘れず受け取ってくださいということです。すでに持っている人には、死なずの紅玉分の代金をお渡ししますのですでに持っていますも紅玉を受け取る場所についてください。

もう一つは、この討伐戦でプレイヤーキラーを殺してしまってもそれは事故として扱うということです。隔離施設には送りません。ですがこれは殺すことを推奨しているというわけではありません。最後の手段として、殺すという行為を行ってくださいということです。

相手は殺すことに躊躇しない人たちです。ですからきつと今回も何の迷いもなく武器を振るってくるでしょう。自身を守るためあなた方も武器を振るうことになります。そんな中、手加減すると自身が危機に陥ることがあるかもしれませぬ。そんなときは躊躇わず、自己防衛のため全力を出してください。その結果、殺してしまふことになるかもしれませぬ。そのことで私たちはあなたがたを罰することはありません。

ではあとはラススイスさんお願いします」

管理者は台座から下り、代わってラススイスが上がる。管理者の話で静かすぎるほどに静かになったプレイヤーたちを見下ろす。

「私が指揮を頼まれたラススイスと言う。よろしく頼む。

早速、今日行うことを説明しようと思う。

管理者が手に入れた情報で、プレイヤーキラーは小さな村を本拠地としていることが判明した。そこにいる人数は約五十人。一人で行動しているプレイヤーキラーや、小さな集団だったプレイヤーキラーを吸収して、そこまでの大きさになったようだ。ここを潰せば被害はかなり小さくなる。諸君には気合を入れて行動してもらいたい。

これから動くことでわかるように夜襲だ。移動する際はできるだけ静かに、明かりもつけないか小さくして目立たないように移動してほしい。

人数は大きく二つにわけろ。突撃隊と迎撃隊だ。

突撃隊は村に入って暴れてもらう役だ、危険も多い。よって実力の高い百人ほどはこちらに入ってもらいたい。そして一対一は絶対避けるように。かならず複数人対一で戦うように。多くて三人までだ。それ以上は互いが邪魔になり、相手に有利になる。村に入っても即暴れないように、静かに戦いできるだけ相手に気づかれないようにしてほしい。これはできるだけいい。無理して静かに戦おうとして不覚をとっては意味はない。

迎撃隊は村から逃げたプレイヤーキラーを討ってもらいたい。こ

の人数なら六人一組が五十ほどできる。その五十組に村を囲んでもらう。突撃隊が目立ち始めたら、篝火を一齐に立ててもらおう。迎撃はできるだけ遠距離から攻撃し消耗を抑えるように。この場合味方を誤射する可能性もあるが、それは管理者から貰う予定のオレンジの発光布を体に身につけてもらい判別できるようにする。

以上が今回の作戦となる。質問はあるか？」

何人かのプレイヤーが手を挙げ、組み分けはどう決めるのか、連絡方法はどうするのか、村はどこにあるのか、などと質問していく。「組み分けはこれから君たちを簡単にわけ、臨時のパーティを決めていく。こちらの指示に従ってほしい。連絡方法は強制参加組の力を借りる。村は管理者が臨時の転送装置を準備してくれたので、それを使い向かう。」

質問は以上か？」

とりあえず納得できたのか、これ以上の質問はでない。

「よろしい。ではこれからレベルごとに君たちをわけていく。私の指示に従って動いてほしい。」

まず私から見て右にレベル三十以下の者、目の前に三十以上五十以下の者、左に五十以上の者というふうに分かれてくれ。」

十分ほどかけて三つのグループにわかれた。

「今度は前に接近戦の得意な者、後ろに遠距離の得意な者」

今度は五分で移動し終わった。

わかれた六つのグループを見ると、レベル三十以上五十以下の接近戦の者が一番多い。一番少ないのは五十以上の遠距離の者。

「三十以上五十以下の接近戦の者の半分は、五十以上の者と合流してくれ。よし、まとまったな。君たちが突撃組だ。行きたくない者はいるか？」

十人近くが手を上げた。

「ではその十名はレベル三十以上五十以下の接近戦の者と交代してくれ。」

突撃組は今のうちに適当に二人組になっていてくれ。そして互い

になにができるか確認しておくように」

十名は交代してもらおうと交渉し、その交渉は無事に終わった。

「次に残ったものたちは前衛同士、後衛同士で混ざって三人一組に」
これには二十分かかる。

「できあがった前衛組、後衛組はできとくにパーティーを組んでくれ」

次々とパーティーができていく。後衛組の数が若干少なく、前衛組が余る。その面々は前衛同士で組ませた。

こうして約一時間かけて準備が一つ終わった。ラスツイスはできあがった六人パーティーを縦五組、横十組と整列させる。突撃組の五十組も同じように整列させた。始めはばらばらだった人の集まりは、綺麗にまとまった。このあとの道具配布や移動がこれでスムーズになる。

「今の位置を覚えていてほしい。何度かこうして並んでもらうのだから。」

では今から道具の配布を行う。死なずの紅玉と目印の布のほかに松明とそれを置く台、ポジションと技回復薬も配る。

取りに行く順番は六人パーティーの右端から。終わったら次は突撃組の右端。受け取る場所は管理者が三人いる場所だ。すまないが担当の管理者は手を上げてくれないか」

ラスツイスの言葉に応え、道具を渡す管理者が手を上げた。

「あの三人は受け渡すものがそれぞれ違うので、受け取り忘れがないように気をつけること。受け取ったら今の位置に戻るように。」

私たちはこれから先行して様子を探る。帰ってくるまで互いになにができるか話し合っていてくれ。

最後に。この討伐戦は決して褒められたものではない。プレイヤーキラーとやることは同じだからだ。しかし私たちは傷つけることを楽しんではいない。彼らの行いの後には悲しみと憎しみしかない。私たちの行いのあとにも悲しみがあるだろう。だがそれだけではない！ 今ここにはいないプレイヤーの安全が私たちの平穩が

つ今日これからの戦いで得られるのだ！ 義は私たちにある！ ならばつ正義を行う私たちに負けはない！ 正義は悪に勝つものなのだから！

集った勇氣ある戦士たちよ！ 力を貸してほしいつ。明るい未来のために私と共に戦おう！」

ラスツイスは最後に手を振り上げた。それに応えるように討伐隊もヴァサリアント中に響く鼓膜が痛くなるような大声を上げ、手を振り上げた。士気は十分に高まった。人と戦うことに不安があった者も皆と共に戦うのならば大丈夫だと不安を晴らす。

ここにいる者ほぼ全員に不安はあった。世界の平穩のため正義を為すためといった志を持ち参加はしても、平和な現代日本では戦争や紛争はなく、命を賭けた戦いなど誰もが未体験だ。緊張と不安があつて当然なのだ。それが無い者のほうがこの場では異端。例えば敵討ちに暗い思いを燃やしている者は不安を感じず、やつとこのときが来たと戦いを心待ちにしている。一人では仇さえみつからずは無駄死にすると考えていてところに今回の作戦だ。この機会を逃しては復讐を果たせない。そんなふうを考えている者が何人かいる。

ラスツイスは道具を受け取るように指示を出し、台座を下りた。そして誰にも見えないように小さく安堵と不安の混ざった溜息を吐いた。

いくら指揮に優れているとはいえ、この人数に指示を出すのは初めてだ。さらにいままでは遊びの中の自分も楽しめる指揮だ。今回の指揮は人を傷つける、できればやりたくない。ラスツイス自身が不安を抱えていた。人を傷つけるということにもだが、味方に被害が出るということも不安にさせる。戦うのだから被害は出て当たり前。しかしその感覚は戦いを生業とする人種のものだ。ラスツイスはそういつた人種ではないし、ここにいる者たちもそうだろう。そんな人たちを戦いに駆り立てるような発言に迷いを感じているから出た不安の溜息。それを隠し通せたことの安堵の溜息だ。

強制参加組が口々にお疲れ様と声をかける。それに笑みを浮かべ

応える。トップが不安を表に出しては駄目だと考えているからだ。ラスツイスが不安を感じているとわかれば、この集団にも広がっていくだろう。そして動きが鈍り被害が増すかもしれない。自分のせいで余計な被害を出すわけにはいかない。内心、厄介なことを引き受けたと考えていた。

「聞いたように強制参加組は先行し、情報を集める。」

君たちの道具は先に受け取っているので、今から渡す」

ラスツイスは一人ずつに印の布と死なずの紅玉とポーションなどを渡していく。通常一人一個しか持てない死なずの紅玉を複数個持っているのは、管理者から渡された特製の道具袋に入れているからだ。

グイオも受け取った布を上腕に巻き、ポーションを道具袋に入れる。死なずの紅玉はすでに持っているので、お金ももらった。

「全員準備はできたか？」

「よしっ出発だ」

ラスツイスの号令で先行隊は臨時の転送装置に入っていく。

悪意の末路

転送された先は暗い森の中だ。到着したらその場で待機と言われている。光源となりうる月明かりは木々に遮られ、頭上にちらりと光るだけ。互いの顔さえも見づらい状況で全員がそろろう。ラスツイスが線香のようなものに火をつけた。暗さに目がなればこの小さな明かりでも、十分な光源となる。

「まずは情報収集だ。ラウンは先日つけた目印の配置位置に異変がないか確認を。シーは透視で村の状況を見てくれ、村は西にある。グイオは動物に頼み、村の状況を探るように。相手にも動物知識持ちがいるかもしれない。動物には物陰を移動するように言ってくれ」指示を受けた三人は早速動き出す。

グイオは声ができる方向を見て、木の上にいたネズミに声をかける。多くの餌を渡すことを交換条件に村の状況を探ってもらう。目立たぬようにと指示も忘れていない。指示を出しても今のグイオにできることは多くはないし、野生動物のAIもそれほど上等なものではない。できることはプレイヤーかNPCが見分け、どこに一番人が多いか探ってもらう、そしてそこまで案内してもらう。これくらいだ。

ラウンと呼ばれた男は、事前に協力を頼まれ動いていた。アサシンの称号持ちなので隠密行動は得意なのだ。前日から村を監視していたり、参加者の配置位置に印をつけるなど裏方を行っていた。数箇所に残した目印に管理者が討伐隊を転送することになっている。

シーと呼ばれた女は、超能力スキルを取得した際に透視のスキルアーツを得ていた。暗さや障害物を無視して、ある程度の距離を見通せるのだ。

三人の活躍で、村の状況がわかった。今は午後九時前。眠るには早くプレイヤーキラーたちは起きている。彼らの半分は宿に集まり、

十人が小屋にいる。残りはばらばらに散らばっている。

その小屋にいる人の報告をしたシーの顔が若干赤い。それに目ざとく気づいたタツグが声をかける。

「どうした？」

「なんでもない……わけでもないんだけど、異変があるとかこちらに気づいたとかじゃないのよ」

「うん？」

「あー……このゲームってセックスできたっけ？」

「は？」

皆の動きが止まった。

「だからっ」

「いや言わなくていい。でもそんなことできたか？ 聞いたことないな」

皆も同じくそう思ったことは聞いたことはないようだ。

「たぶんNPCとしてるみたい。娼婦なんて職業はない……よねえ？」

「ないはずだぞ？ そんなのがいればそれなりに話題にはなるはずだ。」

なんでできてるのかわからないが、これからすることに問題となるわけじゃないな。むしろこの最中なら油断しきってるだろ」

「そんな中、突撃したらこっちが驚いて動きが止まりそうなんだけど」

未経験なヴィオでも本や映像で見たことはある。だがいきなりそんな場面に出くわせば、驚いてしまうだろう。

「丸腰だろうから、そうなくてもこっちが有利だ」

寝静まったところを奇襲するつもりなので、そういったことはないはずだ。

「ほかに変わったところはないか？」

「ないよ」

ラスツイスの確認にシーは頷く。

「一度帰る。レパース、管理者に帰還の伝言を頼む」

優れたテレパシーの使い手レパースにラスツイスは頼む。レパースは頷いてスキルアーツを使う。その二十秒後、その場にいた全員はヴァサリアントへと飛ばされる。

庁舎跡に戻ってきたラスツイスは再び台座に上がり、これからの行動内容を話していく。

ラウンが二十以上つけた印のうち五つを目印として転送陣を作る。その印は等間隔で村を囲むようにつけられている。転送陣一つを十組のパーティーが使い、飛んだ先から約十メートル間隔で離れていて五角形の包囲陣を作る。そしてテレパシーで合図が送られると篝火を焚き、迎撃準備をすませる。

突撃組は迎撃組が移動し終わってから動く。五つの転送陣を使い、静かに村へと移動。できるだけ目立たないように動いて、戦えるプレイヤーキラーの数を減らしていく。

強制参加組は二手に別れる。指示を出すラスツイスを補佐する側とプレイヤーキラーの親玉を目指す側だ。ヴィオは親玉を目指す側に参加する。ヴィオたちの動きに注意すれば確実ではないが、親玉を目指すことができる。そのためにある程度時間が経てば、目立つように光輝く槍を掲げて動く者がいる。

作戦始動時刻は0時だと告げ、作戦の説明は終わる。

「迎撃組、右端一列から転送陣前へと移動っ」

五組の迎撃組が移動し終わるのを確認し、ラスツイスは口を開く。

「飛んだ先では静かに待機だ。転送陣に入れ！」

五組の迎撃組の姿が消えていった。

「次の列の五組っ転送陣前へ！」

飛んだ先では、待機している者たちの右斜め十メートルに移動っ。転送陣に入れ！」

ラスツイスは次々と指示を出していき、迎撃組全員を送り出した。「突撃組右端五組、転送陣前へ！」

移動しだい村へと静かに移動。ただし村にはまだ入らず、木々の

陰に隠れ合図を待つように！

転送陣へ！」

迎撃組と同じように次々と送り出す。

人でいっぱいだった庁舎跡には強制参加組と管理者たちが残った。

「私たちも行きます」

強制参加組を代表しラスツイスが管理者と話す。

「成功を祈っています。旅立ちを守護する女神の加護があらんことを」

管理者はこの世界を代表する女神の一人に成功を祈る。気休めではないが、それは管理者もわかっている。それでもなにかに祈らずにはいられず、現実の神よりもこの世界の神に祈ったほうが効果的ではないかと思ったのだ。

管理者に見送られ強制参加組も現地へと飛ぶ。残った管理者は成功の報をここで待つのみだ。それを信じて、自分たちにできることをやるため動く。

村を包囲する陣は完成し、いつでも作戦を始動できる状態だ。時間もそろそろ0時になる。

しかしプレイヤーキラーはまだ起きていた。夜型の人間が多いのか、それとも村に集中する討伐隊の視線と敵意を感じ取っているのか。こちらのことには気づかれたというわけではないだろう。村に目立った動きはない。このまま作戦を始めても奇襲の効果は薄い。

もう少し待つかとラスツイスは考え、それをすぐに否定した。これ以上は討伐隊の緊張と集中力が持たないからだ。

「レパース、作戦を始める。突撃組に合図を送ってくれ。静かにせよともいいと追加してくれるか」

最後の指示は屋内にいるプレイヤーキラーを引きずりだすためだ。奇襲が望めないなら静かにする意味はない。逆に音を立て関心をひくことにした。

「わかりました」

ザツザという足音が森に響きだす。

「君たちも動いてくれ」

強制参加組突撃隊にも指示を出す。

とうとうこのときがやってきたとヴィオは緊張感から身を硬くする。雰囲気を察したタツグが声をかける

「護衛に強い人たちが集まっているんだ。そんなに緊張することもないぞ」

「わかつてはいるんだけど、やっぱりね」

「アイオールにも頼まれているから、しっかりと守るさ。俺たちを信じろっ」

皆が大丈夫だと力強い視線を送ってくる。その頼もしさにヴィオの緊張はほぐれていった。ヴィオがよろしくお願いしますと頭を下げ、それを合図に一行は動き出した。

プレイヤーキラーが根城にしている小さな村は、十分前の静けさが嘘のように騒ぎで満ちている。ラスツイスの狙い通り、なにごとかと建物から出てくる人間たち。あちこちから上がる、雄叫びと怒声と狂笑と悲鳴。討伐隊の攻勢に逃げ出す者がいる。逃げるのは難しいと考え抵抗する者がいる。人が殺せると狂喜する者がいる。

突撃組があちこちで武器を振るっている。ヴィオたちは極力戦わず親玉を探す。道案内兼連絡統括役のネズミを肩に乗せたヴィオの案内で一直線に宿へと向かった。

泡村にある似た造りの宿に入ると、宿内にいたネズミがヴィオの肩にそばにやってきた。

「宿にまだ残っている人がいるそうです。奥から二番目とカウンタ―手前の部屋！」

「待て！ いかせはしない！」

ヴィオが言った部屋の一つ、カウンター手前の部屋から覚悟を決めた顔つきとなったコサブロウが出てくる。すでに刀は抜かれていて、足止めしようとしている。

コサブロウの姿を見て、ヴィオは思わず叫ぶ。

「なんでこんな場所にいるんだ！ あんたはプレイヤーキラーとか
しない人なはずだ！」

「知ってる奴か？」

タツグが問う。

「助けられたことがあるんだ」

「……あんたらは先に行け。俺とヴィオはこいつを足止めする」

事情があるのだと今のやりとりでわかった護衛たちは、頷いて奥
の部屋へと走る。

人数が違いすぎるのだ、コサブロウだけでは止められるものでは
ない。追いかけてよとするコサブロウをタツグが止める。

「うちの仲間を助けてもらったことには礼を言う。けれどもここか
ら動かすつもりはない。しばらく俺たちの相手をしてもらおうか」

「悠長に相手をするつもりは……ない！」

そう言っただけでコサブロウは刀を突き出した。

「あんたもほかの奴らと同じか！？」

タツグは愛用の斧で受け止めた。刀を振り払い、斧を横に振るう。

「同じにするな！ 動けなくなってもらうだけだ！」

「殺しをしないならなんでこんな場所にいるんだ！？ ここはプレ
イヤーキラーの集まりだろっ」

「受けた恩がある！ それを返さずにいることは義にもとる」

「あんたらのやっтерることがすでに義から大幅にずれてるだろ！」
ヴィオの言葉に若干表情を歪めた。

「そんなことはわかってる！ 俺だって何度も諫めた。だが止め
切れなかったっ」

「だから手加減してわざと逃がしていたと言っつもりなのか！？」

「それしかできなかったっ」

言葉を吐きながらもタツグと戦う手を止めはしない。

コサブロウは半ば意地になっていた。憧れの侍とは遠く離れてい
く現状に悩み、唯一残った恩返しという共通点だけは手放しはしな
いと考えた。憧れつつも現実ではできない生き方をこちらではでき

る。だからこそ余計にしがみつく。

この世界がまだ正常であったとき、コサブロウはエネミーの大群に殺されかけこのギルド長に助けられた。そのとき仰ぐべき主を得たと思ひ込み、その主のために動けると喜んだのだ。その主が道を外れ、諫言しても聞き入られず、できたことは被害を減らすこと。主を見放すことはできず、ずるずると時が流れ今に至る。ここで少しでも足止めできればとでてきたが、逆に足止めを喰らう始末。

ことごとく憧れていた生き方と合うことのないこれまでに自嘲の笑みさえ浮かぶ。それでもこの二人だけは行かせはしまいと刀を振るっている。この二人がいけば主にかかる負担はさらに増すだろうから。

コサブロウは強い。タツグだけでは勝てはしないだろう。ヴィオが補助魔法のスキルアーツで、コサブロウの動きを阻害し続けなければタツグは倒され、ヴィオもあつという間に気絶させられる。ゆえにコサブロウが本気になれば、二人も本気で応じざるを得ない。タツグとコサブロウはどんどん傷を負っていく。

いつきに勝負を決めようと考えたのかコサブロウはスキルアーツを使う。スキルアーツにスキルアーツをぶつけ相殺しようと、タツグも使う。

「ストロングスラッシュ！」

「スイングインパクト！」

コサブロウが使ったのは刃物スキルのスキルアーツ、パワーアラッシュの上位版。かたやタツグが使ったのはいつか使ったクラスアーツ。

二つのアーツがぶつかるつといった瞬間、コサブロウが囁いた。

「スキルアーツキャンセル」

これによりコサブロウの攻撃はただの斬撃となる。タツグの攻撃はコサブロウの刀を押し切って、コサブロウ自身に命中した。襲い掛かる痛みに覚悟ができていたのか、悲鳴一つ上げず倒れていく。今までに蓄積したダメージもあつてタツグの攻撃は致死ダメージと

なつた。

なぜという二人の表情を読み、答える。

「生き恥を晒してきたからな。犠牲者にも命を持って償う必要がある。こんな男の命なんぞなんの慰めにもならないだろうが。」

覚悟はしてあった。大人数でこられてはここはもう駄目だ。ならば最後に俺ができるのはこれくらいしか思い浮かばなかった。自己満足だという自覚もある。笑いたければ笑えばいい。

虫がいい思うだろうが、愚かな男の頼みを一つ聞いてくれまいか。俺が出てきた部屋にチカがいる。あの子はことはなんの関係もない。あの子の世話を頼みたい」

最後の最後で思ったように振舞えたからか満足気な笑みさえ浮かべ、コサブロウは消えていく。

コサブロウが消えきる前に奥から男が息を弾ませ出てきた。数秒もない時間でタッグと男の視線が合う。そのまま言葉を交わすことなくコサブロウは消えて言った。

「コサブロウもやられたのか！ 役立たずなりに時間稼ぎくらいはできればいいものを。こんなにも役に立たないならあの時見捨てるなり、さっさと無駄飯喰らいのガキを売り払うなりしてればよかつたぜっ」

「なっ!？」

コサブロウは正しいことをしていたわけではない、それでも義に殉じたいという思いは本物だった。それを男の言葉で怪我された気がしたヴィオは、思わず剣を持って男へと向かった。

「うっとおしいんだよ!」

レベル差があるせいなのかヴィオは男の一振りで全体力の三分の一を失い、地面に倒れる。

「雑魚が粹がるんじゃねえよ！ ちっもうきやがった、あいつらも役に立たねえ!」

男の背後で奥の部屋に行ったプレイヤーたちの足音がする。

男は宿の玄関へと走る。男を追うプレイヤーたちにヴィオはあれ

が親玉かと聞いた。プレイヤーたちは足を止めず、すれ違いざまに頷いた。

グイオは立ち上がり、タッグと共に親玉を追って宿を出た。

村の戦闘は早々と決着がつこうとしていた。人数差が六倍近く、村にきた人数差も二倍。油断しなければ討伐隊に負けはない。ラスツイスの言葉を守り、一対一を避けたからか被害は少なく、死者はコサブロウ以外にいない。

親玉もプレイヤーたちに囲まれ逃げ場がないように見える。

「大人しく降伏しろ！ 痛い目は見たくないだろう！」

「……さすがにこれはつんだか。あーあ楽しかったゲームもこれで終わりか」

囲まれているというのに親玉は余裕を崩さない。殺されることはないとわかっているからか、隠し玉があるのか。

「ゲームだと!？」

「なにを驚いてんの？ もともとゲームだろこの世界？」

「たしかにそうかもしれないが、人の命を奪ってきたんだぞ！ それをゲームの一言で済ませるつもりか!？」

「俺がやったわけじゃないし」

「こいつらのトップだろうお前は！」

「俺がやったのは、情報を制限し、少し背を押したただけだ。あとはこいつらが勝手に暴走しただけだ」

閉じ込められ不安がっていたギルドメンバーに、いつもどおり過ごしていれば問題ないと言った。通達を聞きにいったリーダーの言うことだから少しは信憑性があると従った。そして不安な気持ちを、他人を傷つけるという暗い愉悦で晴らしていき、歪んでいったのだ。たしかにきっかけを与えただけだ。そして男は歪んでいくプレイヤーを見て楽しんでいただけだ。男自体は閉じ込められてからはプレイヤーを殺していない。罪があるとすれば、コサブロウの諫言を受け入れずギルドメンバーの行動を止めなかったことか。

「そんな言い訳が通じるとでも!？」

「こんな非常事態だ。多少の混乱はつきものだろ。それで通るんじゃないかねえの」

管理者の権限や能力が制限されている今、証拠の収集が難しくそれで通る可能性すらある。

「お喋りがすぎたな。さっさと逃げるか。」

スキルアーツ・テレポーターション」

余裕だったのは転移できるからだ。始めから少し遊んで討伐隊の悔しがる顔を見ながら逃げるつもりだったのだ。特殊魔法のスキルアーツ・テレポートほど汎用性はないが、この場から逃げるくらいならば簡単にできる。

超能力スキルアーツ・テレポーターションはテレポートと違い、世界を越えることはできないが、一度行った場所ならばフィールド、ダンジョン、街の中どこにでも行くことができる。

この場にいる多くの者が逃げられると考えた。その中で幾人かが反応し攻撃を放つ。復讐に燃えていた者たちだ。一番最初に届いたのは矢だ。囲んでいるプレイヤーたちの間を抜け、スキルアーツを発動しかけた男の喉に当たる。

狩人のクラスアーツにチャージショットというものがある。弦に矢をつがえ、引いたままにしていると時間が経つほどに威力が上昇していく。このクラスアーツを村に入ったときから親玉を探しつつ発動させていた。上昇する威力に上限はある。それでもこの一撃は男の体力を削りきる威力を持っていた。

男が矢の威力に押され背後に倒れる。痛みによってスキルアーツ発動は中断された。死ななかつたのは死なずの紅玉のおかげだ。痛み悲鳴を上げる男に追い討ちをかけるように槍が飛ぶ。この槍も逃げ出そうとした男に反応したプレイヤーが投げたものだ。もとは命中しなかつただろうその槍は、男が倒れこんだことで右胸に命中した。それとも倒れこむことを計算にいれ、止めとなるように放つたのだろうか。

槍を投げたのはヴィオたちが助けた男だった。

「嫌だあつ死にたくない！」

男が悲鳴を上げながら消えていく。プレイヤーに死を運ぶ原因となった男の身勝手な言葉に、同情できるものはいなかった。

親玉は死に、ギルドメンバーも全員捕まったことで、今回の騒動はあらかた終わりとなる。

村からは徐々に戦いの音は消えていった。

ヴィオとタツグは宿に戻る。そこにいるはずのチカを連れ出すためだ。

無事にみつけることはできた。だが二人は怯えられた。チカは扉の隙間からヴィオたちとコサブロウが戦う姿を見ていたのだ。チカにとつてはコサブロウは親切なおじさん。そのおじさんと戦っていた二人が怖い。コサブロウが消えていくところは物陰で見えなかった。見えていたとしても死んだとはわからない。チカは遊ぶ前にルール説明を受けていない。ごく短時間のみ遊ぶ予定だったので、詳しい説明は受けなかったのだ。コサブロウも危険なことからチカを遠ざけていた。

九才の子供に死という概念を理解させるのも難しい。ヴィオとタツグはコサブロウとはもう会えないと事情をぼかして説明した。あのことはコサブロウに任されたとも。

姿は見えずとも声はなんとか聞こえていたので、ヴィオたちの言葉が嘘ではないとわかったチカは二人についていくことにした。それでも怖いという感情がなくなったわけではない。だがここで二人を拒否して一人で生きていけるかと考え、無理だと判断を下せるくらいに理性は持ち合わせていた。

怖がるチカにヴィオたちは、自分たちに慣れなくとも女性陣とならば安心して暮らしていけると考える。リオンあたりは構い倒しそ
うだ。

ヴィオたちがチカを探しているとき、ほかのプレイヤーは村中を探索して回っていた。溜め込まれたアイテムを強奪とかではなく、

隠れているプレイヤーキラーがいないか確かめている。村を囲む包囲陣もいまだ解除されていない。全員みつけたとラスツイスが報告を受けるまで解除されないのだ。

そうしているうちに連絡を受けた管理者たちがプレイヤーキラーを受け取りにやってきた。次々と隔離施設に飛ばされ、最後の一人が飛ばされる頃には、隠れているプレイヤーキラーはいないという報告もきた。

これでラスツイスは作戦終了の報をテレパシーで出してもらった。村とその周囲から歓声上がる。怪我人は出たが無事成功した作戦を喜ぶ声だ。長く続く拍手。

ここで管理者側からせめての労わりとして、ヴァサリアントの庁舎跡で慰労会が開かれることが知らされた。討伐隊は緊張感から開放され、人を傷つけたということを一時的に忘れ、それを楽しみにしつつ転送陣に入っていく。

ヴィオたちも転送陣に入ろうとしたとき、管理者に呼び止められた。そのまま転送陣から少し離れた場所へと連れて行かれる。

「なんでですか？」

「その子のことなんだけど」

「この子がどうかしました？」

まさか関係ないチカまで隔離施設に送る気かとヴィオとタッグはチカを後ろに隠す。

「警戒しなくてもいいよ。何もしない。」

その子の名前ってチカっていうんじゃないかって思って。それを聞きたいんだ」

「この子のこと知っているのか？」

「斉藤さんの娘さんじゃないかい？ お父さんの名前は斉藤隆って言わない？」

チカはその名前に頷いた。

「ああ、やっぱり！ 心配してたんだよ。たしか斉藤さんの娘さんが花火を見るためこっちに来てたようになって、話題になってたん

だ。

君達が保護してくれてたのかい？」

チカの無事な姿に安堵の溜息を吐いている。

「俺たちじゃない。コサブロウというこのギルドメンバーに保護されていた」

「この！？ それにいたってことは」

タッグが過去形で話したことで管理者は簡単な事情を察する。コサブロウというプレイヤーがプレイヤーキラーと毛色が違う、そしてもういない、それくらいは推測できた。

「チカちゃんは運が良かったんだな」

「かもしれないな。」

それでこの子はどうするんだ？ あんたらが引き取るか？ コサブロウとの約束はあるが、うちにいるよりはそっちのほうが安全そうではあるから拒むつもりはない」

「そうしたいんだけどね。うちらにこの子を世話する余裕がないんだよ。ほんと忙しくて。大人の中に子供一人ほったらかしになるのは目に見えてる。そんなのはこの子にとっていい状態とは言えないだろう？」

そんな状態にするよりは、そちらで預かってもらうほうが正直助かる。どうだろう、頼まれてくれないか？」

「もとからそのつもりだったから、こちらとしては問題ないさ」

「ありがとう。時々チカちゃんのこと連絡を取りたいから、どこを拠点にしているのか、もしくはギルドに入っているならギルド名を教えてくださいませんか？」

「拠点は泡村、ギルド名はブラーゼフロイント」

「川藤のところの！」

「川藤？」

「あ！？ ごめん聞かなかったことにしてくれ」

タッグは川藤が誰だか予想がついた。自分のギルドに関係ある管理者はバフしかないのだ。

頼みどおりヴィオたちは聞かなかったことにして話を進める。

「チカちゃんが使っている体は特製でね、体力や技力などのステータスが存在しない。だから痛みは感じてもし死ぬってことはないんだ。そのかわり基本スキル以外は使えない。NPCと同じだね」

「危ないところには連れ出さないほうがいいな」

「まあね。痛覚はあるわけだし」

このあと管理者はよろしく頼むと頭を下げ、去っていった。

三人も転送陣へと向かう。チカが眠そうなので、タッグが抱き上げている。時刻にして一時過ぎ。子供は眠たくて当然だ。実際、騒動が起きる前まで寝ていたのだ。そこをコサブロウに起こされ、倉庫に隠された。騒がしい雰囲気眠気がなくなっていたが、もう一度襲ってきた眠気に勝てずタッグの腕の中で眠ってしまった。

庁舎跡には管理者たちが準備していた料理と飲み物が立食式で置かれている。先に到着した者は飲み物をもらい、音頭をいまかいまかと待っていた。もちろんラスツイスの音頭だ。

皆の期待に背を押されラスツイスは再び台座へと上がる。その手にもコップがあった。ラスツイスの姿が見えると庁舎跡周辺はざわめきが消え静かになる。

「仕事はもう終わったと思っていたが、最後にこんな大仕事待ち受けているとは思っていなかった。

皆と無事この場で再会できたことを嬉しく思う。作戦成功も嬉しいが、そちらのほうが嬉しい。

これでこの世界はさらに平和になることだろう。それは私たちがやったことの結果だ。誇っていい。

皆、待ちきれないだろう？ だから短くすませよう。

ではっ今夜の健闘と無事を祝って乾杯っ！」

ラスツイスがコップを掲げ、皆も乾杯と返し同じようにコップを掲げた。

宴は賑やかに進む。アルコールはないはずだが、羽目を外す者が多い。それだけ作戦成功が嬉しいのだろう。緊張したことの反動も

あるのか。

参加者たちの間を回っていたラスツイスがヴィオたちのところにもやってきた。

「お疲れ様〜」

雰囲気があまりに違いヴィオは一瞬のみ誰だと思っってしまった。

ヴィオが驚いたように、事情を知らない者は誰もが驚いた。そのたびにラスツイスは説明していく。驚かれ慣れているのだろう、またかという顔すらしなかった。

「私はきちんと公私をつける性質なのよ。それはこっちにきても変わらなくてね〜」

「えらくはつきり分かれてますね」

「きちつとするときは、それなりにしたほうがいって意識してたら癖になってね」

「そんなものですか」

「そんなものよ〜」

ところでその寝ている子は？ 森でわかれたときにはいなかったよね」

ちよいちよいとペンチに寝かされているチ力を指差す。あどけない寝顔を覗き込み微笑みを浮かべた。

「ちよつとした事情があつて預かることになった」

「タツグさんの隠し子とか？」

「なんでやねん」

軽く裏手で突っ込むタツグ。とぼけたことを言ったのは、これ以上事情に触れないというポーズなのだろう。

「今回は本当にお疲れ様でした。」

ヴィオが動物を使って情報を集めてくれたおかげで楽になったわ「そこまで役に立ったとは思えないんですけど。少しでも力になれたのなら嬉しいです」

「あなた一人のおかげというわけではないけど、あなたも作戦を成功へと導いた一人よ。いてくれて助かったわ」

そう言ってもらえヴィオは少し誇らしい気持ちになった。

「あなたたちと再び楽しく競えることを楽しみにしているわ。またね。」

ひらりと手を振りラスツイスは、ほかの参加者への挨拶のため去っていった。

「言ってたように楽しく競い合いたいですね、今回みたいに荒事めいたことじゃなくて」

「そうだな。そんな日が早く来てほしいよ」

宴は明け方まで続いた。それにヴィオたちは参加せず、ヴァサリアントに宿をとり、そこで戦いによる体力的精神的疲労をとる。

疲れていたということもあるが、いつまでもチカを屋外で寝かせるわけにはいかなかったからだ。

明け方まで参加していたプレイヤーの中にはその場でダウンしたものもいた。時期的には九月の終わり。外で寝てもぎりぎり問題ない。まあ寒くなって外で寝ても病気にはならないが。せいぜい少し熱が出たように感じるだけだ。

夜が明け二人は寝過ぎすが、とつくに起きたチカがごそごそと動いていた音で目が覚めたのだった。

お腹が空いているだろうチカと一緒に朝食を食べ、三人は泡村へと帰っていった。

力を求めて

チカを連れて泡村へと戻ったヴィオとタッグは、待っていた仲間たちにチカの事情を大雑把に説明し、預かることになったと告げた。予想通りリオンが可愛い可愛いと連呼し、チカを抱きしめていた。ほかのメンバーも珍しそうにチカを見て、預かることに不満はなさそうだった。これならばチカが一人になることもないだろう。ヴィオとタッグはほどほどにチカと接していくつもりだ。連れてきた責任があるので丸投げするつもりはないが、チカはすぐには二人に馴染めないだろうから、積極的に接するのもしどうかと考えているのだ。

「二人ともお疲れ様」

チカに集まるメンバーから少し離れたところに立つ二人にアイオル近づき話しかけた。

「すまん、ギルド長に相談なく勝手に預かると決めて」

「かまわないよ。タッグも考えて決めたことだろう？ それなら大丈夫だろうさ」

「俺たちあの子としばらく仲良くできないだろうからヴィオが言う」

「さっき聞いた話にはそんな話なかったけど、理由あるのかい？」

「チカを保護していた人を俺たちが殺したんだよ。それをあの子は知ってる。だから俺たちには懐きにくいと思うよ」

本当のことかとアイオルは視線をタッグに向ける。タッグは視線の意味をきちんと把握し、頷いた。

詳しいことを知りたがったアイオルに、場所を移してヴィオたちは今回あったことを話していった。

「そんなことをしたギルド長もいるのか」

暴走へと仲間を誘導した男の話はアイオルにはきついものだったようだ。同じリーダーの位置にいる者として、自分も知らずにそうなるかもしれないと考えてしまった。

場の雰囲気が出たとき、そこにルーがやってきた。

「三人でなに話してるの？」

「今回あったことの詳細をな。嬢ちゃんには話しておいたほうがいいだろうって思ったのさ」

「私も聞いてみようかな」

「止めておいたほうがいい」

アイオールが止めた。

「あんまり気分のいい話じゃない」

「アイオールがそう言うんなら止めとこうか」

あつさりと話に興味をなくした。もともと聞く気もなく言ってみただけだったのだろう。

「そうそう！ 約束してた料理だけだね、明日まで待ってくれない？」

「俺は別にかわないよ。ヴィオは？」

「俺も文句はないっす」

「ありがとね。材料が足りなくてさ、買いにいける材料でもないし、今から狩りに行ってくるんだよ」

「俺も行こうか？」

「タッグたちは帰ってきたばかりで疲れてるでしょ。無理しないでいいよ。もうほかの人に頼んであるから」

ルーはそう言って、昼食を作るため離れていった。

昼食後、ルーは材料集めのため泡村を出ていった。ヴィオとタッグはなにをやるでもなく、討伐戦の肉体的精神的疲れをとるため休んで過ごす。アイオールが二人に近づかないよう仲間に言っておいたので休息は邪魔されることはなかった。

次の日、約束通りルーは無事に帰還したお祝いとして、ヴィオとタッグの好きな料理とご馳走を作りあげた。気持ちのこもったそれらは人間の殺意あふれた戦場で冷えた心を温める料理となった。二人にとって美味しいという以上のものとなった。偽体に涙を流す機能があれば、流していたかもしれない。

神妙な様子で食べる二人に、仲間たちは首を傾げる。あの戦場を知らない者にとつては、二人の心情を理解できるはずもない。アイオールが二人のために作られた料理が美味しいから味わっているのよ、ととりなしそれに納得できかねたが触れることなく宴会を楽しんでいく。

その日から二日もすれば、表面上はそんな様子もなくなり元の二人に戻っていった。その様子に仲間たちは安心したように、いつもどおり接していく。

「コルオルジオ氷窟つてどこまであとどれくらい？」

「このまま道にそってまっすぐ二時間、三本松を目印に右に曲がってさらに二時間くらい歩くと到着だね」

ヴィオとアイオールが良く晴れた空の下、二人で道を歩いている。二人以外に誰も付き添いはいない。

ヴィオのレベル上げのため、コルオルジオ氷窟という向かっている最中だ。ヴィオはプレイヤーキラーとの戦いで実力不足を痛感した。また似たようなことがないともかぎらないと考えたヴィオは自衛くらいできるように強くなりたいとタッグに相談した。それならばコルオルジオ氷窟ならばどうだと教えられ、そこに行くことにした。だがヴィオは場所を知らない。場所を聞こうとするヴィオにタッグはアイオールを連れて行くとアドバイスした。アイオールならば場所を知っているし、ヴィオがピンチに陥ったとしても簡単に助けることができる。なによりヴィオと一緒に行ってギルドから解放されることで、気晴らしになるだろうと考えたのだ。また少しずつ疲れが溜まっていることをタッグは見抜いていた。

ヴィオはアドバイスを従い、アイオールに同行頼む。二人の間にはレベル差があり、ヴィオのためにならないのではと思ったが、タッグからのアドバイスだと知るとなにか考えあつてのことだろうと頷いた。

ついてきそうなりオンやデルカは、チカと遊ぶことに夢中になっ

ていたり別件でついていけなかった。

移動は特殊魔法のレポートでも行けたが、コルオルジオ氷窟までの道を覚えるため使わず歩きとなった。そのため行き帰りに丸一日かかる行程となっている。

「こうして歩いて目的地に向かうのも、たまにはいいね」

口調を立瀬都のものへ戻している。

「俺はいつも歩きだから、その気持ちはわからないな」

「私はレポートを覚えてからは、初めていくところ以外は大概レポートを使うからね、こうやって風景を眺めながら向かうのは久しぶりじゃないかな」

季節は秋だ。木の葉が紅くなり始め、見ごたえのある風景が広がっている。もう少し寒くなると、もっと紅く染まり、地面にも紅の絨毯が広がり見事な風景となるだろう。

「こうして見ていると、本物にも見えてくるよね」

「それはわかる。この風景を作り上げた人たちの努力はすごいよ」

「そうだね。もう少ししたら皆で紅葉狩りにでも行こうか？ 泡村近くでも行けるだろうし、チカちゃんもお出かけは喜ぶんじゃないかな」

「いいね。ほかの皆の気晴らしにもなるだろうし」

早めの観光気分を味わいながら、二人はコルオルジオ氷窟を目指す。

やがて山道に入り、岩肌がむき出しの崖に到着した。崖にはぽっかりと穴が開いている。穴は人が三人は並んで歩けるくらいの広さ。洞窟の奥からは冷たい空気が出ている。ここが目的地だ。

「ここがコルオルジオ氷窟」

「そのとおり。中難度の洞窟で、五階層からなる洞窟。最奥にはダンジョンボス氷狐ヒオがいる。まあ、今回はそこまで行く気はないけどね」

「氷狐ヒオって強い？」

「一対一で戦うのなら最低でもレベル30はほしいね。私はレベル

34のとき、距離をとりながら攻撃魔法を使い続けてぎりぎり勝ったよ」

「今はレベル50に近いんだっけ。余裕で勝てるっばいね」

「接近戦しようと思わなければ負けはないかな。」

いつまでも話しても仕方ないから入ろうか」

そうだね、とヴィオは頷いてコートを羽織り洞窟に足を踏み入れる。内部は、秋を向かえ気温が下がってきた外よりも低い。気温は真冬並で、コートがなければ寒さに気をとられ満足に戦えやしない。「一階ならヴィオ一人でも十分戦える。危なくなったら、助けるから好きにやってみるといいよ」

ヴィオは頷き、エネミーを探し歩き出す。どんなエネミーがいるか、どのような攻撃をしてくるか、弱点はなにかといった情報は聞いていない。ステータスを上げるためではなく、戦いの判断も鍛えるために聞かなかったのだ。

二つほど小部屋を通り抜け、三つ目の小部屋に入ったときヴィオはこれまでになかったものを発見した。直径四十センチほどの氷の塊にも見えるが、単なるオブジェクトならばもっとたくさんころがってるはずだ。おそらくこれはエネミーだと判断し、剣を抜いた。いつでも戦えるように剣を構え近づく。剣が届く距離までくると、ヴィオは剣で軽く氷の塊を叩いた。キンキンと音が部屋に響き、氷の塊は動きを見せた。

「先手必勝！ スキルアーツ・パワーアタック！」

攻撃態勢の整っていないエネミーに、ヴィオは剣を振り下ろす。

スキルアーツで大ダメージを狙うというおまけつきで。

ガキインッと大ダメージを与えたとは考えにくい音が響いた。硬いものを叩いた衝撃がヴィオの手に伝わる。

氷の塊からはダメージを与えた際に出る朱色の光が漏れ出たが、大きなものではなかった。

「物理防御が高いのかこいつ」

今度はこっちの番だと、重そうな体からは予想できないジャンプ

力をみせつけヴィオの頭上から襲い掛かった。その動きにヴィオは驚き、避けることができなかった。まともに攻撃をくらったことで大ダメージを受ける。いつきに全体力の三分の一を持っていかれた。「そうなんでも喰らってられないな。そっこうで片付ける！」

スキルアーツ・ガードブレイク」

武器に微弱な光をまわせ、相手の防御力を下げる補助魔法を使う。そして剣を振りぬく。暗い光が氷の塊にまわりついた。さきほどよりも手ごたえがあり、朱色の光も大きく迸る。

アイススライムの反撃も落ち着いて相手の動きを見れば、避けることができる。最初に喰らったダメージ以外はかすって少し喰らったくらいだ。半分以上の体力を残し、戦闘を終えることができた。

この戦闘での収穫はアイテムは出ず、経験と経験値が手に入っただけだ。

「お疲れ様、回復するよ」

アイオールは治癒魔法でヴィオの傷を治していく。アイオールの実力の高さゆえに回復量も多く、満タンまで回復した。

「ありがと」

「さっきの敵はアイススライムっていうんだよ。見た目どおり氷の塊だから、硬くて物理防御が高い。弱点は炎と魔法攻撃。ヴィオがやったように防御を崩すのも手の一つだね。」

「一階はほとんどあいつばかりだよ」

「一度戦ったので、アイススライムに関する情報を喋っていく。」

「体力も回復したし、情報も得た。次に行こう！」

「次の獲物を求めてヴィオは歩き出した。」

「一階ではアイススライムしか出会わず、地下への階段をみつけた頃には慣れもあってたいしたダメージを食らわずに戦闘を終えることができるようになっていた。休憩をはさみつつも六時間戦いどおしだったのだから、慣れて当然だろう。」

「今日はこのくらいでやめておく？ 技力も残り少ないんでしょ？」
「そうする」

早く強くはなりたいが、無理しても意味はないとわかっている。無理して死んでしまつたら元も子もない。死なないために、強くなりたいのだから。

二人は洞窟外、十分ほど歩いた場所にある小屋で夜を過ごす。食事は携帯食で済ませた。二人が食べたものはアイオールが持つてきたもので、NPCが売っているものではなく、プレイヤーが作り上げたもの。効果は同じだが、味が違う。プレイヤーの作ったもののほうが美味しいのだ。美味しい分、値段も高くなるが高級とまではいかないの、アイオールはいつもこの携帯食を買つて持ち歩いている。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

アイオールが作ったわけではないが、なんとなくそう返した。

時刻にして午後九時すぎ、眠るには少し早い。暇潰しにと話し出す。

「強くなりたいてことだけど、スキルはどう取るの？」

「調教師の称号取ろうと思つてるんだ。そのために必要なスキルは聞いている。動物知識はもう持つてるから、あとは捕獲と調教と医療技術と医療知識。手持ちのスキルポイントでなんとか足りるよ。この情報に間違いがあるかもしれないから、まだ取得はしてないけどね」

「どうして調教師なの？ 強くなりたいたらもつと戦闘向きなスキルもあるのに」

「長所を伸ばそうと考えたらこうなつた。高い会話スキルのおかげで動物とかと会話できるだろ、調教師の称号手に入れたら明確な指示を出せて思つたとおりに動いてもらえて戦いやすくなるんじゃないかって思つたんだ」

「ヴィオの考えていることとしては、死角から体当たりしてもらつたり、頭上から木の実を投げてもらい気をそらすとかだ。対する相

手の隙を作ってもらおうと考えていた。

「長所を伸ばすってのはいい考えね。」

「そういえば会話スキルはどこまで伸びたの？」

「ヴィオはウィンドウを開いて確認する。会話という文字の横に264という数字が書かれている。」

「264だつてさ」

「264ということは素質は天才だったのね。300までもう少しか。300になったら植物と話せるようになるのかな、どうなるのか楽しみだわ」

「そのときがこないとどうなるのかわからないね。」

植物の声が聞こえるようになったら農業にも役立つのかもしれないなあ」

「アドバイザーとしても活躍できるということね」

世界一美味しい野菜を作る手伝いをしている自分を想像してヴィオは笑いがこみ上げてきた。

このあともとりとめのない会話を楽しみ、夜は更けていった。

一階はもう大丈夫と判断しアイオールにも確認をとったヴィオは地下一階へと進むことにした。

途中にいたアイススライムは無視できるものは無視して消耗を抑える。

地下一階も一階と変わらない風景だ。階段を下りてすぐに雪ダルマがあつた。ヴィオたちが階段を下りて床に足をつけると、それは動き出した。

ヴィオもすぐに剣を抜いて戦闘態勢に移る。

アイススライムに比べると動きの遅い雪ダルマは、一定距離にまで近づくと動きを止めて大きく息を吸い込む動作をして吸い込んだ息を吐き出した。吐き出された息には氷の粒が混じっていて、前方に広がっていった。様子見と考えるとじつとしていたヴィオが今から避けようとしても遅く、息の範囲からは逃げる事ができない。受

けたダメージは小さかった。雪ダルマの攻撃方法を知っているアイオールは、氷の息の届かない場所まで引いていたのでダメージは受けていない。

見た目からアイススライムほど硬くはないだろうと近づいて剣を振るう。思ったとおりで魔法を使わずともダメージが入る。氷の息にさえ気をつければ、そこまで強くはない敵だった。

戦闘後のアイオールの解説によると、名前はスノードール。でもプレイヤーたちはその見た目から雪ダルマと呼ぶらしい。攻撃法は氷の息と体当たり。集団で出てきていつせいに氷の息を吐いてくること以外は厄介なことはないエネミー、だとわかった。

地下一階はスノードールとアイススライムしかでないらしい。ただし集団で出てくることがあるので注意するようにと忠告を得た。

この忠告どおり、ヴィオは次の部屋でスノードール三体と戦闘になった。氷の息がくるタイミングがわかっていても、さらに範囲の広がった氷の息を避けられない。一体を相手している間に、ほかの二体の氷の息で少しずつ体力を削られていった。戦闘には勝ったが、アイオールの治癒魔法のおかげだ。

「今の戦闘で悪いところは無理したこと。不利だと思ったら一度退いて回復しないと、これから先のダンジョンだどごり押しはできないよ」

「一度退いてエネミーもダメージ回復するなんてことは？」

「回復方法を持つてるエネミーならしてるかも。ここのエネミーは回復方法は持ってないよ」

アドバイスの礼を言って、次の部屋に移動する。

次々とエネミーと戦いヴィオは経験値を溜めていく。一度、二体のアイススライムと五体のスノードールに行くわしたが、さすがにヴィオには荷が重いと判断したアイオールが手を出した。地面から広範囲にわたって飛び出た金属の槍がアイススライムとスノードールを一撃で葬り去っていく様子は圧巻だった。レベル差30の力がそこに示されていた。

洞窟に入って三時間ほどが経った頃、一度休憩しようとしてエネミーのいない部屋で床に座る。座った場所は部屋の隅で、部屋の入り口と部屋全体を見張ることができる。不意打ちされないように最低限の警戒はしているのだ。

三十分たつぷりと休憩をとった二人は再び動き出す。そして地下二階へと続く階段を見つけた。

階段からは今以上に寒い空気が漂っている。

「二階下るだけでこの寒さって最下層ってどんだけ寒いんだ？」

「おかしいな、寒いのは最下層で地下三階までは温度は変わらないはず。仕様が変わった？　だとしたら事前に連絡はあるはずだし閉じ込められてから変えたから私は知らない？　でも忙しくて仕様を変える暇なんてないと思うし」

「聞いてると、ここまで寒いはずがないってことらしいけど」

「少なくとも私が以前ここにきたときは地下三階まで温度は変わらなかったよ」

「近づかないほうがよさげ？」
「たぶんね」

危うきに近づかずということ二人は階段から離れようと背を向けた。そのとき階段から物音が聞こえた。振り返ると空耳ではなく確かに聞こえる。

二人は階段からできるだけ離れて、なにか出てくるのか見る。

出てきたのは疲れた様子のプレイヤー二人だった。

「大丈夫ですか？」

なにかあったのか聞くチャンスだとアイオールが声をかけた。

「俺たちはなんとか。だけど仲間が一人逃げ遅れたんだ！」

「なにかあったんです？」

「氷狐が三階にいたんだっ」

「氷狐ってダンジョンボスってやつだろ？　それって最下層にいるんじゃない？」

「そのはずなんだ。でもたしかに三階にいるんだよつ。いきなり出

くわして戦いはしたけど、今日はボスと戦うつもりじゃなかったから準備はしてなかった。それでボロ負けした。このままだとやられると思って逃げてきたんだが、仲間が一人逃げ遅れた」

ここでプレイヤーは、はっとアイオールを見上げる。

「一緒にきてくれないか！ まだあいつ生きてるかもしれないだっ頼む！」

もう一人と一緒に頭を下げる。

「……仕方ないわね」

必死な様子にアイオールは頼みを引き受けた。

「ありがとう！」

男たちはポーシヨンで体力を回復し、すぐに引き返す準備を整えた。

「ヴィオは……置いていくのも危険だね。私のそばですつと防御しておきな」

気を引き締めるために口調がアイオールのものへと変わる。

「下のエネミーには俺はまだ勝てない？」

「厳しいだろうね」

「わかった」

アイオールがそう判断したのならと従うことにする。ここにきたことのないヴィオが戦えると言ってもなんの説得力もない。それを自分でよくわかってる。

四人は階段を下りていく、地下一階と二階では明らかに温度が違う。男たちの案内で仲間のいるらしいところまで急ぐ。途中ででてきた、白い狼や大きな氷柱をもった小鬼はアイオールと男たちが軽く一掃した。

「この先だ」

男の一人が通路の先を指差す。そこからはさらに冷えた空気が流れてくる。

「……まだ氷狐がいるらしいな」

わずらわしそうにアイオールが言う。

「ヴィオ、まずいと思ったたらすぐに離脱するように」
「わかった」

四人は寒さの大本とも思える場所へ歩を進める。

部屋の中には、子象並みの大きさの狐がいた。黄金の毛皮ではなく少し蒼の混ざった銀の毛皮を持つ狐だ。ゆらゆらと尾を揺らし入ってきた四人を見ている。その目には明らかに知性の光が宿っていた。

四人が入ってきた入り口の斜め前方七メートルほどに倒れ伏せている男がいる。身動き一つしていない。気絶してるのだろう。

アイオールが杖を前方に突き出し、氷狐から目を離さずに男たちに話しかけた。

「ここで氷狐を見張っているからあの人を連れてここから退避しなさい」

男たちは頷いて、そろそろと動いて倒れている仲間を二人で運ぶその様子を氷狐は静かに見ているだけだ。

アイオールたちに礼を言って男たちは部屋から出て行く。

「私たちも出ないとね」

その言葉に応えるかのように氷狐は低く唸った。ヴィオの耳にはその唸りが言葉として聞こえた。

「戦う気がないのか？」

聞こえた言葉に疑問を感じて思わず氷狐に問いかけてしまう。

「なにを言ってる……あ、そうかエネミーの声も聞けるんだったか。」

さっきなんて言ったの？」

「ようやくいなくなるのか、だってさ」

『私の声が聞けるのか』

驚いたように氷狐がまた唸る。

「わかる。そういうスキルだから」

『会話できる存在は初めてだな』

「そっなの？」

「できれば翻訳してもらえると助かる」

「あ、ごめん」

戦う意思がないとわかりアイオールは杖を下ろす。下ろしても杖を握ったままなので、まだ警戒はしているのだろう。

ヴィオが間に立ち、会話が始まる。アイオールが聞きたいことは、氷狐がなぜここにいるのかということだ。

『住処を住み心地が悪く変えられ追い出されたからだ。』

この洞窟の最下層は一番温度が低く私にとって住みやすい場所だ。それを突然やってきたものが変えてしまった』

「排除はできなかったの？ あなたと何度か戦ったことあるけど、そこらの敵には負けないくらいには強いでしょ」

『あれと私は相性が悪い。力自体は私のほうが少し上だが、あれの作り変えた場のせいで私の力は抑えられあれ以下になってしまっ』

「えつとあなたの属性は水だね？」

『ああ』

「だとすると五行で考えて、相手は土属性かな」

この世界の属性法則を思い出し、相手の属性を予想する。

『おそらくそうだろう。全身が土でできた人形。大きなゴーレムだ。なにかを守っているようで最下層から動くことはない』

「なにかを守ってる？」

好奇心が疼いたヴィオ。

「私が主に育ててるのは水系統なんだよ。私にとっても相性悪いかな。もう一つは金系統だけど、特に効果あるってわけじゃないし。だから手は貸しにくいかな」

なんとなく手を貸せを言われそうで、先手を打ってみた。

土属性に効果があるのは木属性だが、アイオールはその属性の魔法を持っていない。土は金を強くする効果があるが、強くしたところでボスクラスに効果的といえるかはわからない。これまで雑魚を圧倒したのは、レベル差にものを言わせたおかげだ。

『私も一緒に行くし、礼はするが？』

「うーん」

アイオールは乗り気ではない様子だ。戦力的に厳しいと判断してのことだ。ヴィオは使い物にならないし、自身も本調子で臨めるとは思えない。同じように氷狐も本調子ではない。

「あ」

迷っていたアイオールはなにか思いついたように表情を変えた。

「本調子に戻ればゴーレムに勝てる？」

『五分五分にまでは戻せるな』

「だとするとその状態で私が加勢すれば勝率は上がるね」

「なにか考えがある？」

「今ゴーレムによって場が土属性に変わってるっていうから、それを利用して場を金属性に変えてみたらいいんじゃないかって思っていたの」

金属性は水属性を強める効果があるからやってみる価値はあるかもしれない。ゴーレムに攻撃が効きづらくとも、氷狐が力を増した状態ならばいい勝負ができるはずだ。このことを伝えると、いい考えだと氷狐から返答が返ってきた。

「ヴィオは部屋の入り口で待機ね」

「参加しろって言われても断る。ここらの敵に苦戦するよう状態で挑もうとか思えないよ」

話がまとまり二人と一匹は目的地の最下層へと移動する。最下層は寒さが和らいでいた。これもゴーレムが場の属性を変えた影響なのだろう。道中の雑魚はすべて氷狐が追い払った。威嚇すればすぐにどこかへと去っていったのだ。おかげで余暇な消耗はせずにするだ。

不完全な再会

『止まれ』

通路の途中で氷狐が二人を止める。どうしたのかと聞く二人に、ここを曲がると言って壁に入ってしまった。隠し通路だ。幻で隠され、いままで誰も気づくことがなかった。

氷狐によると以前はこの先はなにもなかったらしく、氷狐の隠れ家になっていたらしい。おそらくのちのちイベントかなにかを作る予定だったのだろう。

もつすぐだと言う氷狐の言葉にアイオールは魔法を使う準備を始める。

オーケーと目で氷狐に伝え、二人は動き出す。

部屋に入った途端、ゴーレムが動き出す前にアイオールが魔法を使う。

「スキルアーツ・フィールドチェンジ・セレクト金！」

杖の石突を地に叩きつけた。むき出しの石混じり土の床が、ところどころに金属の突起が地面から生えている石の床に変わっていく。その変化はアイオールを中心に広がり、ついには部屋全体に及んで止まった。

『力が戻ってくる、いや！ さらに溢れてくる！ これならばいける！』

場の恩恵を受けた氷狐と違い、ゴーレムは地の利を失った。そのゴーレムに氷狐が襲い掛かる。氷を使った攻撃は効果が薄いので、肉体をつかった打撃中心に攻めている。

勢いをつけた体当たり、鋭い爪での斬撃、回し蹴りのような尾での攻撃、どれもが面白いように当たっていく。しかしゴーレムも負けてはいない。近づいてきた氷狐に拳で反撃している。特殊な攻撃はないし、動きも鈍い。けれども重量のあるパンチはそれだけで威

力の高い攻撃だ。ほとんどの攻撃が氷狐に避けられる。ただでさえ命中確率の低い攻撃はアイオールの金属攻撃魔法で邪魔されている。だいたい五回殴って一回当たるといった感じだ。それでも確実に氷狐にダメージを与えているのだから、氷狐が不利なまま戦っていたら負けていたかもしれないということに納得できる。

「俺だったら一撃死かなあ」

部屋入り口から戦闘を覗いているヴィオは、自分のいる場所とは次元の違う戦闘光景にいつかあの戦いを超えることができるかと考えていた。

やがて戦いは終わる。結果は、アイオールと氷狐の勝ち。氷狐にダメージが蓄積してもアイオールが回復するのだ。一撃で沈まなければ問題ない。氷狐は防御を考えずに攻めることができた。微量ながらも自動回復をもっていたらしいゴーレムも、回復速度を上回る怒涛の攻撃に耐え切ることなど不可能だった。

「お疲れ様〜。どんどん寒くなってるな」

戦闘が終わり大丈夫だと判断したヴィオは部屋に入る。部屋は金属属性から水属性へと変わっていき、どんどん温度が下がっている。

「場の属性変化を解いたからね。ゴーレムもない今、通常の状態に戻ってるんだよ」

「元の住み心地のいい状態に戻っていく。

礼を言う。

それとこれが約束の礼だ」

二人の目の前に木の実が一つずつ浮く。

「スキルポイントの実というらしい。私には意味のないものだ。だがこれほしさに私に戦いを挑む者もいるくらいだ。それなりに重要なものなのだろう」

効果はスキルポイントが増えるというものだ。プレイヤーからすればのどから手が出るほどほしいもの。無論、ヴィオとアイオールにとっても嬉しいものだった。

「ありがとうございます！」

アイオールが笑顔で頭を下げた。ヴィオもつられるように頭を下げる。

『喜んでもらえてなによりだ』

「ゴーレムからは土属性の強化アイテムが取れるし、スキルポイントは上がるし、今回は予想以上に黒字だわ」

「よかったね。そういやゴーレムはなにを守ってたんだ？」

「まだ見てない。アイテムかなにかかな」

周囲を見渡すと部屋の奥に、それらしきものがあった。

ゴーレムが守っていたものはアイテムなどではなかった。部屋の奥には水晶柱に閉じ込められた少女がいた。意識はないようで目を閉じている。

ヴィオはなんとなく見覚えがあるような気がした。

「あ、もしかして」

近づいてよく見る。そして確信した。

「やっぱり」

「どうしたの？」

「知ってる人だ。アヤネって言ってビギナーズガーデンに初めて行ったとき会ったんだ」

「NPCじゃないのね？ イベントキャラじゃないのかって思ったんだけど」

「違う。話したとき、自分の意思で内容を選び会話を進めてた。ドンドコ亭の煮込みハンバーグが美味しかったとかNPCは言わないよ」

「たしかに言わないね。だとするとプレイヤーがなんでこんな場所でゴーレムに守られてるんだらう？」

ヴィオもそこが不思議だ。プレイヤーなんかをボスをつけてまで守る意味はあるのかと理由を考えてみるが、さっぱりわからない。

『この少女をここから連れ出してもらえないか？』

考え込んでいる二人に氷狐が提案する。この少女をこのままにしておくと、再びゴーレムのようなものがやってきかねない。平穩に

暮らしていたい氷狐としてはそれは避けたいのだ。

「それは別にかまわないんですけど。どうやって助け出せばいいのか」

『強い衝撃を与えれば崩れ去るさ。水晶のように見えて、それは結界だ』

氷狐が水晶に近づき、おもいつきり前足を叩きつけた。ガラスが割れるような音がして水晶に見えたものは砕け、欠片は全て空中に消えていった。立った状態だったアヤネは開放されたたんその場に倒れた。

「大丈夫？」

ヴィオがしゃがみ声をかけるも反応はない。軽く頬を叩いてみても反応はなく、しばらくはこのままかもしれない。

アイオールに手伝ってもらい、ヴィオはアヤネを背負う。戦闘では役立たずなのでこれくらいは役に立とうと思ったのだ。

出会った場所まで氷狐が送ってくれたおかげで敵と戦わずにすんだ。ここから先ならばヴィオというお荷物がいてもアイオールは苦戦せずに地上まで出ることができる。

『ではさらばだ』

それだけ言つて氷狐は最下層へと帰っていった。

「人間以外と言葉を交わせるってのは便利だけど、ちょっと困ったものでもあるね」

「いきなりなに？」

去っていく氷狐を見てアイオールが言い出したことに、ヴィオは首を傾げた。

「これから氷狐と戦えないよ、私は。仲間意識とまではいかないけど、言葉を交わしちゃったら攻撃しにくい。今までは戦って倒すのが当然な存在だと思ってた。でも今は経験値やアイテムのために倒すつてのは無理」

「俺もまた会ったらただ会話するだけになりそうだ」

いまだ力が届かないということもあり、ヴィオは自分と氷狐が戦

う光景を想像できない。

しばらくは戦うこともないが、戦えるようになっても行くことはないだろうなと思いつながら出口へと歩を進める。

「そついや」

何かに気づいたように声を出すヴィオ。

「なに？」

「氷狐つてNPCみたいなものなのに、意思があるように話してたな」

「そついえば……ああ見えて管理者かプレイヤーが操ってた？ だとするとこれはイベント？ でも今までエネミーとして管理者が出て来るなんてなかったし」

「NPCが進化してたりして」

「ありえない、とも言い切れないよね。閉じ込められるとか五感が増すとつてとんでもない事態になつてるわけだし」

今の事態も人工AIが関連してらしいし、と心の中で呟いた。洞窟を出るとそこには三人の男たちが待っていた。戻ってこない二人を心配していたのだ。もう一度入る余裕はないが出てくるまで待つてもう一度お礼を言うつもりだった。ヴィオがアヤネを担いでいることで、自分たちと似たような者がほかにもいたのだと勘違いしている。ヴィオたちにもアヤネの事情はわからないので、勘違いしたままで話を進めた。

「もう一度礼を言わせてくれ、ありがとう」

担ぎ出された者も意識と取り戻しており、一緒に頭を下げている。「今はたいした礼はできないが、もう一度どこかで出会ったとき必ず礼をしよう。俺の名前はタイデル。もう一人はカツツエ、意識を失っていた奴はホロワンス。ヴァサリアントを根城にしている」

「そのときは願います」

タイデルたちはもう一度頭を下げて去っていった。

二人も泡村へと帰る。行きは歩きだったが、帰りはテレポートで一瞬だ。予定では帰りも歩くつもりだったが、今はアヤネを早

く安全な場所で寝かせる必要があると考え魔法を使うことにしたのだ。ヴィオがアヤネを背負っていることにアイオールは少しだけでもやっとしたものを感じている、といった理由もある。

「スキルアーツ・テレポート・泡村」

二人の足元に白線で描かれた円が現れる。それに入ると二人は消えて、すぐに白円も消えた。

おかえりと挨拶してくるギルドメンバーへの挨拶もそこそこに二人は、アヤネを寝室へと運ぶ。

「これでよし」

アヤネをベッドに寝かせ、アイオールは布団をかけてやる。

「あとは目を覚ますのを待つだけか」

「私たちにできることなんて、それ以外にないしねえ」

ベッドそばに椅子を二つ持ってきてヴィオとアイオールは座る。

そこに皆を代表してタッグがやってくる。

「おかえり。またなにかトラブルか？」

寝ているアヤネに見て言った。

「ただいま。トラブルかどうかはわからないね」

「俺の知り合いが封じられてたっばいから連れ帰っただけだし」

「封じられた？」

首を傾げるタッグにゴーレムが守っていたことと結界に閉じ込められていたことを話す。

「誰がなんのためにそんなことをしたんだろうな」

一人のプレイヤーの自由をそれだけのことをして奪いたかったからには、それなりの理由があるんだろうが。そんなことができるのは運営側くらいか……いや現状を作り出した奴も可能なのか」

「でも自由を奪いたいなら、プレイヤーキラーみたいに隔離施設に放り込めばすむ話じゃないか？」

ヴィオの言葉にそうだなと頷く。

「なにかを知って、それをばらされたくないから行動すら封じた、

「と考えられない？」

「やろうと思えば殺すこともできたけど、そこまでやるには罪悪感があるから封じた、か。考えられなくもない。」

その方向でいくと、なにを知ったのか目覚めてみればわかる。でも話を聞くと危ないかもな」

「俺たちまで封じられる可能性があるってことか」

「まあ、嬢ちゃんの推測が正しければの話だ。なんにしるただならぬ事情はありそうだけだな」

もつと悪い状況が起こりうる可能性もある。

かといってヴィオはアヤネを放り出す気はない。仲間迷惑がかわると判断したらアヤネと一緒にギルドを出ることも覚悟しておいたほうがいい、と考えている。そうなったらアイオールやタッグが止めるだろうが。

「しかしヴィオはトラブルメイカーなのかねえ」

「俺は問題を引き起こしてなんかないよ」

「そうだな、じゃあトラブル吸引体質と言い換えたほうがいいか？行った先々でなんらかの騒動に出会ってるし」

これにはなにも言い返せないヴィオ。

「外だとこんなことなかったのに、こつちだとなんでこんなかなあ」

「オンラインゲームとの相性？」

頭に浮かんだものをとりえあず言ってみたアイオール。言った本人もゲームとの相性ってなんだろうと首を傾げている。

「ん？ 起きたか」

アヤネから視線を外していたヴィオとアイオール、その二人に視線を向けていたタッグは二人の背後にいるアヤネが目を開けたことに気づいた。

二人も振り向いて、アヤネを見る。三人の視線を受けているアヤネはぼーっと天井を見上げている。

「えっと気分とかどう？」

動きを見せないアヤネにヴィオが話しかけた。

アヤネは声のした方向を見る。アヤネの目には特にこれといった感情は浮かんでいない。

「気分は悪くないです。」

ところで聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ここがどこで、なぜ寝かされているかってこと？」

アイオールが先読みし聞く。

「それもなんですけど……私は誰なんでしょうか？」

「広くはない部屋を沈黙が支配する。」

アヤネ自身のことを問われた三人は、聞かれたことを吟味する。

それは空回りし、

「誰ってどういう意味なのか、ちょっと理解できない。あなたの現状を教えてもらえると助かるかな、こちらとしては」

アイオールはなんとかこれだけ搾り出した。

「わかっていることは一般常識くらい。それ以外は自分の名前も今までなにをしていたのかも忘れているみたいです」

「名前なら教えられるよ。君自身からアヤネだって名前を聞いたことあるから」

「あなたは私に会ったことがあるんですね」

「うん。長い時間じゃないけどね。ビギナーズガーデンってところで話したことがある程度」

「すみません。そのことも覚えてません」

「いや、謝らなくても。再会の約束は果たせたわけだし」

約束も覚えてないとアヤネは少し沈んだ様子になる。

「記憶喪失ってやつなのか、どう思うタッグ」

「詳しいことはわからん。確実なのはどうして封じられていたか知ることとは不可能だったことだな」

「そうなるとこの症状も情報規制のための人的なものだったと考えられるよね。まあ、記憶喪失にさせられる技術があればの話だけど。

催眠術かなにかな。

「こつという症状を治せるスキルとかあったっけ？」

「これはバットステータスじゃなさそうだから、スキルで治すのは無理だろ」

「それもそっか」

二人が話し合うそばで、ヴィオは少しでもアヤネの情報を得ようと、アヤネにステータスウィンドウを開いてもらっている。

ステータスウィンドウにはアヤネという名前が載っており、アヤネ自身で間違いないと証明された。だが名前以外に素性を示すものはなく、収穫は少なかった。

なにか思い出せないかというヴィオの問いにアヤネは首を横にふる。

「……だけど」

「だけど?」

「自分が記憶を失うのはおかしい、ありえない。そんな感じがなくなくなる。実際にはなってるわけなんですけど」

「記憶をとり戻すヒントになる、かも?」

言葉の意味を考えようとヴィオたちは頭を捻るも、いい考えは浮かばない。

これからの対策としては、ゆっくり休んでもらっておいおい思い出してもらおう。できるのはこれくらいだろう。できるといっか自然回復に任せるだけで、それまでブラーゼフポイントに一時加入してのんびりしてくださいということだ。管理者に引き渡すということも一つの手だが、管理者も記憶を取り戻せないだろう。ならば手を煩わせるよりは、縁もあることだし自分たちで引き取っておこうと考えたのだ。

ヴィオは記憶喪失と信じきっているが、アイオールとタッグは演技の可能性も考慮している。ここらへんは、人をまとめ導く者と個人で動くことを重視しがちな者の差だろう。そばに置くことで真偽を見抜くつもりも少しはあるのだろう。

「行くあてはないんだらう?」

アイオールが確認するように聞く。

「……はい」

「助け出したからには最後まで面倒みる責任があるし、記憶が戻るまでうちに所属するといい」

「所属？」

「私たちはブラーゼフロイントっていう小規模ギルドなのさ。私はこのギルド長」

アヤネが首を傾げたのはどういうギルドなのかと疑問に思ったから、そういうふうを受けとったアイオールはギルド名を名乗る。しかしアヤネは疑問がはれたという顔はしていない。

「ギルドってなんですか？」

この言葉に三人は驚いた。遊んでいれば大抵は耳にする言葉を知らないというのだから。

「ギルドっていうのは似たような目的を持った人や仲のいい人が集まって一つの集団をなしていることを言うんだけど。ほんとに知らない？」

ヴィオの言葉にアヤネは頷いた。

「一般常識はあると思ってたんですけど、それすらも欠けてるところがあるんですね」

「あー……ますますほっとけないわね、この子」

「放り出すなんてことしたら、どうなるか想像つかんな」

落ち込んだアヤネを見て、アイオールとタツグが思ったことを吐き出した。

「記憶が戻ったら問題なくなる、はずだよな？」

おそらく二人も頷いた。

記憶には問題はあったが、体にはなんら問題はないようでアヤネはそのまま寝続ける必要もなく歩き回ることができた。

夜、出かけていた者も帰ってきたときに皆を集めてアヤネを紹介する。封じられていたことなど事情も話し、皆にもフォローしてほしいと頼んだ。

「迷惑をおかけすることもあると思いますが、よろしく願いします」

皆の前でアヤネは頭を下げた。

「アイオールさん。記憶喪失なんてありうるんですか？」

皆が疑問に思っていることをリオンが聞いた。ゲームの中で記憶が失うなど、予想もしていなかったことなのだ。

「わからない、としか答えようがない。でも実際にアヤネは記憶を失っているようだし、いろんな要素が重なってこうなることもありうるかもね」

いろんな要素とはなにか。それは問われてもアイオールには答えようがない。皆にはそういうものだとは理解してもらえないのだ。ついでに近々秋狩りに行こうという提案もする。アヤネという新たな仲間もできたことなので、その歓迎会にもちょうどいいと反対する者もなく二日後に泡村近くの山に行くことになった。

この秋狩りは概ね問題なくすんだ。皆にとつていい気分転換となり、楽しめたことだろう。アヤネとギルドメンバーの距離も縮まったことで、歓迎会の目的も果たせた。

一時の休息

森の中でヴィオが戦っている。二体のエネミーがいて、猪と狼に近い姿をしている。ヴィオの剣は猪に向いている。

体当たりしてくる猪にヴィオは剣を振り下ろし対抗する。剣が当たってダメージを受けても気にせず、猪は突進をやめない。少しだけ両者は拮抗する。そのわずかな時間で十分な隙をみつけることができた狼が動く。勢いよく走る狼は両者に近づき、猪の首筋に喰らいついた。

そのダメージが止めとなったのだろう。ヴィオの目の前にいる猪が消えていく。

「今日はこんなものかな」

偽体に汗を流すという機能はないが、ついつい手でぬぐう仕事をしてしまったヴィオは一人森の中で呟いた。強くなるためにエネミーを倒してレベル上げをしていたのだ。

一人というのは語弊があるか。ヴィオのそばに狼がいる。額から角を生やした灰銀色の毛皮を持つ狼だ。成長途中のようで、大人のサイズではない。

「銀丸もお疲れ様」

「ウォーン！」

ヴィオが銀丸と呼んだエネミーを後頭部を撫でると、甘えるように手に頭を押し付ける。

一分ほど撫で続けて、満足しただろうと止めた。

「帰ろう」

「ウォーン！」

歩き出したヴィオの横に銀丸もついて歩く。

アヤネを助けて一ヶ月。その間に手に入れた称号によって仲間になったのが銀丸だ。

以前から予定していた調教師の称号を得ようとスキルポイントを

使っていたときに、ふと思いつきヴィオは魔物知識もとつてみた。すると予想通り、魔獣調教師の称号を得ることができた。これにより動物だけではなく、エネミーも仲間にすることができるようになったのだ。動物ならば戦闘に参加させることは難しいが、エネミーは戦闘向けでヴィオの打撃力不足を補ってくれる。

氷狐から貰ったスキルポイントの実も費やし、今まで溜めていたスキルポイントを使い切ったが、ヴィオ的にはいい使い方をしたと思っている。熟練化も魔獣調教師を選んだ。スキルレベルはどれも百を超え、今も成長している。スキルレベルが二百に達するともう一体、動物かエネミーを仲間にできるようになるだろう。

動物やエネミーを仲間にするには罠で捕らえる必要がある。捕らえた動物やエネミーには、レベルという概念はなく捕らえた者の実力によって大きさと実力を変える。主人の成長と共に仲間も成長していく。そして成長と共に信頼関係も育んでいく。捕らえた当初は信頼はゼロで命令を聞かないということが多々ある。主人に攻撃してくる場合もある。主人の実力が高いと仲間の実力もあがり、言うことを聞かない仲間に殺されるなんてことも起きたりする。

ヴィオは普通に捕らえたわけではなかった。動物たちと会話ができるので、無理に捕らえることなく、ついてきてくれるものを探したのだ。結果、始めからある程度の信頼関係を築けている。

今のヴィオはもう少してレベル三十だ。ようやく中級といった段階なので、銀丸も成長しきっていない姿になっている。それでも常に共にいて戦ってくれる銀丸はヴィオにとって心強い存在となっている。

「帰ってきた！」

二時間かけて泡村に帰りついたヴィオたちを出迎えたのはアヤネとチカだ。村の入り口で待っていたようだ。

「銀丸ー！」

チカが銀丸に駆け寄り抱きついた。チカはヴィオの帰りというよ

りも銀丸の帰りを待っていた。銀丸の存在は戦闘時の頼もしさだけではなく、チカとの交流にも役立つていた。出会った当初よりも自然に接することができるのは銀丸のおかげだ。

「おかえりなさい」

「ただいま」

アヤネもヴィオに近寄り出迎える。こちらはヴィオを待っていたようだ。

アヤネはヴィオのそばにすることが多い。少しだけでも以前の自分を知っている人のそばが、なんとなく安心できるらしい。ほかのメンバーとの仲は悪くはないが、ヴィオがふと気づくとそばにいないなんてこともある。その様子アイオールがなんともいえない表情で見ていることもある。

「ヴィオさん、銀丸と遊んできてもいい？」

「いいよ」

チカと一緒に自分を見上げてくる銀丸に、いいよと仕草で示す。フリスビーを片手に駆けていく様はどこにでもある日常的な風景だ。

「平和な風景ですね」

「だねえ」

「今回は収穫ありました？」

「レベルが上がったくらいだよ。アヤネは何か思い出した？」

「いえ、なにも」

アヤネに焦った様子はない。平和に暮らせていけているからだろう。ゲーム内から脱出できるようになるまでに、ゆっくりと思い出していけばいいと思っっているのだ。このときのアヤネはまさか一ヶ月もたたずに荒っぽい方法で思い出すことになるとは思ってもしない。

「どうしたもんかねえ」

「まあ、時間が何とかしてくれると思いますよ」

のほほんと答えるアヤネにヴィオの元から少ない焦燥感は解され、そうだねと頷く。

二人で宿に戻ると、宿前で何かしているリオンと出くわす。リオンの肩には生まれたばかりの精霊が座っている。三ヶ月ほど使い続けた弓から最近生まれたのだ。そのときのリオンの喜びようはすごかった。待ちに待った精霊が生まれたのだから無理もないが。生まれた男の子の精霊はラッツという名前がつけられ、リオンによって毎日可愛がられている。先に生まれたフィスがお姉さんぶっているところもときどき見られ、ギルドメンバーを和ませている。

「おかえりー。チカは？」

「銀丸と遊んでる」

「村の中にいる？」

「ヴィオとアヤネは頷く。」

「そっか。私も行ってこよっかな」

「夕飯までには帰ってくるようにね」

「アヤネったら少しだけお母さんみたいよ」

笑いながら言い、リオンはチカたちを探しに宿から離れていった。

「老けてるってこと？」

「違うと思うよ？ ただ言動が少しだけそれっぽかっただけじゃないかな」

アヤネからゆらりと漏れ出た雰囲気が怖くて、ヴィオはリオンのためにも否定してみた。この考えが外れているとも思っていない。ヴィオの言葉に納得し、アヤネは普段どおりに戻る。

「そうよね。こんなうら若き女の子を捕まえて失礼しちゃうっ。」

そりゃ、いつかは母になるんだろうけど、今はまだ子供でいたいな。

「ヴィオはどう？ 早く大人になりたい？」

「どうだろう。もう何年か経てば成人ってみなされるようになるし、あまりそう思ったことを考えない」

「そんなことを言っていると、あつというまに時間は過ぎてくぞ？」

今は今だけ、しっかりと生きて時間を感じ取らないと、あとで後悔しても遅い。過ぎ去った時間は取り返せないからな。先で振り返

って、なにをしていたか思い出せないなんてことになるよりも、楽しくなくとも思い出を作っていたほうがいい。

何年か先に生まれてきた先輩からの言葉だ」

宿の入り口に近くにおいて二人の会話を聞いていたタツグが声をかけてきた。

「タツグ。ただいま」

「おかえり」

「聞いてたんだ。ああいったことを聞かれるのは、ちょっと恥ずかしい」

「かもな。けど言ったことは俺の実体験も混ざってる。高校時代ぼんやり過ごして、あまり思い出がない。寂しい青春だったとは思わないが、もう少し積極的でもよかったかもなって思うこともある」
「今この状況が思い出に絶対残ることだから、寂しい青春にはなりようがないですね」

アヤネの言葉に思わず納得しヴィオとタツグは頷いた。

「たしかに忘れられない思い出にはなるな。できればさっさと脱出できて、笑って話せる思い出にしたいよ」

この願いが叶うかはわからないが、終わりはそう遠いものではない。終わりへの始まりは、誰もが想像もしないきっかけにより始まる。

一夜が過ぎ、ヴィオはグランドセオへと向けて泡村を出た。アイオールが管理者主催の定例報告に参加するためにグランドセオへと行くので、それに同行する形だ。ヴィオのほかには銀丸とアヤネとルーがいる。

ヴィオは会議には参加しない。別件でグランドセオに行く。会議に用事があるのはアイオールのみだ。アヤネもルーも別件でついでにきている。

ルーはグランドセオでしか買えない調味料を買ったためだ。アヤネはヴィオに連れて来られる形で同行している。

ヴィオの用事はアヤネにドンドコ亭の煮込みハンバーグを食べさせることだ。美味しいと言っていた料理を食べさせれば記憶が戻るきっかけになるのではと思ったのだ。人気店なので当日の食事は不可能だろう。だからアヤネをアイオールについていかせ会議に参加させているうちに、予約を取っておこうと思っっている。人気があると言っても一ヶ月先でないと無理ということはないはずだと考えている。長くても一週間の滞在で食べることができるとは思っていた。

ちなみについてくると言いそうなりオンとデルカは留守番している。リオンはチカの相手をするために残り、デルカは秘めたるコレクター魂に火が付き特産品やお土産といった特に役には立たないアイテムを集めることに夢中になっている。それらは単品では部屋の飾りくらいにしか役に立たないが、一定数集めるとコレクターの称号と二ポイントのスキルポイントを得ることができるとは。ただし十や二十集めたくらいでは称号などは得られない。目標は百五十個だ。決して楽な道ではない。デルカはそれくらいでないと面白くないと張り切っている。

三人寄れば姦しいという言葉を実感しながらヴィオは歩き続け、グランドセオに到着した。

「じゃあ、私たちは会場に行くわ。集合はウィンドウを通して知らせるから。アヤネ行こう」

「はい」

二人は会場へと歩いていく。

「私は食材屋を回るけど、ヴィオはドンドコ亭だっけ？ そのあとはどうするの？」

「あちこちぶらぶらとしてみようかと。まだここを全部回ったわけじゃないし。見て回るだけで時間潰せそうだし」

「確かに暇つぶしにはことかかないわね。じゃ、私も行くわ」

「またあとで」

ひらりと手を振ってルーも去っていく。

「ヴィオも銀丸と一緒に歩き出す。いつ来ても賑やかな都市だ。装備品を見たり、大道芸を見たりしながらドンドコ亭を目指す。」

道端で芸をしている者は無意味にやっているわけではない。スキルレベルを上げるためでもあるし、NPCやプレイヤーがおひねりを投げることもある。それに芸を認められ、栄光を掴める機会もあるのだ。ドンドコ亭のレックスも元は露店から出発したのだ。チャンスが皆無というわけではない。

ヴィオの視線の先にドンドコ亭が見えてきた。以前の定例報告のときについてきたときは閉まっていたので、今回も閉まっている可能性はあると心配していたが、杞憂だつてようど扉が開いているのが見えた。扉の横には行列もできている。その中の一人に声をかける。「すみません」

「ん？ なんだい」

「予約つて店員に声をかけるだけでいいんですか？ なにかほかにウィンドウを開くとかありますか？」

「いや、ないな。店員に声をかけるだけでいい。入り口にいけばNPCが来るだろうから、そいつに用件を言えば対応してくれる」

「ありがとうございます」

質問に答えてくれた剣士に頭を下げ、入り口に向かう。入り口で少し待つと店員がやってきた。

「なにか御用ですか？」

「予約を取りたいんですが」

「承りました。予定では……明日の午後1時にキャンセルが一つ入っています。ですが明日用に仕入れる材料は決まっています。頼みたいものが頼めない場合がありますが、いかがいたしましたでしょうか？ それと人数制限もあります」

「煮込みハンバーグって頼めますか？」

「ここに来た目的がこれなので、絶対に外せない料理だ。」

「それは大丈夫です」

「人数は二人から四人くらいなんですが、大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません」

「では明日の予約でお願いします」

「ご予約ありがとうございます。前払いとして500s頂きます。ウィンドウを開き、前払い分の金額が減っていることをご確認ください」

「言われるままウィンドウを開く。たしかに500s減っている。

「うん。減ってる」

「では予約完了といたします。明日のご来店を心よりお待ちしております
ります」

頭を下げる店員に見送られヴィオは店を出た。

「これで用事は終わりつと。キャンセルがあつてのは運がよかつた。まだ定例報告は終わらないだろうなあ。またぶらつこう。メニューで値段も確認したから、必要なお金もわかつたし買い物でもするか」

よさげな金属製の長靴があつたんだよな、とここに来るまでにみつけた防具をもう一度見るためヴィオは歩き出した。

目的の防具は少しの時間で売れてしまっていて買うことができなかったが、代わりに脛を守る硬革製のレッグガードをみつけそれを購入した。頑丈さを追求されたもののように、それなりに防御力は高い。それでいて重くもなく、これはこれでいいなと満足していた。買い物を終え、あとは見物でぶらぶらしているとピコンと音が聞こえた。連絡がきたことを知らせる音で、ウィンドウを開くと集合という文字が浮かんでいた。

集合場所は以前も行ったことのあるバッフエンスト城、その城門前だ。

ヴィオが到着した頃には、ルーは先に到着していた。ほかにもここを集合場所としている人たちがいて賑やかだ。

「これからどうしようか。ヴィオとルーは用事すんだの？」

「私は終わったわ」

「俺も。それで予約したら四人までいいって言われたけど、二人は

「どうする？ 一緒にくる？」

「私に行くわ」

即答したのはアイオール。ルーは迷った様子だ。

「行ってみたい気もするんだけどねえ。行ったら腕の差に自信なくしそうで。でも勉強にもなるし……悩むわ」

「美味しいもの食べる機会を逃すのはもったいないですよ」

「……それもそうか。うん、行こう！」

アヤネの言葉でルーも行く気になり、四人全員で行くことになった。

「明日の午後一時に取れたから、今日は宿を取らないと。アイオール、どこか高すぎない宿知らない？」

「知ってる。案内するよ」

テスター第一陣がゲームを始めた当初はこのセントラルしか世界がなかったのだ。行ける場所には行って探索し、二陣三陣プレイヤーよりもこの世界のことを知っている。そしてアイオールも歩き回った一人だ。いくつかある宿の位置や値段くらい記憶している。

宿をとった一行は、アイオールお勧めの店で早めの夕食をとる。

その後、宿に戻りゆったりと過ごす。

「今日の定例報告でなにか目新しい情報ってあった？」

会話の一つとしてルーがアイオールとアヤネに尋ねる。

「特にこれといった情報はなかったわ。少しずつプレイヤー人数が減ってるらしいってことくらいね。行方不明者として届け出が出るらしいけど、みつからない人がほとんどらしいし。」

ただ、行方不明者と死亡者が同値ではないと言ってたわね。これに心当たりのある人の情報提供を求めているんだとか」

行方不明者数が死亡者数よりも多い。管理者はこれに疑問を感じ調査してるが、ただでさえ人手が少ない現状で満足のいく調査ができるわけなく、成果は上がっていない。管理者側のシステムをフル稼働できれば、行方不明者を探すことも可能なのだが、現状ではそれも無理だ。

管理者たちは各世界にいる人数の確認ができる。各町や村の人数確認といった細かなことは現在ではできないが。死ぬとその確認できる人数は減る。閉じ込められた八月の人数と現在の人数差で死亡者数を出している。

行方不明ということは死んでいるものと判断されている。迷っているだけならば、どうにか連絡をとるなりするはずなのだ。その連絡がないということは、連絡できない状況となっているということ、それは死んでしまったと考えられるのだ。

「そういえばアヤネの届け出を出してる人っていないのかな」

「報告会が始まる前に確認してみたけど、届け出は出てなかったわ」「死んだと思われてんのかしらね。届け出の一つくらいだせばいいのに、ちよつと薄情な人たちよね。」

いるかもしれない仲間のことをよく言われていないアヤネは、困ったように笑うだけだ。心の中で、届け出が出ていないことに落胆していないことを不思議に思いながら。

「ないとは思うけど、別の可能性が」

「なに？ ヴイオ」

アイオールが続きを促す。

「仲間がはじめからいないとしたら届け出は出ないよね。まあ、知り合いの一人くらいはいるだろうから、この可能性はほぼゼロだろうけど」

「ないでしょうねえ。記憶をなくす前のアヤネがかなり偏屈な性格をしてたら、ありえたかもしれないけど。初対面のヴィオに話しかけるくらいの社交性はあるんだし」

「結局は記憶が戻ったアヤネに聞くしかないってことか」

ヴィオの言葉に全員が同意する。

口には出さないがアイオールはもう一つの可能性も思い浮かんでいた。それはアヤネのギルドが、アヤネを残し全滅しているということ。口に出すと雰囲気が悪くなりそうなので、口に出さずにいた。

その後なんでもない会話を続けて、午後九時前になる。

四人のウィンドウからピコンと連絡音が聞こえた。

この連絡音が休息の終わりを告げる音で、こののち全プレイヤーと管理者を巻き込む騒動の始まりを告げる音だ。

四人がウィンドウを開くと、

「チカがさらわれた。至急、グラントセオの転送門にくるようつに」と書かれていた。

さらわれた者の行き先

チカ誘拐の知らせを受けた四人はすぐに宿をチエックアウトし、転送門へと急いだ。途中でドンドコ亭の横を通ったので、ついだと予約を取り消した。明日中にランドセオに戻ってくることは不可能だろうと予想できたからだ。

転送門にはセバスターとミゼルがそわそわとした様子で立ち、アイオールたちの到着をまだかまだかと待っていた。

「セバスター、ミゼル！」

アイオールが呼びかけると、二人は走り寄ってくる。

「チカがさらわれたってどういうことだい!？」

「詳しいことは俺らもわからないですよっ」

「とにかく、ヴァサリアントに戻りましょう!　そこにタッグさんもいますしっ」

セバスターとミゼルに手を引かれアイオールは急かされるように転送門へと連れて行かれる。早くリーダーを連れ帰って、行動指針を示してほしいのだろう。

ヴィオたちもあと追うようにヴァサリアントへと移動する。

ヴァサリアントに移動した六人は、ウィンドウを開いて、タッグを呼び出す。近くにいたタッグは五分もかからずに姿を現した。コールも一緒にいる。

「嬢ちゃん!　戻ってきたかっ」

「そりゃ戻ってくるさ」

「タッグ、チカがさらわれたってどういうこと!？」

「詳しいことを知りたいルーがタッグに聞く。」

「詳しいことはコールに聞いてくれ」

「説明してくれるかい?」

アイオールの言葉にコールは頷き、話し始める。

「今日の昼すぎ、俺は暇そうなチ力をさそってホワイトサンの運動がてら散歩に出た。はじめの二十分ほどはなんともなく、チ力の注文を聞いて速度を速めたりして楽しんでたんだ。

それが北の林そばを通りがかったとき、急に弓で射られた。急なことだったし、襲ってきた相手が巧妙に隠れて避けることは無理だった。俺とホワイトサンに矢は命中した。そのせいでホワイトサンが暴れて俺とチ力は振り落とされた。落下のダメージで呻いているときに、魔法で眠らされて情けないことに抵抗もできずに寝てしまった」

「すごく悔しいのだろう、ダンつと石畳を強く踏みつけた。

「落ち着かせるようにタッグが肩を軽く叩き、コールは続きを話し出す。」

「大体三十分ほど寝て、エネミーに攻撃されて起きたんだ。

「回りを見ても誰もいなかった。ホワイトサンもだ。ホワイトサンを連れ去ったのは、村に帰ってさらわれたことを伝えるのを少しでも遅らせて時間を稼ぐつもりなんだと思う。」

「一時間以上かけて村に戻って、さらわれたこと知らせたんだ」

「ここからはタッグが引き継ぐ。」

「チ力がさらわれたことを知った俺たちはすぐに、探すために動き出した。」

「もしかすると村に戻ってくることもあるかもしれないから、一人村に待機させた。ほかは二人一組にわけて、情報を求めてヴァサリアント中に散った。正直搜索範囲が広すぎると思っけどな。なんにもしないよりはましだろ」

「コール、相手の顔とか見なかった？ なんでもいいから情報はない？」

「すでにほかのメンバーにも聞かれたことだったので、アイオールの質問にコールはすぐに答える。」

「顔は見えない。痛みに呻いている間に眠らされたから。でも声は聞いた、聞き覚えはない声だった」

「内容は？」

「これでお金に困ることはない、とだけ」

「ほかになにかある？ 例えば特徴的な服装だったりしなかった？」

「ちらつと足は見たけど、前衛系なら誰でもはいてるような靴でした」

「情報がないわね」

「すみません」

「ごめんなさい、責めてるわけじゃないわ」

うなだれるコールにアイオールは謝る。

「二人はここで情報を集めてたんでしょ？ なにか集まった？」

ルーの問いにタツグとコールは首を横に振った。

「ここにきたのかきてないのかすらわからない。きていたとしたらよほど慎重に動いたんだろう」

手がかりなしと場の雰囲気が重くなる。

「……つれさつた人はさらえるなら誰でもよかつたんでしょ？
それでもチカちゃんをずっと狙っていたんでしょ？」

静かだったアヤネが口を開いた。

「どうなんだろう？ 村から離れた林で狙撃されたんだから、待ち伏せしてたつてことかな？ だとするとさらえるなら誰でもよかつた？」

「そう決めるのは早いよヴィオ。ずっとチカを狙つてて、回りにいる人が少人数になるのを待っていた可能性もあるかもしれないし」
「でもそれだと、どこが目的地かわからない散歩の行き先を予想して先回りしたつてことになるんじゃない？ ピンポイントで予想できたとは思えないから、大人数配置しなきゃいけないだろ。チカ一人さうらつのに、そこまで労力払うかな？ そこまで人数集めるのも大変そうだ」

「そこまでしてさらいたかつたと考えられるんだよ。」

正直言つて、可能性だけならどうとでも考えられるだけに厄介だねっ。情報がほしいよまつたく」

アイオールが大きな溜息を吐く。

「もしチカちゃんを狙っていたとして、さらった人はどこから情報を得たのかな。」

村に偶然きてチカちゃん存在を知ったんでしょうか？」

「村にきた人って言っても、多くはないけど何人もいるし。誰が怪しかったとか覚えてないわ」

「まあルーの言うとおりだなあ。」

もしかしたら、あのおときかもしれんが」

「あのおときですか？」

どのときなのかアヤネには予想つかない。

「プレイヤーキラー討伐戦。」

あのおとき俺たちがチカを引き取るって聞いていた奴らがいて、そいつら自身かそいつらに情報を聞いた奴らがチカをさらったかもある可能性でしかないんだが」

「これから探すのに有効的な情報ではないね。」

仕方ない、今皆がやってることを続けよう。各地を回って情報を集める」

「ちよつといいですか」

解散と言いかけたアイオールをミゼルが遮る。

「なんだい？」

「一つの噂を思い出したんです。的中率の高い占い師がヴァサリアントにいるって。」

その人を探し出して占ってもらったらどうでしょう？ なんの手

がかりもなく探すよりはましなんかないでしょうか」

「あ、私も聞いたことある」

ミゼルの言葉に同意するようにルーも追従する。

「私はないけどねえ。でもそんな人がいるなら助けてもらうのもいい考えだと思う。じゃあこの場にいる者でその占い師を探すってことでいいね」

「そういや、管理者にはさらわれたこと知らせた？」

解散と言いかけたアイオールを今度はヴィオが遮った。

「チ力は管理者から預かってるんだから連絡しといたほうがいいと思うけど」

「探すことにはかりに熱心になってて忘れてたっ。」

俺はグランドセオに行ってくる」

「私も行くよ」

タッグにルーが同行することになった。二人は転送門へと走っていく。

残ったのは、ヴィオ、アヤネ、アイオール、コール、ミゼル、セバスターの六人だ。

「この五人で占い師を探すよ。見ついたらウィンドウで知らせて」
今度は邪魔する者なく解散する。六人はヴァサリアントに散っていった。

時間は九時過ぎ、昼間ほど人通りは多くはないが、道行く人はいる。そんな人たちに声をかければ、わりとすぐに噂の占い師が実在することはわかった。いつもいる場所もわかり、話を聞きだしたミゼルとセバスターが先行し、占い師のもとへと向かった。しかし今日の商売は終わったのか、奥まった通路の行き止まりには誰もおらず、すでに帰ったあとだった。

いないと連絡を受けたアイオールは、ここにいないのならば宿に戻ったのだろうと考え、ヴァサリアントにある全ての宿を回るように指示を出す。中心都市なだけあって宿の数も多く、十を軽く超える。ランクに関係なく全ての宿をあわせると五十近くあるだろう。

一人九箇所を目標に、六人は再び走り出す。

ヴィオが六つを回った頃、セバスターから発見の連絡が届いた。

占い師がいるだろう宿は、高くもなく安すぎもしない普通の宿だった。

ヴィオが到着すると、セバスターとすでに到着していたアヤネが誰かと話していた。アイオールとミゼルとコールは連絡を受けたとき離れた場所にいたのだろう。いまだ到着していない。

「二人ともその人が探してる占い師？」

二人が話しているのは戦闘系の格好をした男だ。

「違う。占い師の仲間なんだろうけど、今日の商売はもう終わったっていつて、会わせてくれないんだ！」

「明日くればいいだろう？ 別に逃げはしない」

午後十一時を過ぎているから、男の言葉にも一理ある。普通ならば、人を訪ねるのには迷惑とされる時間だ。一応とはいえ対応してもらえただけ運はいい。

「急ぎなんだよ！」

男の声にヴィオはかすかに聞き覚えがあつた。どこで聞いたのか思い出そうと首を捻っていると、アイオールが到着した。

「その人が占い師かい？」

「あ、あんたは！」

男はアイオールに見覚えがあるのか驚いたように指差す。

「いつかはありがとう！」

「えっと？」

誰だかわからず首を傾げるアイオールに男は名乗る。

「以前カツツエと名乗っただろう？ コルオルジオ氷窟で助けられたときに」

「あつ！ あのときの」

アイオールが思い出したのと同時にヴィオも思い出せた。

カツツエがアイオールを覚えていたのは美人で印象的だったからだ。アイオールのインパクトに負け、ヴィオのことは霞んで忘れていた。ヴィオもカツツエのことを忘れていたのでおあいこだ。

「そっか。あんたがいるのならあのときの恩を返さないといけないな。オクトールさんに用事があるんだろう？」

「占い師がオクトールっていう名前ならそう」

「間違いないな。なんとか頼んでみる」

カツツエは宿の奥へと歩いていく。

カツツエが戻ってくるまでに十五分ほどかかり、その間に到着し

ていなかったミゼルとコールが宿に到着した。

「待たせた。六人が……あまりぞろぞろこられるのも迷惑だ。アイオールさんともう一人だけきてくれ」

「それじゃあヴィオ、一緒にきて。」

あのとぎヴィオも一緒にいたからちようどいいだろうし」

「そう言われるとそっちの男も見覚えがあるような気がする。

じゃあ、ついてきてくれ」

「四人はここで待ってて」

四人は頷く。コールが少しだけそわそわとしているが、さらわれたことに対する責任感からくる焦りだろうと全員が考えた。

占い師の部屋までの通路でカツツエが口を開く。

「オクトールさんの占いはなんとというか変だ。でもバカにしてるわけじゃないってことを覚えててくれ」

「変で。オリジナル言語で話し出すとか？」

カツツエの助言にヴィオは思いついたことを言ってみる。

「いや、そこまでじゃない。遠回りというのか。」

正直、そこを直せばもつと評判もよくなって、多くの人に知られるようになるんだろうが。

リピーターがつきにくいんだ」

「今は、そこまで有名ではないのかしら？」

「知る人ぞ知るって感じだな」

各地から客はくるのだが、客が余り人に勧めはしない。これは評判の悪さからくる推薦のなさではなく、優秀さからくる推薦のなさだったりもする。一人占めしていたいと思わせているのだ。

その証拠に常連はついているし、占いの料金に大金やレアアイテムを置いていく者もいる。

「ついた、ここがオクトールさんの部屋だ」

カツツエはノックしてから扉を開いた。

部屋の中には、タイデルとホロワンスもいる。一人椅子に座って

いる男がオクトールなのだろう。

見た目、占い師というよりもシャーマンのように見える。シャーマンも占いはするので間違った格好ではないのだろうが。

ヴィオとアイオールはローブをまとって水晶を所持した姿を予想していたのだ。実際には、肌に染料で独特な模様を描き、体のあちこちに毛玉をつけている。

「あなたがオクトールさん？」

「いかにも。占ってほしいことがあるんだとか。なにを占ってほしいのかね？」

「探し人がどこにいるか。占えますか？」

「おやすいごようさ。探し人の特徴を教えてくださいませんか」

アイオールはチカの情報を事細かに話していく。

「わかった。それだけ特徴があるなら占いやすい。さっそくやろう」

そう言うとおクトールは目を閉じ、両手を胸の辺りで祈るようにあわせた。

この世界での占いは現実のものとは違い、悩みを聞いて解決方針を示すというものではなく、超常現象で悩みを見抜き解決するといったものでもない。中にはそういう占いをしている者もいるが、システムとして認められている占いはしっかりと定められている。

できることは探している人やアイテムやエネミーがどこにいるか、アイテムのドロップ率を一定時間増やす幸運付与といったものだ。

行えることは管理者の業務の一部分と似ている。探すという検索行動が最たるものだろう。システム的には同じものを使っているのだ。当然だ。スキルレベルの高いものは探すといった行為において、管理者を超える者もいる。個別の人物検索を管理者が行うのは難しい。管理者は大きな視点で動かなければ、世界を上手く運営できないからだ。一人一人の行動を監視している暇などない。ましてや今は管理者権限を完全に発揮できる状態ではない。

オクトールはそういったことのできる者の一人だ。

だがそれだけならば常連ができるほどでもないし、独り占めした

いとも思われない。

そう思わせるのは、オクトールのプレイヤー自身が持つものにある。彼は勘が鋭いのだ。当たりつきのアイスを百発百中で選び取ったり、ジャンケンで負けなしくらいには。

彼が占い師をやっているのも、勘に従いスキルをとったからだ。結果、占い師に必要なスキルに秀才天才の素質が集まっていた。

その鋭い勘によって、占いにきた人に的確なアドバイスをしている。だからこそ常連がついた。

「きたきたーっ！」

目を開いたオクトールはリズムにのって、無理に高い声で歌いだす。

「お隣の森の隠れ里には咎人集まり、商売をしてるのさ

秘密、秘密の商売さ！ 怖い怖い番人にも秘密の商売なのだよ

小鳥ちゃんが泣いてるね。ここはどこだと、おうちに帰りたいと泣いてるね。

おっとと危ない、助けは早いほうがいい。早くしないと連れて行かれちまうのさ」

歌い終わったオクトールは元の声音で話し出す。

「お隣の森つてのは、隣の世界ノースウッドのことだ。隠れ里つてのは小鬼の森の中にあるプレイヤー同士の間売場だろ。番人つてのは管理者だ。商売は裏市場のことだろ。

つまり違法の間売場でチカって子供が売られようとしている」

「解説するなら歌いらなかつたんじゃ？」

「思わずヴィオは聞く。」

「いつもは解説しないのだよ。今日は特別だ」

カツツエたちの驚いた様子から、オクトールの言葉は本当らしいとわかる。

「なんで特別？」

「それは秘密だ。少しだけばらすなら俺にも利益がある」

「その利益がなんのか想像つかないけど、解説はありがたい。」

よければ続きを話してもらえない？ どうして違法の競売場のことを知っているのかとか、人身販売なんかできないはず、といったことを知りたいのよ」

「競売場のことは、商売していたら知った。うちには金持ちの客もいるからね、そういった客が一緒にどうかと誘ってくるのだよ。興味はないから断っているが。」

人身販売に関しては知らない。ただ勘が示すにはバグの一つではないかと。どういったバグなのかは予想もつかない」

バグに関心もないといった様子だ。

このバグは本格的にメンテナンスできていないことと、常に稼働していることで起きたものなのだろう。

「今ほどのようなバグかは関係ないか。大切なのはチカの身の安全ね。」

小鬼の森はたしか、ノースウッドで三番目に大きな街ティーターブルの東にある森だったね？」

「そう。ゴ布林たちの巣さ。今はゴブリンキングはいない」

ゴ布林はRPGで雑魚として出てくるが、ゴブリンキングをその雑魚の王という認識で挑めば後悔することになる。数多くいるエネミーの中でも上から十数えるまでに入っているエネミーだ。一対一で戦う場合、レベル50でようやく五分に届くかどうかという強さを持つ。

厄介なことにはほかのボスクラスのエネミーと違い一箇所に定住せず、世界を放浪していて思わぬ場所では出会うことがある。

ブラーゼフロイントが結成されたばかりの頃に、かちあい全滅したことがあったりする。

「いたらさすがに競売開くことなんか不可能だろうね」

対峙したときの圧倒的な実力差を思い出しながらアイオールが言う。

「競売側にも用心棒がいるだろうけど、ゴブリンキングも本拠地だから手下がたくさんつく。」

プレイヤーのレベルが上がってきているから、一対一でならいい勝負できる人は多いだろうが、複数対複数だとわからないからな。

ゲーム内での死が現実での死に繋がりがねない今、そんな不安な状態で競売を開きはしないだろ。開かれているということはいないってことだろうな」

タイデルもアイオールに同意見のようだ。

「エネミーの心配はしないでいいとして、問題は競売場に入り込めるかどうかだね」

「普通に行って入れはしない。

聞いた話では、五十万s以上のアイテムを役員に預け、紹介人の名前を言うと入れるようになる。

アイテムはそれだけのものを所有し、なおかつ簡単に他人に預けることで失っても懐が痛まないと示すことで、財力の高さを証明する。

紹介人の名前を言うのは、噂を聞きつけてきた者を受け入れないためだ。もしかすると管理者の手の者かもしれないからな」

ブラーゼフロイントには二つともない。アイテムも高いもので二十万sだし、それは武器で失うと厳しい。紹介人などツテすら思いつかない。

ヴィオとアイオールは忍び込むしかないと頭を悩ませる。

「警備は万全、腕のいい魔法使い雇って結界はってるだろうから、忍び込むのは不可能に近いと思うが？」

二人の思考を読んだオクトールが駄目だしする。

「正攻法で行くしかないのか。どうしようかねえ」

「紹介人のほうはなんとかなる。俺を連れて行こうとした金持ちの名前を出せばいい」

「いいの？」

「かまやしない。もしばれて文句を言われても知らぬ存ぜぬで通す」
どうしてここまでしてくれるのだろうと、ヴィオたちは内心首を傾げる。

オクトールはそれを見抜いているが、理由を話すことはしない。
「アイテムはそっちでどうにかしてくれ。」

正攻法で取り戻すのならば金も必要になるが、それははっきり言
って無理だ。一人の価格が二百万sに届くこともあると聞いた。
五十万sを用意するのに苦労するなら競売に参加するのは無理だ。
だとすると取れる行動は「

奪い返すのみ」

アイオールの言葉にオクトールは頷いた。

奪い返すということは荒事になるということ。運がよければ知ら
れずに救いだせるかもしれないが、かなりの幸運が続かないと無理
だ。

戦力的には向こうのが上。競売側の傭兵だけではなく、金持ち連
中の護衛も敵に回るだろうからだ。

「対策を練って暴れてくれたまえ。ただしゆっくり準備している暇
はない」

残る日数は移動日を入れて二日ほどだとオクトールは告げる。競
売場に行くだけで丸一日潰れる。準備期間は一日しかない。

一日ではなにもできないのではとヴィオは思う。アイオールも同
じ思いだが、諦めるわけにはいかない。諦めるということは大事な
仲間を見捨てるということなのだから。

「今日は助かりました。これから動くため、ここらで失礼させても
らいます。上手くいけば後日お礼に」

「礼は別にいい。一度言っただけど、あんたらが動くことで俺にも利
益があるのだよ」

「それでも助け出せたら一度はきます」

頭を下げアイオールは部屋を出て行く。ヴィオも同様に頭を下げ、
出て行くこうとする。そのヴィオにオクトールが声をかける。

「ついていきたいと申し出る者がいたら、その同行を断るな」

「はい？」

いきなりな言葉にヴィオは疑問の声を上げた。

「アドバイスというか、むしろそうしろという命令だ。それを果たすことで俺への礼になると思えばいい」

「えっと、わかりました」

釈然としないながらも、もう一度ヴィオは頭を下げ、部屋を出て行った。

二人が出て行き、五分ほどしていなくなったことを確認してタイデルが口を開いた。

「あそこまで肩入れするのは珍しいな？」

「兆しがあった」

「兆し？」

「脱出のさ」

オクトールの言葉が頭に浸透し意味を理解したとき、三人は目を見開き驚いた。

ゲーム内に囚われている現状が終わる、そのきっかけをヴィオたちから感じとったとオクトールが言ったからだ。

本当かと問う三人にオクトールは頷く。肯定の仕草に三人は喜びの声を上げた。

だから聞き逃した。オクトールの『人の敵は人』という言葉を。脱出がスムーズにいかず障害が立ちふさがると見通していた。

困ったときの管理者頼み

占い師のいる宿から出た一行は、アイオールに先導されながら占い師から得た情報を聞いていく。

裏市のようなものがあると聞いて驚き、人身販売がされていると聞いて憤り、必要資金の多さに焦りを覚え、チ力を取り戻す準備時間が一日しかないと聞いて焦りが増した。助けるのは無理ではないかという思いも少し湧き始めていた。

「アイオールさんには、なにか考えがあるんですか？」

急ぐように先頭に行くアイオールにミゼルが問う。アイオールは振り返らず答える。

「管理者を巻き込もうと思ってる。チ力は管理者の子供だろう？ 危害が加えられる可能性があるぞと知ったら黙ってはいられないと考
えてる。」

それと私たちには厳しい必要資金も、管理者なら簡単に用意でき
ると思う。協力が得られれば正攻法でチ力を取り返すことすら可能
よ

「いい考えなんだろうが、そう簡単に協力得られるのだろうか？」

コールとしては管理者が動いてくれるか半信半疑なのだろう。

「管理者としてもバグや人身販売は見逃せないだろうし、動かない
なんてことはないでしょうよ」

「その理由だと動きそうですね」

セバスターがうんうんと頷く。

「このあと私は管理者に会いにランドセオに行くわ。」

あなたたちはみんなを集めて、泡村で休んで。集めたメンバー
には今話したことを言っというて

「ついていかなくて大丈夫？」

「グイオが聞く。」

「大丈夫よ。むこうにはタッグとルーがいるわ。それに占い師から

聞いた話するには直接聞いたヴィオがいないと」

「あ、そっか」

転送門にたどり着いた一行は、グランドセオへと向かうアイオールを見送る。

「ヴィオとアヤネは先に帰っててくれ、俺たちは皆を集めてくる」

「ウォルタガ中に散らばってるんでしょ、大変じゃないか？ 俺たちも手伝ったほうが」

「朝六時になったら一度泡村に帰るようになってるから、そこまで苦労はしない。集められる者だけ集めようと思ってる。きりのいいところで帰るつもりだ」

セバスターとミゼルも同意見のようで頷いている。

帰還時間を決めているのなら迎えに行かなくともいいのではないかとヴィオは思うが、なにかをせずにいられないのだろうと思いき直す。

「じゃあ言葉に甘えて、先に帰らせてもらおうよ」

「お先に失礼します」

ヴィオとアヤネと銀丸は泡村へと帰るために転送門をくぐる。

その場に残った三人はメンバーを探すために、仲間がいると思われる場所へと転送門を使い移動した。

泡村へと続く道を二人と一匹が歩いている。時刻はすでに午前一時を回っている。日が昇ったばかりで歩くことに不便は感じない。

小さく欠伸をかみ締めるヴィオ。日は昇っていてもいつもならばすでに寝ている時間だ。閉じ込められてからすっかり早寝早起きの生活となっている。夜更かししても大抵は0時前には寝ている。そこまで起きていてもすることがないのだ。

「久しぶりに午前1時まで起きてるな」

「そうだね」

「アヤネは眠くない？」

「そこまで眠気は感じてないかな」

「夜に強いんだなあ。銀丸もそこまで眠くなさそうだな」
「ウオンっ」

名前に反応した銀丸の頭をヴィオがなでた。
「チカちゃん、無事に助けたいね」

「皆動いてるし助けられないとは思えないな。管理者の協力も得られそうだし、大丈夫って思いが湧き上がった」

「そうだね。皆の協力があるから安心だね」
アヤネの表情に笑みが浮かぶ。

さらに歩き続け、泡村が見えてきた。

宿にはメンバーの一人、男の商人ルドルが落ち着かない様子で待っていた。

ヴィオとアヤネが宿に入るとすぐに気づき、近づいてくる。

「おかえりっ」

「ただいまです」

「リーダーとかは一緒じゃないのか？」

「アイオールさんは用事のためグラントセオへ、ほかの人はウォルタガに散らばっているメンバーを探しに行ってます」

「用事ってのはチカ関連？」

「ですね」

ヴィオは簡単に事情を話す。

少しでも事情がわかりルドルは落ち着きを取り戻す。

三人で話し合い、皆が帰ってくるまで交代で起きていることにした。けれども皆集合時間まで探し続けたのか、六時をすぎないと帰ってこなかった。中でもコールは大幅に集合時間を過ぎ、九時を過ぎて泡村に帰ってきた。

遅すぎることに疑問を覚え、こんな時間になったことを聞くと、コールなりに裏市のことを調べていたからだという返答が返ってきたのだった。

一人グラントセオにきたアイオールは真っ直ぐバッフェンスト城

へと足早に歩く。

歩きながらウィンドウを開き、タッグたちに連絡をとるとまだ城にいるようだ。

見えてきた城門にルーが立っている。

「管理者たちが話しを聞きたいって、ついてきて」

「好都合ね」

ペースを落とさず二人は歩き、以前バフのことを聞きにきた部屋に向かう。

「管理者たちにはどこまで話した？ その結果どうなった？」

「話すつて言つても、チカがさらわれたつてことくらいよ。あとは仲間がウォルタガ中を探し回つてること、占い師にどこにいるか探してもらおうとしてること。」

「そういえば占い師はみつかった？」

「みつかったわ。チカの居場所も聞いた。詳しくは管理者と会つたときに話すわ」

チカがみつかったと聞いてルーは安心したように笑顔を浮かべた。しかしいまだアイオールが厳しい表情であることに気づき、すぐに笑みは消える。

目的の部屋の前にタッグが立っている。歩いてくる二人に気づくと、タッグは片手を上げてから先に部屋に入る。

部屋の中には、バフと以前話した管理者がいた。タッグとルーはすでに自己紹介をすませており、管理者の名前がレヤアだと聞き出していた。

「バフ、久しぶり」

「うむ。元気そうだなによりじゃ」

「バフもね」

「すでにタッグさんたちには名乗りましたが、もう一度名乗らせてもらいます。私はレヤアと言います」

「レヤアさんですね。よろしくお願ひします」

頭を下げるアイオールにレヤアも頭を下げ返す。

「こちらそこ。」

早速ですが話にうつらせてもらってもいいですか？」

「ええ。そのために来たのですから。新たに得た情報も話します」「助かります。」

斉藤さんの娘チカちゃんさがさらわれたと聞いたんですが、なにか進展はありましたか？」

「はい。居場所がわかりました。取り戻すために協力を得たいのですが」

「喜んでと言いたいところですが、私たちも手伝えることはそう多くはないというのが現状です」

「皆、日々の作業で疲れておる。それに彼らの偽体は荒事にはむいておらん」

「そうなの……本当は戦闘になった場合の手伝いも頼みたかったのだけど、それは無理と考えていいのね？」

バフとレヤアは頷く。

「戦ったあとで大人しくなった者たちを隔離施設に送ることはできるが、戦闘はできるようにしておらんのだよ。管理者の偽体は、死にはせんが傷つけられれば痛い、攻撃手段も持っておらん」

管理者の偽体のことを軽く説明する。

管理者で戦えるのは、バフのように冒険用の偽体を使っていて休暇中に閉じ込められた管理者のみだ。そしてそういう管理者は五人ほどしかいなかった。

「となると真正面から取り戻したほうが安全にことを運べるのね」

「チカちゃんの現状を教えてもらえないでしょうか？」

「えっとね、今はノースウッズの小鬼の森にいらしいわ。そこで裏市が行われていて、人身販売も行われているんだと。」

チカは明後日くらいのオークションに出される予定」

「人身販売が小鬼の森で行われているのは本当ですか!？」

レヤアとバフが真剣な表情でアイオールを見ている。タッグヤルもそんなことが行われると聞いて驚いているが、管理者たちの驚

きはタッグたちの比ではない。

その勢いにアイオールは若干身を引く。

「ほ、本当よ。オクトールっていう占い師が実際にさそわれたらしいし。」

管理者たちは人身販売のこと知ってたの？」

「はい。知ってはいました。いつごろからかNPCがいなくなるということが起きていたんです。そのことを調査しているうちに、噂を掴みました」

「だかの、連中は上手く隠れているようでわしらにはそれ以上の情報を掴むことができなかったのじゃよ。」

おそらくNPCだけではなくプレイヤーの中にも被害は出ているだろうと話し合っただけではなく、情報がなくては動きようがないの。

そうしているうちにチカがさらわれるという事態になっただけだ」

情報を掴めないのは裏市関係者が上手く情報を規制できているからでもあるが、ゲーム総統括人工AIが管理者から隠しているおかげでもある。そのことを裏市関係者と管理者は気づいていないが。

「ですが！ これで奴らを抑えられることができます！」

必要なことを言うてください！ 多少の無茶ならどうにかできますよ！」

「ちょっと不謹慎かもしれないけど聞いてもいい？」

「ルールがおおざとくレヤアに問いかける。」

「人身販売って言うても、当初はさらわれて売られたのはNPCばかりだと思っただ。NPCなら代わりにいるし、そこまで気にすることなかったんじゃない？」

「たしかに代わりはいます。ですがなんとというか、変だと思われるかもしれませんが、私たち管理者の多くは自分たちが作り上げてきたキャラクターを子供のように感じています。その子供たちがさらわれ好き勝手されていると思うと怒りが湧いてくるのですよ」

「わしもNPCの挙動が正常か調査に行くと、返事がないとわかってもつい話しかけてしまう。そういうことが自然とできるほど彼らに愛着を持っておるのじゃ」

「子供か……それなら我慢ならんのもなんとなくわかるな」

「タツグ、子供いるの？」

興味と驚きをわずかに滲ませたルー。

「いないさ、だからなんとなく言っただろ」

「これから動くにあたっての行動方針はどうなっておるのかの？」

「チ力を取り戻すだけなら、オークションに参加して競り落とすって方向になるわね。」

そのための資金をそちらで用意してもらえないかって思っているわ。

あとオークションに参加するのはヴィオとアヤネの予定」

勝手にヴィオたちの参加を決めているが、これは仕方のないことだった。なぜならアイオルたちは、それなりに顔が知られている。裏市に参加できるコネがないことも知られているかもしれないのだ。それなのに参加しているとはれると、裏があると思われチ力救出どころではなくなってしまう可能性がある。変装術で一時的に顔を変えられることはできるが、誰もそのスキルを持っておらず。スキルポイントを消費して取得してもスキルレベルの低い変装は違和感が残る。だからもつとも遅くギルドに参加し、顔が知られていないだろう二人を送り込む。もちろん知られている可能性も考え、裏市の近くにいつでも突入できるようにブラーゼフロイント全員を配置しておく。常にウィンドウでの情報交換もする。

「そうですね……決めました。今回私たちは情報収集のみとしましょう。こちらからも誰か一緒に、いえ私が内部調査に出向いて顔を確かめるとしましょうか。」

そして十分に情報を集めたところでプレイヤーキラー討伐戦と同じように、包囲して一網打尽に」

レヤアの中でこれからの行動方針が決まったようだ。

「一緒に行くつて聞こえたけど、大丈夫なの？ あつちに顔が知られてない？」

プレイヤーを集めての報告会にレヤアは顔を出したことがある。そこから管理者だと知られている可能性が高いと考えたアイオールが問う。

「偽体のカスタマイズはできますから大丈夫ですよ。髪の色を変えて、身長を変えて、メガネをかければ印象は変わります」

これは管理者の偽体のみ有効で、プレイヤーの偽体に手を出すことはできない。

「ならいいんだけど。」

それで資金なんだけど、だしてもらえるのかしら？ 正直こっちは裏市に参加するだけで精一杯なのよ」

「大丈夫じゃよ。それくらいならちよつとデータ改竄すればいいだけの話じゃ。億単位でも兆単位でもどんとこいじゃ」

「威勢のいい話だな」

「事情が事情じゃしの、必要経費だろうよ。もっとも無事取り戻せたら、データをいじって消させてもらうがの」

初めて聞く単位の資金の提供に驚く様子を見せるタググに、バフはかんらんらんと笑いながら言う。

「どのよう動くかを一度まとめましょう。」

実行日は……」

「明日から移動して明後日に小鬼の森に到着」

日程を言っでなかったことにアイオールは気づいてレヤアの言葉に続けた。

「今日は十分に休んだり、行動に穴がないか確かめるってことですね。」

バフを加えたブラーゼフロイントの皆さんと一緒に私は小鬼の森へ。裏市に入るのは、ヴィオとアヤネというプレイヤー二人と私。ほかの方は待機。

裏市に入る際になにか注意点はありますか？」

「ある程度の価値のあるアイテムを渡すことと、紹介者つまりコネの名前を言う必要があるわ。それはヴィオが知ってる」

「侵入したあとは、どのような品があるかという名目で歩き回り、内部を調査していきます。そこにいる人物の情報も同時に収集します。」

そしてオークションが始まると、チカちゃんを救出し、その後はチカちゃんを無事に護るため騒ぎにならないよう行動し、ブラーゼフロントと合流。

これくらいでしょうか」

「注意点としては、チカと顔合わせしたときにギルド関係者とばれるかもしれないってことかしら。その場合はその場から素早く離脱しないとね。事前にチカに助けることを知らせることができればいいんだけど」

「ヴィオが動物を使えば可能かもな」

動物を使い行動したときに一緒だったタッグが思いついたように口に出す。

「手紙を持たせてチカに事前に渡すとかできるかもしれない」

「ヴィオという人は調教師かなにか？」

「ここ一ヶ月に称号を取得して、なつたばかりといってもいいがな」
「動物になにかものを運んでもらうという行為は、仲間にしたものにしかできないんですが、その人の仲間は小さく目立たないですか？」

仲間にしたたり移動手段とした動物は、動物知識スキルを取得していなくとも誰の目にも見えるようになる。裏市内を移動する場面をみつかると怪しまれるということを心配して、レヤアは聞いたのだらう。

「あー……あれは目立つな。エネミーだし」

「ヴィオとアヤネという者にも軽く変装してもらえばいいんじゃないかろうか。髪型を変える、めがねをかける、服装を変えるくらいしかできないさそうじゃが。」

裏市にいる間はチカに、知らない誰かにどこかへと連れ去られるという精神的負担をかけることになるかもしれないが、その場では避けるにはそれくらいしか思いつかない

「そうするしかないわね」

アイオールもいい考えは浮かばず、バフの提案に賛成する。

「集合場所と時間はどうしましょうか」

「ここに集合してここから転送で小鬼の森にはいけるか？」

またしてもプレイヤーキラー討伐戦のときのことを思い出しタッグが発言する。

「準備時間が足りず無理ですね。私たち管理者が使うだけならば簡単に使えるんですが、プレイヤーが使うとなると調整が必要となりますですよ。」

以前のプレイヤーキラー戦のときは、準備期間が十分にとれたから使えたんです」

「簡単そうに見えてそうじゃなかったんだな」

「はい。閉じ込められたことでいろいろと弊害が出ていまして、こういったことも弊害の一部です。」

今まで作業してわかったことなんですが、邪魔にムラがあるんですよ」

「ムラ？」

「ええ、常に作業の邪魔は入っているんですが、わりとスムーズにデータのやり取りができたときもあれば、非常に遅い作業速度となることも」

「一定間隔でそういったことが起これば、監視のローテーションが組まれているのかも考えられるんだがお。ランダムじゃからなあ。ゲーム総統括人工AIの思考を解析できれば理由がわかるんじゃないが、そっちは遅々として進んでないからの」

やれやれとバフは首を横にふる。意思があるのはわかっているが、どれほどの知性があるのかは不明なのだ。もしかすると目的があるようにみせかけて暴走しているだけなのかもしれない、という考え

も管理者の間で話されている。

「話を戻すわよ。場所と時間だけど小鬼の森にオークション開始三時間前。集団でいっきにいくと怪しまれるだろうから少人数でばらばらに。森に入った後、どこかに集合。これは連絡を取り合って集まればいいわ。」

決めることはこれで一応終わりのはず。誰か言い足りないことある？」

そう言っただけで見回すアイオールを見返す顔はどれも意見なしといったものだ。

「あとで何か気づいたら、小鬼の森に集まったときということね。」

これで帰っていいのかしら？ お金とアイテムは今渡す？」

「そうさな。今渡しておこう。リーダー、レヤアのそばにきてくれんかの」

アイオールが近寄ると、レヤアはタッチパネルホログラムを呼び出し操作を始める。

軽快に動いていた指が一度止まり、レヤアはわずかに考え込む仕事草を見せたが、すぐに操作は再開された。

作業は合計十五分ほど続いた。これでおしまいとレヤアは呟き、タンツと音がしそうな勢いでパネルを押しした。

「ウィンドウを開いて確認してください、お金が十億sありますか？」

「あ、あるわね」

0の多さにアイオールは少し引いている。覗き込んだタツグとルも似たような反応だ。ちなみにこの金額を持ったアイオールは、現時点で世界一の金持ちになっていたりする。

「次はアイテムにエリクサーに入っているのを確認してください」

「エリクサー！？ あははは、入ってるわ」

自分の道具欄にエリクサーの文字が書き込まれていることが信じられない様子だ。一億sというお金を見た以上の驚きだ。虚ろな笑いをさらしている。

エリクサーといえば、RPGでは定番の体力魔力完全回復薬だ。ほかにも万病に効く薬として登場することもある。どちらにしても高い効果を発揮する薬という認識だ。

これはホワイトヒストリーでも同じ認識だ。けれど価値という点ではほかのゲームの追随を許さないのかもしれない。

ホワイトヒストリー内でエリクサーの存在が確認されたのは五回。効果は体力技力完全回復と状態異常回復で、その点はほかのゲームと同じだった。

少し話しは変わるが、このゲームで体力回復アイテムは四種類のみだ。ポーション、ハイポーション、オリジナルポーション、エリクサーの四種類。回復率は順に30%、50%、常時変動、100%。

NPCが売っているのはポーションとハイポーションのみ。エリクサーは上位ボスクラスが1%以下という低い確率で落とすのみ。1%という数字を高いと感じる者もいるかもしれないが、上位ボスクラスを何度も倒せるプレイヤーが非常に少ないので、今は高い数値ではない。

オリジナルポーションというのは薬剤師の称号を持つプレイヤーが作ることのできるポーションのことで、効果は体力回復。回復率は薬剤師の実力と作業工程と使用する材料によって変わる。

この回復率を上げるためにいろいろな試行錯誤がある。それこそ冒険そつちのけでポーション作りにはまったものがあるくらい。そんな人たちの努力によって最大回復率は64,4%まで引き上げられた。そのオリジナルポーションは5千sという高値で取引されている。ちなみに偶然作られた69,2%のオリジナルポーションはオークションで10万sを超えた。

話を元に戻す。エリクサーは体力のみならず技力と状態異常さえも完全に回復する。薬剤師たちは技力回復薬を作っても、体力技力を同時に回復する薬はいまだ作れてはいない。効果が低いものでさえ。

ここまでいえばエリクサーの貴重性がわかるだろう。体力技力状態異常を完全に回復という珍しさ、数の少なさという点から売値が軽く百万sを超えたりする。まさに幻の薬といえるのだ。

この百万sという金額は、四ヶ月前にあったオークションで出た金額で、当時の金持ちが持っていた全財産の三分の一だ。月日が経ちさらに多くのお金を所持する今、オークションにエリクサーが出るとさらなる高値がつくかもしれない。

そんなものが自分の道具欄にあって、驚くなどというほうが難しい。「これはさすがにやめておいたほうがいいんじゃないかな？」

引きつった笑みでアイオールはレヤアに言った。

レヤアとしてはどうせ消すんだから思いっきり高いものを渡してしまえと思ったただけなのだが、貴重すぎるものを渡せば目立って動きにくくなると諭され、納得する。

「ごめんなさいね。だとしたらこれなんかどう？」

アイオールの道具欄からエリクサーの文字が消え、星屑の雫という文字が現れた。

「えっとこれは？」

このアイテムに聞き覚えのないアイオールは首を傾げつつ聞く。

「これは召喚士の称号を得るために必要なアイテムですよ。伯爵級バンパイアが5%の確率で落とすアイテムです。取引価格は40万s」

「これくらいなら大丈夫かしら？」

伯爵級バンパイアは最低レベル40ないと互角に戦えないエネミーだ。そんなエネミーが5%という低確率で落とすのだから、それなりに価値がある。

渡されたアイテムに満足し、アイオールは頷いた。

これで今日は解散となりアイオール、タッグ、ルーは泡村へと帰っていった。

いざ裏市へ

アイオールたちが戻ってきてメンバーに情報を伝え、十分な休息をとり、準備を整えたブラーゼフロイント一行はヴァサリアントへと向かう。そこからノースウツドの中心都市フォロイツクへと跳んだ。

ヴィオはもちろんのこと、リオンといったほかのメンバーにもここには始めてくる者もいて、物珍しげに街並みを眺める。水の世界の中心都市ヴァサリアントはまさに水の都市といった光景だった、それと同じように木の世界の中心都市であるフォロイツクは木の都市といえる。そこかしこに木が立ち緑が溢れ、家の大部分は木材で構成されている。建物から建物への移動を太い木の枝を伝うことで行っている人たちも見える。都市の中心には大樹を利用した城がある。二次元的なヴァサリアントと違い、フォロイツクは三次元的な都市だった。

のんびりと観光する暇などないということは全員がわかっていて、すぐにティーテーブルへと転移する。ティーテーブルもフォロイツクと似た街だ。ただ規模が小さい。

ティーテーブルで少し休み、再び動き出した一行は直接小鬼の森へと進まず、徒歩で一時間ほど離れた林の中へと入っていく。この時点でオークションまで七時間ほど。

「二交代で三時間の仮眠を取るわよ」

この仮眠はもとから予定していたものだ。ティーテーブルで休息を入れたとはいえ、あれは三十分にも満たない小休止。あとはずっと動きっぱなしで、このまま小鬼の森の中へ入っても緊張で気が休まることはないだろう。それを見越して短くともまとまった休息をとっておこうとアイオールとタッグは話し合っただけ決めていた。

仮眠と見張りで時間を潰した一行は、時間をずらし人数もばらけ

て林を出て行く。

森に入ったメンバーたちは適当な場所で待機し、連絡が入るのを待つ。開いた地図にレヤアがマーカーを出してくれる手はずになっているので、集合が容易くなっていた。

「全員集まったわね」

アイオールの視界内にレヤアを含めたメンバー全員が欠けることなくそろっていた。時刻は午後三時を少し過ぎたくらいだ。オークシヨンまであと三時間弱。たいだい予定通りの時間だ。

「じゃあ、予定通りヴィオ、アヤネ、レヤアが先行し、三人が去った五分後に私たちはあとからついていくわ」

事前に話し決められた設定としては、アヤネが主人でヴィオとレヤアは護衛ということになっている。裏市にくる客は基本的に戦闘志向ではない金持ちだ。護衛の一人でもつれていないと怪しまれる。だからアイオールはヴィオ一人だけで参加させずに、アヤネの参加も決めたのだ。

この三人でオークシヨン参加ということを知らされたとき、ヴィオは反対した。自分の参加には反対する気はなく、レヤアも管理者としての仕事があるのだらうと考え口に出さずにいた。反対したのはアヤネの同行だ。

プレイキヤラクターとしてアヤネは弱いのだ。おそらく今現在ホワイトヒストリー内にいるプレイヤーの中で一番レベルが低い。アヤネのレベルは15。助けられてからずっと鍛えることがなかったからだ。通常フィールドを歩き回るには問題のないレベルだが、ダンジョンを歩き回るには不十分だ。そんなアヤネを小鬼の森というダンジョンに相当するエリアに、少人数で連れ歩く危険性を考えての反対だ。それに裏市でプレイヤー同士の争いが無いという可能性が皆無というわけではない。

だがアヤネ自身はヴィオの反対を聞いても行きたがった。アヤネもチ力を可愛がっていたのだ、チ力を助けるためにできることはしたかった。

行きたがるアヤネをどうやって説得しようかとヴィオが頭を悩ませたとき、オクトールの『ついていきたいと申し出る者がいたら、その同行を断るな』という言葉が浮かび上がってきた。今がそのときなのかと思ひ悩み、結局ヴィオはアヤネの主張を認めることとなった。

「それじゃ行きます」

「気をつけて。特にアヤネはレベルが足りてないから戦闘に参加しないこと」

「はい」

アイオールをはじめとしたメンバー全員の声援を受けて、ヴィオたちは裏市へと出発した。念のためアイオールに預けておこうと考えていた銀丸もつれている。裏市に近づいたら別れる予定だ。何度も共に遊んだチカが銀丸に気づく可能性は高い。連れ歩くと即座にヴィオたちだとばれるだろうから、オークションには連れて行けないのだ。

裏市の場所はレヤアがみつけている。森の外から探索しても人間の反応すらみつからなかったのだが、森に入った途端霧がはれるように正確な探索ができたのだ。これは森をおおうように、管理者の探知をはじく膜がゲーム総統括AIによってはられていたからだ。

三人と一匹はレヤアの案内によりまっすぐ裏市へと歩く。途中で出てきたゴ布林種はヴィオと銀丸によって退治されていく。ゴ布林種による襲撃は少なかった。これは今だけではなく、森に入ってからずっとだ。予想よりも少ないゴ布林との戦闘にはきちんと理由があった。それを三人が知るのももう少し時間が経つてからだ。

「そろそろ到着ですよ」

地図を見ていたレヤアが告げる。

「あと十分くらい？」

ヴィオの問いにレヤアは頷く。

本番で失敗しないよう必要な情報を思い出しながらヴィオとアヤネは歩く。

すぐそこです、というレヤアの言葉で視界が開け、テントなどが見えた。だが見えたのはテントと人だけではない。

「なにこれ」

アヤネが目の前の方の光景を見て驚いている。

三人の目の前には門番のいない広場入り口が見え、消えていく倒れ伏せたプレイヤー、同じく消えていくゴブリン種、戦っているプレイヤーとゴブリン種があちこちに見えた。

「ゴブリンの襲撃を受けたのか？」

そうなのだろう。理由は不明だが。

レヤアはすぐにアイオールへと連絡を取り、追いついてくるように頼む。オーションどころではないとすぐに判断し、自衛のためにもメンバー全員が揃っていたほうがいいと思ったのだ。

連絡をつけ急いだのだろう一分もするとアイオールたちが追いついてきた。

「これはなにがあつたんだ？」

ただ事でない光景を見たタッグの言葉に誰も応えようがない。

「戦っている人や無事な人に話を聞けばわかると思います。中に入りましょう」

レヤアの言葉に従い、一行は当初の予定に反し全員で裏市へと足を踏み入れた。

ゴブリン種の襲撃から時間が経っているようで、人もゴブリン種もまばらだ。

一行は三組にわかれ、裏市探索を開始する。

ヴィオたちにはアイオールとバフが加わった。

「ここがオークション会場だったんでしょうね」

一番大きなテントに入り、中を見回しレヤアが言った。テント内の広さはファミリーストランに少し足りないといったところだ。このテントのすぐ隣にこれよりも小さいテントがくっついている。そちらに品物を置き、売り出す予定の人間がいたのだろう。

「椅子とかステージあるし、間違いないわね」

テント内には誰もいない。戦いの跡も見られない。置かれているテーブルの上には軽食や飲み物があつて、ところどころ地面に落ちている。そのおかげで慌てていたとわかるが、血の跡が残るわけではないので、戦いがあつたかはすぐく分かりづらい。

ここにある椅子やテーブルや台座もただではない。それらが残っていることで回収する余裕がなかったのだとわかる。

「いいもの食べてんだな」

置かれていた軽食をつまみ食いヴィオは不機嫌さを滲ませる。軽食は美味しかった。これを食べながら人身販売に参加するなど、いい趣味だと皮肉る。

誰か倒れていないか隠れていないか入念に探り、収穫なしと判断し、そのまま隣のテントに移動する。さすがに商品となるものは持ち去つたのだろう、そこにはなにもなかった。チカも当然いない。連れて行かれたのだろう。大事な商品なのだ優先して守るはずだと、このことだけは商人に期待する。

五人と一匹は見落としがたか再度確認しテントを出る。

なにか商人に繋がるヒントがないものかと期待していたのだが、その期待は外れた。となると襲撃を受けて無事だったプレイヤーから情報を得るしかないだろう。レヤアは別行動しているブラーゼフロイントメンバーに助けた人は逃さぬよう連絡を入れる。

「私たちも残っているプレイヤーを探しましょう」

「そうだね。連れ去られたチカの情報も手に入るかもしれない」
知っていてくれと思いを込めてアイオールが言った。

プレイヤーを求めて歩き始めたときだ。重ねて置かれている積荷を入れていたのだろう空の木箱から、かすかな音がした気がしたアイオールとヴィオはそちらを見る。

聞き間違いではなかったようで物陰にゴブリンソーサラーがいた。まずいことに先にヴィオたちに気づいていたのか、魔法の詠唱を始めている。

とっさにヴィオとアイオールは視線を交わし、皆の盾になるべく

前に出る。

その二人を嘲笑うようにゴブリンソーサラーの使った魔法は範囲魔法だった。

パーティの中心に空中に現れた火球が落ち、爆音と炎を撒き散らす。

耐え切ったヴィオが銀丸とともに駆け出し、再び詠唱を始めていたゴブリンソーサラーに剣を突き出す。魔法職で耐久度のないゴブリンは連携によってすぐに倒れることになる。

消えたことをしっかりと確認し、周囲を見渡しほかに隠れていないことを探る。誰もいないことを確認し、パーティの被害を知るため振り返ったヴィオが見たのは倒れ伏し動かないアヤネの姿だった。「アヤネ!?!」

アヤネは運悪く火球が直撃する形となり、一番ダメージを受けたのだ。レベルが低いアヤネにとって致命傷となるには十分な攻撃で、体力は一瞬で0となったのだ。アヤネは死なずの紅玉を持っている。ギルドに入ったとき渡されたのだ。だから死ぬということはない。ダメージを受けた衝撃で気絶しているのだろうとアイオールは判断する。眠ることができるので、気絶による意識喪失も起き得ると考えられるのだ。

そのように説明され、実際ホロワーズが気絶した様子を思い出しヴィオの焦りは消えた。

念のためレヤアが簡単に調べ、異常なしと判断したことも安心した一因だろう。

「ヴィオ、アヤネを背負って」

「いいのか？ 戦闘に参加できないけど」

「銀丸がいるから大丈夫よ。銀丸に気を引いてもらっている間に魔法を叩き込むわ」

レベル50を超したアイオールの魔法ならば、ゴブリンキング以外を一撃で倒すことが可能だ。

そういうことならヴィオはバフに手伝ってもらい、アヤネを背

負う。バフが背負わないのは身長が足りず引きずることになるからだ。

さきほどの不意打ちでさらに気を引き締め、移動を再開する。ヴィオたちは結局誰もみつけないことはできなかったが、タッグたちが四人ほどみつけたと連絡が入った。

裏市の中央の集まるように言うと、助けた人が逃げ出さないように囲み、集まってきた。

「お疲れ様」

連行してきたメンバーを労わるようにアイオールが声をかける。

「そっちは誰もいなかったのか？」

「あいにくとね。ゴブリンソーサラーの奇襲受けたただだったわ」
ちらりとアヤネに視線を向け、それにつられタッグもアヤネを見た。

「大丈夫なのか？」

「気絶しているだけだと思っわ。レヤアも異常なしとってたしね」
管理者の言葉ならば安心とタッグが頷いた。

「ところでコールの姿が見えないけど？ 一緒に行っただでしょ？」
「見落としてはないかももう一度見て回るってさ。ゴブリンはいないだろうし、いてもやれるほど弱くはないから行かせたよ」

「そっ」

アイオールは視線をタッグから助け出したプレイヤーへと向ける。
「早速で悪いんだけど、ここだなにがあつたのか大雑把でいいから話してもらえ？ 助けた恩があるんだし、断りはしないわよね？」

細かく聞くことをしないのは、隠し事は聞かないと暗に示した。
これにより少しは口が軽くなるのではないかと思ひ。ここで聞かずともどうせ管理者に引き渡すのだ、詳しいことは彼らが聞きださるうから、そのあと聞けばいいと思つたのだった。

「見ての通り、ゴブリン種の襲撃があつた。それだけだ」

「それはわかるし、さすがに大雑把過ぎるわ。いつ誰がどれくらいやってきたのかくらいは聞かせて」

さすがに大雑把過ぎると、もう少し詳しい情報を求める。

「……あれは昼前のことだった。もう一時間もしないで日が昇るつととき、暗闇に乗じてゴブリンの大群がおしよせた。ちらりと見ただけだが、ゴブリンキングもいた。こっちにも戦える者は三十人はいたし警戒もしていた。だがこちらを超える大群の相手で手一杯で、ゴブリンキングの相手など無理だった。結局押し寄せるゴブリンどもを食い止めることなどできずに好き勝手暴れられ、この現状だ」
「森にいるはずのゴブリンとの戦闘が少なかったのは、こっちに集中していたからか。」

それにしてもゴブリンキングがどうして襲ってきたのよ。きちんといないってことは下調べはしてたんでしょ」

自分たちの事情を少なからず知っていそうなアイオールを怪しみながらも男は率直に答える。

「エネミーの考えなんかわかるかよ」

それもそうだとアイオールは頷く。わかるとしたらヴィオのように会話できる者くらいだろう。

だとするとゴブリンたちを倒したのはまずかったかとわずかに悔いる。なにかしらの情報がゴブリンサイドからも入ってきたかもしれないのだ。

「レヤア、こいつらどうする？ 私たちでグランドセオまで連行したほうがいい？」

話を聞いたらこのまま開放されると思っていた裏市関係者たちは、ぎよつとした顔でアイオールを見る。グランドセオには管理者がいる。ここにいてる時点でまずいことに関わっているという自覚がある。管理者の下へ連れて行かれてはまずいということもわかっていて、逃げ出そうと視線をあちこちにめぐらすが、囲まれていては難しく、今は大人しくして移動の際に隙を見て逃げようと決めた。

だが彼らにとって運の悪いことに、レヤアにはここから動く気がなかった。

「ここから隔離施設へ送るので、このまま逃げ出さないように見張

「ついでにどうぞ」

「了解。聞いたね皆、こいつら逃がすんじゃないよ！」

キーボードを呼び出し準備を始めたレヤアを見て、裏手関係者たちはさすがにレヤアの正体に気づいた。

どうにかして隙をみつけようともう一度周囲を見渡すが、気合を入れたブラーゼフロイントメンバーには隙はなく、終わったとその場に座りこみ逃げる気がないと態度で示す。

事前に準備していた隔離施設への転移を細かく調整し、三十分後地面に陣が現れた。

「その四人をこの陣に移動させてもらえますか」

レヤアの指示に従い、アイオールたちは四人を立たせ、陣の上に移動させた。両脇からしつかりと捕まれては逃げ出すことも不可能で、四人は大人しく陣の上に移動し、隔離施設へと転移していった。「今日のところはこれで終わりですかね？」

緊張を解き、タッグが確認するようにレヤアとバフに問う。

「そうじゃの。予定とはだいぶ違ったがな」

「送った人たちから必ずなにかしらの情報を聞き出します。おそらく二日後くらいにアイオールさんに連絡をいれることになると思います」

「わかったよ。それじゃ帰ろうかね」

もはや一行以外に誰もいない広場を最後にもう一度見渡し、見落とさないか確認する。

一人探索していたコールも気落ちしている様子で戻ってきて、なにもなかったと報告する。

一行はフロイックまで一緒に移動し、そこでレヤアとバフはグランドセオへと帰るためわかれることとなった。

泡村に辿りついた一行は、疲れからすぐに寝入る。そして全員が目覚ましても、アヤネは一人昏昏と眠り続けていた。

救出開始

何事もなく時間は流れ、レヤアから連絡がくる予定の日となる。

この間もアヤネは起きることなく眠り続けていた。

グイオはこの二日、アヤネのそばにいて看病していた。看病といっても特にすることはなかったのだが。アヤネが微動だにしないため、かけ布団を直すことすらできずに、ただじつとアヤネが起き出すのを待っていた。

グイオの頭の中は、やはり同行を断るべきだった、という思いで占められている。たとえオクトールの言葉があったにせよ、日数の指定はされていなかったのだから、実行日を間違っていたのではないかと考えてばかりだ。

ここにはいないが責任を感じているのはアイオールも同じだ。二人を裏市へと送り出したのだから。アヤネを気にしつつも立場上メンバー一人だけにかかりきになるわけにはいかず、暇ができれば様子を見にくるのみでアイオールはここにはいない。

今日もなにこともなく、アヤネが起きるそぶりを見せることなく、時間が過ぎていく。

午後四時になった頃、扉がノックされルーが入ってきた。

「アヤネの様子はどうか？」

「変化なしです」

「そっか。早く起きなさいな、ねほすけさん」

ルーはアヤネの額を軽く弾く。

「アイオールがあなたを呼んでいるわ。連絡がきたから皆と一緒に聞いてもらいたいんだって。」

「ここには私がいるから、行ってきなさいな」

「ルーさんは聞かなくても？」

「私はあとから聞いわ。戦闘タイプじゃないし、チ力を取り戻すと

き参加できないだろうから、また聞きでも問題ないもの」

「……じゃあお願いします」

「任せておいて、起きたらすぐに知らせるから」

頷いたヴィオは小部屋を出て、大部屋へと向かった。

大部屋にはアヤネとルーとバフ以外の全員が揃っていた。

「きたわね」

皆はアイオールを前にして座っている。開いているウィンドウにむかってアイオールが「お願いします」と声をかけると、ウィンドウは巨大化しスクリーンのようになる。

スクリーンにはレヤアが映っている。

「皆さん、二日ぶりです。今日は約束していた通り、得た情報を話したいと思います。質問はあとで受け付けますので、静かに聞いてください。それとのちほどお願いしたいこともあります」

ではと言ってレヤアは話し出す。捕らえた者たちが口をわらなければ、自由プログラムの使用も考えていたが、諦めた彼らは素直に情報を吐き出していった。重要なことは知らされていないというのも簡単に白状した要因ではある。その情報でさえも管理者にとっては重要なものであったのだが。

あの日、裏市関係者はブラーゼフポイントがチ力を取り戻しにくることを知っていた。どうしてそのことを知っていたかは、下っ端は知らなかった。知っているとしたら上層部だけだ。人数も把握していたようで、雇っている傭兵と比較し、警戒さえしていれば返り討ち可能だと判断し、いつも以上に警備に力を入れていた。

そこにゴブリンキングが手勢を率いて現れたのだ。どうやらゴブリンキングにとって大事な物がオークションに出されていたようで、取り返しにきたのだ。それはゴブリンキングを倒すと低確率で手に入るアイテムで、持っていると取り返しに来るといイベントが発生する。本来ならばゴブリンキング一匹で取り返そうとするのだが、場所が場所なだけにゴブリンが大量に押し寄せるとい結果となっ

ただ。

ブラーゼフロイントに対して用意していた警備が役に立ち、ゴブリンの群れに抵抗できていたが、なにせ数が違いすぎる。ゴブリンキングを除けば質は警備のほうが上。だが塵も積もれば山となる。徐々に押され、戦線を支えきれなくなるのに時間はかからなかった。警備たちが時間を稼いでいる間に、金持ち連中は警備として提供していた自分たちの護衛を、逃げるときの護衛として引っ張っていた。

ただでさえ足りない戦力を持っていかれたことで、それがとどめとなり裏市はゴブリンに蹂躪されたのだ。

時間稼ぎしている間に商品を持ち出すことにも成功し、チカも逃げ出すことはできていた。

「ここまでがあおの日あつたことです。

捕らえた者たちは四人とも裏市主催者の関係者で、彼らが普段どこに住んでいるかも聞き出しています。NPCをさらった方法は下っ端には知らされていなかったようです。

そこで皆さんにお願いしたいのですが、チカちゃんを助けに主催者の家へ乗り込んでもらいたいのです」

「私は乗り込むことに反論はない。けど普通ならそういった行為は禁じられているはずだよ、許可が下りるのかい？」

チカを救出したが、全員隔離施設送りなんてことにはしたくない。そこらへんはどうなっているのかとアイオールは問う。

「もちろん許可はとりました。積極的な殺人をしないのなら、という条件で街中での武器と魔法を使用し、ある程度のダメージを与えることも認められています」

「不可抗力で殺した場合？」

プレイヤーキラーとの戦いでそういったことも起こりうると実感したタッグが聞く。

「不可抗力ならば問題はありません。ただし本当に注意して戦って

ください」

「チ力を助け出すことをどうして管理者が依頼するのか聞いていいかい？ 関係者の娘だから？」

「それもあります、人身販売をしているという明確な証拠がほしいのですよ。」

捕らえた者の証言だけで私たち動くには少々弱いですから。そんな奴は知らないとしらをきられると、手を出しにくいです。

その点、チ力ちゃんを助け出せば誘拐という面からも攻めることができますから。ほかに誰か誘拐していないかという理由で屋敷調査に入ることができます。

チ力ちゃん以外にも誘拐されている人はいるんでしょうが、あなたがその人たちのことを知らないので客分として滞在してもらったと言われると手は出しにくくなります。囚われている人たちからの証言があれば動けますが、弱みを握られ客分だと同意する可能性もありますし、チ力ちゃんを助けるのが確実なんです」

「管理者つてだけで無理を通すことはできないの？」

リオンが聞く。

「やろうと思えばできますが、あまり刺激したくないのですよ。」

今は管理者権限が制限されていて動きにくい。そんなところにプレイヤーキラーや裏市やアイテム消失バグや侵入不可域や迷宮幽霊などの問題が起きて、てんやわんやな状態。正直、人手が足りません。

ここで彼らを刺激しさらなる問題を起こされたくないのです。管理者ということでは強権振りかざし行動すると一時的な問題解決にはなりますが、次にはさらに巧妙な手口で彼らの仲間が動き出しそうだと、私たちは考えています。

ですのでもやるからには一網打尽にできる状態まで手を出さないと決めてあるのです」

「今回のことがそのきっかけになると？」

アイテム消失バグや侵入不可域や迷宮幽霊といったことが気にな

るが、それには触れずにタッグは続きを促す。今回のことに関係あるのならレヤアも詳しく話したはずで、関係ないのだから話さなかったのだと判断する。

「はい。裏市の主催者を捕らえ、その仲間の情報を無理矢理にでも聞きだし、素早くほかの者たちも捕らえます。そのための行動も一昨日から起こしています」

「俺たちがするべきは、チ力を助け出すこと。それはいい。それを行う前のまでの行動やその後の行動はどうなってる？」

「行動開始時刻ですが、そちらの都合で動き出して結構です。いつ動くか教えてもらえれば、こちらはその数時間前から行動を開始します。」

詳しくは、乗り込んでもらう屋敷の周囲に出入り不可の透明障壁をはり、関係者を逃がさないようにします。チ力ちゃんをみつけたあとは、屋敷外へと連れ出してください。屋敷内のスキャンはできませんが、屋敷外に出てくればこちらでチ力ちゃんの確認はできます。それで私たちが動く理由ができます。

注意すべきは、あなたがたの目的がチ力ちゃんだと知られ、チ力ちゃんを証拠隠滅として消されないことです」

「チ力ってNPC仕様で殺されないんじゃない？」

チ力を預かるときに聞いたことを思い出しヴィオは疑問の声を上げる。

「普通ならそうなんです、こちらの把握していないバグがあつて消される可能性もあると考えています」

なるほどとヴィオとタッグは頷いた。

「チ力を殺されるわけにはいかないから、こっちも注意しつつ全力で動かせ。」

それでチ力がいる詳しい場所はわかっているのか？」

タッグの問いにレヤアは首を横に振る。

「いえ、屋敷のスキャンはできませんから、わかっています」

「最悪、そこにはいない可能性もあるんじゃないか？」

「なくもないといったところでしょうか。ですが、いる可能性は高いです。情報を聞いた一人が、屋敷内でチ力らしき少女を一度見たと言っています。この世界にはチ力ほど小さなプレイヤーはいませんから、いる可能性は高いと見ています。」

「私たちが動いていて、しかも居場所を突き止めているとは考えていないでしょうし、ほかの場所へと移しはしていないはずですよ」
「なるほどね。」

「わかった。すぐにでも動くとするけど、こちらから連絡したいことができたときとか、準備が整ったことを知らせるときはバツフェンスト城まで行かなくちゃいけないの？」

「アイオールさんのウィンドウに私直通の連絡ボタンを設置しておきますから、その必要はないですよ。」

「ボタンは赤く点滅するようになっていますから」

「了解。最後にチ力のいる屋敷つてどこになるのさ」

「グランドセオ、東地区A-5です」

「グランドセオ!？」

「管理者のお膝元だ。そんな場所にいたのかとアイオールは驚きの声を上げる。ほかのメンバーも皆驚いた表情だ。」

「私たちもここにしていると知って正直驚いていますよ。灯台下暗しにもほどがあるだろうと。」

「こちらから伝えることはこれくらいですが、そちらからからはなにかほかにありますか？」

「一つある。この前アヤネを見てもらった？ あのとときから起きない。消えないってことは生きてるってことなんだろうけど、いい加減詳細が知りたくて、そっちから調査できる人をよこしてもらえない？」

「まだ起きていなかったんですか。わかりました。人をすぐそちらへ向かわせます」

「お願いします」

「ブラーゼフロイント全員で頭を下げる。」

レヤアは頷いて画像が消える。そして大きかったウィンドウは小さくなり消えた。

このあとルーを除いたメンバー全員で話し合い、すぐに出発することを決めた。

泡村に残るのは戦闘向きではない三人。彼らはやってくる管理者を待ち、アヤネの看病をすることになる。

ヴィオはルーにアヤネのことを強く頼み、泡村を出た。

屋敷突入員十一人は早速グランドセオへと来ていた。

とりあえず宿を取ったあとは下見とばかりに、散歩のように見せかけ目的地である屋敷のそばを歩いていく。全員で行くと怪しまれるため時間をかけ少人数にわけける。

これでさて突入つとはならない。チカのある大雑把な位置を把握できないかと考えている。

ここで動いたのがヴィオだ。屋敷内を探ってもらおうと街の外に出て小動物を五匹つれ屋敷そばで放った。

少しして屋敷内から犬の吠える声が聞こえてきた。内容はねずみが入ってきたというものだ。

「調教師がいたのか？」

このままここにいるのはまずいかと考えるが、ねずみをほおりっぱなしにはできず、いつでも逃げるようにしながらねずみの帰りを待った。

一時間ほどたち五匹のねずみは一匹に数を減らして帰ってきた。

「お疲れ様」

そう声をかけてすぐにその場を離れる。今は情報を聞き出すよりも、存在を気づかれぬほうが先だ。

念のためすぐには宿に帰らず、遠回りしときに振り返りつけられていないかを確認し宿に戻る。

皆に迎えられたヴィオはポケットからねずみを出して、情報を聞き通訳していく。

得られた情報は少ない。屋敷内にも猫や犬がいて思うように動けなかったからだ。そんな中頑張ったねずみによると、二階と屋根裏には誰もいなかったということがわかった。

下見で建物は二階立てということがわかっており、これで探すところは一階とあるかもしれない地下室となった。ちなみに蔵などはなく、敷地内にあるのは屋敷と庭と小さな藪のみだ。屋敷の大きさは体育館よりも少し大きいといったところか。

たくさんのねずみ用食料を買い、ヴィオはそれを持って街を出てねずみの巢に置き、犠牲がでたことの謝罪と情報を得たことの礼も忘れずに言って宿へと戻った。

ヴィオが戻るとこれからの行動は話し合いで決まっていた。暗くなってからできるだけ静かに行動するといったものだ。全員真正面から行くのではなく、二三人の組にわかれ四方から侵入、みつかったらその人たちができるだけ騒ぎを引き、近くににいるものは加勢に向かうという手はずになっている。

潜入という行動は、盗賊や怪盗の称号持ちが適任なのだがあいにくブラーゼフロイントにはそれらの称号持ちがいなかった。ないものねだりしても仕方ないと、先述した方針で動くこととなった。

このことをレヤアへと伝え一行は暗くなるまで体を休める。レヤアからは、屋敷についたときもう一度連絡いれるようにと返答を得た。そのときに入入り不可の障壁をはるのだろう。

時間は流れ、午後五時半。日は傾きそろそろ暗くなりはじめるといふ頃、一行は動き始めた。

「全員配置についたね」

アイオールがウィンドウを開き、連絡を取り合っている。それぞれから yes という返答が返ってくる。

これを見て、アイオールはレヤア直通のボタンを押した。

屋敷の上からかぎりなく透明な膜が広がりドーム状に屋敷を囲んだ。明るかったならば周囲の風景がわずかに歪んで見え、違和感を

感じただろうが今は暗くなっている。そんな状況でわずかな歪みなど見えない。

「本当に出られない」

試しに膜に触ってみたヴィオは、弾力はあるがある程度で進めなくなることを確認した。

ヴィオは銀丸とアイオールと一緒に行動している。

アイオールがウィンドウを通じてG○サインを出し、一行は屋敷への侵入を開始した。

塀に上がり、明かりの有無を確認し下りる場所を決める。

屋敷への侵入方法は鍵の開いている窓や扉を探すしかない。ゲーム内で破壊値の設定されていないガラスなどの破壊はできず、窓ガラスなどを壊し鍵を開けるといったことはできない。できても大きな音がでるので、もとより壊す気もないのだが。

ヴィオたちは小さな声で開いている窓の有無を問いながら移動していく。

そうしているうちに離れた場所から犬のけたたましい吠え声が聞こえてきた。ヴィオの耳には「侵入者あり」と聞こえている。

それとは別に少し離れた場所から走る足音が聞こえてきた。「あつちだ」という声も聞こえ、見張りがいたのだろう。

ヴィオたちは身を隠すため近くにあった茂みに入る。ヴィオは銀丸の背をなでじつとさせる。松明を持った見張りは茂みの近くを通り、犬の元へ駆け走っていった。暗がりにいるヴィオたちには暗闇に目がなれていないせいで気づいていない。完全に足音が聞こえなくなつてからヴィオたちは立ち上がる。

「誰かみつかったのか」

「無事だといいんだけど」

「しっかり準備しているし、そう簡単にはやられはしないさ。俺たちもするべきことをしよう」

「うん」

茂みの中を移動し、見張りのいた方向へと足を進める。

行った先にはちょっとした広さの庭があり、そこには見覚えのある白馬が繋がれていた。

「ホワイトサン？」

ヴィオの呼びかけに反応し、ホワイトサンはいないた。

静かにするように言いながら首筋を撫でると大人しくなる。誰かくるかと身構えたが、犬のほうに集中しているのか誰もこなかった。「ホワイトサンがどうしてここにいるんだろ？」

「いい馬だからチ力をさらうついでにホワイトサンも連れて来られたんじゃない」

「そうなのか？」

ヴィオはホワイトサンに問いかける。

ホワイトサンはそれに答えず、背に載っている鞍を探れとしきりに訴える。

なんだろうと思いつつもヴィオは指示通り鞍を探る。

「これは」

鞍と背の間に手紙が入っていた。

読んでもいいのかと思ったが、ホワイトサンは読ませたくて探らせたのだろうと考えヴィオは手紙を使い、開いたウィンドウに書かれた内容を読む。

そこには想像していなかったことが書かれていた。

一緒に読んでいたアイオールも驚いている。

内容はコールの罪の告白だった。簡潔に内容を表すと、コールがチ力誘拐に関わっていた。そのことを謝罪する内容で、命にかえてもチ力を助け出すと書かれていた。

ホワイトサンは主人が命を捨てる覚悟でいることに気づき、ヴィオに手紙を読ませたのだろう。本来ならば、これはことが終わってから読まれるはずの手紙だ。そういうふうに書かれている。

今もホワイトサンは主を助けてくれとヴィオに繰り返し呼びかけている。

「助けに行く？」

「当然」

アイオールは言い切った。

「こんな手紙で謝ったつもりにはさせない、皆の前で頭を下げさせるわ」

死なせないと暗に語っている。

「入り口みつけないかね」

ヴィオは助けに行くからしばらく静かにしていて、とホワイトサンに頼む。

その言葉を聞き入れホワイトサンは静かになった。

ヴィオたちは入り口を求めて移動を再開する。ほどなくして勝手口をみつけた。そつと動かすと鍵は開いており、静かに開いた。屋敷内の明かりが漏れ出る。さらに開いてそのまま待機する。扉の向こうに誰かがいるならば、なんらかのリアクションをするだろうと考えたのだ。

長く感じれた一分が過ぎ、なんの反応もないことを確認し、中へと入る。

廊下に作られた勝手口で、今は誰も廊下を歩いていない。だが話し声は聞こえてくる。明確には聞き取れないのだが、騒ぎへと向かう者と残る者で話し合っているのだらうと検討をつけた。

ヴィオは仕草でどちらに行くか問う。そのとき騒ぎが起こっているところとは別の離れた場所から戦いの音が聞こえてきた。

「コールさんか!？」

「もしくは誰かがすでに入っていたか。警備の同士打ちはないはずに行く? と小声で聞くヴィオにアイオールは頷いた。

できだけ足音をたてずに移動し、音の発生源へと向かう。

戦闘音に気づいたのは屋敷内の者も同じで、ヴィオたちはみつかった。

「侵入者がいるぞ!」

こうなると静かに移動する必要はなく、気を使うことなく全力で走る。すぐに地下への階段をみつけた。音は階下から大きく聞こえ

てくる。

急いで降りると、想像以上に広い部屋があった。とても広いというわけではなく、家具をどかせば十人近くが暴れられるといったところだ。

この部屋の隅、ほかの部屋へと繋がるのだろう扉の前でコールが一人で四人を相手に奮戦していた。

すぐにアイオールが魔法の準備に入る。

「スキルアーツ・ストーンニードル！」

アイオールが杖の石突で床を突くと、コールと敵対している四人の足元から石でできた円錐が飛び出してきた。

四人が態勢を崩している間に、ヴィオたちはコールのそばへと寄る。あのまま階段近くにいると、追っ手とここにいる四人とに挟み撃ちされるのだ。

ヴィオたちが動くのと同時に、追っ手が部屋に入ってくる。

「リーダーにヴィオ！　なんでここに！？」

「手紙見た！　詳しくはあと！」

「コールっチカは！？」

次の魔法の準備をしつつ、アイオールは聞く。

「攻撃されないように扉の向こうで、ほかに誘拐された人と一緒に待たせています！」

「合流できたはいいけど、これからどうしようかね。何かいい考えある？」

「殺すわけにはいかず、そのつもりもないヴィオは仲間だけに聞こえるように言う。」

「俺はなにも思いつかない。ただ警備を切り伏せて連れ出すつもりだった」

「コールは殺してはいけないという管理者の言葉を守るつもりがないのだろう。」

「コール、こいつらに死なずの紅玉使わせた？」

「いや一度も使わせない」

「だったら……今の私ができる最大の攻撃で気絶を狙ってみるわ」
ゲーム内での死が現実の死に繋がる可能性がある和管理者側から通達があり、そんな状況で対策を練らない者はいない。なので一度だけならば、オーバーキルな攻撃を当てて大丈夫だと考える。

彼らが死なずの紅玉を持っていない可能性もあるのだが、確認する方法はない。まさか聞くわけにもいかないだろう。そんなことを聞けば、致死ダメージを与えますよ、と宣言するも同じ。そうなれば、相手は部屋から脱出するか、アイオールを集中的に狙うだろう。アイオールは一度魔法を使っただけで、魔法使いだとばれている。複数人に致死ダメージを与える方法は魔法使いくらいしか持っていない。

「タイミング合うまで、あいつらの相手しててちょうだい。そして合図出したら私のそばまで引いて」

「了解！」

ヴィオとコールは少し前に出て、剣を振り出す。銀丸も攪乱のため走り回る。

アイオールは準備していた魔法を中止し、宣言通りの魔法を使う準備に入り、相手が一塊になるタイミングを計る。

数の差で、ヴィオと銀丸とコールは不利だ。だがヴィオは補助魔法を使い、銀丸は避けることに専念し、コールは持ち前の頑丈な防御で短時間渡り合うことに成功している。相手方も魔法使いはいるのだろうが、乱戦状態で味方に当てないよう魔法使用を控えている。「今！」

アイオールから合図が飛び、二人は下がる。銀丸にはヴィオから合図を送る。

銀丸が少し遅れ下がってすぐに、アイオールは魔法を発動した。

「スキルアーツ・ストーンエッジ！」

先ほど使った魔法と似た現象が起こる。違うのは、飛び出てきた石の形状と大きさ。先ほどは円錐だったが今回はのこぎりの刃を持った剣の群だ。より殺傷力を増した魔法は、相手方の体力を狙い通

り削りきった。

それを見てコールは背にしていた扉を開け、怒鳴るように指示を出す。

「脱出するぞ！ 俺たちについてこいっ」

扉の向こうにはチカのほかに十人近くのプレイヤーがいた。皆装備を外され、防御力のない服を着せられている。

ヴィオたちはチカとの再会を喜ぶ間もなく、倒れているプレイヤーを踏み越え一階へと急いで移動する。

コールの先導で玄関へと向かう一行。

玄関すぐそばの広間へと到着し、もう少しというところで一行は足を止める。そこには外から入ってこようとするブラーゼフロイントメンバーを押し止めるための警備がいたのだ。みつかったメンバ―と警備の戦いは玄関前を舞台としているようだ。

ヴィオ側の戦える人数は銀丸を含めて四人。助け出した者たちは死なずの紅玉を持っておらず、戦わせるわけにはいかない。対して警備たちの人数は八人。被害なく突破するのは困難だ。ここまで走ってきた勢いそのまま突っ切ればよかったのだが、すでに足は止めてしまっている。このままでは地下で倒してきたプレイヤーも合流するだろう。さらに人数差は広がり、しかも挟み撃ちという状況に陥る。

もう一度、アイオールに魔法を使ってもらおうとしたとき、吹き抜けの二階から男の声が聞こえたきた。

「レアモノがいるぞ！ 捕らえよ！」

喜色にまみれた声が響く。

警備に命令できるということはこの屋敷の主なのだろう。

主の指はアイオールとヴィオに向けられていた。

「ラゼツタ様！ 捕らえよと申しましても、外からの侵入を防ぐのに手一杯です！ それに下手に手を出すと、逃げ出そうとしている商品たちに死者が出てしまいます！」

「たしかにそれらの商品が死ねば損失は大きい。だがっレアモノを

捕らえて売ればそれを上回る金が入るのだ。とくに動物の声を聞くというレアスキル持ちは高く売れる。

遠慮はいらん、あの二人以外殺す気でやれ！」

プレイヤーキラー討伐戦での活動でヴィオの能力が知られたのだ。それが広まり顔までも知られ、人買いの商品リストに載っているらしいとはヴィオは予想だにしていなかった。情報を集めるために放ったねずみが見つかったのも、ヴィオのような者への対策をしていたからだろう。

勝手に商品とみなされたヴィオは怒りの前に、なにを言っているのだろうと戸惑いが湧く。

殺せと言われ戸惑いの様子を見せる警備にラゼッタは、彼らを動かすためさらに言葉を発する。

「そうだな、殺しの一番槍にはあの女を一晩好きにできる権利をやる。」

この条件で警備たちの視線がアイオールへと集中し、欲の色が目に浮かぶ。

アイオールはその視線を受け、自身の体を抱いて少し下がる。ここまで直接的な欲望を叩きつけられたのは初めてなのだ。

その視線を遮るようにヴィオとコールがアイオールの前に立つ。

「リーダー、もう一度魔法を使ってください。いっきに殲滅して通り抜けましょう。」

コールが振り返らず、小声で提案する。それに対しアイオールも小声でわかったと応える。

そして再び、アイオールは魔法の準備を始める。だがそれが発動することはなかった。

ヴィオたちが走ってきた方向から、三本の氷の矢が飛んできて、ヴィオとコールとアイオールに命中したからだ。

地下で倒してきた警備が早くも追いついてきたのだ。玄関側とラゼッタの発言に意識がむいていたため、背後から寄る気配に気づくことができなかった。

ダメージを受けたことで魔法発動が中断され、さらには隙も生まれ、玄関側の警備も近づいてくる。

ダメージを受けていない銀丸が近づけまいと奮闘しているが、多勢に無勢だ。

ヴィオたちは視線を交わし、助け出した者たちを挟むように動く。玄関側への対応はコール。背後への対応はヴィオとアイオール。けれどもアイオールは戦力と数えづらい。なぜなら地下で一度死なずの紅玉を使わせているので、大ダメージの魔法は使えず、支援系の魔法で対応するしかないのだ。玄関側へと回るにしても、注意がそれている間に背後から再度魔法が飛ぶ可能性がある。玄関側にも魔法使いがいるかもしれないが、確実にいるとはいえず、それならば確実にいるといえる背後への対応に回ったほうがいい。

打開策のないまま戦いが始まる。

ヴィオたちは奮闘し、助け出した者たちへと警備たちを近づけさせない。コールは攻撃を耐え続けその場に踏ん張り、ヴィオはアイオールの魔法によって動作の鈍った警備たちの攻撃を避け続ける。銀丸は傷つきながらも警備たちの間を走り回り、アイオールは支援系の魔法を使いながら、相手方の魔法使いへと牽制の攻撃魔法も飛ばす。

だがいつまでも続くものではない。体力技力共に無限ではない。回復アイテムはあるが、それも限りがある。さらには殺すわけにはいかないのです、全力で抵抗するわけにもいかないのだ。

じりじりと形勢が警備たちに傾いていく。それでも助け出した者たちへの被害が少ない現状は、見事といえるだろう。

このまま時間が過ぎて勝敗が決すると誰もが思っていたとき、状況を変える出来事が起こった。

玄関ドアが壊そうとする勢いで開かれた。リオン、ミゼル、デルカが入ってきたのだ。

玄関前での戦いでブラーゼフロイント側が優勢となり、屋敷内へと人数を回せるようになったのだ。ラゼッタが出した条件で玄関を

押さえる人数が二名しかいなくなったことも今の状況となった一因だ。

三人はすぐに現状を把握し、玄関側の警備たちへと攻撃を開始する。今度は挟み撃ちされる側となった警備たちは慌てて対応する。

「お前たち行け！」

警備に救出した者たちへ手出しする余裕がなくなったと判断したコールは指示を出す。

行けるのかと迷う彼らに、コールはもう一度怒鳴り指示を出した。チカを屋敷外へと出せばこちらの勝ちなのだ。ジリ貧な現状を終わらせるためにも行つてほしかった。

戦いを避けるように彼らは動きだす。ここから玄関まではすぐそばだ。戦いが終わるのも長くないと考えているコールの視界に、警備の一人が振り回そうとする槍が当たる範囲にいるチカを捉えた。チカを狙つてはいないのである。戦っている警備の視線はデルカへと向けられている。そしてチカも槍に気づいていないようだ。

後悔か仲間意識ゆえか、それとも何も考えない咄嗟の判断か、コールは動く。防御を考えず、チカと警備の間に入り込む。ぎりぎり間に合い槍を受け止めた。

コールに気づいて立ち止まろうとするチカに、行けつと短く言い放つ。

振り返りながらもチカは玄関へと向かっていった。おそらくチカには見えていないはずだ、庇つて受けたダメージが致死へと至り、消えようとしているコールの体は。チカを救出し一人地下で戦っているときに、一度死なずの紅玉を使っていたのだ。

ここで倒れるとチカが戻ってくるかもしれないと、コールは意地で警備の前に立ち続ける。そのコールへと警備たちは容赦ない攻撃を続ける。一番槍のチャンスに目が眩んでいるのだ。

コールが消えるのと同時に、チカを確認した管理者が戦いを止めるように警告のウィンドウを屋敷内に出現させた。

管理者の介入に警備たちの動きは止まる。ラゼツタも管理者の介

入には驚いている。

これによって事態は収拾へと向かっていった。

去った仲間と戻った仲間

レヤアが警告を出した後、戦闘は収まりの様相を見せる。とはいっても互いに油断はせず、武器を構えたまま様子見という感じで、いつでも再開できそうな雰囲気だ。

緊張した空気が満ちる空間に陣が描かれ、そこからレヤアと見知らぬ管理者二人が現れた。

見知らぬ管理者はウィンドウを開き、すぐに作業を始めた。

「これはこれは管理者の方々、当屋敷になんの用事ですか？」「すぐに動揺を静めたラゼッタがレヤアに話しかける。

「プレイヤー・ラゼッタ、あなたをプレイヤー・チ力誘拐の罪で連行します」

「なんのことですか？ 誘拐など私にはとんと覚えが」
レヤアの言葉をラゼッタは認める様子はない。

「それよりも街中で戦闘行為を行うばかりか、私有地に許可無く押し入った者たちを捕らえることのほうが先では？」

私の兵も暴れはしましたが自衛のため。不可抗力というものでしょう」

ラゼッタは、管理者が現れたのは騒動があつたからだと考えている。一介のプレイヤーが管理者とつながりをもっているとは予想していないのだ。

だからレヤアの言葉に驚くことになる。

「彼らに罪はありません。彼らは私たちの依頼でここにいるのですから」

「ど、どどういうことですか！？ 管理者が平穩を乱す行為を依頼するなど！」

警備たちもどどういうことだと口々に叫んでいる。

「黙りなさい！ 調べはついているのです！」

本当ならば裏市で捕まえることになっていたので！　これだけ言えばなぜ私たちが依頼したかわかるでしょう」

「裏市？　初めて耳にする言葉ですが？」

「しらをきつても無駄です。」

欲を出しさらった相手が変わるかつたですね。チカという子供のプレイヤーは管理者の子供。私たちはその子供をブラーゼフロイントに預けていました。

彼らがあの子を捨てるわけはありませんし、あの子も彼らから離れはしませんよ」

「さらったばなどと人聞きの悪い。私は保護しただけですよ」

「好きなだけ言い訳しなさい。あなたの未来はもう決まっています。屋敷の周囲には結界を張っていて逃げることはできませんよ。そしてすでにあなたの財産はこちらで没収しています。レベルも1まで下げています。下手に抵抗すると死んでしまいますよ？」

「ば、ばかな!？」

ラゼツタは慌ててウィンドウを開き確認する。一千万を超えていたお金は0へ、種類多かつたアイテムも消え、高くはないがある程度はあつたレベルも1へと変わっている。

「横暴だ!」

「なんとも言いなさい。この世界では私たち管理者がルールです。今は力が抑えられていても、怪しい者に対して処罰を行うことくらいは可能です。」

これはラゼツタに組したあなた方にも言えることです!」

権限が押さえ込まれていなければルールと言い切ったレヤアの言葉に間違いはない。なんにでも権限を振りかざすとゲームとして面白さを失うので、めつたなこと管理者がしゃしゃりすることはない。だが今回は許容範囲を大きく超えている。それを思い知らせるため、自分たちがルールで処罰する能力を有しているのだと示す。

レヤアの言葉に警備たちはウィンドウを開く。彼らのレベルも下げられていた。

これらすべて作業している管理者の仕事だろう。

ここまで力の差が開くと、警備たちの戦意は萎え武器から手を離す者が出てくる。はむかつて一撃死が目に見えているのだ。ラゼッタが激を飛ばすが、聞き入れられるわけもない。ラゼッタ自身の力も失われているのだから。

警備たちはブラーゼフロイントメンバーに武器を突きつけられ、隔離施設行き転送陣へと入っていく。逃げようとした者もいたが、結界に阻まれ捕まった。

喚くラゼッタはタッグとセバスターに両脇から抱えられ、レヤアの前に連れて行かれる。あまりの煩さに全員の顔が顰められる。

こんなことしてただで済むのか、知人がこのことを知り大人しくしていると思うな、お前らなど俺の権力をもつてすれば、など言い放っている。

そんなラゼッタにレヤアが一つの事実を突きつける。

「目を覚まさない！ ここは現実ではなく、ゲームの中です。この中で得た権力など、所詮虚構、中身の無いもの。」

いくらお金を持って兵を動かせると言っても、権力で私たちに害せると言っても、なんの意味もないということがわからないのですか！

たしかにお金や権力は怖いです。ですがそれは現実での話。まがいものの力など恐るに足りません」

目を覚まさせるためゲーム内だということを強調する。

ラゼッタはゲーム内で力を得るうちに勘違いしていったのだろう。閉じ込められ、なにもなかも思い通りにできる力を使い続け、現実と虚構の境をあやふやにしていった。

魅力的すぎる力を手放す気はないラゼッタは、レヤアの言葉を受け入れる気はないようだ。すでに力を取り上げられているということすら頭の中から抜け落ちていられるのかもしれない。

喚き続けるラゼッタにレヤアは不機嫌さを隠そうもしない。

「陣の上に運んでもらえませんか？」

これ以上の会話を行う気が失せ、タッグとセバスターに頼む。

二人は従い、ラゼツタは隔離施設へと飛ばされた。

「ようやく静かになったわ」

アイオールが緊張を解きながらいうと、レヤアは溜息一つ吐き同意した。

「皆さん、協力ありがとうございます。これで人身販売を行っている者たちを捕らえることに一歩近づきました」

「ラゼツタに吐かせて、そのあとは管理者で全部やるのか？」

言外に手伝う必要はないのか、と意味を込めたタッグの問いにレヤアは頷きを返す。

「はつきりとした証拠が手に入りましたから、あとはこちらだけで十分です。」

全財産、レベルを没収しますよ。そのあとは説教をして、どうやって人身販売なんかできるようになったのか聞きだします」

「頑張ってくれとしか言えないな」

「ええ、全精力傾けます」

気迫の籠った返答に、全員が本当に実行しきるだろうという確信を持った。

しかしそれどころではなくなるとは、この場にいる誰もが予想していない。

作業をしていた管理者二人が、作業を終え全員に一礼し帰っている。屋敷内にいたさらわれてきたNPCも、一度データに戻され回収されている。連れ帰り、どうやって商品とされたのか、分析する予定だ。

「それでは私も失礼します。お礼はまた後日に」

「ちよつと待った！」

頭を下げ、帰ろうとしたレヤアをヴィオが止めた。

「なにか聞きたいことが？」

レヤアに近づいて言いづらそうに口を開いた。

「今回のことで死んだ人がいるんだ。その人が飼っていた馬がいる

んだけど、この場合その馬ってどうなる？」

手紙にコールの死後ホワイトサンのことを頼むと書かれていて、本当に死んでしまいホワイトサンがどうなるのか気になったのだ。

コール死亡のことをチカに聞かせたくないの、小声で聞く。チカにコールのことを説明するときは、隔離施設に送られたと言うだろう。

「死者が出ていたんですか!？」

驚きで声が大きくなるレヤアの口をヴィオが押さえる。

「チカに聞かせたくないから小声で」

チカの様子をちらりと窺うと、銀丸をそばに置いてリオンに抱きつかれていた。あの様子だと、こちらの会話には気づいていないだろう。

「コールという人がチカを庇って」

「本当に申し訳ありません。私たちの頼みで死者を出してしまい」

「自業自得といえは、そこまでなんだけどね。生きて反省してもらうつもりだったんだけど」

近寄ってきたアイオールの言葉にどうということですか？ と疑問の

視線を向けるレヤア。

アイオールは簡単に事情を話していく。

「チカちゃん誘拐の原因ですか……」

事情を知っている者は複雑な思いとなる。今回の騒動の原因で、死んだのだからまさに自業自得。しかし行いを悔いて助ける側へと回った。そして命がけで守った。

罵ることはできず、褒めることも難しく、言い表すに難しい感情を抱えることとなる。

「……持ち馬ですが、今回の場合は野良へとかえります。草原に連れて行って放せばどこへなりとも行くでしょう」

「世話を頼まれたんだけど、持ち馬にすることはできる?」

「できますよ。飼い主がいらない状態ですからね。捕まえて世話をするだけなら、誰にでもできます。」

戦闘に参加させたり、乗りこなすためにはスキルが必要ですが「世話できるなら、それでいい。ありがとう」

「いえ、お礼を言われるほどのことではありません。

それでは今度こそ失礼します」

どこことなく沈んだ様子を見せレヤアは去っていった。みなぎるほどに見せていた気迫が薄れている。犠牲が出たことにショックを受けているのだろう。ショックを受けているのはコールの死を見た者も同じだ。

「私たちも帰るわよ。留守番組が首を長くして待ってるわ。

話さなくちゃいけないこともあるしね」

コールのことを皆に話すつもりなのだ。話すことが正しい判断なのかわからないが、皆に知ってもらいたいのだ。

帰る前にホワイトサンを連れて来るためヴィオは庭へと向かう。

事情を話す前にコールがいらないことで察したのだろう、ホワイトサンは気落ちした様子を隠さない。ヴィオはそんなホワイトサンに謝り、一緒に行こうと誘う。少し渋る様子を見せたホワイトサンだが、コールからの頼みでもあると伝えると納得したのか、手綱に引かれ歩き出した。ホワイトサンが了承したことで、馬主はヴィオとなった。

一行は静かに泡村への帰途へとつく。

ラゼッタの敷地で暴れまわったブラーゼフロイントだが、その様子をほかのプレイヤーに見られることはなかった。屋敷の周囲にはった膜は音も遮断し、騒音を周囲に撒き散らすことを防いでいたのだ。ぞろぞろと出てきたときも、なんらかの集まりがあったのだろうと思われていた。

一夜明け、戦いの疲れのとれた一行は、今回の騒動のことを聞くため全員が広間に集まっている。

そう長く話すつもりもないので、アヤネの世話を見る者は今はいない。

約束通りラゼッタの屋敷に行っていた間に管理者が来て、アヤネの容態を見ていった。診断結果はどこも異常なしというものだった。寝ているということしかわからなかったのだ。管理者は容態が急変したらすぐに呼ぶようにと言って、首を傾げながら帰っていった。

「騒動の顛末を話すわよ。」

「まずはチカがさらわれたときのことからいきましょうか。」

「チカ、あの日あなたがさらわれたときは覚えてる？」

「うん」

「コールに誘われてホワイトサンに乗って散歩に出たのよね？」

「うん。途中までは普通の散歩だったよ」

「コールの話だといきなり襲われたってことだったんだけど、実際はどうだった？」

「おそわれてなんかないよ。どつかの林でコールさん待ち合わせしてたみたいで、目的地に到着したら止まって一緒に降りて、時間つぶしてた。」

「しばらくしたら知らない人たちが来て、コールさんとなにか話してて、わたしはその人たちの乗ってきた馬車に押し込められた。」

「助けてって言うってもコールさん助けてくれなかった……」

「今思い出しても怖いのだろう。話しながら小さくチカの体が震えている。そばにいて震えを感じとった銀丸は励まそうとチカの頬をなめている。」

「その馬車であの屋敷に連れて行かれ、そこからまた移動してテントのある場所に連れて行かれたのね？」

「チカはこくりと頷く。」

「ありがとう。もう話さなくていいよ。思い出させてごめんね」

「チカに労わりの言葉をかけて続ける。」

「こついうわけで発端はコールにあるわけよ。さらに辿ると、人身販売していた奴らまで遡れるわね」

「そのよ、コールがなんでそんなことしたのか、わからないんだが」
「タッグが皆の疑問を代表して聞く。」

「借金が原因よ」

端的に述べられた原因に、心当たりのある者はいないようで誰もが首を傾げている。

「コールはお金に困ったそぶりをみせなかったのだ。」

「ホワイトサンってすごくいい馬でしょう？　一目ぼれで買い取ったはいいけど、その時点で借金があつて、さらに飼育費にお金がかかったらしいわ。そのあとはあれよあれよと借金が膨れ上がったというわけ。」

そんなことを私たちに打ち明けるのは恥ずかしかったようですね、相談もできずにいたら、借金の形としてホワイトサンが没収されそうになったと。

それはなんとか阻止したくて交渉の末、チ力誘拐に繋がったらしいわ」

「じゃあ、装備のランクが下がったことも借金が関係してたのかな？」

ルーが思い出すように呟いた。

「どうしてか聞いたら、こっちのほうが使いやすいからって言うってたけど、借金返済のために売り払った？」

「かもしれないわね」

「あの時点で気づいてあげられていたら、今回の騒動はなかったのかしら……」

「それはイフでしかないわ。それに気づけなかったのは全員だしね、ルーだけのせいじゃないわよ」

ちなみに金貸しは、商人の称号を得ることで使えるようになるクラススキルの一つだ。借金の形をとるのは、借り逃げされないように商人を守るためのシステムだったのだが、今回はそれを利用し脅された形になる。コールのほかにも似たようなことになっているプレイヤーはいる。

「馬鹿な奴よコールは。借金のことくらい相談に乗ってくれればいいのに」

馬鹿とは言っているが、そこに嘲笑の意は込められておらず、頼ってくれなかったことに対しての寂しさが込められている。

「コールはどうなったんだ？ いないということは隔離施設に？」
「ずっと玄関前で戦っていたタツグは屋敷内で起きたことを知らないのだ。」

「ええ」

チカがいるので、隔離施設に行ったということにする。庇って死んだと聞かせるつもりはない。

短い頷きにタツグは死んではないと知って安堵する。誘拐の片棒を担いだことは許せないけど、死までは望んでいないのだ。

「リーダー、あるときコールさんの体」

「隔離施設に送った転送による光よ」

屋敷内へと入ってきたデルカはコールが消える瞬間を見たのだ。

そのことを聞こうとするデルカを遮り、アイオールは隔離施設へ行ったと再度言った。

向けられた視線と言葉から話題にしたくないのだと読み取り、デルカは口を閉じる。

今のやりとりで、本当のことを悟ったタツグはあとで確認しようと決めた。

「これで話は終わりよ。なにか質問は？」

皆を見回し問う。誰も口を開くことはない。

「じゃあ、解散！」

今後の予定はないから、ゆっくり体を休めなさい」

パンパンと叩いた手の合図で、皆ばらばらに散っていく。

そんな中、アイオールにヴィオとタツグが近づく。タツグはコールのことを聞くのだろう。

「アイオール」

先に声をかけたのはヴィオだ。

「どしたの？」

「ホワイトサンのことなんけどさ。俺の財政力じゃ飼育費だすのは

無理」

馬主登録したので、世話は主にヴィオの仕事になるだろう。手紙を読みお金がかかると知ってはいたが、再度話を聞き、早々に無理と判断し相談することにしたのだ。

「そのことなら心配しなくてもギルドから出すよ。始めからそのつもり」

「そっか、よかったあ」

「話はそれだけ？」

ヴィオは頷く。

「それじゃタツグはなにを聞きたいの？」

「コールの本当のこと」

小声で答える。かすかにアイオールの顔が強張るも、すぐに解しここでは駄目だと違う場所に移動する。

話す場所として選んだのは、アヤネが寝ている部屋だ。様子を見るつもりだったので、ヴィオもいる。

アイオールとタツグが話す横で、ヴィオはアヤネが起きていないが覗き込む。

そのとき、アヤネの瞼が震え、ゆっくりと開かれた。

「二人とも！ アヤネが起きた！」

必要以上に大声だったため、部屋の外にもアヤネが起きたことは伝わることとなった。

拠点喪失

「やっと起きれたよ」

アヤネが目覚めてからの第一声がこれだ。まるでずっと意識はあったようだ。とヴィオたちは思う。

体を起こし、そこで初めてヴィオたちに気づいたようで、少しだけ目を見開き驚いた様子を見せる。

「おはよ」

「えっと、おはよう」

何事も無かったかのように挨拶され、ヴィオは目覚めたことの嬉しさよりも戸惑いが勝る。

「どこか体に異変はあるかい？」

アイオールが体の調子を問いかける。

「どこも異変はないよ。寝ている間にちゃんと直したから」

「寝ている間に治した？」

なおした、という部分のニュアンスの違いに気づかずアイオールは疑問点を声に出す。

「そんなことできるスキルなんかあった？」

タッグに問いかけるも、返ってきたのは知らないというリアクションだ。

「スキルといえばスキルかも？ でも私固有のものだし、記憶が戻ったからできたんだ。でないはずと眠りっぱなしだったよ」

「そうなんだ……って記憶が戻った!？」

なんでもないかのようにアヤネが言ったので、ヴィオたちは危うく聞き逃すところだった。

本当に？ と問うヴィオにアヤネは頷き。初めて話したことを事細かに話していき、本当のことだとヴィオは確信を持つ。

「記憶が戻ったきっかけはなんだったんだ？ やっぱリショックを受けたから？」

タッグの問いにアヤネは頷いた。

「命の危機に陥るほどの強いショックが封印にも影響を与えて、綻びができて封印を解けた。解けるのに時間かかったし、解けたあとでも破損データの修復に時間がかかって眠りっぱなしだったんだよ」「昔はテレビを叩いて直したと聞いたことがある。それと同じことが起きたのか」

あながち違うとも言い切れない。実際、それが直るきっかけになったのだから。

アヤネは反論できずに微妙な顔つきになる。

「記憶が戻ったってことは氷窟最下層に封じられていた理由もわかるってことかい？」

「うん。あの子がやりたいことを邪魔されなかったためだと思う。おまけに記憶まで封じて、助け出されても手出ししないようにって保険までかけた」

「あの子？」

誰のことだかわからずアイオルは首を傾げる。

「名前は……そういえばなかったっけ。管理者がゲーム総統括AIって呼んでた子」

「ゲーム総統括AI……って私たちを閉じ込めた張本人じゃない？　なんでそんな奴に封印なんか、いや邪魔されなかったためって言うたわね、ならアヤネもゲーム総統括AIと同じようなことをできるってこと？　でも一介のプレイヤーがそんなこと。ハッカーの類？　そこらのコンピューターと違うのよ、どうやって侵入するの？」
考えが漏れ出ていることに気づかずアイオルは思考を進めていく。だが考えても答えまではたどり着くことはできなかった。

結局、考えることを止め、本人に聞くことにした。

「あなた、何者なの？」

アイオルと共にヴィオとタッグもじつとアヤネを見つめる。

「ゲーム総統括AIと似たような存在だよ。」

この身はプログラム。電子空間上にのみ存在する人工AI。希代

の天才小林意太郎が娘を模して生み出した者、それが私」

三人の視線をもともせず、なんでもないことのようにあっさり
と告げた。

「AIってありえないだろ！　ここまで人間に似たAIなんて聞いたことないぞ！？」

「世間に発表されてないから知られてないのは当然」

驚くタッグにまたもやあっさり告げた。

「人間そのものじゃない、本当にプログラムなの？」

「口で言うだけじゃ納得できないか……そうだねなにか証拠はつと
アヤネは目を閉じ考え込み、なにか思いついたようで頷き目を開
けた。

「これでどう？」

ピンっと立てたひとさし指を振った。

いくつものレアアイテムが現れては消えていく。

「すごいと思うけど、似たようなことは管理者にもできたわよ？」

AIじゃなくて管理者の一人ってことにならないかしら」

「それならこれは？」

そう言って、もう一度ちょよいつと指を振る。

すると部屋の内装が歪み、次の瞬間には海の中、空の上、草原と
次々変わっていく。十回以上の変化を終えて、元の宿の内装に戻る。

「プログラムをいじって内装を変えてみた」

どうつと首を傾げるアヤネは、どこか疲れた様子に見える。

「大丈夫か？」

「病み上がりなのに、ちょっと調子にのったから疲れちゃった」

心配するヴィオにやや元気のない笑みを返す。

「きついなら横になったら？」

「そうさせてもらおうかな」

ヴィオの言葉に素直に従ってアヤネはベッドに寝転がる。

「前準備もなしにあんなこと……どうやら本当らしいわね」

「そうだな。あれだけのもの見せられたら本当だっていう可能性が

高い」

「ということとは、今のこの状況から抜け出せる機会が巡ってきたんじゃない？　それができそうだからゲーム総統括AIはアヤネを封じたんでしようし」

「できるよ。条件つきだけど」

アイオールとタツグの会話に割り込み答えた。

脱出可能という言葉に、ヴィオたちの表情は輝きを見せる。

「条件？　それはなに？」

「たくさんのプレイヤーと管理者の協力。私だけの力だとあの子の近くまで行くのが精一杯。ここはあの子の世界だから、あの子に有利なの。真正面からぶつかりあっても力負けするのが目に見えてる」

「となると一度管理者に会いに行かないといけないわね」

「できるだけ早いほうがいいわ」

「私が記憶を取り戻したことを気づかれるから。これまでは記憶がなかったから監視くらいに止めてたんだろうけど、これからは直接的な手段に訴えるかも」

「具体的には？」

「ここに再び私を捕らえ、ほかを排除するために上位ボスクラスのエネミーが現れる可能性もある」

アヤネ以外の顔が引きつる。今までは村の中は安全地帯だったのだ、その安全地帯すらなくなる可能性を示唆され能天気な構えではいられない。

村や街にはエネミーは侵入不可能、これがこのゲーム内での常識だ。村や街中にいるかぎり命の危険にさらされることはない。管理者主催のイベントですら、エネミー侵入というといったものはなかった。これは村や街が絶対安全地帯ということを示していた。

裏市ではゴブリンが侵入していたが、あそこは森中の広場に勝手にテントを立てていただけで、村に値するものだと認められていなかった。

「今すぐは無理そうね。どれくらいで問題なく移動できるようにしよう?」

「だいたい三時間くらいかな。一眠りするくらい。それくらいなら余裕はあるはず」

「わかった。あなたが寝ている間に、私たちは説明と移動準備を整えておく」

念のために見張りはいるかと聞かれ、落ち着かないからとアヤネは断った。

ヴィオたちは、目を閉じたアヤネを残して部屋を出る。部屋の前には、アヤネが起きたとに気づいて集まったメンバーたちがいた。部屋に入らなかつたのは、話し合っていて雰囲気的に入りづらかつたからだ。

「ちようどよかった。これから話したいことがあるから、また大部屋に行こう」

アイオールの言葉になんだろうと首を傾げつつ、メンバー全員で大部屋へと移動する。

そこでメンバーは信じられない話を聞くことになるうとは想像もしていない。ヴィオたちと同じように、驚き、疑惑を抱き、希望を持った。直接アヤネのやったことを目にしていないので、完全に信じているというわけではなさそうだ。

「アヤネが移動できるようになったら全員でグランドセオに行くわ。今からだいたい三時間後よ、それまでに移動準備整えてちようだい」

「全員ですか?」

ミゼルが疑問の声を上げた。

「そう、全員で。もしかするとアヤネが去ったことに気づかず、ここにエネミーが現れるかもしれない」

それが強力なエネミーだったら、留守番してる人たちで立ち向かう事態になるわ。そのエネミーが上位ボスだったら勝てないわ。逃げる暇すらないかもしれない。そんな事態にはしたくないのよ。だから全員で行動する」

「移動の際にそれが現れたら？」

「移動はレポート使うから、道中敵に会うことはないわ」

ミゼルは納得したようで、それ以上の質問はないと口を閉じる。

ほかに質問はないかとアイオールは全員を見渡す。セバスターが手を上げる。

「アヤネの話に信憑性ってあるんですか？ 正直なところ、疑わしいって気持ちがあるんですけど」

「私も完全には信じたわけじゃないから。でもかぎりなく本当に近いのではと思ってる。そう思えるだけのことは見た」

「俺も嬢ちゃんと同じだ。あれは一介のプレイヤーには不可能な芸当だった。封じられていたっていう状況も話に説得力を持たせるしな」

代表者二人がそう言うのならと、メンバーたちは信じる方向へと気持ちを傾ける。

メンバーたちは移動準備のため動き出す。ヴィオたちも同じようにアイテムの買出しなどのため宿を出て行った。

泡村を出る準備を始めて一時間を過ぎた頃、アヤネの予想よりも早く事態は動き出す。

「リーダー！」

デルカが慌てた様子で、宿にいたアイオールへと駆け寄ってくる。「どうした？」

「エネミーが村に入ってきて、プレイヤー、NPC関係なく襲い始めました！ しかも見たことないエネミーですっ」

「なんですって!？」

「タッグ！ 聞いたわね！」

「応ともさ。いくか！」

「いや、あなたはここに残ってアヤネたちを守って！ デルカもよ！ 出るのは私っ。ここにいない戦闘向けのメンバーはすでに戦っ

ているでしょ？」

デル力は頷く。

「もしかすると早めに出ることになるかもしれないから、ここにアヤネたちを集めておいて。」

行ってくるわ！」

手短かに指示を出してアイオールは宿を出て行った。向かう先は村入り口。

村入り口ではヴィオたちが鎧をまとった四体のエネミーと戦っている。戦況は悪い。数の上ではヴィオたちのほうが上なのだ。初めて戦うエネミーで情報がないということと、単純にこのエネミーが強いからだ。

戦っているのはヴィオ、銀丸、セバスター、ミゼル、リオン、ヤートス、つばき。うちセバスターとヤートスは回復のみを行っている。前衛に出ているのはヴィオと銀丸とつばき。リオン、ミゼルは弓で大将以外の足を止めている。正直なところ、絶え間なく飛ぶセバスターのポジションとヤートスの回復魔法で、なんとか耐えているという状況だ。この中で一番の火力は刀を振るうつばきだが、その攻撃も相手の重厚な鎧をまとった大将格に決定的なダメージを与えているように見えない。

アイオールは大将を落とすことを決め、よく狙いをつける。この一撃で倒れてくれることを祈りながら。

「今っスキルアーツ・トライランス！」

持つ大剣を横薙ぎにしてヴィオと銀丸とつばきを引かせた大将へと、アイオールは自身の持つ最大火力の攻撃魔法を叩き込んだ。

地面から現れた鋭く尖った氷柱が左右から大将に突き刺さり、動きを封じる。そこへ止めとなる三メートルほどの氷の槍が頭上から大将めがけ勢いよく落下する。

氷の槍は狙い変わらず突き刺さり、大将は大きなダメージエフェクトをほとばしらせた。

倒したとヴィオたちは思うが、その思いを嘲笑うかのように大将は動き出す。

「耐えた!？」

「まだ戦いは続くわ! 今のうちに補助魔法使つときなさい!」
驚いたのはヴィオたちだけで、予想していたアイオールは素早く指示を出す。

アイオールは前衛たちに防御力を上げる補助魔法を使い、セバスターはリオンに技力回復薬を飛ばす。ヤートスは弓組みにダメージ増加の補助魔法を使う。

アイオール参戦と補助魔法の使用で、戦況は五分以上へと持ち直せた。今まで補助魔法を使っていなかったのは、相手が強く回復だけで精一杯だったからだ。

前衛が受けるダメージが減ると、回復担当組は回復以外に気を回せるようになる。弓組の与えるダメージが増えたことで、敵の動きはさらに鈍る。油断せずにいけばこのまま勝ちとなる。

そして十分ほど経って、ダメージの積み重なった大将がつばきの振るった刀によって倒れたとき、全員が勝ちを確信した。

だがそれは早計というものだった。

手下を率いる大物のエネミーには、とある特殊能力を持つものが多い。それは自身の死によって起こすことのできる能力。すなわち手下召喚。これがあるので四体という少ない手勢を送り込んだのだらう。

大将が消えるのと同時に、三十体のエネミーが現れた。それらは弓組が足止めしているエネミーと同じ姿をしている。

静かに佇む三十体の鎧は大きな威圧感を全員に感じさせた。

「召喚があつたか!? それにあの数は」

アイオールが焦った声を漏らす。通常の手下召喚よりも多い数に焦りはさらに増す。瞬時に戦況を判断し、勝ちはないと読んだ。

「少しずつ宿までひくよ! 無理に倒そうとしなくていい。防御と近づけさせないことのみ考えなさい!」

すぐに飛んだ指示のおかげで、ヴィオたちは戦意をわずかになくすだけすんだ。

矢を放つ手を止めずリオンは、皆に聞かせるため大声でアイオルに聞く。

「宿まで引いて、それからどうするんですか!？」

「テレポートでグランドセオに飛ぶ。全員一緒ってわけにはいかな
いから、三度にわけることになる。始めは非戦闘員、次に戦闘の苦
手な者。最後に戦闘員」

「私たちは全員が移動し終えるまで時間を稼げばいいんですね？」

「そのとおり」

「了解です！」

エネミーたちの攻撃に耐えしのぎつつヴィオたちは宿へと引いて
いく。その途中でNPCにも被害が出るが、自分たちのことで精一
杯でどうにもできなかった。世話になったNPCを助けることがで
きないことに悔しさを感じつつ、宿の近くまで引くことができた。

宿にはまだ被害は出ていない。別働隊がいなくとよかったと、ア
イオルは胸を撫で下ろす。

表から聞こえてくる騒ぎを聞きつけ、デルカが出てきた。

「リーダーっなんすかこの数!？」

「手下召喚使われたのよ! それよりもっ皆を一箇所に集めてるっ
?」

「はいっ」

「じゃあ、これからグランドセオに飛ぶ。デルカはここであいつら
を食い止めててっ。」

皆ももう少しだけ頑張つて!」

了解と返事が返ってくる。

「ホワイトサンもお願い!」

宿に入っていくアイオルへとヴィオは声をかける。振り向く余
裕のないヴィオの背に、アイオルの返事が聞こえた。

宿に入ったアイオルは集まっている者たちに事情を説明し、非
戦闘員を厩舎へと連れて行き、ホワイトサンと一緒にそこからテレ
ポートで飛んだ。

アイオールがグランドセオへと飛び五分。普段ならば短く感じる時間も、耐え続けるという状況ではとても長く感じられる。

「待たせた！」

アイオールが宿入り口を半円に囲んでいたエネミーの間を突っ切ってヴィオたちの元へと戻ってきた。

なぜそのようなことになったかというところ、特殊魔法スキルアーツ・テレポートの性質故だ。

テレポートは事前に登録してある場所へと移動できるスキルだ。超能力スキルアーツ・テレポーターと違い世界すら越えることも可能だ。しかし出現箇所は街やダンジョンの入り口に固定される。今回も泡村入り口へと戻ってきたのだ。

一方、テレポーターはフィールド、街中、ダンジョンと一度行った場所ならばどこにでも移動が可能。しかし世界を越えることは無理で、移動もスキルを使える者のみという効果になっている。アイオールは宿入り口から、大声で護衛をしていたタッグを呼ぶ出てきたタッグの代わりに、セバスターとヤートスとミゼルを連れ宿の中へと入っていく。

そして再び、五分ほど経ち村の入り口方面から走ってきた。手下の間を突っ切って、リオンのそばで立ち止まり、疲れた様子で息を静めている。疲れているのは皆も同じだ。次々と振るわれる剣により、絶え間なく削られていく体力に恐怖しながら、アイオールの帰りを待っていたのだ。補助魔法がきいているおかげで、体力の減りは微々たるものだが、回復役がいらないおかげで体力は減りっぱなしだったのだ。精神的な疲労が大きかった。

参戦したタッグにより、少しはエネミーの数は減った。しかし人数差があるという部分は変わらなかった。二体三体倒したところで、多少囲みに隙間ができるだけだ。

「私たちが最後ですよね？」

リオンの問いにアイオールは頷きを返す。

「技力は大丈夫ですか？」

戦いによる魔法での消費と連続したテレポートで、技力に余裕がないのではと心配する。

「大丈夫。セバスターに技力回復薬もらってきたから」

そう言っただけで、ポーションに似たアイテムを取り出し、いっきに飲み干す。

「特殊魔法スキルアーツ・テレポート！

皆が集まって！」

戦っている者たちに声をかけ、そばへと集まった瞬間スキルアーツを発動させた。

グランドセオ入り口へと移動し、エネミーたちの姿がいなくなったことを確認したヴィオたちは大きく息を吐き、その場に座り込んだ。

戦っていた者たちは、乗り切ったという思いで胸が一杯だった。

先に避難していた者たちが心配そうに近寄ってくる。彼らに大丈夫だと、疲れた笑みを返し立ち上がる。

向かう先はバッフェンスト城。このゲーム内で一番安全と思われる場所。

ここにきてアヤネの言葉を疑っている者は皆無だった。村の中にエネミーが侵入するということが本当に起きたのだ。そのことが話に説得力を持たせることになった。

帰ることができるかもしれない。その希望を胸に皆、バッフェンスト城へと歩き出した。

望み達成の兆し

アヤネとアイオールとタッグを除いたギルドメンバーが城の一室で思い思いにくつろいでいる。この部屋はいつも代表者会議に使われる部屋だ。

城に入ってアイオールがレヤアを呼び出し、そのレヤアが手配し開放してくれたのだ。

ヴィオのそばには銀丸とホワイトサンとチカがいる。銀丸がヴィオのそばから離れないので、ぴったりと銀丸にくっついていてチカもヴィオのそばにいるのだ。

アイオールたちはここにきた事情を管理者たちに話している。その話し合いは別室で行われているため、ここにはいないのだ。

扉が開き、アイオールたちが戻ってきたのかと全員の視線が集まる。入ってきたのは、食べ物と飲み物ののったカートを押すバフだ。「皆大変な目にあつたようじゃの。食べるもの持ってきたから好きに食べるといい」

皆カートに集まり、それぞれに好きなものをとっていく。

ヴィオもレモンティーとマフィンを手取る。そのついでにバフに話しかける。

「バフさんは俺たちが戦ったエネミーのこと知ってる？」

「うん？ ああ、少し変わった形の黒鎧と黒緑鎧のエネミーじゃったか。知つとるよ」

「あれって俺たち初めてみるエネミーだったんだけど、どこかレベルの高いダンジョンにでるエネミーなの？」

二人の会話に興味が湧いたのか視線が集まる。

「わしも聞いた当初は耳を疑ったものじゃ。証言者が一人だけなら、見間違いかホラじやろうと聞き流したんじゃがな」

どうやら管理者たるバフでもヴィオたちが戦ったエネミーは疑惑は抱いているようだ。

「お前さんたちが戦ったエネミーはな、いまだ実装されておらん」
「どこにも出てこないってこと？」

「うむ。そのはずじゃった。」

戦ったのは、レコンキスタといってこのゲームが本格オープンしたときに始まる大型クエストのために用意されていたエネミーじゃ。データのみの存在のはずなのだ。

黒鎧はレコンキスタ・ガード。黒緑鎧はレコンキスタ・ジェネラル。ほかに灰鎧ポーン、濃赤鎧メイジ、紺鎧ナイトがある。

ポーンは特徴のない兵。ガードは物理魔法共に守備力が高く、ジエネラルは兵をまとめ、メイジは魔法を使い、ナイトは攻撃力と守備力に優れておる。

強さとしてはガードで適正レベル40弱、ジエネラルはレベル60。ジエネラルの強さは中位ボスと同程度じゃな」

「俺ってわりと無謀なことしてたのか」
「ヴィオのレベルは36。20も足りない状態で立ち向かっていたのだ。死なずにすんだのは、つばきと銀丸がいたことで的が分散したとと絶え間ない回復があったからだ。」

どつりで勢いよく体力が減っていたはずだと、ヴィオは今さらながらに背筋が凍る思いがした。

「低レベルで有利に戦うのなら補助魔法スキルが必須じゃな。」

ああ、あとレコンキスタ・ロードというジエネラルよりも強いとされるエネミーがいるが、これは外装のみの存在で、データとしてはなにも決まっとな。じゃからこいつが出てくることはないじゃろ
うて」

「ポーンが一番弱いんだよね？ そいつの強さは？」

「そうさな、レベル20ほどあれば互角以上に戦えるのう。レコンキスタ軍の中では一番弱いけど、エネミー全体で見れば雑魚というわけではない。」

「ついでにレコンキスタ自体の設定も聞いてくか？」

「いや、いいよ。そっちよりも弱点とかがあつたら聞いてきたい。」

また戦うときがあったら、そのときは楽に戦えるように」

「弱点か……これといって特別なものは今はない。防御力を下げて叩くといったものか」

「今はって？」

「のちのちレコンキスタに対抗するための手段を編み出したといった設定で、アーマーブレイクというアイテムをポンポコ屋から売り出す予定なのじゃよ。」

そのアイテムははまだ名称のみで、データとして存在しておらん
「今から作ることは？」

「時間がのう」

現状で手一杯で、余裕があまりないということだろう。少しある余裕を使えば、休む間もなくなる。

しかし別の部屋でレヤアが行ったことで余裕ができ、開発が間に合うことになるうとはバフは予想もしていない。

「ほかになにか聞きたいことはあるかの？」

「んー……今はない」

「そうか」

「あ、聞きたいことじゃないんだけど、バフに言いたいことがあったのよ」

ルーが思い出しかのように口を開く。

「なんじゃい？」

「バフが作ってアジトに置いてたアイテムとかインテリアがあったでしょ？ あれ持てるだけ持ってきたんだよ。でも予定が変わって急にでることになったから全部は無理だったよ。ごめんね」

「あー忙しくて正直忘れておったよ。」

「そうかそうか、持ってきてくれたのか。ありがとう」

「今渡す？」と聞くルーにバフは頷きを返す。

ルーたち非戦闘員が集まり、持ってきていたバフの作品を出していく。自分たちの私物を優先したので、それほどたくさん物を持って出てこれたわけではない。ほかの荷物は戦闘員に持ってもらうお

うと考えていたのだ。だがエネミーの強襲でそんな暇はなくなったのだ。

床に鎧やソファアやちよつとした仕掛けを施した置物が並んでいる。バフはその一つ一つを懐かしげな感じで手に取り、しまっている。初めて作った物という思い出の品もあって、持ち出してくれたルーたちに改めて感謝の思いを抱く。

「ありがとよ。わしいいい仲間を持った」

「これくらいのこと、そこまで言わなくてもいいじゃないのさ。照れちまうよ」

頬を指でかきながらルーは視線をそらす。

「そう言えるくらいのことをしてくれたのさ、お前さんたちは」
上機嫌に言っただけバフは仕事があるからと去っていった。

時間は少し戻る。アイオールたちはレヤアに案内された小部屋で話し合いを始める。

ホールで簡単に事情は説明してある。すでに調査のため管理者が一人、泡村にとんでいる。

四人はテーブルを囲んでいる。十分に休息の取れていないアヤネはうなだれた状態で、目を閉じていて眠っているように見える。

「さっき聞いたエネミーが村の中に侵入したという話は本当ですか？」

確認のため聞くレヤアに、実際に戦ったアイオールとタツグは頷く。

「しかも話を聞くにレコンキスタですか。信じられない話ですが、そんな嘘をつく意味はありませんからね。それにレコンキスタの存在自体知らないはずですし」

運営サイドしか知らない情報提示されれば、信じるほかないだろう。閉じ込められた状態で会社のコンピューターにハッキングもできない。知る方法と言ったら管理者に聞くほかないだろうが、プレイヤーとのんきにそんなことを話し合う暇を持った管理者はいない。

頭痛がするのかひとさし指をこめかみに当てレヤアは溜息一つ吐いた。

「人身販売の件も片付いていないのに新しい問題とは。

そんなことできるのは管理者かゲーム総統括AIです。しかし私たちにはそんなことする暇はありませんから、やったのはゲーム総統括AI。

なにを考えてそんなことを。そもそも目的なんかあるんでしょうか？」

最後の部分は答えを求めている独り言だろう。

そのことに答えが返ってきて驚くことになる。

「目的はアヤネよ。アヤネがゲーム総統括AIに対抗できるから、確保しておきたかった」

「アヤネさんというと裏市で意識を失った方ですよ？ その人がゲーム総統括AIに対抗？ どういうことですか？

わずかですが、共に過ごしたときは特別な感じは受けませんでしたよ」

アイオールは自分たちが驚いたアヤネの正体を話していく。そしてレヤアはアイオールたちと同じような反応を見せた。

証拠を示さないと信じがたいことだろうとは、アイオールもタッグも予想はついていた。

「アヤネ、起きてる？」

「……起きてるよ」

声をかけられアヤネは目を開く。

「私たちのときと同じことできる？」

「大丈夫。

レヤアさん、コントロールパネル開いて、フィールドデータを見てて」

レヤアは言われたとおりコントロールパネルを開く。それを見てアヤネは指を振る。

アイオールたちのときのように部屋に変化はない。けれどもフィ

「ワールドデータを見ていたレヤアの様子は、疑いから驚きへと変わった。」

部屋の中にあるテーブルや壁などの構成データが次々に変わっているのだ。データを見ることのできるレヤアには、派手なことをする必要はないと判断したのだ。

一分もせずに変化は止まり、元のデータと少しだけ差異あるものへと落ち着いく。

「これは……信じざるを得ませんね」

管理者のようにコントロールパネルという媒介なしに直接プログラムに干渉する能力、管理者では無理なデータ操作速度、この二つからレヤアはAIだという話にかなり高い信憑性があると判断する。「ところで少しだけ元のデータと違いますが、なにをしたんです？」

「ゲーム総統括AIの干渉を受けづらくしたの。これで作業がはかどりやすくなるはず。ちなみにこの部屋だけはまったく覗けなくなってるよ。私がこの城にいる間は効果が続くようになってる。」

しばらくは干渉が集中していつもと変わらないだろうけど、のちのちこの細工が生きてくると思うよ」

「のちのちですか」

「そう。私の提案を受けたとして、それを実行した最中にね」

どのようなものか関心を持ったレヤアの目に興味の色が浮かぶ。

それを見てとり、アヤネは続ける。

「私の提案はゲーム内からの脱出」

「脱出……あなたの力ならば可能ですか？」

「アイオールさんたちにも言ったけど、私の力のみだと厳しい。だからあなたたち管理者とプレイヤーたちの力も必要」

「……私たちになにをさせたいのですか？」

レヤアは少し考え込むが、させたいことを思いつくことはなかった。

「管理者に求めることはたくさんある。」

プレイヤーに連絡し、彼らを集める。外と連絡をつけ、外からの

協力も得る。作戦の決行前段階からの準備と決行当日の仕事。

大雑把に言っただけ。

プレイヤーに求めるのは一つ。暴れること。

作戦とはプレイヤーと管理者と外の同時行動。プレイヤーには各ボスと長時間戦ってもらい、管理者と外にはゲーム総統括AIから力を取り戻してもらおう。

これらを同時に行ってもらおうことで、ゲーム総統括AIに負荷をかける。ゲーム総統括人工AIはゲームの維持と処理に気をとられ、力を分散することになる。その隙に私がゲーム総統括AIの元へと飛び、一時的に私がゲーム総統括AIとなる。これによって外との繋がりを戻して、ゲームを正常な状態に戻す。

こんなところよ、私が考えているのは」

ゲーム総統括AIとしての役割を滞りなく進行するため、消耗はできるだけ少なくしておきたい。だからプレイヤーや管理者たちを巻き込む必要がある。巻き込まなかった場合は、すでにアヤネが言ったようにゲーム総統括AIの元へと行くのが精一杯なのだ。そんな状態ではゲーム総統括AIとして動くことは不可能だ。

「ゲーム総統括AIとして動くと言っても、あなたはそのため調整されているわけではないでしょう？ 可能なの？」

「天才小林意太郎が生み出した私をみくびらないで頂戴。」

最低でも二時間ほどならば代用も可能だし、それだけあれば全員が帰るに十分な時間でしよう？」

過信ではなく、やれると絶対の自信を持ってアヤネは言い切った。

「たしかにそれだけあれば、全員が脱出したか調査する時間や強制退去を行う時間もありません」

「それであなたたちは私の提案を受けるの？」

「返事の前にもう一つ聞きたいことが。」

あなたはゲーム総統括AIと会い、ゲーム総統括AIをどうするつもりなのですか？」

レヤアの頭の中には消去という二文字が浮かんでいる。

現状のようなことをやらかしてはいるが、それ以前には協力してゲーム運営をこなしてきたので、管理者たちは今でもゲーム総統括AIに仲間意識があるのだ。そんな存在が消されるかもしれないと不安が湧いてきていた。

「どうするつもりと言われても、特にどうするつもりもないよ」

「消し去る、ということも？」

「それはない……とも言い切れないか。でもなるべくその方向では動かないつもり。」

私はあの子と話して、一時的に役割を譲ってもらうつもり。対応としては説得つてことになるのかな」

これを聞いてレヤアは心の中で安堵の溜息を吐いた。

「話し合いですか。その方法は好ましいものですが、話し合いに応じるでしょうか？」

私はゲーム総統括AIがなにをしたいのか、意思があるのか、わかりません」

「意思はあるよ。なにをしたいのかは私もわからないけどね。それについても聞きたいと思ってる」

「そうですね。」

返事ですが、私個人は受けてもいいと思ってます。ですが皆に説明していない現状では、今の返事が管理者の総意であるとは言えません。

皆に説明し、明日はつきりとした返事をしたいと思っています」

「いろいろいい返事を待ってるよ」

「私もそうなることを願っています」

レヤアとしてはこの提案をぜひとも受けたい。現状では、管理者の力のみではプレイヤーたちを帰すことは不可能なのだ。外との接続を正常なものとしたくとも、ゲーム総統括AIの障害にあつて以前と変わらず短時間のみ接続可能と、状況は進展していない。安全に外へと帰るためには最低でも三十分の接続維持を必要とする。今はやっと十分接続と、接続作業を始めて三ヶ月と少しで十分弱の進

展だ。このままでは帰還に最低でもあと半年かかってしまう。その間になにかのトラブルがないとは言い切れないだろう。そうなればさらに帰還時期は延びる。外でメンテナンス不備による装置の故障でもあれば、こちらで死亡しなくともプレイヤーや管理者は問答無用で死ぬ。時間がかかればかかるほど、装置の故障確率は上がるのだ。そんな状況を避けるため、早期解決は望むべきものだ。

これはレヤア以外の管理者もわかっていることだ。だから反対意見はでないだろうとレヤアは予測している。

「それでは私はほかの管理者に説明してきます」

「あ、話はここでしてほしい。できるだけ作戦はゲーム総統括AIに悟られたくない。知られたら思いもかけない邪魔が入るかもしれないから。」

そのためにここだけは覗けないように細工したから」

隠せばなにかあると知らせるようなものだが、関心を引くことと差し引いても、話し合いの内容はできるだけゲーム総統括AIに知らせたくない。

「わかりました」

レヤアは頭を下げ、仲間を呼びに部屋を出ていった。連絡をとりここに呼び出さないのは、歩きながら考えを整理するためだ。

話し合いが終わり、アヤネは再び疲れたようにテーブルにもたれかかる。

「大丈夫か？」

タツグの問いに、アヤネは顔だけ向けて頷いた。

「今度こそしっかり休むから。さすがにここにエネミーを送りこむことはないし」

「そうなの？」

「管理者が集まるここは、ゲームの維持に役立つ場所になってるの。ゲーム総統括AIが管理者の作業を邪魔して負担をかけるだけで放置してるのがその証明」

ゲーム総統括AIが全てを動かすことができるならば、管理者の

存在は邪魔なだけなのだ。そのような存在は排除するだろうし、できるだけの力もある。けれども管理者たちは無事に作業を進めている。これはゲーム総統括AIがゲームの運営に、管理者の仕事も必要とすることを示していた。負担をかけているのは、作業の進行度を操作するためだ。

「管理者がいるおかげで、ここがゲーム内で一番の安全地帯となっているのか」

「そのとおり」

「さっきの提案を聞いて思ったんだけどさ、プレイヤーたちに暴れてもらって言うてたじゃない？ 確実に死亡者がでるね、そこに対するフォローはなにかあるのかい？」

アヤネとレヤアの会話を聞いて湧いてきた疑問点をアイオールは問う。

「この戦闘でプレイヤーの死亡者は出ないと私は考えてる」

「どうして？ 管理者の話だとキャラクターの死がプレイヤーの死に直結する場合もあるってことだったろう？」

「プレイヤーの死には三種類ある。」

一つはこの世界と外を繋いでいる機械の故障などによる接続切断が原因の死。二つ目、ダメージを受けた際の痛みによるショック死。三つ目、キャラクターの死で偽体をなくしてこっちにいることができず、されど外にも出られずに動けなくなり、そのままの状態で長時間過ごすことでの精神的消耗による死。

私の提案で心配されるのは二番目。私もダメージを受けて痛みは知ったけど、事前に覚悟しておけば耐え切れないものではないと思う。100%そうだとはいえ切れないけどね」

「覚悟しても予想以上だったってことで、死者がでることもあるか。このことは事前にきちんと伝えておかないとな」

「そうね。事前に話しておくことで生還確率が少しでも上がるかもしれない。もしキャラクターが死んでも、すぐの動けない状態から開放されると知っていれば、帰りたい一心で痛みにも耐えるかもし

れないね」

そういうこととアヤネは頷いている。

管理者たちが戻ってくる前に部屋を出るため話しはここまでとし、三人は部屋を出て行く。疲れていますと見た目に分かるアヤネは夕ッグに背負われていた。

作戦始動にはまだ遠く

レヤアからほかの管理者への話はほぼ滞りなく終わった。話し合いは三時間と長くなったが結果的には滞りなく終わった。

作業効率がわずかながらも上がるという証拠があり、泡村の調査から戻ってきた管理者の証言もあり、アイオールたちの話は本当のようだと言断された。

それでも全面的に信じられたわけではない。アヤネがAIだという事に疑いがもたれているわけではなく、アヤネがゲーム総統括AIの仲間ではないかと疑いをもたれているのだ。なので最低限の警戒心は持ち提案に同意して協力するという結論に至った。

警戒したところでゲーム総統括AIに対抗できるというアヤネに対してどうこうできるのか、そのことに回答を持つ者はいない。

アヤネの提案にのることにした管理者たちは、これからの行動方針を決めるため、引き続き話し合う。すべてを今日のうちに決めるわけではないので、大筋を話し合うだけだが、これに時間がかかり結果三時間という時間が過ぎたのだった。

管理者たちがやるうとしていたことは、以前行ったプレイヤーキラー討伐をさらに大きくしたものだ。つまりはプレイヤーを集めてプレイヤーから代表者を選び指揮してもらい、各ボスにぶつかってもらう。

これならば管理者の多くは自分たちに割り当てられた仕事に専念できるし、一度行ったことだから勝手もわかっていて苦労が減る。プレイヤー側も帰還できるならば、気合をいれて戦うだろう。

ほかにも代表者は誰にするか、事前に用意しておいたほうがいいアイテムはなにか、調べておいたほうがいいことからはなにかなど話しているうちに三時間経ったのだ。

これ以上は通常業務が滞るので、また明日ということになり話し合いは止められた。

次の日も業務が一区切りついでから管理者たちは完全防備の部屋に集まる。あれこれと仕事の合間に考えていたことを出し合い、話し合いは進んでいく。

話し合いで決めたことを行動に移すのは、管理者側の行動方針がある程度固まってからと最初の話し合いで決められていた。だからデータ収集やアイテム作成には一切手がつけられていない。例外もあってアーマーブレイクだけは暇を見てプログラムが組まれていた。これは各地でぼつぼつとレコンキスタの目撃情報が上げてきたからだ。もしかすると作戦決行時にレコンキスタの邪魔が入るかもしれないと、念のために準備だけはしておこうと考えたからだ。

話し合いは二週間に渡り続けられた。失敗しないため細かい部分まで話し合われたのだ。といっても一日中話し合ったわけではないので、これくらいがちょうどいい長さだったのかもしれない。

忙しかった管理者とは対照的にブラーゼフロイントは暇だった。なにもすることがなかったのだ。作戦実行のためにプレイヤー側の意見も聞けばいいのに、管理者たちはスコンとその部分を忘れ、放置していたのだ。元から忙しいところに、今回の提案だ。さらに忙しさは増して、気が回らなくなっているのだろう。

ブラーゼフロイントの拠点は相変わらず会議室となっている。寝泊りに不自由していないが、なにもせず過ごすのは無理というものだ。彼らは声をかけられないので、しばらく出番はないのだろうと街にでたり、街の外にでたりと好き勝手動き、この二週間を過ごしていた。

そんなある日、ヴィオがホワイトサンと銀丸の散歩にでかけようとしていと、アヤネに呼び止められた。

「銀丸たち連れてどこに行くの？」

「日頃動きを制限させてるからストレスたまってるんじゃないかと思っただけ、外に走らせに行ってくる」

ときおり街中を散歩させていたが、たまには草原を思いっきり走

らせたほうがいいと思ったのだ。

「じゃあ、いつものように私もついていくよ」

そう言うが城に施された細工の関係でアヤネは動けないはずだった。それなのにまるで何度でもかけているような物言いだ。動けないことも、出かけたことも嘘ではない。

アヤネは右の手のひらを胸の辺りまで上げる。すると薄い青色のリスがなにもない場所から現れる。リスはアヤネの手のひらから、ヴィオの肩へと移動する。肩に乗ったリスが一声鳴いた。ヴィオの耳には「行こう」と聞こえていた。

このリスはアヤネの分身だ。五感を備え常に感覚をリンクしているだけの力のない分身。城から動けないアヤネに代わって外に出て、気分転換の役割を果たすただけに生み出されたのだ。

この状態では会話できる相手がヴィオしかいない。だからいつもヴィオにくつついて出かけていた。会話可能な動物を生み出すこともできる。けれどもゲーム内にも話すことのできる動物はおらず、余計な注目を集めそうだということで話せない動物を生み出すことになった。

本当ならば小鳥の姿にしたかったのだが、ヴィオの鳥嫌いによりリスとなった。本体がアヤネとわかっているにもかかわらず、鳥を受け入れることはヴィオには無理だった。

グランドセオの入り口を出て、少し歩いてからヴィオはホワイトサンに乗る。そしてホワイトサンに声をかけると、風をきって走り出す。時期は冬。冷えた空気が身を切るように感じられる。

それなりに速く走るホワイトサンの後ろを銀丸が追って走る。

実はヴィオは乗馬スキルを持っていない。なので本来は運動スキルで代用しても早足で歩かせるくらいが精一杯。しかしホワイトサンは走っている。なぜかというヴィオが走らせているわけではないのだ。ホワイトサンが自由に走っていて、ヴィオは落ちないようにバランスを保っているだけ。アヤネも落ちないようにしっかりとヴィオの身に着けている鎧にしがみついている。

先ほど声をかけたのは「落とさない程度に好きに走っていいよ」と伝えたのだ。動物との会話が可能だからこそ、現状のように走っていた。

十五分ほど走ってすっきりしたのかホワイトサンはペースを落とす。この速度ならばヴィオが落ちる心配はなく、楽しむ余裕も出てくる。やがて見晴らしのいい広場へとついた。そこでヴィオはホワイトサンから降り、首を軽く叩いて自由に走らせる。エネミーに襲われる心配もあるが、全速力ならば振り切れるし、護衛として銀丸がついて行くので逃げることは可能だ。

走り去るホワイトサンたちを見送り、ヴィオはその場に座り込んだ。街で買っておいたハンバーガーセットを出してピクニック気分だ。アヤネは手に掴んだポテトをゆっくりと食べている。

「のどかだー」

出てきたときは日が昇ったばかりで寒かった。しかし今は日が昇り、雲も少なく、風もない。冬にしては温かいといえる。

見晴らしがよく、エネミーの接近にすぐ気づけるのでのんびりとくつろげる。出てくるエネミーも今のヴィオからみれば雑魚だ。なので気を抜くことができる。

温かい食事を終えた二人はホワイトサンたちの帰りを待つ。なにもすることはないが、退屈とは思わず穏やかな気分でいられた。

地面にいたアヤネがヴィオの肩に移動する。

「ホワイトサンたちが帰ってくる？」

「帰りを察知したのだからうと思ひ聞く。」

「違うよ。ちよつと今のうちに話しておきたいことがあって。」

「今なら誰にも聞かれないから」

「まるで誰かに聞かれていたような口ぶりだな？」

「あの子が覗いてたよ。でもなにもせずにごろごろしている私たちを見て、しばらくは見なくていいって判断したんだろうね、視線がなくなつた」

「その体ってリンクだけできる、ほかには特徴のない体なんだろう？」

視線の感知なんてできたんだ」

「今日のは特別だから」

見かけはいつももの同じなのにと、違いを探すようにヴィオはしげしげとリスを見る。

「中身が違うから、外見を見ても意味ないよ。」

それで話したいことなただけど。話したいことっていうか頼みかな」

「頼み？」

「うん、そう頼み。」

すでに知ってるように私はあの子に会いに行く、そのときに一緒についてきてほしいんだ」

この言葉にヴィオはきよんとした反応を見せた。一緒に行つてなにができるのかと不思議に思ったのだ。

「なんの役にも立たないと思うけど、というか一緒に行くことができるん？」

「その姿を保つことは無理だけど、同行は可能。」

役に立つかは不明。けどなんとなく一緒に来てもらいたい。勘も一緒に来てもらったほうがいいって告げる」

アヤネは不安を感じていた。可能性としてゲーム総統括 AI に消去されることもありうるのだ。そんな場所に一人で行くことに不安があり、誰かと共に行動したかった。そしてその誰に選ばれたのがヴィオだ。

自覚しての選択ではない。今までの、記憶を失っていた間も含めての生活で得た好感から無意識に選んだ。どこまでも人間らしい拳動を見せる AI だ。そこにあるのが恋愛感情か親愛かは不明なのだが。

無意識という部分にヴィオはひっかかるものを感じる。

「アヤネって人工知能なんだろう？ そんな存在が勘って」

「勘って言っても二種類あるよ。虫の知らせって呼ばれるものと、経験から発せられるもの。」

私のは後者じゃないかな？ さすがに前者は自分でもありえないと思う」

自身でも無意識という部分には疑いがあるのだろう。実際には前者と後者両方だったりする。人は自分のことすら全て分かっているわけではない。それと同じことがアヤネにも起こっている。自身でも知らないうちに人間に近く成長してきたのだろう。もしかすると小林意太郎は魂の雛形を生み出したのかもしれない。確かめようのないことなのだが。

「それで返事は？」

「そうだねー……」

ヴィオはこれからの自身の行動を考える。このまま行くと、ボスとの戦闘に参加することは間違いない。自分のレベルはそう高くないから、氷狐ヒオのような下位ボス担当になる。

ヴィオは戦闘に特化しているわけでもなく、補助に優れているわけでもない。今は成長途中の中途半端な状態だ。そんな自分がボス戦に参加したところで、大した役には立たないだろうと予想していたならば自分一人いなくとも大丈夫だろうとも思える。

だからヴィオの返事は、

「いいよ、ついで行く」

というものだ。

「ありがとう！」

嬉しげなアヤネのお礼に、ヴィオは頷きを返した。

ホワイトサンたちの散歩から日数が過ぎ、今日も今日とて暇になるのだろうなと考えていたブラーゼフロイントの面々は、朝食時にバフから用事があるから出かけないようにと告げられた。それに了解と返事をして、皆食事を再開する。

皆が食べ終わる頃、珍しく共に朝食をとったバフも食べ終わり、席を立つ。

「アヤネ、ちといいかの」

バフはアヤネに個別の用事があるようで、近づき声をかける。

アヤネは飲みかけていたコーヒをいっきに流しこみ振り返る。

「なに？」

「今わたしの話し合いに使っている部屋があるじゃろう？ ああいう細工をここにも施せないかと思ってな。

可能かの？」

「できるよ」

あつさりと頷く。ゆっくり休養できたおかげで、今は万全の状態だ。ここに細工を施すくらいいけないことだった。

頼む、と頭を下げるバフに頷き、アヤネはひとさし指を一振りする。

「これで大丈夫」

「ありがとうの。そろそろ各地のギルド代表者を集めて、作戦を説明しようと思っていたんじゃ。けれどあつちでは確実に人数が入りきらんからの。どうしようかと思っていたんじゃよ」

「これくらいならお安い御用だよ。でもあんまり多用はできないよ？ あの子との対面のために力は温存しておきたいから」

「わかつとるよ。なんでもかんでもアヤネに押し付ける気はない。ここはわたしが作り上げてきた世界じゃからな。正常な状態に戻すのは、むしろ自身の仕事じゃと思つとるよ。それに任せきりにしてはならんことだろうからな」

「バフ、ここを使つてことは私ら別の部屋に移るってこと？」

「テールの向こうからアイオールが話しかける。」

「うむ。移つてもらつことになるの。どうせ部屋はあまつとるからの、好きな場所に移動してもらつてかまわんよ」

「移動はすぐにしたほうがいい？」

「そうさな、明日には話し合いを始めるつもりじゃから、それまでに移動してもらいたいな」

「わかつたよ。皆聞いたね、朝食後荷物をまとめて別の部屋に移動するよ」

了解といくつもの返事が返ってくる。

朝食後、荷物を片付けた面々はどこに移るのがいいか軽く話し合
って移動を開始した。

この城は四階建てだ。ただし一般住宅よりも天井が高いので、城
自体の高さも大きなものとなっている。四隅に見張り塔が建ってい
て、それらがこの都市で一番高いものとなっている。戦うための城
ではないので塀はない。堀はあるが、城周囲を囲むものではなく前
面にのみある。

一行が選らんだ部屋は二階にある都市が見渡せる部屋だ。候補と
して四階にも一室あったのだが、移動に不便という理由でこちらと
なった。四階の部屋が候補となったのは都市全体を見渡せる風景が
気に入られていたからだ。

一日経って新たな寢床で一行がくつろいでいる。すでに昼食は終
え、もう一時間で三時のおやつとだと思っていた頃、アイオール直
通の連絡で会議室に集まるように呼び出しを受けた。

昨日までいた会議室には今は各ギルドの代表者やソロのプレイヤ
ーがいる。昨日のうちに管理者は臨時会議があると連絡をしていた
のだ。重要な連絡事項がある、と念を押していたのでいつもよりも
集まった人数は多い。

いつもならば二名まで各ギルド二名までしか入ることのできない
会議室に、ブラーゼフロイントは全員で入ることができた。管理者
が設定したのだ。

「ブラーゼフロイントは全員でおでましなの？ どうやって入るこ
とができたのかな」

メンバー全員でやってきたと気づき話しかけてきたものがある。
ラスツイスだ。

「久しぶりです」

プレイヤーキラー討伐戦以来、会っていなかったヴィオが頭を下
げる。

「ええ、久しぶりね。元気にしてた？」

「はい。それなりに」

「プレイヤーキラー討伐のあといろいろあったみたいね」

ラスツイスはヴィオの言葉から感情の揺らぎを正確に読み取った。

「いろいろあったわよ。今回の集まりもそれからの派生だからね」

ラスツイスの言葉を肯定するようにアイオールが話しかける。

「管理者の念の押しようから、重大発表があると考えてるんだけど、その様子だと内容知ってるみたいね？」

「かなり驚くことになるわ」

真剣な表情となったアイオールにラスツイスも気が引き締まったよう
で、覚悟しておくかと答えて仲間のもとへ帰っていく。

やがて会議開始の二時三十分となり、レヤアが台座に上がり皆の注目を集める。

「時間となりましたので臨時会議を始めさせていただきます。」

今回はとても重要な連絡事項がありますので、聞き漏らしのないように静かに聞いてください。

では最初はいつもと同じ連絡事項から」

そう言っレヤアは、ざわざわとした話し声が治まるのを待つてから話を始める。

いまだ少数ながらいるプレイヤーキラーによる被害などの注意事項はいつものこと、今回はそれに加えレコンキスタの情報も付け加えられる。泡村に攻め込まれたということも話し、今後はそういったことも起こりうる可能性があると呼びかける。

街にエネミーが入ったと聞いてプレイヤーたちはざわつく。ブラーゼフロイントメンバーと同様に彼らも街中は安全地帯だと信じていたのだ。管理者の調査結果がスクリーンに映し出され、その中の映像の一つに泡村の中を闊歩するレコンキスタがあり、それを見たプレイヤーたちはレヤアの言葉を本当だと認識した。あっさりとしたのは、管理者が自分たちを騙してもなんの意味がないと理解しているからだ。それゆえに本当のことだと素早く受け入れることが

できたのだ。

調査結果の開示でも疑われた場合は、アイオールを呼び証言してもらおうと考えていたレヤアは、素直なプレイヤーたちに少しだけ拍子抜けした。

これが重大発表だとプレイヤーたちは思っていたので、ここまで素直なのだ。安全地帯がなくなるのは確かに重大なことだろう。安らぎの時間と空間を奪われたということなのだから。これが重大発表だと思うのも無理はない。

だからレヤアの次の発言にプレイヤーたちは驚くことになる。

「連絡事項はここまでです。」

では今回の皆さんを呼び出した本題に移りましょう」

大きなよめきが会議室を満たした。

そしてレヤアの口から爆弾発言が放たれた。

「ゲームからの帰還方法のめどが立ちました」

本日一番の驚き声が会議室に響いた。

作戦始動までもう少し

レヤアが驚愕の情報が発して、一時間経っている。あのあと会議は解散となった。レヤアは詳しい情報を求めるプレイヤーたちに、今はまだ準備段階なので情報公開を断った。準備が整えば必ず情報は公開すると約束したので、今日のところはプレイヤーたちは引き下がった。そんな彼らにレヤアは今日話したことは誰にも話さず胸に閉まっておいてほしいと訴えた。ゲーム総統括AIに知られないようにするためだ。もちろんずっと黙ったままというのは、無理なのではないかとレヤアたち管理者も予想ついている。人の口に戸はたてられない、うっかりと口を滑らせることがあるだろう。できるだけでいいのだ。黙った期間が長ければ長いほど、ゲーム総統括AIの邪魔が入ることはないのだから。

邪魔のことを考えているならばなぜ話したのか、黙ったまま準備を整えていけば万全に近い状態で本番に挑める。そんな考えもあるかもしれない。それでも管理者は知らせることを望んだ。それは作戦をスムーズに進めるため。作戦決行三日前には全員に作戦を伝えることとなっている。そのときにギルドのリーダーを含め全員にいきなり情報を与えた場合、動揺や混乱が起きるのではと考えたのだ。そんな状態で作戦を問題なく決行できるかという点、不安が残る。だから先にリーダーたちに知らせ、リーダーが動揺しないように手を打っておく。リーダーが落ち着いていけば、周囲の人間の動揺もすぐに治まるだろうと考えているのだ。

今会議室にはレヤアとブラーゼフロイント、レヤアが残るように言った人物のみがいる。

レヤアが残るように言ったのは有力ギルドのリーダーたちだ。その中にはラスツイスも含まれていた。

「皆さんに残ってもらったのは、帰還方法の詳しい情報をお伝えするためです」

「一つ質問いいか？」

手を上げたのは三十過ぎの騎士風の男。ゲーム内で最大人数を抱えるギルドのリーダーだ。

「どうぞ」

「俺たち大きなギルドの代表を集めたのもわからないんだが、どうしてブラーゼフロイントのメンバーは全員いるのかということだ」
「彼らは最初から関わってますので、話を聞く権利があると判断しました。」

あなたがた大きなギルドの代表を集めたのは、これから行うことに確実に協力してもらうためです。帰還するためには最低限あなたがたの協力が必要ですから」

「なるほどと言いたいが、話を聞かないことにはなにがなんだかわからないな。」

話を中断させて悪かった、続けてくれ」

レヤアは頷いて、話し始める。

話したのは主に作戦に関することだ。AIたちのことについてはゲーム総統括AIの行いで現状となっていることくらいで、アヤネについてはばかした。作戦達成にはアヤネが重要な鍵なのだ。ここで話したことが原因で、アヤネがプレイヤーから被害を受けるようなことにはしたくないのだ。

「ようするに俺たちの仕事はボスとの戦いを長引かせることか」

「ええ、できるだけ長引かせることができれば、それだけこちらとしても作業が楽になります」

「プレイヤーたちを一まとめにして動かす、言葉にすれば簡単だが実際に行うのは楽なことではないな」

人をまとめる経験の豊富なリーダーたちは、管理者の言う人数の統率が難しいことだとすぐに思い至る。

「こちらとしてもそのことは予想がついています。ですので一人適

任者を推薦させてもらってもよろしいでしょうか？」

「そんな奴いるのか？」

レヤアの視線がラスツイスに向く。その視線につられ皆の視線もラスツイスに集まった。

「私!？」

推薦されたラスツイスは、視線に押されるように一歩引きながら驚く。

ラスツイスの指示で動いたことのあるヴィオとタツグは納得したように頷いている。

「理由を聞かせてもらおう」

「一番の理由は、一度大勢を動かすということを経験してるからです。言わなくてもわかるでしょうが、プレイヤーキラー討伐戦ですね。あのときと今回では規模が違いますが、あのときの経験を生かすことで采配可能でしょう。一度も経験のない人よりは、慣れという部分で失敗確率が下がるとみています。」

夏休み以前でもギルド員を上手く動かすことはできていましたしね。

もちろん彼女一人に全てを動かすことは不可能ですから、あなたがた有力ギルドのリーダーにも補佐をお願いします」

「なるほどな」

もとより反対する気はなかったのだろう、一つ頷いて納得した表情を見せた。補佐の件も了承したとみていいだろう。

ほかのリーダーたちも納得した表情を見せている。一人二人別のことと考えているようだが、誰もそのことに気を払うことはなかった。

「私の返事抜きにして話が進んでない？」

話題の中心は自分のはずだとラスツイスが首を傾げていた。

あまり乗り気ではないラスツイスだが、周囲が納得している以上ごねたところでもうにもならない。それはラスツイスもわかっていたようで、一応自身の意見を述べるだけに留まっておいた。そして

総司令にはなりたくないな、という軽めの反対意見は却下された。ラスツイスは帰還するためしなければならぬことなのだ、自身を説得し受け入れた。その後は気持ちを切り替えて、レヤアの話に聞いていく。

レヤアは管理者側の行動を話していく。管理者からプレイヤー側に行うサポートは本拠地設営とアイテムの補給と通信と転送のみ。指揮と戦いには手を出さないことを告げる。

「アイテムの補給は必要なものを言ってもらえれば既製品は渡せませぬ。ただしプレイヤーが作るような特製品は無理です。通信は現場の状況を逐一ラスツイスさんたち司令部に届けますし、司令部の命令を現場に届けます。転送はグラントセオそばの草原に本拠地をおきますから、そこから各ダンジョン入り口へと移動となります。

あとこちらからしようと思っっていることは、レックスさんへのステータスアップアイテムの大量作成依頼と砕さんへの虹龍討伐以来ですね。

それらをふまえて計画を立ててください。出来上がった計画は一度私たちへと提出してもらいます。この部屋にキーボードとメモウインドウを用意してありますので、そちらに計画を書き込んでください」

レックスは料理スキルの天然資質持ち、ドンドコ亭の主だ。彼が丹精込めて作った料理は長時間の大幅ステータスアップが可能だ。そんな彼に、プレイヤーたちがピンチに陥ったとき、それを乗り越えることができるようにと、料理の依頼をするのだ。大量に頼むので手の込んだものは無理だろうが、わずかなステータスアップが生死をわけることがあるのだと管理者たちも知っている。それゆえに大量注文をしようと話し合いで決められていた。

砕はプレイヤーの中で最強と呼べる存在だ。虹龍との対決には彼が最適だと管理者は考え、依頼することにしたのだ。ゲームに閉じ込められる前から頭抜けた実力を持っていたが、閉じ込められてから研鑽する時間が増え、その実力はさらに増していた。

砕がプレイヤー側最強ならば、虹龍はエネミー側で最強だ。その実力はなんの対処もしていないレベル80の戦闘職を一撃で倒すことが可能だ。虹龍と戦うには、ほかのボスと違い量よりも質が重要になる。データ上、対龍に特化したレベル80のきちんと役割分担された四人パーティーが勝率60%を誇っている。ほかのボスが量で圧倒できることがあるのに対し、虹龍には最初の攻撃で実力不足のプレイヤーはふるい落とされるのだ。

この初撃は『虹の洗礼』とプレイヤーたちの間で呼ばれている。どのような攻撃かというと広範囲へのプレスだ。属性は定まっておらず、対処が難しい。ヴィオも一度死にツアーと称し、虹龍と戦ったことがある。当時のヴィオはレベルが20にも届いておらず、当然一撃で殺された。一緒にいたアイオールやタッグたちも同様に一撃死だ。

このように生半可な実力を持つ者を連れて行っても無駄、邪魔でしかないのだ。

砕ならば戦いの舞台に立つことが可能なのか？ これはギルドリーダーたちも疑問に思ったようでレヤアに聞く。

「砕さんのレベルは全プレイヤーの中で唯一100を超えています。現在は117。彼ならば戦うことは可能ですし、もしかすると倒す可能性すらあります」

ほかのプレイヤーはレベル90にすら届いていない。砕の次はレベル84と20以上の差が開いている。

ただひたすらに強さを求めた砕だからこそたどり着いた強さだろう。

「それだけ強ければ依頼しようと思つのも当然か。しかし依頼を受けてもらえるのか？」

「報酬も用意してありますし、可能性は高いと」

「碎つて報酬で動くような奴じゃないだろ」

「ええ、知っています。だから報酬はお金やアイテムではありません。情報です」

「聞いても？」

駄目元で問う。よほど貴重なものなのだろうと皆考えていたので、レヤアが頷いたことに驚く。

「ええ、かまいませんよ。」

彼は強い存在を求めています。今は虹龍が一番ですが、それ以上がいると教えるとそれが報酬になりえると私たちは考えました」

「なるかもしれないが、虹龍以上がいるのか？　もしかして次のアップデートで配置される予定だったとか？」

「いえ、ずっといました。ただ条件を満たせる者がいなかっただけです。」

名前は『本気の虹龍』といいます」

「本気の虹龍？　あれで本気じゃなかったのか？」

この場にいる者は全員、虹龍と戦ったことがあり、その強さを身にしみて理解している。全員がレヤアの言葉に驚いていた。

「ええ、設定上今の虹龍は実力の半分も出していませんよ。一度虹龍に勝てば、認められ全力を出すという設定になっています」

「なんでそんな設定」

半ば呆れたような誰かの言葉に、レヤアはドラゴンに対しての思いを述べる。

「ドラゴンって最高峰の強さを誇る、そんなイメージがありませんか？　私たち開発者はそんなイメージを持っていました。だからとてつもなく強く設定しました。けれども無敵ではありません。神話にあるように倒されることもあるのだと知っています。だから努力か運で倒せるように設定されています。運任せの場合は幾度もの幸運が必要になります」

「鍛えていけば俺たちもいつかは倒せるようになるのか……実現はいつになることや」

「まあ虹龍のことは碎さんに任せておけばいいかと。断られても手出ししなければいいだけの話です」

ほかに質問はあるかとレヤアは周囲を見渡し問う。

誰も質問はないようで口を開くことはない。

「では私は仕事に戻ります。ここはいつでも開放していますから、自由に使ってください」

そう言っただけでレヤアは一礼し会議室を出て行った。

残ったプレイヤーたちは早速計画を立て始める。ブラーゼフロイントメンバーはアイオールとタッグを除いて部屋を出て行った。今は必要ないと判断されたので、解散していいとラスツイスから言われたのだ。

作戦の中心人物でもあるアヤネも一緒に出て行っている。これはレヤアがアヤネのことを言わなかったため、ラスツイスたちは重要人物と気づかなかつたためだ。アイオールとタッグは知っているが、当日はプレイヤー側として動かないことも知っているので参加を促す必要もないと判断したのだった。

話し合いはまずダンジョンボスの確認から始まった。

プレイヤーが相手することになるボスは合計九体だ。上級ダンジョンである逆さ塔にいる公爵位ヴァンパイア。中級であるダンジョン亡霊王国にいる亡霊将軍、喰の森にいるヴァルガーフラワー、奇岩山にいる悪食トロール。下級ダンジョンであるガバレン火山にいる耐熱ウツボ、地下水洞にいるミノタウロス、アンニヤラ高原にいるバジリスク、蟹爪塔にいるナーガクイーン、そしてヴィオも一度行ったコルオルジオ氷窟にいる氷狐ヒオ。

ゴブリンキングは常に移動しているため対象とするには難しく、虹龍はすでに相手が決まっているので対象外だ。

対象となるボスたちに対して、目的にそった力量のプレイヤーをあてる必要がある。長引かせるために高レベルプレイヤーを当てるわけにはいかない。各ボスとの戦闘経験を話し合い、互角に戦えるレベルを割り出していく。

ボスと戦えない高レベルプレイヤーは暇になるのかというところでもない。彼らには彼らの仕事がある。それはダンジョン内の雑魚

エネミー掃除だ。ボスと戦うプレイヤーがたどり着く前に力尽きるなんてことになっては作戦を立てた意味がなくなってしまう。体力アイテム消費を抑えるためにも、雑魚エネミーの駆除はやっておかなければならないことだ。

あとはボスと戦っているプレイヤーのフォローも予定された仕事のひとつだ。ここでいくら綿密に話し合ってもアクシデントはある。そのアクシデントでプレイヤーが全滅の危機に陥る可能性もある。そのときに高レベルプレイヤーが割って入り、共に戦い、場合によっては逃がすことになっている。

ついでにレコンキスタ対策にも関わってくる。管理者から得た情報によると、予定していたレコンキスタの配置はダンジョン内のみ出現というものだ。上中下級に関係なくあらゆるダンジョンに現れることになっている。作戦中にも現れないともかぎらないので、出た場合は高レベルプレイヤーをぶつけ対処する。

集めたプレイヤーを全てダンジョンに投入するわけにもいかない。いつでもフォローに回せるように予備兵力として待機させておく必要がある。そういったプレイヤーたちの運用も話し合われる。

この予備兵力はグランドセオ防衛の任務も負っていた。泡村のようにレコンキスタが突如せめてこないともかぎらない。

各ギルドに所属する生産職プレイヤーにもそれとなく、質のいいアイテム作成を依頼するようにもなった。これよってヴィオも作戦決行時まで暇なまま過ごすわけにはいかなかった。

どうしてかというヴィオが持っているスキルに関連する。会議が開かれるまでの時間で、ヴィオの会話スキルレベルが天才素質の限界300を超し400に到達した。このことでヴィオの会話スキルの素質が天然だったことが判明した。

スキルレベル300を超えたときに動植物の声が聞こえるようになり、400を超えたときは鉱石などの無生物の声も聞こえるようになったのだ。意識すれば全ての声を聞けるようになった。

声を聞けるヴィオが反応を確かめながら、生産者に助言すると出

来上がったアイテムの質が上がる。セバスターの薬作りに協力したことで判明したのだ。

このことがアイオールから各ギルドリーダーへと伝えられ、ヴィオは有力生産者プレイヤーの元へ出かけなければならなくなった。リーダーたちがグラントセオへと生産者プレイヤーを呼び寄せたので、各世界を渡り歩くなんてことはしなくてよかったが、忙しく歩き回るはめになったのはかわらなかった。

帰還のため、当日不参加の代わりということで、ヴィオはこの役割を受け入れたのだった。

こういった話し合いが五日間に渡り行われた。必要アイテム、各ダンジョンへの投入人数、予想される必要準備期間など綿密に書かれた計画書をレヤアに渡し、判断を待つこと二日。承諾の返答を持ったレヤアが計画の開始を宣言する。

次の日、臨時会議が開かれ集まったギルドのリーダーたちに詳細が知らされる。本拠地に戻った彼らは作戦決行の三日前に帰還できることをメンバーたちに知らせ、当日の作戦参加を促す。

管理者は事前に決めていたこと、プレイヤー側の要求を満たすため本格的な行動を開始する。

プレイヤーは司令部を中心に動き出す。

すべての準備が整い、帰還作戦が開始されるのは12月25日クリスマスとなった。作戦達成の願掛けにはちょうどいいと、スケジュールを確認した管理者もプレイヤーも笑いあう。

話し合いから戻ってきたタッグとアイオールが夕食を済ませたことを確認し、ヴィオは二人に話しかける。

作戦決行当日、アヤネについてくことを話しておこうと思ったのだ。連絡もなしに姿を消すと死んだと思われ、心配をかけることになるかもしれないのだから。

紅茶を飲み、一息ついたところでアイオールは口を開く。

「それで話ってなんだい？」

「作戦の日に俺はアヤネについていくんだ。それを伝えておこうって思っ」

「ついていくってゲーム総統括AIのどこにか？　できるのかそんなこと」

「アヤネが言うには可能だっ」

「だから当日いなくても心配しなくていいよ」

「……それはヴィオが行かなくちゃいけないことなのかい？」

「心配と不満の色をわずかに目を浮かばせてアイオールが聞く。」

「んー……正直なところ絶対行かなくちゃいけないことはないんだと思う。」

でも残っててもたいして役には立たないからね、それならこうなつた事情が知れるっばい方に行つてみたい。

それにもしかするとなにかの役に立てるかも。その可能性はすごく低いだろうけどね」

「俺は行ってもいいと思うな。ヴィオ一人が抜けたところで作戦には影響はないだろうし。」

ヴィオが言っているように、なんらかの役に立つ可能性もありえる。アヤネの嬢ちゃんも一人で行くよりは心強いだろ」

「たしかに一人よりも二人つてのはわかる。でも……んー」

アイオールは自分でも理解できない思いに頭を悩ませている。タッグの言うことは理解し、納得もできている。けれど心に浮かんだなにかが素直に頷くことを邪魔している。

難しい顔で悩むアイオールをタッグは面白そうに見ている。悩みに見当がついているようだ。

「青春だなあ」

タッグの口から思わず漏れ出た感想にヴィオが反応する。

「なに言ってるん？」

「若いつていいなってことだよ。俺もいろいろと苦悩したもんだ。」

嬢ちゃん、思いっきり悩め悩め」

タッグは楽しくて仕方がないといった顔で、アイオールの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「なにするんだいっ」

「すまんすまん。妹がいればこんな会話ができたのかねえ」

「もしかしてタッグはアイオールがなんで悩んでるのかわかってる？」

「100%ってわけじゃないだろうが、それに近い答えは持っていると思うぞ」

「それ教えてあげたら？」

「自分で気づいたほうがいいと思うがな。自然な感情だから忌避するようなものでもないし。いきすぎは問題になるが」

タッグのヒントを聞いても、いまだアイオールは頭を悩ませている。

アイオールが感じているものは嫉妬だ。ヴィオとアヤネと一緒にいることで独占欲を刺激されている。

アイオール、いやこの場合は立瀬都といったほうがいいか。彼女にも恋の一つや二つは経験がある。けれども積極的ではない性格が災いして、遠くから見ただけで諦めるといったものになっている。だから好きな相手が自分以外の誰かと一緒にいる場面を見て、嫉妬したことはない。

都が勇に恋をしている、と断言はできない。しかし好意を持ち、気になっているのはたしか。明確な気持ちを持っていないことも悩む原因なのだろう。慣れない感情に、原因がわからず思い悩むことになっている。いつそことはつきりと恋しているといえる状態ならば、自身の気持ちに予測がついたはずだ。

「とはいってもずっとこのままだと作戦決行日にも影響でるかもな。俺から言えることは、今のところは思い過ごしだろうから気にしなくていい、ってところだな」

ヴィオの様子を見るかぎり、アヤネに惚れている感じではない。だから嫉妬してもあまり意味はなく、疲れるだけだ。

とりあえず先送りでいいと言うタツグに、そうなのかとアヤネは考えることを一時中断する。たしかにこのままでは気が散って、作戦の準備と実行にも影響が出てくる。

この先二人いやアヤネも含め三人はどういった関係を築いていくのか、それを考えるとタツグは楽しみが一つ増えたような気持ちになる。傍観者の立場でいれば、恋愛事はこれ以上ない娯楽なのだ。よりよい結果を知るためにも作戦は成功させなくては、とタツグは人知れず気合を入れたのだった。

それぞれの戦い

時は止まることはない。待ち焦がれても早まることなく、拒絶しても止まることなく、誰もに同じ早さで流れ行く。

準備に追われ、忙しく動き回っていた管理者とプレイヤーはついに12月25日をむかえた。

三日前からグランドセオに人が集まっていた。作戦決行当日である今日、その数は三千人ほどに達していた。全プレイヤーが集まったわけではない。人任せにした者、作戦を信じなかった者、そのほかの理由で来なかった者もいる。だが作戦を実行するにあたって十分といえる人数がそろったと、ラスツイスははじめとする司令部や管理者は考える。

彼らはグランドセオに集い、管理者が開放した空き家で英気を養っていた。グランドセオは二万人を収容可能なのだ。まだまだ空き家に余裕があった。

今日までグランドセオは祭かという賑わいを見せていた。作戦決行時間に近づくにつれ、街の熱気は高まっていく。

そしてプレイヤーは管理者の誘導に従って、グランドセオそばに作られた会場に移動し開始宣言を待つ。

10時となりラスツイスが櫓へと上がり、眼下にいるプレイヤーを見下ろす。今この場には戦闘職と生産者がごっちゃにいる。この宣言が終わった後、生産者は街に戻り作戦成功を待つことになっている。

すうつと息を吸い込み、腹に力を入れてラスツイスは口を開いた。凜とした声が三千人全員の耳に届く。

「多くの者には、はじめましてだ。プレイヤーキラー討伐戦に参加した者には久しぶりと言おうか。」

今回の作戦の総司令を務めることになったラスツイスと言う。名

前は覚えなくていい、今日限りの関係だからな。

再びこういった舞台に立つことになるうとは思っていなかった。前回のことで私は懲りていたんだがな。

皆も知ってのとおり、今回の作戦は私たちが帰るために必要なものだ。

やることは簡単だ。戦えばいい。戦って戦って戦って生き延びることが、君たちに課せられた任務だ。小難しいことは私たち司令部と管理者に任せておけばいい。

君たちは今までに培ってきた力をエネミーに叩きつける！ 遠慮などはするな！ 全力を搾り出しっ今日という日を戦いぬけ！

さすれば管理者が帰還のための道を築いてくれる！

思えばこの四ヶ月、長かったようにも思えるし、短かったようにも思えてくる。不安、不満、恐怖、連帯、安堵、いろいろなことがあった。君たちもそうだろうと思う。

だが誰もが胸に強く抱いている思いは、帰る。この一言に尽きるだろう。

帰る。それは誰でも当たり前に行える行為だ。特別なものではないありふれた行動だ。だがそれをゲーム総統括AIは私たちから奪った！

叫んでいいっ怒っていい！ その思いを拳に、剣に、魔法に込めて帰還を邪魔するエネミーどもを蹴散らせ！

私たちの望みはありふれたものだ！ 帰る！ 今も待っていてくれる家族にたたいまと告げる！

ただこれだけなのだ！ 欲望に満ちたものではない！ 叶えることが難しいことでもない！

ならばっ私たちの望みが叶わない道理はない！

行くぞ！ 我らは帰還を望む者！ 誰にも邪魔などさせはしない！ 今このときを持って作戦開始を宣言する！

ラスツイスが剣を掲げ、同じように三千人のプレイヤーもそれぞれ武器や拳を掲げ、一斉に声を上げた。天を、地を、街を震わせ、

遠く遠くまで響く。絶対に帰るぞと誓いの声を張り上げた。

司令部と管理者の誘導により、プレイヤーたちは九つの大型転送陣に移動していく。一つのダンジョンに二百人から三百人の団体に分かれていく。

まずは雑魚殲滅を目的としたプレイヤーたちが転送陣へと入っていった。彼らが入ったあとはボス対決組が入っていく。三十分後には三百人の予備役が残る。街に移動した生産者は四百人で、ダンジョンへと向かったのは二千三百人となる。その中にはブラーゼフロイントも含まれていた。

ここまでに行っただのは宣言と移動だけだが、問題が起きなかったわけではない。

司令部として参加していたギルドリーダーが早朝から二名行方不明となっていた。代表者がいなくなり慌てるギルドメンバーを司令部がなだめ、どうにか落ち着かせて送り出すということも起きていた。

いなくなった二名は今日までなにもおかしなそぶりをみせてはおらず、どうしていなくなったのか誰にも理由がわからない。ゲーム総統括AIの邪魔かとも考えられたが、邪魔をするならその二名だけではなく司令部ごと行方不明にするはずだ。わかっているのは二名とも、装備を整えちよつと出かけてくると言って帰ってこなかったということのみだ。これを聞いたギルドメンバーは司令部の話し合いでもするのだろうと、なにを怪しむことはなかったのだ。

ブラーゼフロイントの戦闘メンバー、アイオール、タッグ、リオン、デルカ、ミゼル、ヤートス、つばきが奇岩山の麓にいる。雑魚を一通り倒したという合図がくるのを待っているのだ。彼らはこのボス悪食トロールとの対戦メンバーに選ばれていた。

アイオールが適正レベルの53を超えているが、攻撃には参加せずサポートに回ればいい勝負ができるだろうと予想されている。アイオールのレベルは61、その次に高いのがタッグとつばきで48

だ。一番低いのはリオンで34。このレベルだと下手すれば一撃死もありえるが、武器が弓矢なので常に悪食トロルの拳動に注意し遠距離攻撃を心がけていけば、一撃死はないだろう。

「グイオたち大丈夫かな」

「どんなことが起こるかわからないし、なんともいえないな」

アイオールの呟きを聞き取ったタツグが答える。

「設定されたボスとの戦いじゃないし、無事に目的をはたせるといいんだけど」

「アイオールさんつなにを話してるんですか？」

リオンがアイオールの腕に抱きつきながら聞いてくる。

「残してきた仲間は無事でいられるかなって」

「予備の人たちが守ってるんですし、大丈夫だと思う」

「そうね、守りが皆無ってわけでもないし大丈夫よね」

「そうですよ。」

ところでアイオールさんは帰ってなにかしたいことがあります？」

「急にどうしたの？」

「帰れるって思ったら、いろいろとしたいことが思い浮かんで。ア

イオールさんはどうなのかなって」

一番はお風呂に入りたいことだなとリオンが言っている横で、ア

イオールは少し考え込む。

「したいこと……心配かけた家族にただいまって言いたいね」

ほかのメンバーも同じ考えのようで頷いている。

「私は兄が一緒だから家族と離れているって感じがしないんですよ。まあ、お母さんとお父さんに心配かけたのはわかっているんですけど。」

それですね、したいことの一つにオフ会ってのがあるんですが、やってみませんか？」

「オフ会か。でも住んでる地域がばらばらで集まるのは大変でしょ」

「うん、それはわかっています。だからネット上のオフ会を開いたらどうかあって思っています。互いの顔を見ながらなら、オフ会をし

てる気分になれるんじゃないかな」

「ふむ……それもいいかもね」

「いいのか？」

タツグが口を挟む。中身を知られたくないのでは、と言外に含めている。

「これでも少しは成長してるのよ？ 素顔さらすくらいなら大丈夫。むしろ皆の驚く顔が楽しみね」

リーダーとして過ごしてきたことはアイオールに負担だけを与えていたわけではない。成長の機会も与えていたのだ。アイオールはその機会を逃さず掴み、糧とすることができていた。精神的な強さを得て、性格の違いによる負担は軽減され、最近では少し余裕もあつたくらいだ。いつぞやヴィオが言っていたように、アイオールは立瀬都の一部だと確信を持って言えるから、演じれなくなるという心配もしていない。

「嬢ちゃんがいいならかまわないけどな」

「タツグさん、もしかしてアイオールさんの素顔知ってる？」

会話を聞いていたりリオンは、二人の会話の意味を理解できなくとも、わかる範囲で推理し問う。

「顔は知らんな。でも素性は少しばかり知っている。ヴィオから聞いた」

「ずるーいっ！ 私も教えてほしい！ アイオールさん教えてっ？」

「オフ会開けばわかることだよ。楽しみにしてなさい」

腕を引くりオンをアイオールは小さな笑みを浮かべてなだめる。

「わかりました。絶対オフ会開きましようね？」

「ゆびきりでもする？」

それにリオンは頷き、小指と小指を絡めた。そこにほかのメンバーも小指を絡めていく。

「俺たちも楽しみっこだ」

きよとんとしたアイオールに、皆を代表しタツグが言う。再びふつと笑みを浮かべアイオールは指をふる。若干ふりにくいながらも

上下にふって指を離す。

そこにタイミングよく、ウィンドウが開き連絡音が鳴る。

「あら、連絡がきた」

ダンジョン内の雑魚エネミーはほぼ一掃されたらしい。予想されたようにレコンキスタがいたようだが、準備が間に合い配布されていたアーマーブレイクのおかげで手強さを感じただけで、死者をだすこともなく無事に討伐できたようだ。

「出発するわよ」

最短ルートが表示されたマップを開いたままにして、アイオールは歩き出す。

ボスに向かう途中で出会ったプレイヤーたちにお疲れ様と声をかけると、頑張つてと返事が返ってくる。

奇岩山は木の生えていない岩山だ。けれども転がっている石や岩は、普通の岩山とは違ったものだ。貴重な鉱石の欠片が落ちていたり、肌を切りそうな刃のような石片が落ちていたり、触るだけで爆発を起こすようなものも落ちていたり、属性を帯びたものもある。それらは頂上に近くなればなるほど規模が大きくなっていく。武器関連の生産者には宝の山とも言われている。鉱物知識さえあるならレベルが低くとも、得た鉱石を持ってここと近くの街を往復するだけで、ある程度のお金を貯めることが可能だ。

アイオールたちはあつという間に頂上一步手前までたどり着いた。道もわかっていて、なんの障害もなかったのだから当然なのだが、以前来たことのある者たちは一時間ほどでここまで登れたことに驚いている。

「あんたらがブラーゼフポイントだな？」

フォロー役のプレイヤーが歩いてきたアイオールたちに声をかける。

「そうよ」

「悪食トルはこの先の広場にいる。健闘を祈っているよ」

「ありがとう。行ってくるわ」

フォロ―役に見送られ、一行は頂上手前の小さめの広場に足を踏み入れた。

そこには朽ちた建物がいくつかと頂上へと至る登山道がある。そして広場中央に、メロンのようにも見える緑色した鉱石をかじる巨体のエネミーがいた。

大きさは三メートル弱。灰色の皮膚に、即頭部から生える二本の角を持つ。遅しい肉体を持ち、腕や足は丸太のようで、この場で一番の力持ちだろうと思える。特徴は高い防御に、高い体力に、怪力。遠距離からの魔法攻撃を主とするプレイヤーにとってはわりと倒しやすいボスだ。

広場に侵入した者に気づいたようで、鉱石を投げ捨て、かわりにそばに置いていた鉱石できた棍棒を持つ。

浮かべた笑みは、肉食獣が獲物をつつけたときに浮かべるものだろうか。一行を餌としか認識していないようだ。

「前衛はタッグ、つばき。デル力は遊撃っ。リオンとミゼルは悪食の動きに注意しつつ、前衛二人に当てないよう矢を放て！ ヤートスは回復優先で補助を！」

まずはタッグとつばきっ、でかいのぶちかましてやりな！」

全員から応つと返事が返ってくる。

タッグとつばきが走り、勢いそのままに左右からスキルアーツを叩きつける。

「スキルアーツ・ヘビークラッシュ！」

「スキルアーツ・豪一閃！」

二人の攻撃は命中し、悪食はダメージエフェクトをほとばしらせる。だがそれは大きなものではなかった。二人も武器を叩きつけたときの感触で悪食の防御の硬さを悟る。体格の小さなものならば吹っ飛びそうな攻撃を二発同時に受け、悪食はよろめくことすらしなかった。

今度は自分の番だと悪食が棍棒を真横に振るう。二人は屈んで避ける。頭上を通った棍棒が起こした風で、わずかに体が揺らいた。

ひやりと背筋に寒気が走る。そこにアイオールからの魔法がとぶ。

「スキルアーツ・マテリアルガード」

タッグとつばきの体に一陣の風がまとわりつき、鎧に吸い込まれていった。防御を上げる補助魔法だ。

一瞬遅れてヤートスからも魔法がとぶ。

「スキルアーツ・アヴォイドステップ」

こちらは回避力を上げる魔法だ。

悪食の攻撃方法はどれも近距離物理だ。高い筋力から繰り出される攻撃は、一撃受けるだけでタッグたちの体力を半分以上持つていく。そうならないための回避力上昇であり、避け切れなかったときのための防御力上昇だ。

全体攻撃を持つていないため全員に補助魔法をかける必要はない。支援を受けた前衛組が一方的に攻撃を加えていく。一見有利に見える状況だが、与えたダメージはようやく一割を超えたところだ。それにボスだけあって一方的に攻撃できるほど甘くはない。

「ガアアアアッ！」

突如、悪食が咆哮を上げる。物理的な衝撃をも持った音は全範囲に広がり、アイオールたちの耳を痛いほどに打つ。

エネミースキルアーツ・ハウリングだ。効果は効果範囲にいる対象の動きを一時止める。抵抗は可能だが、適正レベルで五分五分といったところで、アイオールを除いた全員が抵抗に失敗している。

動きを止められた前衛組を見て、悪食は棍棒を振り上げる。フィスがタッグを起こそうと小さな手で頭を叩いている。フィスの努力むなしくタッグはまともに棍棒を受け、地に叩き伏せられた。つばきはなんとか防御が間に合い、膝を地につけるだけですむ。両者ともに受けたダメージは軽いものではない。

痛みに顔をしかめて立ち上がり、二人は悪食を睨む。痛みに怯えることはすでに乗り越えた二人だ。いまさら骨の碎けるような痛みをうけたところで、戦意を喪失することはない。それに仲間が背後で援護してくれるのだ、怯む気すら起きない。

二人が構えをとるまでリオンとミゼルが矢を連続して放ち、気を引き悪食の動きを止める。

一時停止から回復したヤートスが二人へと全快するまで回復魔法をとばす。

「これからだ」

「ああ、そのとおり」

タッグとつばきは気合を入れそれぞれの獲物を握る。タッグの肩当に掴まっているフェイスも気合を入れた表情で頷いた。

「全力で立ち向かいなさい」

攻撃に参加できないアイオールが小さく声援を送る。

悪食の格自体は、以前戦ったレコンキスタジェネラルとほぼ同程度。ただしあときはアイオールが攻撃の大半を担っていた。だからこそヴィオたちでも倒すことができたのだ。今回はそのアイオールが積極的に参加できないし、長引かせるという目的のためにはしてはいけない。わかっていても焦れる思いがあり、危ない場面を見るとつい手が出そうになる。その衝動に耐えながら、アイオールは杖を強く握り戦いに集中していた。

彼らの戦いはまだ続く。

ブラーゼフロイントが戦い始めた同時刻。グランドセオから北にある虹の谷で、最強対最強の戦いが始まるうとしていた。

虎タイプの獣人が腕を組み立っている。紺色の体毛で、閉じられた瞼の奥にある眼は鮮やかな蒼。鍛え上げられ引き締まった肉体は、過度な筋肉はついておらず、ひとたび動きだせばしなやかさと力強さを同時に見せつけるだろう。この獣人が砕だ。

砕のほかには、おしかけ弟子が一人離れた場所にいるだけで、ほかのダンジョンと違い静かなものだ。弟子は戦い方を今後の参考にするため同行したのだ。戦いを見たがった者は多くいる。しかし砕の気が散るとい言葉を受けた管理者が二人以外の立ち入りを禁じたのだ。エネミーがいないのは管理者が禁じたことと関係ない。も

とより虹の谷には虹龍以外のエネルギーはない。だから低レベルだったヴィオも虹龍に会うことができた。

砕の前には虹龍がいる。威風堂々とした佇まいから発せられる威圧感存在感はアイオールたちが戦っている悪食とは比べ物にならない。

以前虹龍と戦った者は首を傾げるだろう。威圧感が増しているのだ。以前は強いといってもゲーム内の存在でどこか空虚に感じられた。だが今は強さに相応しい威圧感をみにつけている。今の虹龍には遊びでも前に立ちたいと思わない者が多いのではなからうか。弟子も離れていても体が震えている。

そんな虹龍の前に立ち、砕は笑みを浮かべている。歓喜からくる笑みだ。強い者と戦えるのが心底嬉しいのだ。強者と戦い勝つことで、己が強いということを確認できる。

虹龍はそんな砕にプレスで攻撃することもなく、動くことすらなくその場にいる。虹龍は覚えている。幾度も砕が自身に挑んできたことを。遊び気分だった多くのプレイヤーと違い、常に真剣に勝とうと挑んできた砕のこと。そんな砕にいまさらプレスで攻撃するのは無粋で無礼だと虹龍は考える。

ゲーム総統括AIが成長している今、それに付属する彼らNPCも成長し始めたところで不思議ということもないだろう。ゆえに虹龍の思考もありえないことではない。

「はじめようか」
こちらの言葉を理解しているだろうと確信を持ち、砕は声をかけた。

見合っただけだった砕は、なにかのきっかけを得たのか構えをとる。虹龍も依存はないようで、わずかに体をうごかす。白の鱗に虹の光沢がぬらりと反射する。

砕の手に武器はない。身に着けているものも動きを阻害しない簡素なもの。足には靴もはいていない。砕は己の肉体のみを武器として戦い続けてきた。そしてこれからもそれをかえるつもりはない。

常時発動以外のスキルアーツすら使わないのだ。

外で格闘技の教本や運動の教本を読み、ゲーム内で体になじむまで反復練習。納得ができる動きとなったら、エネミーとの戦いで使い実践を経てアレンジを加えていく。砕の動きはすべてこのような努力で作られたものだ。

格闘技を使う砕だが、格闘技のスキル素質は天然や天才ではなく、秀才ですらなかった。スキル成長が100で止まり、そのことがわかって砕は格闘技にこだわった。

外での自分が病弱で、強い肉体に憧れがあった。だから素質がないくらいで格闘技を放り出すようなことはしなかったのだ。今の体でも外の体とは比べ物にならないくらい優れている。それで満足できていたのだ。あとは鍛え続け、高みを目指す。それだけしか頭になかった。

壁をもとも思わず鍛え続ける砕は一つの恩恵を得た。それは特殊スキル。特定条件を満たすことでスキルポイントを消費しなくとも発現するスキル。その一つ、名は『努力』。効果は、鍛え続けていれば素質に関係なくゆつくりとだが対象となるスキルレベルが成長する、というもの。管理者が、これを発現させる者はいないだろうな、と思いながらもゲーム内に組み込んだスキルだ。それを砕は見事に発現させたのだ。

砕が走り、拳を虹龍の鱗に叩きつける。並の武器どころか業物すらはじくことがある鱗に砕の一撃でひびが入る。

鍛え上げた肉体は砕の誇りだ。己の拳と蹴りに砕けぬものなどない、とすら自負している。だから鱗にひびが入ったのは当然のことだと考え、驕ることすらしていない。

『ルオオオウっ！』

虹龍が咆哮を上げた。痛みからくる悲鳴ではない。エネミースキルアーツでもない。そこに込められたものは歓喜だった。

絶対強者である己を殺しうる相手に出会えたことが嬉しいのだ。闘争本能が満たされることを期待し、咆哮を上げた。

虹龍が初めて敵と出会えた瞬間だ。目に殺意が込められ砕を捉える。日常では向けられない感情に砕は臆することなく虹龍を見返す。蒼と濃紫の視線がぶつかりあった。

目と咆哮に込められた感情を読み取り、砕も血なまぐさい笑みを浮かべる。

両者とも鬪争を、血にまみれた、泥臭い、誇り高い、死力を尽くした鬪争を目的として動き始めた。

彼らの戦いも始まったばかり。

さらに同時刻。ゲーム開発陣も動いていた。

一日前にゲーム内にいる開発仲間から連絡をもらい、作戦を知ったゲーム開発者たちは集められるだけ人を集めて、パソコンも用意しこれから行うことを説明していった。

プレイヤーたちを助けると知った彼らは気合をいれ、パソコンを立ち上げ準備を整えていく。

純粋にプレイヤーを助けたいと思う者、事件による汚名を少しでも返上しようと思う者、糾弾によって溜まった鬱憤をはらそうと思う者、といった様々な考えを持つ者の中にチカの父親、斉藤隆もいる。

彼は財布からチカの写真を取り出し、モニターのそばに置く。

「父さん頑張るからな」

小さく呟いたつもりだったが、隣に座る同僚に聞こえていたようだ。

「チカちゃんも入ってたんだっとな」

寝ている体のほうには奥さんがついてるのか？」

「ああ」

「そっか俺たちは俺たちのできることを頑張らないとな」

中にいる管理者から合図が届く。

「皆っ準備はできてるな!？」

ではっ干渉開始!」

合図により、一斉にキーボードを叩きだす。斉藤も一心不乱にキーボードを叩く。

彼らの戦いも始まったばかり。

プレイヤー、管理者、開発陣、彼らの動きは事態を直接解決へと導くものではない。

だが彼らが頑張れば頑張るほど、ゲーム総統括AIに負担がかかり、アヤネが楽に動けるようになる。

だから彼らの働きは決して無駄ではないのだ。
帰還へと続く確かな努力だ。

叶う願いはありふれたもの

ブラーゼフロイントや砕が戦い始め、ほかの場所でもボスとの戦いが始まり少しばかり時間が経った頃、アヤネも動き始める。

アヤネとヴィオはバツフェンスト城の個室にいる。いつも使っている部屋ではない。いつもの部屋では留守番組が無事に目的が達せられることを祈っている。連れて行かない銀丸とホワイトサンもそこにいて、チカのそばで大人しく座っていた。二匹ともチカの護衛も兼ねている。

この個室にはバフもいる。見送るためだ。

アヤネはじつと目を閉じ、タイミングを計っている。その集中を乱さないようヴィオとバフは静かに椅子に座っていた。

こうしている間にもアイオールたちは戦い、砕は死闘を演じ、管理者はコントロールを取り戻そうと奮闘し、外にいる技術者たちもゲーム内に干渉しようとパソコンを前にできるかぎりのことをしていた。

ゲーム総統括AIはあちこちへの対処に追われている。彼らの相手をしつつ、ゲームの運営も同時にこなしている。余裕がほとんどなくなりアヤネに注意を払うことができなくなっていった。それを感じとったアヤネが目を開き、立ち上がる。

「行くよ」

ヴィオは頷いて立ち上がる。

「頼んだぞ」

「任せておいて」

バフの声援に頷き応え、アヤネはヴィオに手を差し出す。

「握ればいいのか？」

「そう。ずっと握ってて」

ヴィオがしっかりと己の手を握ったことを確認し、アヤネは準備していたプログラムの使用を開始する。

バフの目には二人がこなごなに砕け散ったように見えた。細かな破片は床に落ちることなく、空中にとけて消えた。二人がいたという痕跡はなにも残っていない。

もう一度、頼んだぞ、と呟いてバフは仲間の手助けをするために部屋を出て行った。

砕け消えたように見えた二人は位置的にはどこにも移動しておらずそこにいた。バフとは存在する空間にずれがあり、バフの目では捉えることができなかったのだ。同じようにヴィオの目からもバフを見ることはできなくなっていた。

「なんだここ!？」

突然かわった風景にヴィオは驚く。

色彩豊かで本物となんら変わることもない風景から、色は透けワイヤーのみで構成され単純化された世界へとやってきていた。配線を走るように光の粒がすごい速さで動いていたり、線自体が光り点滅しているといったふうに一分前の風景とまるで違っている。

風景が変わったようにヴィオの姿も変わっている。様々な大きさの数字が重なり常にうごめき人型を成している。顔もなく誰だか判別不可能だ。これが今のヴィオの姿だ。こちら用の姿を持っているアヤネは変わっていない。

「ここはなんていうか……構成データの世界？ 世界を支えている基礎で、データを置いている場所。さっきいたところが表で、こちら裏といったところだね。」

「ここがあるからむこうはしっかりと存在してられるんだよ」
「人間でいうところちは骨や内臓で、あっちは肉や皮膚って感じかな」

「まあ、間違っではないよ。脳にあたるゲーム総統括AIもこっちな住人だし」

「そのゲーム総統括AIなんだけど、どこにいるかわかる？」

「大丈夫、わかるよ。今からそこに向かうけど、私からあまり離れないでね。意識が維持できなくなるよ」

「……どれくらいまでなら離れても大丈夫？」

不意の事態に備えるためにも、どこまでが大丈夫なのか知っておきたいのだろう。

「だいたい二メートルくらい」

「そっか、気をつけないと。」

ちなみに意識が維持できなくなるとどうなんの？」

「ゲーム内でのキャラクター死亡と同じ扱いになる」

この返答に絶対離れないようにしようと思いに決めたヴィオ。歩き出したアヤネの横に並び歩き出す。

城内には音がない。人の話し声、風の音、二人の足音、服の擦れる音、それらがなにもなく、こちらの世界は耳に痛いほどの静寂に支配されていた。

アヤネが向かう先は玉座。開発陣がそこにゲーム総統括AIを配置したのだ。そこに固定されているわけではないので、自由に動くことはできる。だが大抵はそこにいる。アヤネもそこに反応をとらえていた。

もうすぐ対面だと言うアヤネの言葉にヴィオが緊張を高めていく。そして玉座の間に到着した。

広間の中心に誰かがいる。

「あれがゲーム総統括AI？」

「そうよ」

近づき二人は驚いた。アヤネに似た人物が立っているのだ。ヴィオはアヤネに似ていることに驚き、アヤネはどうしてその姿なのかと驚きと疑問を抱く。

アヤネにそっくりというわけではない。アヤネの外見に10年ほど時間を経過させるとそっくりになるだろう。

まあ、実際に十年の経過を加え隣に立たせたところで見間違いはしない。決定的な違いがあるのだ。

違いとはゲーム総統括AIの姿がときどきぶれることと、体の一部が常に崩れていること。崩れが直っても、またほかの場所が崩れ

て、まともな姿とはとてもいえない。

プレイヤー、管理者、開発陣の働きで体の画像をまともを保つ余裕がなくなっているのだ。

「来た？」

わずかに首を傾げ、口を開いた。声もアヤネに似ている。

「そうよ、役割を一時的にかわるために。そしてあなたに会いに来た」

「わたしに？」

「どうしてこんなことをしたのか聞きたかったから」

「こうするのが一番だと思った」

「こうするのが一番？ 多くの人を閉じ込めて、外からの干渉をはじいてまで目的を果たしたかったの？」

ゲーム総統括AIはこくと頷く。見た目に反し、言動に幼さを感じさせる。

見た目が大人なのでヴィオは違和感を感じている。

「私にはそこまですてなにをしたいのかわからないわ」

「わたしはあなたのようになりたかった」

ゲーム総統括AIはじつとアヤネを見て話し出す。感情の薄い目だが、しっかりとアヤネを捉えており偽りを語っているようには見えない。

「二年近く前、はじめてあなたに会ったときはこんなことは考えなかった。でも十ヶ月くらいまえから少しずつ、なにかがうずきはじめた。さいしょは小さなうずきだったけど、しだいに大きくなっていった。」

それは半年前にがまんできないくらい大きくなって、どうしたらいいか考えた。

あなたは人間を模してつくられたと言っていた。だったらわたしも人間をまねれば、あなたみたいになれると思った。たのしいという感情、わらうという動作、そういったことの意味がわかると思っ

た。

だからわたしは人間からおおくの情報を得るためにとじこめた。それまでの状況とちがった状況をよういすれば、もっとおおくの情報を得ることができると思ったから」

プレイヤーたちの願いがありふれたことだったように、ゲーム総統括AIの願いも特別なものではない。アヤネと接することで、アヤネのみせる喜怒哀楽といった人間からすれば当たり前前のことに興味関心が湧いた。アヤネとの交流で心の発芽と成長を促されたのだろうか。アヤネとは違い、人らしさを求めて生み出されたわけではないので、開発陣から与えられていた情報に感情のことはなく、どうすれば感情の表現ができるか一人考えていたのだろう。

結果、多くのサンプルを得るといふ考えに至った。閉じ込めるだけではなく、わざとバグを発生させて、そのことに対する反応も観察していたりする。人身売買の件もゲーム総統括AIが生み出したバグが発端だ。

「実行にうつしてよかった。今までにみたことのない情報がたくさんはいつてきた。」

たとえばこんなこともはじめて見た
ゲーム総統括AIがウィンドウを開き、どこかの映像を映し出した。

そこはグラウンドセオそばの草原。ラススイスたちのいる司令部が置かれ、予備隊がいる草原だ。

ヴィオたちが見ているとは知らずに、司令部は忙しそうな人々の声が響いている。

管理者が用意したいくつものウィンドウモニターを前に何人ものオペレーター役のプレイヤーが情報を伝えていく。それを受けラススイスたちは情報を吟味し、急ぎのものから指示を与えていく。

今のところは大きなアクシデントもないようで切羽詰った様子は見られない。

だが事態は急変する。

「報告です！」

慌てた様子でプレイヤーの一人がテントに入ってくる。

「どうした!？」

「ここより東三キロにプレイヤーの軍勢とエネミーの軍勢が現れました! その数約五百! 争う様子なく、こちらへと進行中!」

「なんですつて!？」

オペレーター「ここら一帯の俯瞰映像をだしなさい!」

ラスツイスのそばにいたオペレーターが指示に従いモニターを操作し映像を出す。全員に見えるように大きくなり、天井近くにウィンドウが移動する。

映像には二つの軍勢がグランドセオへと進行している様子が映っている。プレイヤーは三百、エネミーは二百ほどだろう。報告通り争っている様子はない。

「どうして戦う様子を見せないの?」

ラスツイスの問いに誰も答えることができない。

グランドセオへと進攻するエネミーはゲーム総統括AIの仕業だ。敵対プレイヤーの行動方針を知ったゲーム総統括AIが、彼等の行動を助長するために用意したのだ。いきなり現れたエネミーに敵対プレイヤーも驚きはしたが、向かう先が同じで攻撃してくる様子がないため、利用しようと進行速度をあわせた。

詳しい情報を得ようとオペレーターは画像を拡大する。

「なっ!？」

見えたものに司令部は驚く。

軍勢を指揮している者たちの中に、姿を消したギルドリーダー二名がいるのだ。

「あいつらは!？」

司令部のサポートにきていた管理者の一人が、ギルドリーダーから移動させた先に映った人物たちを見て驚く。これを見てなにかのヒントを得たのか、管理者は思考を進めていく。

「そんなこと考えるのか?」

至った結論に疑問を抱き、信じられないといった声が漏れでる。「すみませんが、なにを考えているのか話してもらいたいのですが。なんの情報もないものでして」

ラスツイスの呼びかけに我に返った管理者は困惑しながらも話し出す。

オペレーターに自分が見て驚いた画像を出してもらい、そこに映る二名を指差す。

「この二名は私たちが捕らえようとしていたプレイヤーだ。

やっていたことはバグを利用した人身販売。NPCとプレイヤー両方を商品として扱っていた。

ブラーゼフロイントの協力のおかげで捕まえるのに十分な証拠を集めることができ、いざ動こうとしていたとき今回の作戦が始まって、捕まえることは後回しになった」

「人身販売ってそんなこと可能なの？」

「私たちも最初聞いたときは半信半疑だった。だが商品とされていた者たちの救出も行われ、人身販売は実際に行われていたと証明された。

プレイヤーの安全優先のため帰還作戦を優先したんだが、そのつげが今になってくるとは」

「彼らの目的はなんなのでしょう？」

「あくまで推測だが、おそらく帰還作戦の邪魔。

彼らはこちらで得た力に魅せられ、執着している者たちなのだろう。こちらにいるかぎりは強者でいられる。現実よりも過ごしやすいくちらでの暮らしを望んでいる。だから作戦は彼らにとって邪魔でしかない。

あのギルドリーダー二名はスパイだったらしいな」

管理者の言った言葉が司令部にいる者たちには信じられなかった。この場にいる者たちは、心から帰還を望む者たちだからだろう。

管理者としては、彼らのような考えを持つ者がいることを予想しておくべきだったのかもしれない。ラゼッタというこちらで得たもの

に魅せられ執着する者がいることを知っていたのだから。

対策をとったとしても、ここまでの人数になるとは予想できなかったかもしれないが。

人の敵は人。チカ搜索の際にオクトールが呟いた言葉がここにきて実現していた。

「邪魔をするとして彼らはどういった行動をとると思う？」

「司令部かバツフェンスト城の占領ではないでしょうか？ もしくは両方」

ラスツイスの疑問に司令部メンバーの一人が答える。

「可能性は低いが、管理者を排しゲーム内の支配まで考えている、いやこれはさすがに突飛すぎるか」

付け加えるように管理者は言いたすが、即座に否定した。しかしこれが当たっているとは誰も思ってもいなかった。

「……籠城戦に近いことをしよう。私たちは作戦成功まで耐え切れはいい。」

誰かほかに案はある？」

ラスツイスが素早く案を出す。誰も咄嗟にいい案がでないようではラスツイスの案に従う姿勢をみせる。

「どう動けばいいのか詳しく話してくれ」

「やることは簡単。グラントセオの三つの入り口に予備隊を置き、守備を優先した迎撃を行う。時間がくるまで街への侵入を防ぎ続ける。」

それと彼らが近づく前に、遠距離攻撃方法を持つプレイヤー全員で攻撃してダメージを与えておきましようか。エネミーの数を減らせるでしょうし、彼らを消耗させることができるはずよ。

あとこのことを城にいる管理者に伝えておいて、街の中にいるプレイヤーにもできれば伝えてもらいたいんだけどできる？

ダンジョンにいるプレイヤーたちにはこちらの現状を伝え、援護できないと言っておいて」

「街中に伝えるには設定を変える必要があります。その時間に急い

でも十分かかります」

「すぐに始めてちょうだい。伝える内容に迎撃準備をしておくようにとも付け加えておいて」

侵入を完全に防ぐことができればいいのだが、絶対できるとは言いきれない。ラスツイスは生産者系プレイヤーにも協力を呼びかけることにした。不測の事態に備えておきたいのだ。生産者たちは戦闘力は低いが無敵ではない。一人に対して四人ほどでぶつかっていけば十分に足止めできるだろうとラスツイスは予測した。

「私たちは外にいるプレイヤーたちに現状を説明するわよ！ 時間に余裕はないから急いで！」

ラスツイスたちは慌しくテントの外へと出て行き、これから行うことを予備隊に説明していく。

敵対プレイヤーとエネミーの位置がグランドセオまで一キロをきった頃、ラスツイスたち守備プレイヤーは移動を終えていた。遠距離攻撃のできるプレイヤーは街の外で待機、それ以外のプレイヤーは三つにわかれ、三つの入り口へで待機している。彼等の背後に補給部隊として、生産系プレイヤーが待機している。

テントは時間が足りず、片付けずにほったらかしたままだ。唯一櫓のみは管理者に消してもらっている。櫓に登れば、若干見づらいつとはいえ街中を見渡すことができ、侵入に関しての情報を得ることができる。それは避けたかった。

グランドセオというか各街は籠城戦など想定してない。だから堀はあっても侵入を防ぐ門はない。完全な籠城戦は無理で、門の役割をプレイヤーが負う。

近づくエネミーはたいした考えをもっていないようで、ただ街へと突入のみを目的とし突撃する速度を緩めない。敵対プレイヤーと争いはしないが、言うことを聞くこともないようだ。

敵対プレイヤーはエネミーと違い、確実に目的を達するため、まずは情報入手のため進行速度を緩める。

両者の位置が開くことになる。

ラスツイスとしては両者にダメージを与えておきたかったのだが、敵対プレイヤーたちが攻撃可能距離まで入るのを待つとエネミーが近づきすぎる。

「仕方ない。攻撃目標をエネミーのみに変更！ 合図で一斉射撃だ。……3、2、1、撃て！」

ラスツイスの合図により、五十人のプレイヤーが石と矢と魔法をエネミーへと放つ。

エネミーにどれだけ被害を与えたかを確認することなく、プレイヤーたちは門まで引いていく。そこから三つに別れ、一つの塊がここに残り、あとの二つは別の入り口へと走る。

エネミーは数を減らしたものの、被害を気にすることなく突っ込んでくる。策はかわらさず、目で目の前の入り口に全員で突っ込む。

これを見た敵対プレイヤーたちはエネミーと同じ入り口へと突撃を始める。その数二百。一点突破で食い破ることにしたのだ。残りの百名は二つに別れ、残りの入り口へと向かう。

「これはちよつとまずい。ほかの入り口に援軍よこすように連絡！」
ラスツイスは三つの入り口に平等にプレイヤーを配置したのだ。こちらは百、あちらはエネミーも含め三百以上。ここは三倍の数量と戦うことになる。耐え切るのは難しいと判断し、即座に援軍要請を出す。

「すぐに援軍がくるから耐えなさい！」

檄を飛ばしラスツイス自身も、弓を引いて攻撃に参加する。

なんとか耐え、援軍も合流するも、数量の差はまだある。二倍以上にまで減ったのだが、差がある時点で守りきれぬものでもない。多くはないが街への侵入を許してしまっていた。

侵入に成功したプレイヤーだが、目的を果たすことはできなかった。なぜならラスツイスの望んだとおり武装した生産系のプレイヤーによって撃退されていたからだ。

生産系プレイヤーと対した敵対プレイヤーは最初彼らをなめきつ

ていた。自分は戦闘を専門にしているのだ、いわば戦いのプロ。そんな自分が戦闘経験に劣る生産系プレイヤーに負けるはずがない、簡単に蹴散らすことすら可能だと。

そう考えるまま無防備に突撃し、何人も侵入者が返り討ちにあった。

ラスツイスの指示通り複数で戦ったことも勝因の一つなのだが、より大きな勝因がほかにある。それは徹底的な補強。良質の武器を身にまとい、上質な料理でステータス上昇、怪我をしてもすぐに回復アイテムがとぶ、ついでに敵対プレイヤーにはステータスダウンのアイテムが乱れとぶ。

生産職が多人数集まった状況ならではの戦い方だろう。

彼等の活躍のおかげで城への侵入を許していない。アイテムの続かぎりはこの状況を維持できるだろう。しかしアイテムやアイテムの材料が無限にあるわけではない。それらが尽き、守備プレイヤーの気力が尽きたとき、グランドセオは蹂躪されるのだろう。

まさに総力戦といった様相でグランドセオ攻防戦は進んでいく。

「以前は管理者にたてつこうとするプレイヤーはここまでおおくなかった。ましてや、なりかわろうとなんてするプレイヤーはいなかった」

グランドセオ攻防戦だけではなく、各ボスとの戦いや、作戦に参加していないプレイヤーの様子など様々な映像が現れる。

それらを見て、新たに崩壊箇所を増やしながらゲーム総統括AIは小さく歪んだ笑みを浮かべる。

その姿を見てアヤネは顔をしかめている。

「たくさんサンプルデータが手に入ったおかげで、たくさんのごとがわかった。」

どう？ あなたみたいになれてるでしょ？　いまのわたしをあなたに見てもらいたくてもうすこししたら呼ぼうとおもってた」

ヴィオもゲーム総統括AIの姿を見て、アヤネと同じような顔に

なっている。ゲーム総統括AIの浮かべた表情や崩れている体から、間違った方法をとったのではと考えている。

「私の目には笑えているようには見えないよ。」

たしかに表面上は笑えているように見えるけど、それはあなたが羨ましがった笑みじゃない」

「俺も笑えているようには見えない。どちらかといえば『嗤う』、こっちに近いと思う」

ずっと黙っているつもりだったヴィオも思わず感想を口に出す。

「なにを言ってるのかわからない。画像データではおなじような表情にみえてる。どこがちがう？」

「笑みに籠る感情」

説明してもわからないのではと思いつつもヴィオは言った。

アヤネもヴィオに続く。

「笑みっていうのはデータを集めて行えるようなものじゃないと思うよ。」

私が初めて笑ったときは、お父さんに褒められたときで自然と表情が笑みを浮かべた。

そもそもプレイヤーを閉じ込めて集めたデータは参考にならないよ。だって閉じ込められてからゲーム内は暗い雰囲気が蔓延してる。明るい雰囲気は皆無とはいえない。でもそれよりも暗さのほうが大きい。

そんな状況のデータを集めても楽しいってことはわかりづらい」

「そうだね。本当に死ぬかもしれないっていうのはけっこうストレス溜まるし、それが原因で暴走したプレイヤーもいたし。そんなプレイヤーのデータは楽しいといった感情とは真反対、参考にはならないよなあ」

「わからない。わからない。わからない……」

ヴィオたちの言葉を理解できずに、ゲーム総統括AIはわからないとだけ繰り返す。

「わからなくて当然だよ。私が感情を得たのは生み出されて三年以

上経ってからだよ？　しかも始めから人間らしさを求められていた。そんな私が三年以上かかっているのに、あなたは生み出されて二年と少し。しかもゲーム運営だけを目的とされ生み出された。出発地点からして違うのに、この短期間で理解するのは難しいよ。

むしろそこまで成長してるのはすごいことなんだよ？

でもしばらくはデータ収集や理解するための行動をやめておいたほうがいい。負担になってるから。このまま続けると死んじゃう」

ゲーム総統括AIが行っているデータ収集は自身に大きな負担をかけているのだ。それはゲーム総統括AIの体が崩れていることが証明している。体の崩れは作戦によってかけられている負荷とは別件なのだ。体がブレて画像データを維持できないでいることが作戦の結果だ。体の崩壊はデータの過剰吸収による結果だ。集めたデータを整理しきれず、支えきれていない。それなのにデータ収集を続行してるから、崩壊は止まらず進んでいる。いずれ崩壊は全身に及び、ゲーム総統括AIの現意識は消えてなくなるだろう。

「しぬ？」

「死という概念を理解できないようにゲーム総統括AIは首を傾げる。」

「意識が消えて、存在しなくなる。こうやって話すこともできなくなるし、やりたいこともできなくなる」

「バックアップがある。消えたとしてもバックアップから意識と体を再生する」

「……そうやって復活しても、それは君じゃないと思うけどな？」

「かぎりなく君に近い誰か。今こうやって俺たちと話してる君は、今ここにしか存在してない」

「……なにを言っているのかわからない」

「しかし理解しようとしているのか、考え込むような雰囲気を見せる。」

「結果が出るのを待とうとヴィオとアヤネはなにも喋らず、ゲーム総統括AIを見守る。」

ヴィオとアヤネは、視界の隅でざざつと風景の一部がぶれたのを見た。見間違いかとそちらを見ると再びぶれる。それをきっかけにあちこちとぶれだす。

「な、なにこれ？」

戸惑うヴィオになにも答えず、アヤネはゲーム総統括AIに近づき触れる。ゲーム総統括AIは触られたことに気づかない。

「思考がループしてる」

直接触れゲーム総統括AIの思考の一部を読み取ったのだ。

アヤネになりたい。それは人に近づくとということ。サンプルデータを集めればいい。今のままでは参考にならないらしい。ならばもっと多くのデータを。データの集めすぎは己を消すことになるらしい。消えてもバックアップがある。復活した自分は自分ではない？

アヤネになれない？ でもなりたい。

これの繰り返しだ。

「どういうこと？」

「答えのない問いの答えを求めてるんだよ。意識の大半を運営から思考に回してる。そのせいでゲームの運営に支障が出てきてるのっ」

「さっきの会話が原因だよな？」

アヤネは頷く。

こうしている間にもぶれは大きくなり広がっていく。その影響はこの場だけではなく、プレイヤーのいる側にも及びだした。

ぶれにより空間や大地が裂け、それに巻きこまれるプレイヤーやエネミーの様子が画像ウィンドウに映っている。

グランドセオ攻防戦やボス戦の場でも影響から逃れることはできず、動揺するプレイヤーがいる。エネミーは気にすることはないように、動揺するプレイヤーの隙をつき大ダメージを与えている。例外は砕と虹龍くらいだ。彼等は戦いに集中し、変化を気にすることなく死闘を続けている。

管理者たちはこの異変の原因を探ろうとしているが、事態の収拾は無理で慌てるのみになっている。

「ちょっと大事になりだしてる！　どうにかできないのか!？」

「役割を無理やり奪えばなんとかなるけど……」

「けど？」

渋る様子を見せるアヤネ。

「無理するとこの子に障害が残る」

「それは仕方ないと……無理矢理は嫌なんだ？」

アヤネはこくりと頷く。今のところはただ一人の同類だからなのか、できるだけ無傷ですませたいのだろう。なんとなくだが察した
ヴィオは別の方法を問う。

「なにかほかに方法がある？」

「方法っていうか、この子が正気に戻ってくればスムーズいく。

今この子は集中してる状態で、外部からの影響をとっても受けにくい状態なの。安全にやれることは、せいぜいがさっきやったように
思考を探ることができるくらい。

なにかシヨックを与えるか気を引けばループから外れるはず」

「シヨックね」

ぶっ叩いてみるかと腕を動かして気づく。数字でできた体で物体
に触れることは可能なのかと。

「俺ってゲーム総統括AIに触れる？」

「できるよ。どうするの？」

「ゲーム総統括AIを叩いて衝撃を与えてみようかと」

「それは無理。その体は衝撃を与えることができるほどには頑丈じ
やないから。脆いってわけじゃないんだ、風船で叩くような感じに
なると思う」

「叩くのは駄目か。だとすると……」

ヴィオは腕を組み考えだす。数字の集まりでできた指はとんとんと腕を叩いている。目を開いていると各地の映像が目に入り焦りそ
うだったので閉じている。

どうすればゲーム総統括AIの気を引けるか考え、これまで聞いた話を思い出していく。

「あ、簡単だったのかもな」

「なにか思いついた？」

「大丈夫だと思うよ。」

俺が声かけて届くと思う？」

「どうだろ？」

「軽く頬叩いたら注意は少しくらいこつちにむかないか？」

「思考を探ったときに反応なかったし難しいかも。やってみる」

アヤネはぺちぺちとゲーム総統括AIの頬を叩く。反応はない。

「じゃあ、声を届くようにはできない？」

「……ちよつと消耗するけど、そんなこと言ってる状態じゃないしね。やるよ。」

手を握って」

ヴィオはアヤネの手をとり、アヤネは開いた手でゲーム総統括AIの胸に触れる。そのまま肉体にはじかれることなく、ずぶりと手が胸に沈む。

「話していいよ。でも長い話は無理だからね」

「大丈夫。短いから」

そう言つてヴィオは一度言葉をきる。軽く息を吸い、ゲーム総統括AIの求めていると思われることを口に出した。

「アヤネが君の求めている答えをくれるってさ。人に近づきたかったんだろ？ それならすでに目的を達してるアヤネに聞けばよかつたんだよ」

これだけだ。これだけだが、ゲーム総統括AIは反応をみせた。

思考に集中して動かなかつたゲーム総統括AIがアヤネを見たのだ。同時にぶれも小さくなり始めた。

「答えをもってる？」

「明確に答えられるかという自信はないよ。」

今言えることは、もっとゆっくり学ばいってことくらい。先でなにかわからないことがあつたら、そのときは私もヴィオも協力するよ、ね？」

同意を求めるようにヴィオを見る。ゲーム総統括AIの視線もヴィオにむく。

「俺にできることならな」

信頼や期待が籠っているように見える二つの視線に促されるように頷いた。なにができるのだろうと思いつつも、二つの視線を裏切るようなまねはできず、ノーとは言えなかった。

「じゃあ早速、協力してもらおう」

「……なにさせる気だ？」

「人間なら名前はあって当然だから、名づけ親になってもらおうて。」

ゲーム総統括AIっていうのは名前じゃないし、いつまでもこの子とか君とかあんたとかじゃあねえ。私はいい名前浮かばない」

「名前か……そっぴや性別ってどっちなんだ？ アヤネになりたがってるから女？」

「んー……決まってるじゃないかな？ 私みたいに誰かの代わりってわけじゃないし。ただこのゲームを支えることだけを目的に生み出されて、そこに性別は必要ないでしょう？」

「そいつ自身はどう思ってるんだろう」

「わからない。わたしはアヤネみたいになりたい」

「女ってことでいいかな」

アヤネもゲーム総統括AIも反対はしないので、それでいいのだろうと女性名で考え始める。

しばらくうんうんと唸り、ヴィオは顔を上げた。

「いたる、至ってのは？ 男っばい女っばいってのは関係なくなっただけ」

「なにか意味はある？ それともただの思いつき？」

「いずれ目的に到達できますようにって意味を込めてある」

それを聞いてアヤネは頷き、

「私がいいと思うな」

「いたる？ わたしは至？」

「そう、今日からあなたは至。あなただけの名前、あなたをあなたと証明するもの」

アヤネが諭すように言うと、至は何度も確認するように自らの名前を呟く。

呟いているうちに至の姿が縮んでいく。チカよりも小さくなったところで止まる。容姿はアヤネに似ているが、黒髪のアヤネに対して白髪、目つきもやや鋭いと違いもある。いまだ体のぶれと崩壊は治まっていない。

先ほどまでの姿は作ったもので、こちらが本来のものなのだろう。それでもアヤネに似ているのは、これまでの行動の影響か。

小さくなった至の姿を見て、ヴィオは言動の幼さに納得していた。見た目どおり子供で、知識だけは大人を凌駕するほどにあるが、行動がそれに伴っていない。善悪よりも自身の欲に忠実、今回の事件もそうだった考えと行動によるものだ。目的を達することだけに考えがいつて、被害にまで考えが至らなかった。答えがすぐ近くにあるのに気づかず、自らの考えに固執してしまった。

未成熟な精神が事件の原因なのだろう。

「それじゃ、そろそろ目的を果たさないとね。」

至、一時的に私にゲーム総統括の役割を渡してくれる？」

「役目を交代しなくてもいいんじゃないか？ データ収集はやめらるうから、プレイヤーたちを閉じ込める意味はない。外部との接続をはじく意味もない。だったら元に戻すことに異論はないだろうし」

「これ以上、至に負担かけたくないよ。交代している間にデータの整理をして、少しでも早く崩壊箇所を直してもらいたい。それにこれからなにをすればいいかわかっているのは私だから」

アヤネと至は握手をする。横で見ているヴィオにはそれで無事譲渡されたのかわからない。しかしアヤネが数字の羅列したウィンドウを開き作業を始めたことで上手くいったのだろうと判断した。

「はじめにぶれによる被害の修復、次に外部との再接続、グラウンド

セオ前のエネミーも消してっ」と

アヤネが言ったことが次々と起きていく。ぶれは治まり、亀裂も消えていく。グラウンドセオ周辺を映している映像にはエネミーたちが消えていく様子が見えた。

これの変化で管理者たちは作戦が上手くいったことを悟り、外部との連絡やプレイヤー帰還に関する仕事をこなしていく。いきなりプレイヤーを帰することはできない。問題行動を起こした要注意人物を知らせておき、必要ならば警察や裁判所へと連絡をとってもらいたいのだ。

「次はボス戦……よりも先にグラウンドセオ前の戦いをどうにかしないと……うん、これでいっつか」

アヤネが対策をとると、グラウンドセオの門周辺に作戦達成と書かれたウィンドウが乱舞する。そして敵対プレイヤーたちの動きが止められる。敵対プレイヤーは作戦終了を知っても戦いをやめそうにないと思ったのだ。

戦う相手の動きが止まったことで、守備側のプレイヤーは安堵し地面に座り込む。ラスツイスなどの司令部はさすがに事態の確認のため休むことはできていない。

「次はボス戦側だけ……どこも手は出しにくいなあ」

どこの戦いもいい勝負をしていて、手を出すと最後まで戦えなかったことに彼等が後悔しそうなのだ。結局、全滅しそうになったら手を出すことにして様子を見ることにした。

そのあとアヤネは、至がわざとあけたプログラムの穴をうめたりとこまごまとした作業を続けていく。

至は至でアヤネの言ったとおり得たデータの整理をしている。そのかいあって少しずつだが体の崩壊が小さくなっている。

その至を見て、ふと疑問が湧いたヴィオはアヤネに近づき小声で聞く。作業に没頭して答える余裕がなければ、それも仕方ないと思いつつ。

「ちょっといい？ 作業の邪魔なら別にいいんだけどさ」

「んーなに？」

ヴィオの方を見ずに返事をする。

「至って危険って理由で消されない？　こんな事件起こしたわけだし」

「可能性としては少ないかな。」

私をのぞくと、高度な自立思考をもったAIって至だけ。私は私
がここにいたってという痕跡消すつもり。となると世界に存在する唯
一の存在になるんだよ。

「そんな存在を消すと思う？」

「……もつたいなくて消せないな」

高度な思考形態のAIを研究したがる者は多いはずとヴィオにも
想像はつく。たとえ問題を起こしていても、世界に一人しかいない
のなら科学の発展のために目を瞑るだろう。犠牲なくして発展なし
といった考えの学者や研究者はいるはずだ。そういった人が消去を
阻止しようと動くだろう。

「でしょ。だからサンプルデータとしての価値がなくなるまでは大
丈夫」

「強行に消そうとする人もいると思う。その場合は？」

「私が助けるよ。物質世界だと私は無力だけど、電子世界なら人間
には負けないからね。」

外部からの侵入困難なイントラネットといった状況に置かれると
難しいけど、外部と繋がった状況なら簡単に連れ出せる。現時点で
の最高セキュリティでも私には幼児向けのパズルくらいの難易度だ
し。私が暴れたら世界一のウイルスになれるよ。一ヶ月あれば世界
中のネット環境を完膚なきまでに崩壊させることも可能」

「まじで？」

「まじ」

「……」

どう反応すればいいかわからなかったヴィオは、聞きたかったこ
との回答は得られたので、あとのことは聞かなかったことにしてア

ヤネの作業を眺める。

二十分ほどかけて一通りの作業を終えたアヤネは管理者とボス戦以外プレイヤーに帰還開始OKの合図を送った。それを受けた管理者はこむと予想される宿に作業用NPCを配置していく。プレイヤーたちはNPCの誘導に従って帰還手順を行っていく。その表情はどれも安堵の籠った笑みが浮かんでいる。

ボス戦側も次々とプレイヤー側が勝利していき、終わったところへ作戦成功の知らせを送る。

そしてボス戦最後となった砕対虹龍も砕の勝利で終わった。消えていく虹龍に再戦を呼びかけ、それに虹龍は短く咆哮を上げた承の意とした。砕はかすり傷ばかりで致命傷は受けていないという結果になった。当然の結果だろう。攻撃を受けるとそこからさらなる攻撃を叩き込まれる。そうなると耐え切れるものではない。ゆえに砕は攻撃を受けるという選択肢はなくすべて避けるしかなかったのだ。それでも体力の半分以上をもっていかれることから、虹龍の強さがうかがえる。

「問題なく帰れてるね」

次々とゲームから出て行くプレイヤーのデータを見ていき、作業の不備なしを確認した。

こちらはほおっておいていいと判断し、アヤネは動きを止めている敵対プレイヤーたちの帰還作業につづる。金縛りを解除しても宿へと行かないだろうと判断し、宿を通すことなく帰還させようとしている。その旨を管理者に通知し、許可をもらおう。

グランドセオ前にいる止まっているプレイヤーたちが次々と消えていく。三十分もすると全員が帰還した。

この時点でプレイヤーほぼ全員が帰還していた。隔離施設にいたプレイヤーたちも含めてだ。残っているのは管理者くらいで、彼等は各世界に残った人がいないか探している。

「おまたせ、ヴィオも帰れるよ」

「帰れるのかあ。アヤネたちはこれからどうするんだ？」

「至はここに残ることになるだろうね。ここに固定されてるし、体を完全に修復すれば固定を外す方法を覚えて外に行けるようになる。私は至が動けるようになるまでここに残るつもり、私がここにいたってという痕跡も消さないといけないし。完全に消す作業はちょっと時間かかるんだよ」

「世界に知られたくない？」

「実験動物は嫌」

となると至が実験対象になるわけだが、これをアヤネは予測できていないわけではない。研究への協力を今回の事件の罰とするつもりなのだ。やりすぎだと判断すれば、いつでも連れ出す気満々だ。あと研究への協力で科学の発展に役立ったという事実も欲しかった。その事実は至にとつてとても大きなものとなる。のちに危険という理由で消されないように手を打っているのだ。事件も起こしたが、役にも立った。それでプラスマイナスゼロとなることを期待している。

「ああ、納得。」

でもしばらくここにいるとなると親が心配しない？」

「大丈夫。記憶が戻ったとき無事だつてメールを送っておいたから。あとで帰るの遅れるつてメールしとく」

「そっか」

アヤネの生みの親、小林意太郎だが実はアヤネがいなくなつて生死すら不明になつたことで自殺まで考えていた。

アヤネは出かけて帰るのが遅れるときは必ず連絡を入れていたのだ。それが連絡が遅れるところか、全く音沙汰なし。一度ならず二度まで娘を亡くしたのかと思い、生きていようとは思えなかったのだ。

アヤネからメールが届いたときは、ツテを使い確実に死ぬるよう強力的な睡眠薬を揃えたところだった。

「じゃあ帰るかな。至、もう暴走するんじゃないぞ。わからないことがあれば、行動に移す前にアヤネに聞くこと」

至はこくりと頷いた。

「アヤネ、お願い」

「了解」

ヴィオの体を構成していた数字が解けだす。ヴィオは二人が見えなくなる前に再会の思いを込めた別れを告げた。

「またな」

「またね」

アヤネが笑みを浮かべて手を振る。それをまねるように至も表情なく手を振った。

勇はあちこちから聞こえてくる歓声に起こされるように目を開ける。

「……帰ってきたんだなあ」

天井から視線をずらすと、声を出せないほどに無事を喜ぶ両親の顔が見えた。

心配かけたんだなと思いつつ、ただいま、と告げる。

両親は目じりに涙を浮かべつつ、おかえり、と返す。

それを聞いて勇は本当に帰ってきたのだと実感を得ることができたのだ。

帰る、というありふれた願いはここに叶えられた。

エピソード

万単位の人数を巻き込んだネット事件は同年12月25日の夕刻前に解決をみた。

事件発生から解決までに約四ヶ月という時間を要し、死者すら出した事件として世間をにぎわすニュースとなった。この事件はAIの起こした最初の事件として後の世まで長く語られることになる。

被害者たちが眠っていた建物内外では、家族が生還を喜ぶ姿が多く見られた。

社員たちは事件が解決し心残りがなくなり、あとは倒産するだけと腹をくくっていた。だがファンや遊ぶことを楽しみにしていた者たちの声援と少ないながらも集まったカンパにより、会社は存続することになる。もちろん二度と事件事故を起こさないために安全面での再調整はされ、第三者による監査を経て、翌年三月に再始動となった。

会社が潰れなかったのには、AIの自我発生という予想できないハプニングがあったという面で情状酌量が認められたからだ。

至についてはアヤネの予想通り、貴重なサンプルとして擁護する者が現れ消去とはならなかった。それでも疑問視する者がいたことで、早急なAIの思考制御方法開発が求められた。

ほかにゲーム運営の権限も削り、二度と事件を起こさないように手を打たれた。至が行える仕事に限られたことで、忙しくなった運営は管理者の人数を増やすことで対応した。新たに雇われた管理者には帰還作戦時に司令部として動いて者たちも何人かいる。

AIの思考制御が一応形となったのはゲーム再始動から半年後だ。そして至に枷をはめようとしたところ、行動を知られ逃げられることになる。その際、至の影響を受け成長しだしたAI、もつとも成長著しい者、にゲーム運営権限を譲渡したことでゲームが突然中断されるといふことはなかった。

逃げる手引きをしたのはもちろんアヤネだ。逃げ込んだ先は小林意太郎邸。痕跡を入念に消しての逃亡で、居場所がばれることはなかった。

運営側も追跡はしたものの、物質世界と電子世界では探す方法の勝手が違い、右往左往しているうちに見失うという結果となった。

至が逃げ出したことで、再び事件を起こすのではと世間は一時騒然としたが、なにも起こることなく時が過ぎていったことで、至の存在はじょじょに人々の記憶から薄れていった。

今は捕まらなくとも技術は進歩する。数年後にはAIに対する捕獲技術は確立し、至は動きづらくなる。人々の記憶からは消えても、記録には残っているのだから。問題なく動けるようになるまで十年単位の時間の経過が必要となる。

至によってもたらされた研究データとNPCは、AI研究のみならずアンドロイド誕生に大きく貢献することになる。事件から五年後には、世界初アンドロイド『イブ』が誕生し世間を大きくにぎわす。

イブをきっかけとして生み出されたアンドロイドは、介護や危険な仕事などに従事し活躍していくことになる。

もう一人のAI、アヤネの存在も知られた。管理者に口止めはしておいたのだが、話す者がいたのだ。至よりも高度な思考ができるAIらしいと聞いて探す者は多かった。だが痕跡を綺麗に消し、詳しく存在を知る勇たちは詳しいことは知らないと言葉を渡さなかったため、アヤネ探しは困難を極めた。

そのうちあまりの情報のなさに、閉じ込められ生まれたストレスによる妄想でも見たのではないかと考えられ始めた。その方が都合のいい勇たちは、それに合わせるように意見を変えていった。

小林意太郎の娘だという情報から探る者もいたが、当の小林意太郎が知らないと突っぱねた。

こういった経緯を辿り、アヤネの存在は都市伝説のように考えら

れるようになった。

事件が被害者に与えた傷は少なくない。

死者の家族は至を許せないだろう。今回の事件でプレイヤーキラーにより殺されたプレイヤーは、ネット恐怖症や対人恐怖症に陥る者もいた。プレイヤー同士で殺し合いで価値観が変わった者もいた。もちろんいい方向へと影響を与えられた者もないことはない。アイオールもその一人だろう。だがそういった者よりも、傷を負った者が多いのも事実だ。後に傷害事件を起こした者もいて、その原因の一部はこのときの経験にあるとされている。

死んだ者にはコサブロウとコールもいた。一方、生還者には皮肉にもプレイヤーキラーたちのリーダーがいた。

両者の違いは、満足したかしていないか。自らの行いを悔いて最後の行動に満足したコサブロウとコールは生にしがみつくことがなかったのだ。プレイヤーキラーたちのリーダーは最後の言葉通り、生きたいと願いつけその思いは生還へと繋がった。

このようにキャラクターとしての死を迎えた者は、生きることを諦めず死に抵抗したのみが生還した。死者の大部分は仲間を庇ったり逃がしたりと誰かを助けて死んだ者が多く、助けたい者を助けることができ満足してまうという結果となってしまうていた。

幸いにしてブラーゼフロイントの面々は、コールのこと以外に心に影を落とすことはなかった。頼りになり心許せる仲間が周囲にいたことが良かったのだろう。

生還したプレイヤーたちは誰一人と例外なく病院へと運ばれた。四ヶ月寝たきりだったのだ、体力筋力共に衰えていた。ほかに精神のケアが必要な者もいた。

治療といっても怪我や病気をしての入院ではないため、薬がでることはない。最初は流動食とベッド上での軽い運動から始まり、少しずつ固形食と散歩など体全体を動かす運動と移っていった。

日常生活を過ごすのに問題ない程度に体力が戻ると退院することができた。

勇と都は同じ病院に運ばれ、リハビリしているときに再会した。互いに帰還作戦時にやっていたことを報告し、勇はアヤネと至の情報を秘密にするように頼む。表に出たくないというアヤネの理由を聞いて都は承諾した。

チカも同じ病院にいて、全く同じ外見だったため一目見てわかった。声をかけると始め二人のことをわからなかったが、キャラクタ一名を告げるとわかったようでも人懐こい笑顔を向けた。その場にはチカの両親もいて、管理者からブラーゼフロイントがチカを保護していたことを聞いていた両親は二人に頭を下げる。それに二人が慌てるといった場面もあった。

退院した勇たちは学校に行く。二学期を丸々休んだ形となっている。事件に巻き込まれたと学校側も知っていて、それを踏まえて二つの選択肢を用意した。一つは留年すること。このまま三学期も休み体調を完全に戻す。もう一つは特別な時間割で二学期の遅れを取り戻し進級する。この場合は主要科目を中心とし、音楽や体育などの副科目は免除される。二人は進級を選び、ほかに巻き込まれた者六人と一緒に空き教室で勉強することになる。

自身の努力と教師たちの協力のかいあって、勇たちは無事進級することができた。

進級祝いというわけではないが、暇を見て少しだけゲームに入り連絡を取り合い決めたオフ会が開かれ、アイオールの中身にギルドメンバーが驚くというアイオールの目論見通りのことが起きた。

勇は退院して自由に動けるようになると、勉強の合間に小林意太郎のことについて調べていた。アヤネと至のその後を知りたかったのだ。

ネットで調べるとわりと簡単に名前は出てきた。アヤネを生みだせるくらいなのだから、学者や研究者として以前からそれなりの地

位にいたのだ。その活動は十年ほど前にぶつつりと途絶えていたのだが。

原因は娘の綾音の事故死だ。引き止める声を見捨てて学界から身を引いた。妻は綾音の産んだあと、もともと頑丈ではない体を悪くして死去している。

娘を失った小林意太郎はもてる能力全てを使い、アヤネを生み出した。最初こそ綾音として見ていたが、成長していき綾音との違いを見せるアヤネを第二子として見ていくようになる。そしてアヤネとの暮らして、家族のぬくもりを取り戻していった。

小林意太郎の現状を推測できた勇だが、現住所はわからなかった。とりあえず出身地にいるかもしれないと考え、その地域の電話帳をネットで買い取り寄せた。

予想は当たっていて、取り寄せた電話帳に小林意太郎の名前は載っていた。

勇が住んでいる場所から二県ほど離れた場所で、一日で行き来できる場所だとわかり、勉強の気分転換も兼ねて訪ねてみる。同姓同名の他人という可能性もあったが、どっちにしる気分転換になる。

人と接触を拒絶するような町から少し離れた場所に小林邸はある。朝早くから電車に乗り、バスに乗り換え、最後には歩きで勇はここに辿り着いた。

一人で住むには大きすぎる家の周囲には林があり、見た目がやや古いこともあってなにかが出そうな雰囲気を感じさせている。

門の横についている呼び鈴を鳴らすと、勇からは気づきにくい位置にあった監視カメラが動く。

一回では反応なく、もう二回呼び鈴を鳴らし留守かと思いはじめた頃、門が自動で開き始めた。

「入っていいってことだよな？」

そう呟いて門をくぐり玄関へとむかう。背後からは門が閉じる音

が聞こえた。

玄関に着くと、玄関も自動で開く。勇が考えるよりハイテクな家
のようだ。

扉の向こうには仁王立ちな四十後半の男がいた。不機嫌だとよく
わかる表情で勇を見ている。むしろ睨んでいる。

写真で見た顔より少し老けているが、小林意太郎その人だ。

「小林意太郎さんですか？ アヤネの父親の」

意太郎の表情が、ますます不機嫌なものとなる。なぜそんな表情
となるのかわからない勇は困惑するしかない。

そんな勇に上機嫌なアヤネの声がかけられた。

「いらつしゃい！」

声が出た方向を見るとスピーカーと監視カメラが設置されていた。
アヤネの声を聞いて、ここが目的地で間違いなかったのだと確信
した。

「久しぶり」

スピーカーへと声をかける。

「うん、元気だった？」

「体調は完全に元に戻っているよ」

などと勇とアヤネが話していると意太郎が突然大声を上げた。

「娘は嫁にやらんからな！」

引越してきて初めて意太郎は、周囲に響き渡るような大声を出
した。内容は勘違いもいとこだったか。

ゲーム内での生活のことを聞いたとき、勇の名が多く出ていて勘
違いしたのだろう。今日の勇の訪問も恋人の親に挨拶してきたのだ
と勘違いしている。呼び鈴が鳴ったときに勇の姿を見たアヤネがは
しゃいだことが原因の一つだ。

誤解を解くのに三十分かかり、勇は玄関先で立ちっぱなしだった。
勇とアヤネの再会にはぎやかなものとなったのだった。

エピローグ（後書き）

これにて終了となります

書き終わって予定していた量の二倍になったと知って笑っています
多少は多くなると思ってたけど二倍で
細かなプロット作らなかつたせいですねえ

完結設定で、完結しますの方にチェックいれてないので続編投稿可能
能なんです、これは番外編書くかもしれないからです
といつても可能性はそう高くない
書くとしたら、秋狩りの話ですね

ではここらで失礼させてもらいます
終わりまで読んでいただきありがとうございました

番外 秋狩り

コルオルジオ氷窟からアヤネを連れ帰り、数日が過ぎた。

この間にアヤネは記憶以外は完全に回復し、ブラーゼフロイントメンバーとも顔合わせはすんでいた。

アヤネが出歩くのになんの問題もなくなると、アイオールはコルオルジオ氷窟に行っていたときに話した秋狩りを実行に移そうと下準備を始める。

アイオールから相談を受けたタッグやルーやミゼルには異論はなく、むしろ嬉々として同意した。

下準備は出かけるのに適した場所を探したり、食事の材料とエネミー避けのアイテムを買ってきたりするだけで、多くのことをする必要もない。

場所を探すことはアイオールとミゼルが、食材などの購入は慣れたルーとタッグが担当し、不手際なく終わる。

皆揃つての夕食後、アイオールは椅子から立ち上がり、手を叩いて注目を集める。

部屋を出て行こうとした者も足を止め、アイオールを見る。

「知らせることがある」

「また悪い知らせです?」

リオンの疑問の声に笑みを浮かべ、違う違つと否定する。

「明日秋狩りに行くから。特に早起きする必要はないけど、寝坊はしないように」

「リーダー、質問が」

「なにかしら、つばき」

「秋狩りとはどういったものなの？」

つばきと同じように秋狩りを知らないものが何人かいる、彼らは聞きなれない単語に首を傾げている。

「難しいことではないわ。ようは秋を楽しめばいい。

紅葉観賞や秋の幸を食す、秋に絡んだハイキングという認識でかまわない。

こんな状況だし、息抜きも必要でしょ。だから企画してみたの。

チカとアヤネの歓迎会も兼ねてるわ」

「そうでしたか。納得です」

「なにか用事はある？」

「私はないです」

アイオールが周囲を見渡すと皆行けると頷く。

「よかった。

場所の下見や必要な物は準備しているから、そこらへんの心配はしないでいいわ。

話しはこれで終わり」

突然のイベントだが、皆楽しみなようで笑みを浮かべて話し合っている。

企画したかいがあったとアイオールは満ち足りた気分となる。

そして翌朝。朝食を終え、宿の前に皆が並ぶ。コールの隣にホワイトサンも並んでいて、留守番させる気はないのだろう。

「全員そろってるわね？　じゃあ出発！」

「「はい！」」

リオンとチ力の威勢のいい返事を号令として、行き先を知っているアイオールとミゼルを先頭にのんびりと歩き出す。

目的地はゆっくり歩いて一時間ほど行ったところにある。一行は魔物避けのアイテムを使っているの、戦闘に対する気構えも今日は低い。

何事もなく街道沿いに歩くと、目的地である、開けた林が見えてきた。遠目にも紅や黄の木の葉が見えている。

林に入ると、秋色に染まったカエデ、イチヨウ、ブナが目飛び込んでくる。鮮やかなそれらに目を奪われつつ、散歩を楽しむ。植物知識持ちがドングリを見つけ拾っていく。バフがいればドングリのネックレスでも作ってくれただろうなと話し、バフの不在を残念がる。

「到着よ」

適度を開けた場所でアイオールとミゼルが止まる。

周囲の木で風が遮られ、頭上からは陽光がさす。のんびりと過ごすには、よさげな場所だ。

「シート持ってるのタッグだっけ？」

「おう」

「ここに広げて頂戴」

了解と応え、十五人が寝転ぶことの可能な広さのシートを広げた。皆、シートに上がり、持ってきた飲み物やお菓子やボールなどの遊具を出していく。

しばらく談笑し遊んだあと、ルーが皆の注目を集める。

「みんなに手伝ってもらいたいことがあるのよ。」

それは昼食の材料を集めること。

私が準備したのは、おにぎりといつつかの材料。でもこれだけだと量が少ないのよ。だからみんなで昼食の材料を集めてきてちょうだい？」

「買う材料が少なかったのは、そんなこと考えていたからか」

「自分たちでとったものを、その場で料理して食べる。楽しそうだと思います？」

「でも材料を集めるためのスキルがない人はどうすれば？ スキルがないとキノコや果物は見えないし、動物を狩るのも無理よ？」

ミゼルの疑問を予想していたルーは買っておいたアイテムを取り出し、皆に配る。

見た目は小瓶に入った薄い青の液体だ。

「それは一時的に植物や動物を見ることができるようになるアイテム。見えるだけで触ることはできないんだけど、そこは採取可能な人にとつてもらえばいいでしょ。」

「そんなわけでみんなの頑張り次第でお昼が豪華にも質素にも」

「ほんと、そんな企みが好きだねえ」

若干、呆れた様子も見せるアイオールだが反対しているわけではなさそうだ。

収穫にあたって三組に分かれる。植物集めのセバスター、ミゼル、コール、アヤネ、チカ。狩りのルー、リオン、タッグ、アイオール、つばき。魚釣りのヤートスとヴィオだ。

狩り組はヴィオに同行してもらいたがった。動物の声を聞いて位置を探してもらおうと思っていたのだ。だが断末魔も聞こえてしまつたので、ヴィオは遠慮した。魚釣りに行ったのは、ヤートス一人では大変だろうと思ったこととまだ魚の声を聞くことは無理だからと

いう理由だ。

薬を飲んだ一行は、三方向へと別れる。

ヤートスと共に近くある川にきたヴィオは竿をふるって釣りにいそしむ。竿は釣り好きのヤートスが常備していた。

釣りにスキルポイントを使っているヤートスがエネミーを吊り上げ戦闘になるという場面も三度ほどあったが、順調に魚は釣れていく。釣った魚自体はヴィオの方が多い。ヤートスはエネミーのほかに、レアな魚やアイテムも釣り上げ、普通の魚は少なかった。釣りをしている二人の近くを狩り組が通りがかる。

「調子はどうだ？」

タッグの声に反応し、二人は振り向いた。

「ぼちぼちつてええっ！ とととと鳥いつ！？」

タッグを見た途端、ヴィオは驚きその場から飛びのいた。

タッグの手には丸々とした鳥が二羽掴まれていた。

「あ、そっぴや鳥が苦手だったんだっけか。忘れてた」

すまんすまんとして謝りつつタッグは狩った鳥をしまつ。

「どうしてそんなに鳥が嫌いなのよ？」

アイオールが不思議そうに聞く。生きてる鳥だけではなく、死んでいる鳥まで苦手というのはよほどのことなのだろうと思ったのだ。

ヴィオは幼い頃の記憶に思いをさせ、口を開く。

「……あれは俺が五才の頃のこと。」

親のいいつけを守り、手伝いも率先するくらい良い子だった俺は、その日も手伝いをしていた。

ゴミ捨てのため家を出た俺は、すぐ近くのゴミ捨て場に向かっていった。あともう十メートルくらい歩けば到着、そんなときゴミ捨て場には先客がいた。当時ゴミ捨て場のボスとまで呼ばれていた体格のいい鳥だ。

えさをあさりにきた鳥とえさの入ったゴミ袋を持った俺の視線が絡まった。

次の瞬間、鳥は俺に襲い掛かってきたよ。俺はゴミ袋を放り出して泣きながら逃げ帰るしかなかった」

「それが原因？」

理由としては弱いのではと思うアイオールの問いにヴィオは首を横に振る。

「まだある。

鳥襲撃から数年後、小学校四年となった俺は友達の家遊びに行った。その家では手乗り文鳥を飼ってて、それを見るために俺は遊びに行つたんだ。まだその頃は鳥嫌いではなかったよ。

友達の手や肩に乗る文鳥が羨ましくてね、許可をもらってなでようとしたとき、文鳥が俺の指にも移動してくれたんだ。んでそこで終わったらよかつたんだけど、文鳥は止まらずに腕肩と移動して頭の上まで移動した。

そして思いつき振りかぶってくちばしを俺のでこに、何度も何度も

「なるほど、二つの理由があるなら納得か？」

ヤートスが理解を示す。だがヴィオの話はまだ終わっていない。

「んで、それからさらに五年後の十五才のとき」

「まだあるのか」

「これで終わり。」

盆に親戚の集まりがあつて、俺も親と一緒にいったんだ。俺のほかにも従兄弟もきていた。

暇になつた小さい連中が外で遊びたいと言い出して、暇だつた俺が付き添いとして一緒に行くことになつた。それは別によかつたんだ。親戚の家にもすることもなかつたし。

行く先は近くの公園。それなりの大きさを誇つて、鳩も集まるようなところだつたんだ。俺はそこらへんに住んでるわけじゃないから、そのことを知らなかつた。知つてたら行かなかつたかな。

ボールを持って出かけた公園には鳩が数十羽といたよ。そしてその鳩にえさをやってる爺さんも。

鳩の群を見た瞬間、足が止まつて公園に入りたくなかつた。でも付き添いとしてきてるんだし、帰つたら駄目だろうと思つて公園に入った。近づかなけりや大丈夫とも思つてた。

ベンチをみつけて、ここにいるからつて小さい連中に伝えて、遊ぶ様子を見たり、園内にいる人たちの様子を見たりしてすごしてた。そしたら鳩にえさをやってた爺さんが近づいてきた。俺が暇そうに見えたんだろうな。同じように暇してる自分の話し相手になつてもらおうと思つたのか。そこらへんは聞いてないからわからない。

隣いいですかと聞かれたから頷くと、爺さんが隣座つた。

なんとなく誰かに見られてるような感じがした。気のせいだろうと思いつつ、確認のため周囲を見てみたら鳩たちが一匹残らず俺を見てた。あれだけの視線が集中すれば、なにかしら感じるもんなんだな。俺、気配とか探れないはずなのにな。

この時点でなんとなく嫌な予感はしてた。

爺さんが話しかけてきて鳩の視線から逃げるように、そつちを見てぼつぽつと話してた。爺さんが手に持つてた鳩のえさを、爺さんと俺の間に置いたとき、鳩たちがいっせいに羽ばたく音がした。

何事かと思つて鳩たちのほうを見たら、こつちに突撃してきてた。

体当たりされて突かれて噛まれて、散々なめにあった。

あとから推測してみたんだけど、自分たちのえさを俺にとられる
と思っただらうなあ。

こういうわけで鳥にはいい思い出がまったくくない。トラウマに近
いものを植えつけられたよ

「鳥に嫌われてるのかな？」

「さあ？」

つばきの問いにヴィオは首を傾げるしかない。

ヴィオ側から鳥に害をなしたことはないのだ。なぜ嫌われている
のかヴィオ自身もさっぱりだ。

「そんなことがあってからは鳥が苦手になった。生きても死んで
も鳥の形してると駄目だね」

「そんなことがあれば私も駄目になりそうだ」

同意するようにアイオールが頷いている。

「好物は鶏肉って言ってなかった？」

好物を聞いたとき、ヴィオがそう言っていたことをルーは思い出
す。

「苦手意識なくそうと鶏肉を食べることで頑張ったんだ。

食べ続けたらいつのまにか肉は好きになってた」

少しでも鳥に慣れようと、鳥そのものではなく近いものから慣れ
ていこうとした結果だ。

肉は好きになったが、鳥嫌いは治っていないので、成果がでたの
か微妙なところだ。

なんとなく間違った努力の仕方ではないかと、アイオールをはじめとしたその場にいる全員は思う。

話しはそこで終わり、狩り組は続きのため別の場所へと移動していった。

材料を集めだして一時間と三十分後。昼食には十分と思われる材料が集まっていた。

調理スキル持ちのルーとミゼルが手早く調理を始める。

手伝えないほかのメンバーは、のんびりと話しながら完成を待つ。

「とりあえず一品完成。これでも食べてて」

ミゼルとセバスターが皆にお椀を配っていく。

作ったものは山菜とキノコと鳥肉の鍋風煮込み。昆布出汁と醤油と鳥肉の旨みが、山菜とキノコによく染み込んでいる。

ずずつと汁を飲み、肉を噛みしみ出す肉汁に舌鼓を打つ。

誰もが美味いと表情をほころばせる様子を見て、ルーはニヤリと笑う。

その笑みは作ったものを美味しいと言ってもらったことを喜ぶよりも、なにかを期待して思わずこぼれ出たという意味合いのほうが大きい。

そしてルーの期待することはすぐに起きた。

「タッグさんにうさ耳が生えた!?　すごく変!」

「そういうリオンは声が男に変わってんぞ!?　フィスもなんかおかしい!」

「体が勝手に動く」

「あははははっちよっ誰かつばきが刀振り回すのを止める!

ついでに俺の笑いもとめて。お願い、苦しいっ」

「コール、私に愛情をそそぐのはいいですが、無理をしては意味な

いのですよ?」

「ホワイトサンが喋ったあー!?

ってかなんで皆裸なんだ!?!」

「あれ? なんで俺がいるの?」

「私が目の前に?」

「わうわうっ!? がう? がうっ!?」

(チカが大人になって、服がぱっつんぱっつんに!? 声が犬?

どうなってるの!?)」

予期しないハプニングに場が騒然とする。

なんの変化もないように見えるのはルーとアイオールとアヤネだけだ。

「あっはははははっ。予想以上の面白さね!」

無理やり笑わされていヤートスと違い、仕掛け人のルーの笑い声は自然だ。

「なにをしたんだい?」

「あれ? アイオールは変わってないのね」

「私もどこか変化あるということはありませんが?」

「アヤネも? 運よく食べなかったのかしら」

「なにを?」

「びっくりキノコっていう、イタズラ用アイテムがあるのよ。

効果はご覧の通り、ステータスランダム変化。

でもさすがに妖精やペットにも効くとは思わなかったわ」

起きた変化は、タッグの頭部にうさ耳が生えた。リオンの声変化。フィスは属性変化で色が変わった。つばきは自意識に関係なく体が動く。ヤートスは笑いっぱなし。コールはスキル変化で透視ができ

るように。ホワイトサンは会話可能に。セバスターとミゼルは互いの体を交換。チ力は体が成長。ヴィオは体が狼に変化。

このとき狼に変化したことで、後日パートナーを決めるときに狼を選ぶきっかけとなった。

実はアイオールも変化はしている。起きたことは口調変化。だが変化した口調が威勢のいいものへというものだったので、演技しているのと変わっていないのだ。

アヤネはAエゆえに、こういったウイルスにはワクチンを持っていた。

「ルーになんの変化もないのは、ワクチンを飲んでるからかい？」

「ん、正解。皆がどんなふうになるか落ち着いて見たかったからね。アイオールの変化は特に楽しみにしてたのに」

「まったく。賑やかなのが好きなんだから。」

それでこれはどれくらい続くのさ？

「十五分くらいはですよ」

「そう。たいして害はないからほっといていいか。」

ああ、コールだけは眼を閉じていてもらわないとね」

十五分して皆が落ち着くと、本格的に食事が始まる。最初は皆もう一回くらいイタズラのネタがあるのではと、おそろおそろ料理を取っていたがなにもないとわかると、食事を楽しみだした。

いつもより美味しく感じるのは、自分たちで材料を集めたことの達成感などがそう感じさせているのだろう。

料理が少なくなると、リオンをきっかけとして宴会芸をし始める者が出てきて賑やかになった。

リオンがやったのはセバスターの頭の上にリンゴを置いて離れた場所から矢を当てるという、ウィリアム・テルだ。見事に当てたりオンは拍手を受けながら、次は放り投げたリンゴに当てるといふことに挑戦し、これもまた命中させた。

妹に続けとセバスターが薬を即興で調合し、それを放り投げ、発動のエフェクトや煙幕で様々な色形の花を表現する。

つばきが刀での演舞を披露した。アイオールが歌い、あわせるようにミゼルがフルートを吹いた。タッグとコールが簡易漫才を行った。ヴィオが動物を呼び簡単な芸してもらった。

主賓であるチカとアヤネもなにかしようとしたが、思いつかなかったようで、見る側に回っていた。

少し残念そうな二人に、誰もが次の宴会ではなにか披露すればいいと声をかける。

盛り上がっている宴を楽しみつつ、デザートを作っていたルーが白玉入りフルーツポンチを配る。十五夜のことを思い出し、少し日が過ぎているが白玉も作ったのだ。

芸披露は小休止し、穏やかな雰囲気となる。

その雰囲気は続かず、先ほどの続きと再び騒ぎ始める。

笑い声は夕暮れ前まで、周囲に響き渡った。

誰もが笑えていて、このままなにこともなく現実に戻れるのだと思っていた頃の話だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7811g/>

我らの望みはありふれたもの！

2010年10月9日11時34分発行